

茨城県教育財団文化財調査報告第28集

水海道都市計画事業・小絹土地地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 3

大谷津 A 遺跡(上)

昭和 60 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

## 大谷津 A 遺跡正誤表

### — 大谷津 A 遺跡 (上) —

頁	行	誤	正
67	2	平面図は、	平面形は、
90	3	第 5 号溝が南北に走っている。	第 4 号溝が南北に走っている。
91	22~23	覆土の中層及び P <sub>4</sub> 覆土中	覆土の中層及び P <sub>6</sub> 覆土中
137	7	P <sub>2</sub> ・P <sub>4</sub> ・P <sub>6</sub> ・P <sub>7</sub> の 4 か所が	P <sub>2</sub> ・P <sub>4</sub> ・P <sub>5</sub> ・P <sub>7</sub> の 4 か所が

### — 大谷津 A 遺跡 (下) —

頁	行	誤	正
47	4	口縁無文帯と	口縁部無文帯と
204	4	住居番号に	住居跡番号に

茨城県教育財団文化財調査報告第28集

水海道都市計画事業・小絹土地地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 3

大<sup>お</sup>谷<sup>や</sup>津<sup>つ</sup> A 遺跡(上)

昭和 60 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団



遺跡遠景



遺跡遠景

# 序

茨城県筑波郡谷和原村の西方地域において「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業」が住宅・都市整備公団によって進められておりますが、この事業地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、昭和55年度から茨城県教育財団が実施してまいりました。

本書は、昭和56年度から昭和58年度にかけて、筑波郡谷和原村大字小絹地区内において発掘調査を実施した大谷津A遺跡の調査成果を集録したものであります。当遺跡からは多くの資料が発見され、縄文時代の中期に生活が営まれた集落跡であることが判明し、地域の歴史を解明するうえで資するものが多いと考えられます。

その意味から本書がより多くの方々に御活用いただけることを希望しております。

なお、発掘調査及び整理にあたり、委託者である住宅・都市整備公団からいただいた御協力に対し、感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会、谷和原村教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力いただいたことに、衷心より謝意を表します。

昭和60年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 竹内藤男

## 例 言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和56年度末から昭和58年度にかけて調査を実施した、茨城県筑波郡谷和原村に所在する大谷津A遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 大谷津A遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長		竹 内 藤 男 大 金 新 一	～昭和56年11月、昭和58年12月～ 昭和56年12月～昭和58年11月
副 理 事 長		古 橋 靖 川 又 友 三 郎	～昭和58年7月 昭和58年7月～
常 務 理 事		川野辺 四 郎 綿 引 一 夫	～昭和57年3月 昭和57年4月～
事 務 局 長		小 林 義 久 小 林 洋	～昭和58年3月 昭和58年4月～
調 査 課 長		寺 内 寛 夫 青 木 義 夫	～昭和59年3月 昭和59年4月～、昭和58年度整理班長
企 画 管 理 班	班 長	坪 秀 雄	～昭和57年5月
	主任調査員	今 村 信 夫	昭和57年6月～昭和59年3月
	主 事	市 毛 洋 一	昭和59年4月～
	〃	加 藤 雅 三	昭和57年4月～
	〃	海老沢 一 夫	昭和57年4月～
	〃	綿 引 良 人 大曾根 徹	～昭和58年3月 昭和58年4月～
調 査 第 一 班	班 長	倉 本 誠 夫	昭和56年度
	主任調査員	石 井 毅	昭和58年度
	〃	安 成 幸 重	昭和56年度調査
	〃	和 田 雄 次	昭和56年度調査
	〃	久 野 俊 度	昭和58年度調査
	〃	佐 藤 正 好	昭和57年度調査、昭和58年度整理・執筆
〃	高 村 勇 治	昭和59年度整理・執筆	
〃	鈴 木 美 治	昭和57・58年度調査、昭和59年度整理・執筆	
整 理 班 長		渡 辺 千 秋	昭和57年度調査第一班班長

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、Ⅰ次調査区（昭和56・57年度）の発掘調査分を佐藤正好が、Ⅱ次調査区（昭和57・58年度）の発掘調査分を高村勇・鈴木美治が、それぞれ整理・執筆し、鈴木美治が総括編集を担当した。
- 4 発掘調査及び出土遺物の整理等に際して、埼玉県立歴史資料館谷井彪氏の御指導をいただいた。
- 5 本書の作成にあたり、東京学芸大学助手二宮修治氏に黒曜石の原産地の分析を依頼し、分析結果の報告をいただいた。また、石材の材質鑑定は、茨城県立教育研修センター（現、上郷高等学校教頭）蜂須紀夫氏の御指導をいただいた。
- 6 本書に使用した記号については、第3章第1節の2の記載方法の項を参照されたい。
- 7 発掘調査及び出土遺物の整理等に際して、御指導、御協力を賜った関係機関、各位に深く感謝の意を表します。

# 目 次

## —上 卷—

序

例言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	2
1 地区設定	2
2 基本層序の検討	3
3 遺構確認	3
4 遺構調査	4
第3節 調査経過	4
第2章 位置と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	10
第3章 遺構	13
第1節 遺構の概要と記載方法	13
1 遺構の概要	13
2 遺構の記載方法	13
第2節 竪穴住居跡	19
1 縄文時代	19
2 古墳時代	130
3 奈良・平安時代	138
第3節 土壌	142
第4節 溝	209

## —下 卷—

第4章 遺物	1
--------	---

第1節 遺物の概要と記載方法	1
1 遺物の概要	1
2 遺物の記載方法	2
第2節 竪穴住居跡出土遺物	7
1 縄文式土器	7
2 土師器	126
第3節 土壌、グリッド出土土器	131
1 土壌	131
2 グリッド	148
第4節 その他	151
1 土製品	151
2 石器	159
3 石製品	199
第5章 まとめ	201
第1節 遺構について	202
1 竪穴住居跡について	202
(1) 縄文時代	202
① 住居跡の類型化	203
② 住居跡の形態分類	204
(2) 古墳時代	205
(3) 奈良・平安時代	220
(4) 集落の変遷	221
2 土壌について	228
(1) 屋外かについて	228
(2) 「Tビット状遺構」について	229
(3) 土壌の形態分類	229
(4) 土壌の分布状況	234
第2節 遺物について	237
1 土器	237
2 土製品	240
3 石器	240
終章 むすび	244

## 挿 図 目 次

第 1 図	小絹地区遺跡配置図……………2	第 25 図	第13号住居跡実測図……………39
第 2 図	調査区呼称方法概念図……………3	第 26 図	第13号住居跡遺物出土位置図……………40
第 3 図	上層柱状図……………3	第 27 図	第13号住居跡土器接合関係図……………41
第 4 図	遺跡全体図……………5	第 28 図	第14号住居跡実測図……………42
第 5 図	遺跡地形図……………9	第 29 図	第14号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………43
第 6 図	大谷津 A 遺跡周辺の遺跡……………12	第 30 図	第15号住居跡実測図・遺物出 土位置図・土器接合関係図……………44
第 7 図	第 1 号住居跡実測図……………20	第 31 図	第16・17号住居跡実測図……………46
第 8 図	第 2 号住居跡実測図……………21	第 32 図	第16・17号住居跡 遺物出土位置図……………47
第 9 図	第 3 号住居跡実測図……………22	第 33 図	第18号住居跡実測図……………48
第 10 図	第 4 号住居跡実測図……………23	第 34 図	第18号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………49
第 11 図	第 4 号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………24	第 35 図	第19号住居跡実測図……………50
第 12 図	第 5 号住居跡実測図……………25	第 36 図	第19・25号住居跡遺物出土位 置図・土器接合関係図……………51
第 13 図	第 5 号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………26	第 37 図	第20号住居跡実測図……………52
第 14 図	第 6 号住居跡実測図……………27	第 38 図	第20号住居跡遺物出土位置図……………53
第 15 図	第 7 号住居跡実測図……………29	第 39 図	第21・28号住居跡実測図……………54
第 16 図	第 7 号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………30	第 40 図	第21・28号住居跡遺物出土位 置図・土器接合関係図……………55
第 17 図	第 9 号住居跡遺物出土位置図……………31	第 41 図	第22号住居跡実測図……………56
第 18 図	第 9 号住居跡実測図……………32	第 42 図	第22号住居跡遺物出土位置図……………57
第 19 図	第10号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………33	第 43 図	第23号住居跡実測図……………58
第 20 図	第10号住居跡実測図……………34	第 44 図	第23号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………59
第 21 図	第11号住居跡実測図……………35	第 45 図	第24号住居跡実測図……………60
第 22 図	第11号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………36	第 46 図	第24号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………61
第 23 図	第12号住居跡実測図……………37		
第 24 図	第12号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………38		

第 47 图	第24号住居跡土器接合關係図……62	土器接合關係図……………91	
第 48 图	第25号住居跡実測図……………63	第 72 图	第42号住居跡実測図……………92
第 49 图	第26号住居跡実測図……………65	第 73 图	第42号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………93
第 50 图	第26号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………66	第 74 图	第44号住居跡実測図・遺物出 土位置図・土器接合關係図……94
第 51 图	第30号住居跡実測図……………68	第 75 图	第45号住居跡実測図……………95
第 52 图	第31号住居跡実測図……………70	第 76 图	第45号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………96
第 53 图	第32号住居跡実測図……………71	第 77 图	第46号住居跡実測図 遺物出土位置図……………97
第 54 图	第33号住居跡実測図……………72	第 78 图	第47号住居跡実測図 遺物出土位置図……………98
第 55 图	第33号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………73	第 79 图	第48号住居跡実測図……………99
第 56 图	第34号住居跡実測図……………74	第 80 图	第48号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………100
第 57 图	第34号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………75	第 81 图	第49号住居跡遺物出土位置図…100
第 58 图	第35号住居跡実測図……………77	第 82 图	第49号住居跡実測図……………101
第 59 图	第35号住居跡遺物出土位置図…78	第 83 图	第50号住居跡実測図……………102
第 60 图	第36号住居跡実測図……………79	第 84 图	第50号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………103
第 61 图	第36号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………80	第 85 图	第51号住居跡実測図……………104
第 62 图	第37号住居跡実測図……………82	第 86 图	第51号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………105
第 63 图	第37号住居跡遺物出土位置図…83	第 87 图	第52号住居跡実測図……………106
第 64 图	第38号住居跡実測図……………84	第 88 图	第52号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………107
第 65 图	第38号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………85	第 89 图	第53号住居跡実測図……………108
第 66 图	第39号住居跡実測図……………86	第 90 图	第53号住居跡遺物出土位置図…109
第 67 图	第39号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………87	第 91 图	第54号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………109
第 68 图	第40号住居跡実測図……………88	第 92 图	第54号住居跡実測図……………110
第 69 图	第40号住居跡遺物出土位置図 土器接合關係図……………89		
第 70 图	第41号住居跡実測図……………90		
第 71 图	第41号住居跡遺物出土位置図		

第93図	第55号住居跡実測図 遺物出土位置図……………111	土器接合関係図……………132	
第94図	第56号住居跡遺物出土位置図…111	第117図	第27号住居跡実測図……………133
第95図	第56号住居跡実測図……………112	第118図	第27号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………134
第96図	第57号住居跡遺物出土位置図…112	第119図	第43号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………135
第97図	第57号住居跡実測図……………113	第120図	第43号住居跡実測図……………136
第98図	第58号住居跡実測図……………114	第121図	第29号住居跡カマド実測図……138
第99図	第58号住居跡遺物出土位置図…114	第122図	第29号住居跡実測図……………139
第100図	第59号住居跡実測図……………115	第123図	第63号住居跡実測図……………140
第101図	第59号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………116	第124図	土壇実測図(1)……………158
第102図	第60号住居跡実測図……………117	第125図	土壇実測図(2)……………159
第103図	第60号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………118	第126図	土壇実測図(3)……………160
第104図	第61号住居跡実測図……………119	第127図	土壇実測図(4)……………161
第105図	第61号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………120	第128図	土壇実測図(5)……………162
第106図	第62号住居跡実測図……………121	第129図	土壇実測図(6)……………163
第107図	第62号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………122	第130図	土壇実測図(7)……………164
第108図	第64号住居跡実測図 遺物出土位置図……………123	第131図	土壇実測図(8)……………165
第109図	第65号住居跡実測図……………124	第132図	土壇実測図(9)……………166
第110図	第65号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図(1)……………125	第133図	土壇実測図00……………167
第111図	第65号住居跡土器接合関係図(2) 126	第134図	土壇実測図01……………168
第112図	第65号住居跡土器接合関係図(3) 127	第135図	土壇実測図02……………169
第113図	第66号住居跡実測図……………128	第136図	土壇実測図03……………170
第114図	第66号住居跡遺物出土位置図 土器接合関係図……………129	第137図	土壇実測図04……………171
第115図	第8号住居跡実測図……………131	第138図	土壇実測図05……………172
第116図	第8号住居跡遺物出土位置図	第139図	土壇実測図06……………173
		第140図	土壇実測図07……………174
		第141図	土壇実測図08……………175
		第142図	土壇実測図09……………176
		第143図	土壇実測図20……………177
		第144図	土壇実測図21……………178
		第145図	土壇実測図22……………179

第146図	土壌実測図23	180	第163図	土壌実測図40	197
第147図	土壌実測図24	181	第164図	土壌実測図41	198
第148図	土壌実測図25	182	第165図	土壌実測図42	199
第149図	土壌実測図26	183	第166図	土壌実測図43	200
第150図	土壌実測図27	184	第167図	土壌実測図44	201
第151図	土壌実測図28	185	第168図	土壌実測図45	202
第152図	土壌実測図29	186	第169図	土壌実測図46	203
第153図	土壌実測図30	187	第170図	土壌実測図47	204
第154図	土壌実測図31	188	第171図	土壌実測図48	205
第155図	土壌実測図32	189	第172図	土壌実測図49	206
第156図	土壌実測図33	190	第173図	土壌実測図50	207
第157図	土壌実測図34	191	第174図	土壌実測図51	208
第158図	土壌実測図35	192	第175図	第1号溝実測図	210
第159図	土壌実測図36	193	第176図	第2号溝実測図	212
第160図	土壌実測図37	194	第177図	第3号溝実測図	214
第161図	土壌実測図38	195	第178図	第4号溝実測図	215
第162図	土壌実測図39	196	第179図	第5・6号溝実測図	216

## 表 目 次

表1 大谷津遺跡周辺の遺跡一覧表……………11

表2 土壌一覧表……………142

## 写真図版目次

- P L 1 遺跡周辺遠景, 遺構確認状況
- P L 2 調査後全景(Ⅱ次調査区), 大谷津  
B遺跡, 簡戸A・B遺跡遠景
- P L 3 第1号住居跡, 第2・3号住居跡
- P L 4 第4号住居跡, 第5号住居跡
- P L 5 第6号住居跡, 第6・7号住居跡
- P L 6 第7号住居跡遺物出土状況,  
第7号住居跡
- P L 7 第9号住居跡, 第10号住居跡
- P L 8 第11号住居跡,  
第12号住居跡遺物出土状況
- P L 9 第12号住居跡, 第13号住居跡
- P L 10 第14号住居跡遺物出土状況,  
第14号住居跡
- P L 11 第15号住居跡遺物出土状況,  
第15号住居跡
- P L 12 第16・17号住居跡,  
第18号住居跡遺物出土状況
- P L 13 第18号住居跡, 第19号住居跡
- P L 14 第20号住居跡,  
第21号住居跡遺物出土状況
- P L 15 第21・28号住居跡遺物出土状況,  
第21・28号住居跡
- P L 16 第22号住居跡遺物出土状況,  
第22号住居跡
- P L 17 第23号住居跡遺物出土状況,  
第23号住居跡
- P L 18 第24号住居跡遺物出土状況,  
第24号住居跡
- P L 19 第25号住居跡,  
第26号住居跡遺物出土状況
- P L 20 第26号住居跡遺物出土状況,  
第26号住居跡
- P L 21 第30号住居跡, 第31号住居跡
- P L 22 第32号住居跡, 第33号住居跡
- P L 23 第34号住居跡遺物出土状況,  
第34号住居跡
- P L 24 第35号住居跡遺物出土状況,  
第35号住居跡
- P L 25 第36号住居跡遺物出土状況,  
第36号住居跡
- P L 26 第37号住居跡遺物出土状況,  
第37号住居跡
- P L 27 第38号住居跡遺物出土状況,  
第38号住居跡
- P L 28 第39号住居跡遺物出土状況,  
第39号住居跡
- P L 29 第40号住居跡焼土堆積部分上層断  
面, 第40号住居跡遺物出土状況
- P L 30 第40号住居跡焼土堆積状況,  
第40号住居跡
- P L 31 第41号住居跡,  
第42号住居跡遺物出土状況
- P L 32 第42号住居跡遺物出土状況,  
第42号住居跡
- P L 33 第44号住居跡, 第45号住居跡
- P L 34 第46号住居跡, 第47号住居跡
- P L 35 第48号住居跡遺物出土状況,  
第48号住居跡
- P L 36 第49号住居跡,

	第50号住居跡遺物出土狀況		6号土壤, 第7号土壤, 第8号土壤, 第9号土壤
P L 37	第50号住居跡, 第51号住居跡遺物出土狀況	P L 57	第10号土壤, 第11号土壤, 第12号土壤, 第13号土壤, 第14号土壤, 第15号土壤
P L 38	第51号住居跡遺物出土狀況, 第51号住居跡		
P L 39	第52号住居跡遺物出土狀況, 第52号住居跡	P L 58	第16号土壤, 第17号土壤, 第18号土壤, 第20号土壤, 第22号土壤遺物出土狀況, 第23号土壤
P L 40	第53号住居跡, 第54号住居跡遺物出土狀況	P L 59	第27号土壤, 第30号土壤, 第31号土壤, 第32号土壤, 第33号土壤, 第34・35号土壤
P L 41	第54号住居跡, 第55号住居跡		
P L 42	第56号住居跡, 第57号住居跡		
P L 43	第58号住居跡, 第59号住居跡	P L 60	第36号土壤, 第37号土壤, 第38号土壤, 第39号土壤, 第40号土壤, 第41号土壤
P L 44	第60号住居跡遺物出土狀況, 第60号住居跡		
P L 45	第61号住居跡遺物出土狀況, 第61号住居跡	P L 61	第42号土壤, 第43号土壤, 第44号土壤, 第45号土壤, 第46号土壤, 第48号土壤
P L 46	第62号住居跡, 第64号住居跡		
P L 47	第65号住居跡遺物出土狀況(1)(2)	P L 62	第49号土壤, 第50号土壤遺物出土狀況, 第50号土壤, 第51号土壤, 第52号土壤, 第53号土壤
P L 48	第65号住居跡遺物出土狀況(3), 第65号住居跡		
P L 49	第66号住居跡遺物出土狀況(1)(2)	P L 63	第54号土壤, 第55号土壤, 第56号土壤, 第57号土壤, 第58号土壤, 第59号土壤
P L 50	第66号住居跡遺物出土狀況(3), 第66号住居跡		
P L 51	第8号住居跡遺物出土狀況, 第8号住居跡	P L 64	第60号土壤, 第61号土壤, 第62号土壤, 第63号土壤, 第64号土壤, 第65号土壤
P L 52	第27号住居跡, 第29号住居跡		
P L 53	第43号住居跡遺物出土狀況(1)(2)	P L 65	第67号土壤, 第68号土壤, 第69号土壤, 第70号土壤, 第71号土壤, 第72号土壤
P L 54	第43号住居跡遺物出土狀況(3), 第43号住居跡		
P L 55	第63号住居跡カマド土層断面, 第63号住居跡	P L 66	第73号土壤, 第74・75号土壤, 第76・77号土壤, 第78号土壤, 第79号土壤, 第80号土壤
P L 56	第1号土壤, 第2号土壤, 第3号		

- P L 67 第82号土壤, 第83号土壤, 第87号土壤, 第88号土壤, 第90-97号土壤
- P L 68 第91-93号土壤, 第92号土壤, 第94号土壤土层断面, 第94号土壤, 第95号土壤, 第96号土壤
- P L 69 第98号土壤, 第99号土壤, 第100号土壤, 第101号土壤, 第102号土壤, 第103号土壤
- P L 70 第104号土壤遗物出土状况, 第104号土壤, 第105号土壤遗物出土状况, 第105号土壤, 第106号土壤, 第107号土壤
- P L 71 第108号土壤, 第109号土壤, 第110号土壤, 第111号土壤, 第112号土壤, 第113号土壤
- P L 72 第114号土壤, 第115号土壤, 第116号土壤, 第117号土壤遗物出土状况, 第117号土壤, 第118号土壤
- P L 73 第119号土壤, 第121号土壤, 第122号土壤, 第123号土壤, 第124号土壤, 第125号土壤
- P L 74 第126号土壤, 第127-158号土壤, 第128号土壤, 第129号土壤, 第131号土壤, 第132号土壤
- P L 75 第133号土壤, 第134号土壤遗物出土状况, 第134号土壤, 第135号土壤, 第136号土壤遗物出土状况, 第136号土壤
- P L 76 第137号土壤, 第138号土壤, 第139号土壤, 第140号土壤遗物出土状况, 第140号土壤, 第141号土壤
- P L 77 第142号土壤, 第143号土壤, 第144号土壤, 第145号土壤, 第146号土壤, 第147号土壤
- P L 78 第148号土壤, 第149号土壤, 第150号土壤, 第151号土壤, 第152号土壤, 第153号土壤
- P L 79 第154号土壤, 第155号土壤, 第156号土壤, 第157号土壤, 第159号土壤, 第160号土壤
- P L 80 第161号土壤, 第162号土壤, 第163号土壤, 第164号土壤, 第165号土壤, 第166号土壤
- P L 81 第167号土壤, 第168号土壤, 第169号土壤, 第170号土壤, 第171号土壤, 第172号土壤
- P L 82 第173号土壤, 第174号土壤, 第175号土壤, 第176号土壤, 第177号土壤, 第178号土壤
- P L 83 第179号土壤, 第180号土壤, 第181号土壤, 第182号土壤, 第183号土壤, 第187号土壤
- P L 84 第188号土壤, 第189号土壤, 第190号土壤, 第191号土壤, 第192号土壤, 第193号土壤
- P L 85 第194号土壤, 第195号土壤, 第196号土壤, 第197号土壤, 第198号土壤, 第199号土壤
- P L 86 第200号土壤, 第201号土壤, 第210号土壤, 第211号土壤, 第212号土壤, 第213号土壤遗物出土状况
- P L 87 第214号土壤, 第215号土壤,

- P L 88 第216号土墩, 第217号土墩,  
第218号土墩, 第219号土墩  
第220号土墩, 第221号土墩,  
第222号土墩, 第223号土墩,  
第224号土墩, 第225号土墩
- P L 89 第227号土墩, 第228号土墩,  
第229号土墩, 第230号土墩,  
第231号土墩, 第232号土墩
- P L 90 第233号土墩, 第234号土墩,  
第235号土墩, 第236号土墩,  
第237号土墩, 第238号土墩
- P L 91 第239号土墩, 第240号土墩,  
第241号土墩, 第242号土墩,  
第243号土墩, 第244号土墩
- P L 92 第245号土墩, 第246号土墩,  
第247号土墩, 第248号土墩,  
第249号土墩, 第250号土墩
- P L 93 第251号土墩, 第252号土墩,  
第253号土墩, 第254号土墩,  
第255号土墩, 第256号土墩
- P L 94 第257号土墩, 第258号土墩,  
第259号土墩, 第260号土墩,  
第261号土墩, 第262号土墩
- P L 95 第263号土墩, 第264号土墩,  
第265号土墩, 第266号土墩,  
第267号土墩, 第268号土墩
- P L 96 第269号土墩, 第270号土墩,  
第271号土墩, 第272号土墩,  
第273号土墩, 第274号土墩
- P L 97 第275号土墩, 第276号土墩,  
第277号土墩, 第278号土墩,  
第279号土墩, 第280号土墩
- P L 98 第281号土墩, 第282号土墩,  
第283号土墩, 第285号土墩,  
第286号土墩, 第287号土墩
- P L 99 第288 - 290号土墩, 第291号土墩  
第292号土墩, 第293号土墩,  
第294号土墩遺物出土状况,  
第294号土墩
- P L 100 第295号土墩, 第296号土墩,  
第297号土墩,  
第298号土墩遺物出土状况,  
第298号土墩, 第299号土墩
- P L 101 第300号土墩, 第301号土墩,  
第302号土墩, 第303号土墩,  
第304号土墩, 第305号土墩
- P L 102 第306号土墩, 第307号土墩,  
第309号土墩, 第310号土墩,  
第312号土墩, 第313号土墩
- P L 103 第314号土墩, 第315号土墩,  
第316号土墩, 第317号土墩,  
第318号土墩, 第319号土墩
- P L 104 第320号土墩, 第321号土墩,  
第322号土墩, 第323号土墩,  
第324号土墩, 第325号土墩
- P L 105 第326号土墩, 第327号土墩,  
第328号土墩, 第329号土墩,  
第330号土墩, 第331号土墩
- P L 106 第332号土墩, 第333号土墩,  
第334号土墩, 第335号土墩,  
第336号土墩, 第337号土墩
- P L 107 第338号土墩, 第340号土墩,  
第341号土墩, 第342号土墩,  
第343号土墩, 第344号土墩

- P L 108 第345号土城, 第346号土城,  
第347号土城, 第348号土城,  
第349号土城, 第350号土城
- P L 109 第351号土城, 第352号土城,  
第353号土城, 第354号土城,  
第355号土城, 第356号土城
- P L 110 第357号土城, 第358号土城,  
第359号土城, 第360号土城,  
第361号土城, 第362号土城
- P L 111 第363号土城, 第365号土城,  
第366号土城, 第367号土城,  
第368号土城, 第369号土城
- P L 112 第370号土城, 第371号土城,  
第372号土城, 第373号土城,  
第374号土城, 第375号土城
- P L 113 第376号土城, 第377号土城,  
第378号土城, 第379号土城,  
第381号土城, 第382号土城
- P L 114 第383号土城, 第384号土城,  
第385号土城, 第386号土城,  
第387号土城, 第388号土城
- P L 115 第389号土城, 第390号土城,  
第391号土城, 第392号土城,  
第393号土城土城土城断面,  
第393号土城
- P L 116 第394号土城, 第396号土城,  
第398号土城, 第399号土城,  
第400号土城, 第401号土城
- P L 117 第402号土城, 第403号土城,  
第404号土城, 第405号土城,  
第406号土城,  
第407号土城土城土城出土状况
- P L 118 第407号土城, 第408号土城,  
第409号土城, 第410号土城,  
第411号土城, 第412号土城
- P L 119 第413号土城, 第414号土城,  
第415号土城, 第416号土城,  
第417号土城, 第418号土城
- P L 120 第419号土城, 第420号土城,  
第421号土城, 第422号土城,  
第423号土城, 第424号土城
- P L 121 第425·426号土城, 第427号土城,  
第428号土城, 第429·430号土城,  
第431号土城, 第432号土城
- P L 122 第433号土城, 第434号土城,  
第435号土城, 第436号土城,  
第437号土城, 第438号土城
- P L 123 第439号土城, 第440号土城,  
第441号土城, 第442号土城,  
第443号土城, 第444号土城
- P L 124 第445号土城, 第446号土城,  
第447号土城, 第448·449号土城,  
第450号土城, 第451号土城
- P L 125 第452号土城, 第453号土城,  
第454号土城, 第455号土城,  
第457号土城, 第458号土城
- P L 126 第459号土城,  
第460号土城土城土城出土状况,  
第460号土城, 第461号土城,  
第462号土城, 第463号土城
- P L 127 第464号土城, 第465号土城,  
第466号土城, 第467号土城,  
第469号土城, 第470号土城
- P L 128 第472号土城, 第473号土城,

- 第474号土壌、第475号土壌、  
 第476号土壌、第477号土壌  
 P L 129 第478号土壌、第479・480号土壌、  
 第481号土壌、第482号土壌、  
 第483号土壌、第484号土壌  
 P L 130 第485号土壌遺物出土状況、  
 第485号土壌、第486号土壌、  
 第487号土壌、第488・492号土壌、  
 第489号土壌  
 P L 131 第490号土壌、第491号土壌、  
 第493号土壌、第494号土壌、  
 第495号土壌、第496号土壌
- P L 132 第497号土壌、第498号土壌、  
 第499号土壌、第501号土壌、  
 第503号土壌、第504号土壌  
 P L 133 遺跡全景(Ⅱ次調査区、N→E)  
 P L 134 調査前全景、伐倒作業風景、  
 遺構確認作業風景(1)、遺構確認作  
 業風景(2)、グリッド発掘(Ⅱ)終了  
 後全景、グリッド拡張作業風景(1)  
 P L 135 グリッド拡張作業風景(2)、遺構確  
 認状況、調査風景、現地説明会、  
 研修会(1)、研修会(2)

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

日本住宅公団は、首都圏への人口や産業の集中を緩和すると同時に、膨大な住宅用地の需要に対応し、良好な居住環境を備えた住宅用地の供給と、周辺都市との有機的結合をめざした調和のある新しい町づくりを目指し、昭和41年から茨城県取手市と下館市を結ぶ「関東鉄道常総線」の沿線に、常総ニュータウンの建設を着手した。

この事業の一環として、茨城県筑波郡谷和原村大字小絹を中心に、総面積85haに及ぶ大規模開発計画の「水海道都市計画事業・小絹上地区画整理事業」が計画された。

このため、昭和54年度に茨城県教育委員会は、谷和原村教育委員会とこの開発地域内における埋蔵文化財包蔵地の状況について分布調査を実施した。この結果、開発地域内に5遺跡（大谷津A遺跡・大谷津B遺跡・筒戸A遺跡・筒戸B遺跡・西下宿遺跡）約10haに及ぶ埋蔵文化財包蔵地が確認され、その取り扱いについて茨城県教育委員会、谷和原村教育委員会及び日本住宅公団が協議を行った結果、現状保存は困難と判断し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることになった。

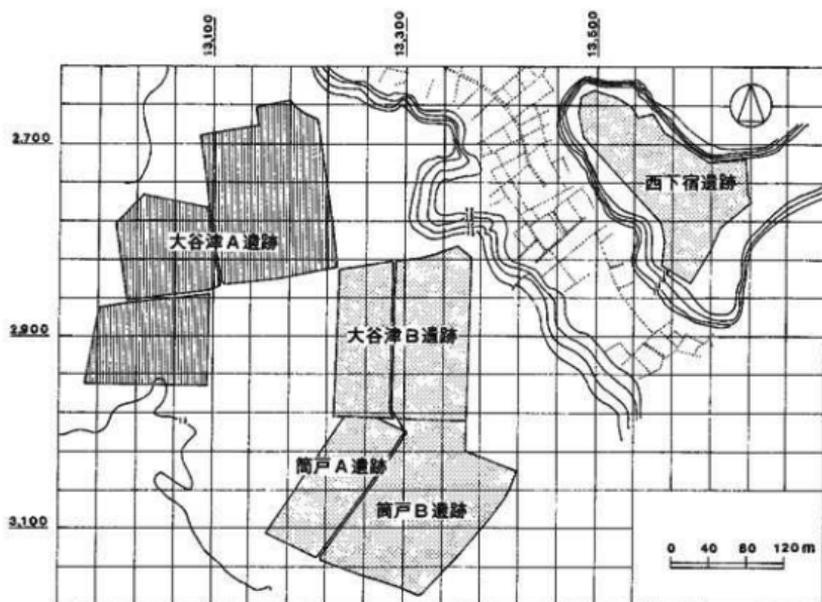
茨城県教育財団は、急増する大規模開発に伴う発掘調査に対応するため、茨城県教育委員会の指導により、昭和52年度から本部に調査課を設置し、その業務に当たってきたが、当開発事業に伴う発掘調査についても、日本住宅公団と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し、昭和52年度南守谷地区から年次計画に基づいて調査を実施してきた。小絹地区の発掘調査は、南守谷地区の調査が終了した翌55年度から実施した。

昭和55年度以降に調査を実施した遺跡は、下記の通りである。

No.	遺跡名	種類	主な時期	面積(m <sup>2</sup> )	調査年度	No.	遺跡名	種類	主な時期	面積(m <sup>2</sup> )	調査年度
1	大谷津B	集落跡	縄文中期	21,151	昭55・56	4	筒戸B	集落跡	縄文中期	18,962	昭56・57
2	西下宿	包蔵地	縄文早期	14,671	昭55・56	5	大谷津A	集落跡	縄文中期	37,900	昭56～58
3	筒戸A	集落跡	縄文中期	8,187	昭56・57						

なお、日本住宅公団は、昭和56年10月1日付けをもって宅地開発公団と統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足したが、従来の契約によって生じた権利・義務はそのまま新公団に継承されることになった。

また、発掘調査は茨城県教育財団本部調査課調査第一班が担当した。



第1図 小絹地区遺跡配置図

参考文献

- (1) 茨城県教育財団 「年報1」 昭和56年 「年報2」 昭和57年 「年報3」 昭和58年
- (2) 「水海道都市計画事業・小絹上地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」大谷津B遺跡 茨城県教育財団 昭和58年
- (3) 「水海道都市計画事業・小絹上地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」筒戸A遺跡・筒戸B遺跡 茨城県教育財団 昭和59年

## 第2節 調査方法

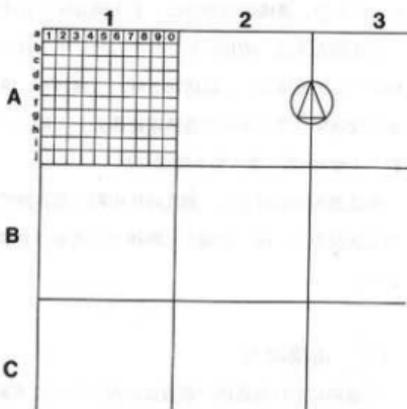
### 1 地区設定

地区設定は、日本平面直角座標系・第IX座標、X軸(南北) -2,900m、Y軸(東西)+13,300mの交点を通る軸線を基準にして、東西・南北各々40mずつ平行移動して大調査区を設定した。小絹地区の上地区画整理事業区域内に確認された5遺跡(大谷津A遺跡・大谷津B遺跡・筒戸A遺跡・筒戸B遺跡・西下宿遺跡)は互いに隣接しているため、一連の大調査区の方眼の中に組み入れた(第1図)。

調査区の名称は、まず、大調査区を北から南へ「A」・「B」・「C」……「O」、西から東へ「1」・「2」・「3」……「19」と大文字を付して、「A1」区・「B2」区のように呼称した。さらに、大調査区内を4m四方の小調査区に100分割し、それぞれ同様に、北から南へ「a」・「b」・「c」……「j」、西から東へ「1」・「2」・「3」……「9」・「0」と小文字を付した。

各小調査区の名称は、大調査区の名称と合わせた四文字で「A2b2」区・「M8j0」区のように呼称した(第2図)。

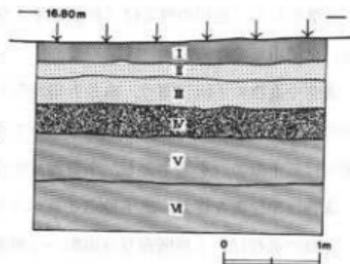
なお、大谷津A遺跡は、大調査区で南北「B」～「I」、東西「1」～「8」の範囲に位置している。



第2図 調査区呼称方法概念図

## 2 基本層序の検討

大谷津A遺跡の基本層序(第3図)は、第I層が表土層で20~30cmほどの厚さを有し、比較的軟らかで軽い暗褐色の土層である。第II層以下は関東ローム層となる。第II層は10~15cmほどの厚さを有し、暗褐色土の粒子が混入するソフトロームである。第III層は第II層に比べ粒子が密で硬く、25~30cmの厚さを有するローム層である。第IV層には30cmほどの暗褐色土の堆積がみられ、火山活動の休止時期に堆積した黒色バンドと言われている層である。第V層以下はハードローム層となる。第VI層は第V層に比べ硬く粘性がある。



第3図 土層柱状図

## 3 遺構確認

大谷津A遺跡が確認された経緯については、前節において述べた通りである。

当遺跡の調査対象面積は37,900㎡である。調査面積が広大なため、遺跡の中央部を南北に走る工事用道路を境として、便宜上、その西側をI次調査区(17,999㎡)、東側をII次調査区(19,901

m)とした。遺構確認調査は、Ⅰ次調査区とⅡ次調査区に分けて実施した。

Ⅰ次調査区は、昭和56年2月から翌57年5月にかけて遺構確認調査を実施し、調査区の北側を中心とした地区から、住居跡3軒、土壌44基、溝2条を確認した。Ⅱ次調査区は、昭和57年7月から翌58年3月にかけて遺構確認調査を実施し、調査区の南西側を除くほぼ全域から、住居跡63軒、土壌400基、溝5条を確認した。

確認調査の結果から、縄文時代中期の集落跡であることが判明した。また、確認された遺構の分布状況から、同一台地上に隣接する大谷津B遺跡、簡戸A・B遺跡との関連性の強いことが伺われた。

#### 4 遺構調査

当遺跡における遺構の調査は、次のように実施した。

住居跡の調査は、長径方向とそれに直角に交わる方向に土層観察用ベルトを設け、四分割して掘り込む「四分割法」で実施し、地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。また、重複している場合は、新旧関係が把握できるような位置にベルトを設けた。

土壌の調査は、長径方向で二分して掘り込む「二分割法」で実施した。大形のものは住居跡の調査法に準じた。溝の調査は、適宜な位置に土層観察用ベルトを残して掘り込みを実施した。

土層観察は、色相、含有物、混人物の種類や量及び粘性、吸水性、縮まり具合を観察し、分類の基準とした。色相の判定は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社）を使用して行った。

遺構や遺物の平面実測は、水系方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は、遺跡内の水準点を基準として、レベルを用いて水系を水平にセットした実測基準を設定して行った。縮尺は二十分の一を基本とし、土器埋設が<sup>1</sup>やカマドは十分の一の縮尺で作成した。

遺物は原位置を保ち、出土地点とレベルを遺物出土状況計測表に記録し取り上げた。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土位置図作成（主として計測表を使用）→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行うことを基本とした。

### 第3節 調査経過

大谷津A遺跡は、昭和57年2月16日に発掘調査を開始し、昭和59年3月31日をもってすべての調査を完了した。以下、約2年2か月にわたる発掘調査の経過を月ごとに記述する。



第4図 遺跡全体図

昭和56年度

- 2 月 I次調査区内の雑木の伐倒及び上物除去作業を行い、調査区を設定した。大調査区の基本杭に沿ってトレンチを設定し、試掘を開始した。F3区を中心とする調査区は、上取りが行われており調査が不可能であったため、調査対象から除外した。
- 3 月 トレンチによる試掘の結果、表土層や遺構の状況が把握できたため、土層断面及び遺構の観察・記録を実施した後、中旬から重機を導入し表土除去を行った。

昭和57年度

- 4 月 調査の諸準備を整え、I次調査区の北側から遺構確認調査を開始した。G・H区は往時は谷津であったと思われ、西から東に向かって若干傾斜し、黒色土の堆積が見られた。
- 5 月 遺構確認調査を終了し、住居跡3軒、土塚44基、溝2条を確認した。各遺構の調査を開始した。
- 6 月 住居跡、土塚、溝の調査を継続して実施した。

- 7 月 I次調査区内の遺構の調査を全て終了し、全景写真撮影を実施した。
- 8 月 II次調査区（畑 5,761㎡、山林 14,140㎡）の確認調査を開始した。山林部の試掘を実施し層位を検討した結果、土層が20～30cmと浅く重機による表土除去は困難と判断した。畑部の除草を行い、調査区を設定した。
- 9 月 II次調査区の北側B6～7区、C4～7区の遺構確認調査を行った。この地区は畑で、耕作による攪乱跡が東西に帯状に深く入り込んでいたため、確認が困難であった。
- 10 月 引き続きB6～7区、C4～7区の遺構確認調査を行った。また、並行して山林部の雑木伐開及び上物除去を行い、終了後調査区を設定した。
- 11 月 畑部（B6～7、C4～7区）の表土除去・遺構確認調査を終了し、山林部の遺構確認調査を開始した。II次調査区の北側からは住居跡、土壌が濃密に確認された。
- 12 月 山林部（D4～7、E5～7、F5～7区）の遺構確認調査を行った。II次調査区の中央部D5～6区及び大谷津B遺跡に隣接するF7区からは、遺構が濃密に確認されたが、西側のE5区、F5区は希薄であった。
- 1 月 引き続き山林部の遺構確認調査を行った。
- 2 月 F6～7区を中心に、遺構確認調査を行った。この地区の地形は起伏が認められたため、トレンチを設定し土層を観察したが、自然堆積であることが判明した。
- 3 月 II次調査区の遺構確認調査をすべて終了した。その結果、住居跡63軒、土壌460基、溝5条を確認した。確認した遺構の配置図を作成し、航空写真撮影を行い、本年度の調査を終了した。

#### 昭和58年度

- 4 月 調査の諸準備を整え、昭和57年度に確認した遺構の調査をC4区から開始した。並行して、土層観察用テストピットを掘り、調査の方針を検討した。
- 5 月 C5～6区の住居跡及び土壌の調査を行った。C6区を中心とする遺跡の北側からは、加曾利E期の住居跡を中心とした遺構が濃密に検出され、重複関係も見られた。
- 6 月 B6～7区、C6～7区の遺構調査を行った。この地区は畑であったため、住居跡や土壌の上部が耕作による攪乱を受けているものが多かった。地床が有する阿玉台期の住居跡や、古墳時代の住居跡を検出した。
- 7 月 D6～7区の遺構調査を行った。D6区からは加曾利E期の遺構・遺物が多く検出されたが、壁の確認されない遺構も見られた。
- 8 月 D5～6区の遺構調査を行った。台風の影響で一時調査が遅れが出たが、住居跡第38号、土壌第301号まで調査を進めた。
- 9 月 D6～7区の遺構調査を行った。住居跡内に多量の焼土が投棄されていた第40号住居

跡や、土器埋設がを有する第42号住居跡等、特徴的な住居跡が検出された。

- 10 月 E6～7区の遺構調査を行った。遺構は調査区の北側に比較して少なく、土壌が中心であった。住居跡は、阿玉台期のものが中心をなしていた。
- 11 月 大谷津B遺跡との関連から、遺構が濃密に確認されたF7区の調査を中心に行った。F6～7区は塚状のマウンドが多数検出された地区であり、一部に残土があったため、これらを除去し、遺構を再確認しながら調査を進めた。
- 12 月 F7～8区の遺構調査を行った。F8区の南側からは、新たにカマドを有する住居跡の存在が確認された（第63号住居跡）。住居跡第60号、上墳第474号までの調査を終了させ、年末・年始の休みに入った。
- 1 月 調査再開。F6～7区の遺構調査を行った。しかし、19日以後降雪が続き調査に遅れが出た。除雪と並行しながらF5区の拡張、遺構確認調査を進めた。
- 2 月 F5～6区の遺構調査を行った。1月19日以来、近年にない大雪に見舞われ調査に支障をきたした。降雪の合間をぬって、除雪と遺構調査を並行して行った。住居跡第65号、土壌第500号、溝第7号まで調査を進めた。
- 3 月 調査の遅れを取り戻し、12日に小絹地区報告会、17日に現地説明会、19日に航空写真撮影を行い、大谷津A遺跡の発掘調査をすべて完了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

大谷津A遺跡は、茨城県筑波郡谷和原村大字小絹字大谷津1,120番地の45ほか17筆に所在し、調査対象面積は37,900㎡である。

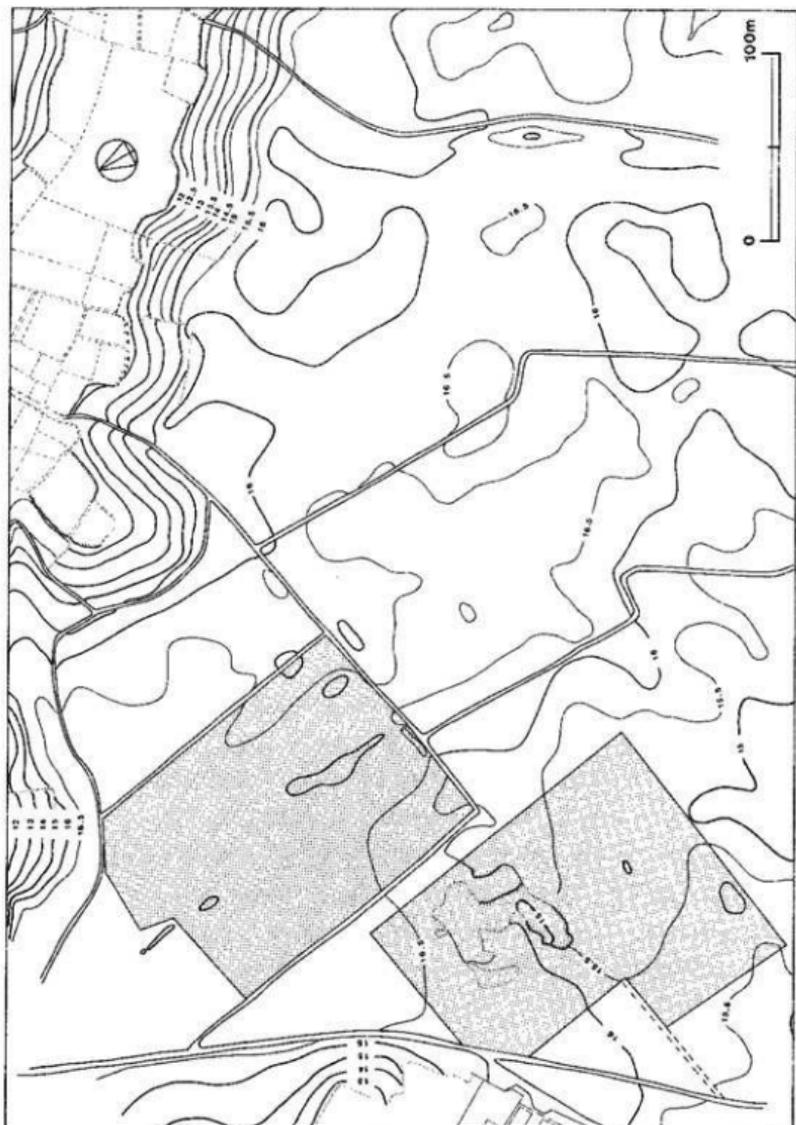
当遺跡の所在する谷和原村は、関東構造盆地の北東部にあたる茨城県の南西部に位置し、南北14.5km、東西5.5km、面積約34km<sup>2</sup>の細長い村である。谷和原村役場を基点として、北西へ直線6kmで水海道市に、南へ12kmで取手市に、南西へ42kmで東京都に至る位置にある。本村は、昭和30年3月の町村合併により、筑波郡福岡村、谷原村、十和村と北相馬郡小絹村の合併によって成立<sup>(1)</sup>し、東に筑波・稲敷台地、西に猿島・北相馬台地という二つの洪積台地の縁辺部と、その間の沖積低地を村域とした。

筑波・稲敷台地は、筑波山塊の南から南東方向に延び、東は霞ヶ浦、南は利根川低地に限られた標高26～29mの比較的平坦な台地である。猿島・北相馬台地は、本県の南西部台地の南端に位置し、利根川の北側に広がり、鬼怒川・小貝川低地を境とする台地である。谷和原村の大部分を占める沖積低地は、鬼怒川水系の幾多の変遷と造盆地運動によって造られたと考えられている<sup>(2)</sup>。なお、鬼怒川は、江戸時代以前には北相馬台地の北縁の小絹地先で東流し、小貝川と合流していたため洪水の原因となっていたが、江戸時代初期（寛永年間）、伊奈半十郎によって治水事業が行われ、猿島・北相馬台地の一部を開削することにより小貝川との分流がなされた。その結果、当遺跡の立地する台地の北部で大きく南西に曲がりながら流下し、利根川に注ぎ込むようになった。

当遺跡は、谷和原村役場から3.3km程北西に離れた同村の西端に位置する。遺跡の北東約0.7kmには国道294号線が、さらに、その北東0.1kmには関東鉄道常総線（小絹駅）があり、並行して走っている。また、東方約1.4kmには小貝川が南東に流下し、西方約0.6kmには新河道である鬼怒川が接近して流れている。なお、遺跡は、両河川に挟まれた標高16m程の平坦な台地上に位置し、台地の北側には谷津が南東に向かって入り込んでいる。台地と谷津との比高差は約5mである。台地は、南東側で舌状に張り出しているのに対して、北西側では急傾斜している。

当遺跡の所在する同一台地上には、南東側に隣接して大谷津B遺跡が、更に、その北側には江戸A・B遺跡が続いており、大規模な縄文時代の集落の存在が認められる。以上のことから、往時、この地が縄文人にとって生活に適した格好の居住地であったことが推察される。

なお、遺跡の現況は、一部に畑を含むがその大部分は山林であり、表土層は浅く10～30cm程でローム層に達する。



第5圖 遺跡地形圖

## 第2節 歴史的環境

大谷津A遺跡の周辺に所在する遺跡を、谷和原村を中心として時代ごとに記載し、歴史的変遷について述べることにする。

大谷津A遺跡の所在する谷和原村からは、先土器時代の遺跡はこれまでに確認されていない。

縄文時代の遺跡は、早期から晩期まで確認されており、早期の遺跡としては洞坂畑遺跡〈6〉、西下宿遺跡〈1〉がある。また、当遺跡の北西0.9kmの鬼怒川を隔てた台地上には、水海道市奥山下根遺跡〈12〉がある。西下宿遺跡は、当遺跡の東300m、谷津を隔てた標高18mの舌状台地上に所在し、縄文時代早期の田戸式から茅山式期の土器片を主として出土した遺跡である。住居跡状遺構1軒、土壇42基（内炉穴24基）が検出されている。奥山下根遺跡は、縄文時代早期の三戸式から茅山下層式期の土器片を主として出土し、三戸式土器に伴う押型文土器が出土したことで注目される。竪穴住居跡2軒（古墳時代）、土壇56基（内炉穴17基）が検出されている。前期の遺跡は少なく、浅間山貝塚〈4〉、田村貝塚が知られているだけである。浅間山貝塚は、当遺跡の北約0.8kmの台地上に所在する主淡貝塚である。中期の遺跡は比較的多く、当遺跡をはじめ大谷津B遺跡〈2〉、簡戸A・B遺跡〈3〉が同一台地上に所在する。宝木山遺跡、明神遺跡からも阿玉台式、加曾利E式期の土器の出土することが知られている。大谷津B遺跡<sup>(3)</sup>は、当遺跡の南東側に隣接する加曾利EⅡ～Ⅳ式期の集落跡であり、竪穴住居跡55軒、住居跡状遺構12軒、土壇854基、溝1条が検出されている。また、大谷津B遺跡の南側に隣接する簡戸A・B遺跡<sup>(4)</sup>もほぼ同時期の集落跡であり、縄文時代の竪穴住居跡85軒、土壇455基、埋甕7基が検出されている。両遺跡とも、大谷津A遺跡と重要な関連をもつ遺跡である。

弥生時代の遺跡は、先土器時代と同様に村内からは現在のところ確認されていない。隣接する谷田部町には熊の山遺跡、嵩山遺跡、伊奈村には勅兵衛新田遺跡などがある。

古墳時代の遺跡は、並木古墳をはじめ茶畑古墳〈5〉、東樽戸古墳、福岡岡古墳群などが台地丘陵部に確認されている。東樽戸古墳からは、粘土郭の主体部が確認されている。また、前述した洞坂畑遺跡や大谷津A遺跡、隣接する水海道市の奥山A遺跡〈9〉、奥山下根遺跡〈12〉などからは、当該期の住居跡も検出されている。

奈良・平安時代の遺跡については、村内での報告例が少なく、当遺跡や簡戸A・B遺跡から数軒の竪穴住居跡が検出されているにすぎない。しかし、当該期の遺跡は、隣接する水海道市や守谷町などからはかなりの報告例があることから、今後、谷和原村においても発見されることが予想される。

また、中世の遺跡としては、簡戸城跡〈8〉の存在が知られている。

以上のように、大谷津A遺跡の所在する谷和原村及びその周辺地域を概観してみると、そこに

は、数多くの貴重な遺跡が所在し、豊かな自然の恵みを背景とした遠い祖先の生活の息吹と、脈々と続く文化の創造を肌で感じとることができる。

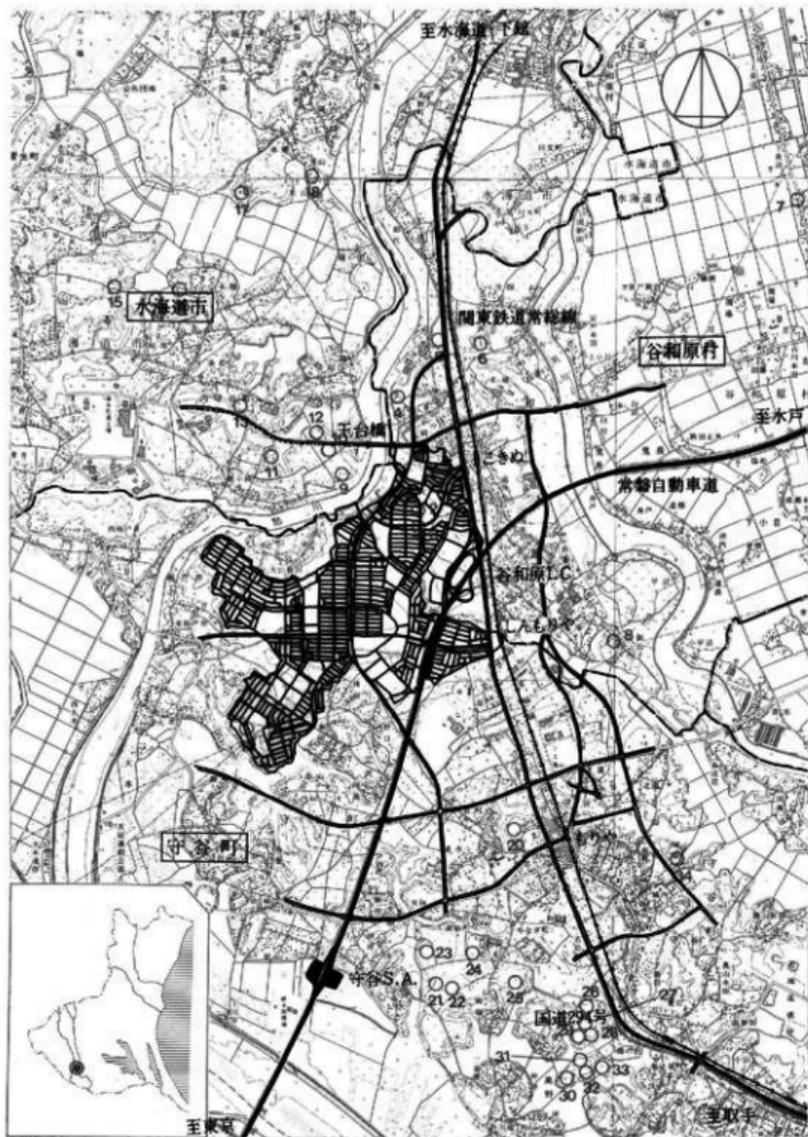
※文中の〈 〉内の番号は、第6図中の該当番号を表す。

図中 番号	遺跡名	遺跡の時代					図中 番号	遺跡名	遺跡の時代				
		先土器	縄文	弥生	古墳	その他			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
⑥	大谷津 A 遺跡		○		○	○	18	坂手日之王神遺跡		○			
1	西下宿遺跡		○				19	北守谷遺跡		○			
2	大谷津 B 遺跡		○				20	清水古墳群				○	
3	筒戸 A・B 遺跡		○			○	21	鈴坂遺跡(B)		○			
4	浅間山貝塚		○				22	鈴坂遺跡(C)		○			
5	茶畑古墳				○		23	座庄内遺跡(B-1)					○
6	洞坂畑遺跡		○			○	24	鈴坂古墳(F)				○	○
7	下長沼貝塚		○				25	大日遺跡(A)		○		○	○
8	筒戸城跡					○	26	篠根人遺跡(C-1)					○
9	奥山 A 遺跡				○		27	中原遺跡(C-2)				○	○
10	奥山 B 遺跡		○				28	中原遺跡(C-3)				○	○
11	奥山 C 遺跡		○				29	中原遺跡(C-5)				○	○
12	奥山下根遺跡		○			○	30	今城遺跡(E)		○		○	○
13	西原遺跡				○		31	北今城遺跡(D-2-3)				○	○
14	内守谷本郷遺跡		○				32	北今城遺跡(D-1)				○	○
15	菅生城跡					○	33	乙子遺跡(D-4)				○	○
16	内守谷館/台遺跡		○				34	守谷城跡					○
17	坂手萱場貝塚		○										

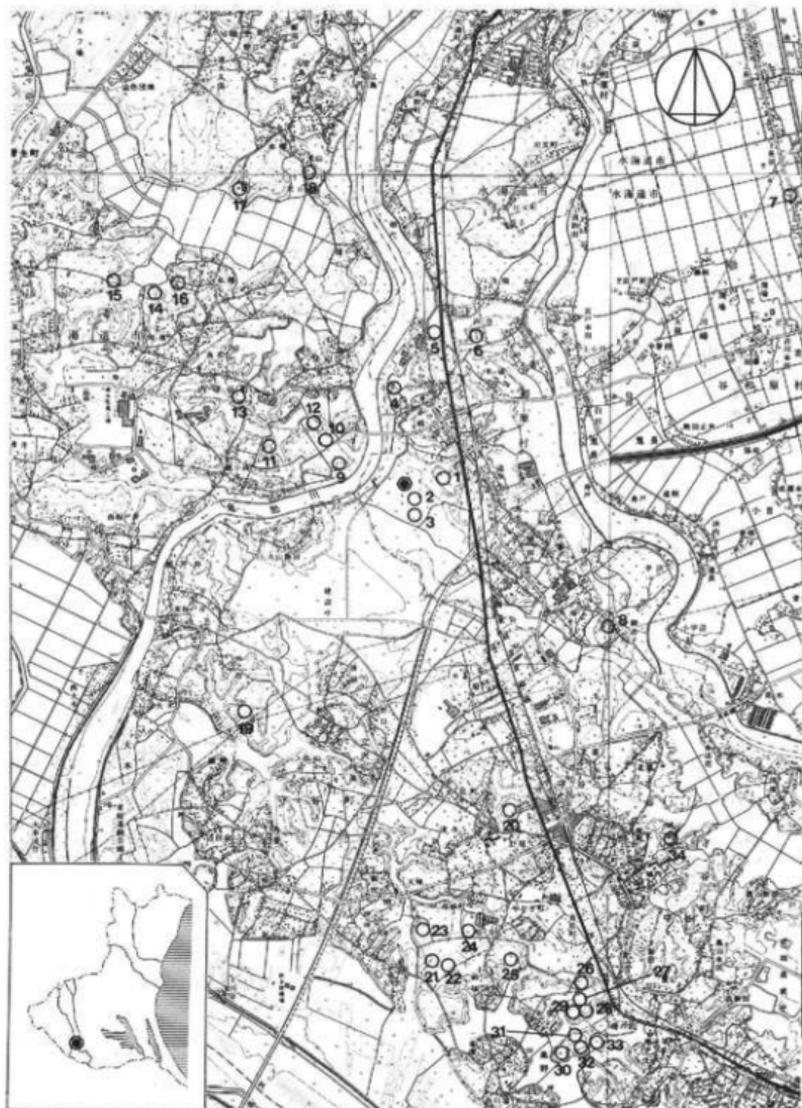
表1 大谷津A遺跡周辺の遺跡一覧表

#### 参考文献

- (1) 茨城県 『茨城県史 市町村編Ⅰ』 昭和50年
- (2) 居留川正平 青野壽郎 「日本地誌」5 二宮書店 昭和50年
- (3) 「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」 大谷津 B遺跡 茨城県教育財団 昭和58年
- (4) 「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」 筒戸 A遺跡・筒戸 B遺跡 茨城県教育財団 昭和59年



第6図 大谷津A遺跡周辺の遺跡



第6図 大谷津A遺跡周辺の遺跡

## 第3章 遺構

### 第1節 遺構の概要と記載方法

#### 1 遺構の概要

当遺跡からは調査の結果、竪穴住居跡66軒、土壇 504基、溝7条が検出された。その後、出土遺物を整理し、遺構の状況を検討した結果、遺構でないと判断したものは欠番とし、本項から除外した。その結果、当遺跡における最終的な遺構数は、竪穴住居跡66軒、土壇 498基、溝6条となった。竪穴住居跡は、縄文時代中期の阿玉台～加曾利E式期に比定されるものが61軒、古墳時代の和泉期に比定されるものが3軒、奈良・平安時代に比定されるものが2軒である。土壇は時期を明確にすることのできるものは少ないが、その大部分が縄文時代中期に比定されるものと思われる。溝は6条検出されているが、時期は不明である。これらの遺構の多くは、遺跡の北から東に入り込む支谷に向い合うように、調査区の北側及び東側に密集して検出されている。特に遺跡の南東側から検出された遺構群は、その分布状況から隣接する大谷津B遺跡と密接な関連を持つことが推測できる。

なお、当遺跡の発掘調査以前の現況は畑及び山林であり、畑の地区から検出された遺構の多くは、その上部が耕作による擾乱を受けており、一部には壁の確認ができなかった住居跡もあった。また、F3区・G3区を中心とする地区は後世の土取りによって削平されており、調査不可能であった。

各遺構の詳細については、第2節及び第3節で述べることにする。

#### 2 遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は、下記の要領で統一した。なお、遺物については第4章遺物の項で記載した。

##### (1) 使用記号

本書で使用した記号は、次のとおりである。

名称	住居跡	土壇	溝	炉	ピット
記号	S I	SK	SD	F	P

##### (2) 遺構の表示

本書で使用した遺構等の表示方法は、次のとおりである。

 = 住居跡  = 焼土  = カマド ● 土器 ★ 石器・チップ類

##### (3) 土層の分類記号

本書で使用した土層の分類記号は、次のとおりである。色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用し、Hue 7.5YRを基準とした。また、土層断面中の含有物についても分類し、挿図中の土層はすべて番号で表示した。

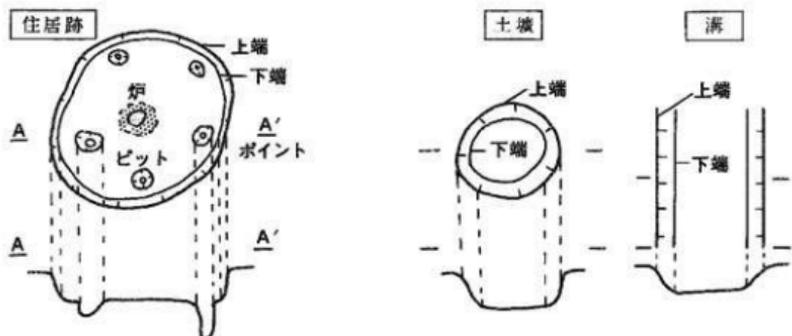
番号	土色名	色相	明度/彩度	含有物
1	にぶい褐色	Hue 7.5YR	% %	a ローム粒子混入
2	明褐色	Hue 7.5YR	% %	b ローム小ブロック混入
3	灰褐色	Hue 7.5YR	%	c ロームブロック混入
4	褐色	Hue 7.5YR	% % %	d ローム粒子、ローム小ブロック混入
5	黒褐色	Hue 7.5YR	% %	e ローム粒子、ロームブロック混入
6	暗褐色	Hue 7.5YR	% %	f 焼土粒子混入
7	黒褐色	Hue 7.5YR	%	g ローム粒子、焼土粒子混入
8	極暗褐色	Hue 7.5YR	%	h ローム粒子、ローム小ブロック、焼土粒子混入
9	にぶい黄褐色	Hue 10YR	%	i ローム粒子、ロームブロック、焼土粒子混入
10	黄褐色	Hue 10YR	% %	j ローム小ブロック、焼土粒子混入
11	にぶい黄褐色	Hue 10YR	%	k 焼土粒子、砂質粘土混入
12	褐色	Hue 10YR	% %	l 炭化粒子混入
13	黒褐色	Hue 10YR	%	m ローム粒子、炭化粒子混入
14	暗褐色	Hue 10YR	% %	n ローム粒子、ローム小ブロック、炭化粒子混入
15	黒褐色	Hue 10YR	%	o ローム小ブロック、炭化粒子混入
16	にぶい明赤褐色	Hue 2.5YR	%	p 焼土粒子、炭化粒子混入
17	暗赤褐色	Hue 2.5YR	%	q ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子混入
18	明赤褐色	Hue 5YR	%	r ローム小ブロック、焼土粒子、炭化粒子混入
19	赤褐色	Hue 5YR	% %	s ローム粒子、ローム小ブロック、焼土粒子、炭化粒子混入
20	暗赤褐色	Hue 5YR	% % % %	炭化粒子混入
21	極暗赤褐色	Hue 5YR	% %	t 攪乱
22	黒色	Hue 5YR	1/2	

※「小ブロック」は直径5mm未満のものとした。それ以上のものは「ロームブロック」として扱った。含有物の量については、少量（5～10%）検出されたものを基準とし、やや多く見られるもの（11～25%）については「・」を、さらに多く認められるもの（26%以上）については「\*」をアルファベットの右上に付加して表示した（例…a', a\*）。また、分類の便宜上、焼土ブロックは焼土粒子に、炭化物は炭化粒子に含めた。なお、含有物を集約して記

号化したため、調査過程における観察所見を詳細に表現することは困難であった。記号表示することによって上層と下層に同一の記号を用いることも生じたが、調査の過程で作成した土層断面図を最大限使用することにした。詳しくは、住居跡の土層の解説の中で述べることにする。

#### (4) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

本書における遺構実測図の作成方法は、次のとおりである。



- ① 竪穴住居跡の図版は、縮尺二十分の一の原図をトレースし、版組後、縮尺三分の一で掲載することを基本とした。また特殊な土器埋設炉やカマドの版組は二分の一とした。
- ② 竪穴住居跡からの出土遺物は、住居跡の平面図及び断面図に位置をドットで落とした。また、接合されたものはすべて線で結び、実測図や拓影図として掲載したものについては固有の番号を付した。詳細は、第4章第1節の2に記載した。
- ③ 土壇の図版は、縮尺二十分の一の原図をトレースし、版組後、縮尺三分の一で掲載することを基本とした。
- ④ 溝の図版は、縮尺二十分の一の原図をトレースし、版組後、縮尺五分の一で掲載することを基本とした。
- ⑤ レベルはm単位で記載した。
- ⑥ 遺構実測図の掲載については、できるだけ遺構番号順とした。

#### (5) 表の見方

それぞれの表の見方は、次のとおりである。

住居跡一覧表

住居跡番号	位置	方向	平面形	規模		ピットの数 総数/土柱	カマド	覆土	出土遺物	時期	形態	備考
				長径×短径(m)	壁高(cm)							

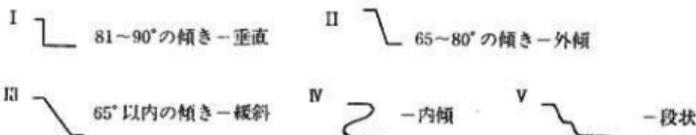
- ①住居跡番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。
- ②位置は、小調査区（グリッド）名で表示した。他の調査区にまたがる場合は、造構の占める面積の割合が大きい小調査区名をもって表示した。
- ③方向は、長径ないし長軸が座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを、角度で表示した（N-20°-E、N-20°-W）。（ ）を付したものは推定を表し、形状不明の場合は空欄とした。
- ④平面形は、現存している形状の上端面で判断し、円形・楕円形の場合は下記の分類基準を設け表示した。（ ）を付したものは推定を表し、形状不明なものは空欄とした。
- ・円形（短径：長径=1：1.1未満のもの）。
  - ・楕円形（短径：長径=1：1.1以上のもの）。
- また、形の整わないものは、不整○形と表示した。
- ⑤規模の欄の長径・短径は、平面形の上端面の計測値であり、壁高は、残存壁高の計測値である。また、平面形が円形・楕円形の場合は、長径・短径とし、隅丸方形・隅丸長方形などの場合は、長軸・短軸として表示した。
- ⑥ピット数の欄の総数は、住居跡に伴うものと考えられるピットの総数を表示し、主柱は主柱穴数、（ ）を付したものは推定を表す。
- ⑦炉・カマドの欄は、その種類を記し、炉やカマドを持たない場合は空欄とした。
- ⑧覆土は、堆積の状態が自然堆積を示す場合はN、人為堆積を示す場合はA、攪乱である場合はKと略号で記した。また、明確でない場合は（ ）を付し、不明の場合は空欄とした。
- ⑨出土遺物は、最も多く出土した遺物の種類とその出土点数、それに、代表的な遺物名を記した。
- ⑩時期は、時代名と土器型式名を表し、不明のものは空欄とし、推定は（ ）を付した。
- ⑪住居跡の形態分類の基準については(6)で述べる。
- ⑫備考は、重複関係や性格等を記した。

土城一覧表

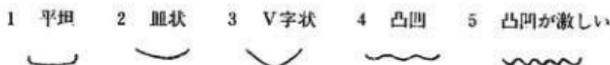
土城番号	位置	方向	平面形	規		壁高	底面	覆土	ピット数	出土遺物	形態	備	考
				長径×短径(m)	深さ(m)								

- ①土城番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で遺構でないとは判断したものは欠番とした。
- ②平面形は、円形・楕円形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。
- ・円形（短径：長径=1：1.2未満のもの）。
  - ・楕円形（短径：長径=1：1.2以上のもの）。

- ③規模の圃の深さは、開口部から底面の最も深い所までの計測値である。  
 ④壁面は、底面からの立ち上がりの状態を下記の基準を設け記号で表示した。



- ⑤底面は、下記の基準を設け記号で表示した。



- ⑥ピット数は、上壕内に検出された大小のピット数を記した。  
 ⑦上壕の形態分類の基準については(6)で述べる。

※その他の項については、住居跡一覧表の見方に準ずる。

## (6) 遺構の分類

住居跡及び上壕については、下記の分類基準を設け、形態分類を行った。

### 住居跡

#### ①平面形

- A型…円を基調とする一群 (円形・楕円形を含む)。  
 B型…方を基調とする一群 (方形・隅丸方形・長方形・隅丸長方形を含む)。  
 C型…いわゆる「二段掘り込み」の形態を有する一群。

#### ②柱穴の配列

- 1類…住居跡のほぼ中央部に、1か所の支柱穴を持つ一群。  
 2類…住居跡の長軸線上に、柱穴が配列される一群。  
 3類…柱穴が、規則的に配列される一群。  
 4類…柱穴の配列に、規則性が見られない一群。

#### ③炉

- a種…住居跡内に、炉の施設を持たない一群。  
 b種…住居跡内に、炉の施設を持つ一群。

※b種は、その形態によって b<sub>1</sub>…地床炉、 b<sub>2</sub>…土器埋設炉 に細分した。

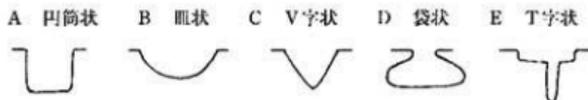
以上のものを組み合わせて、「A-1-a」、「B-3-a」のように表示した。ただし、縄文時代以外の住居跡については対象外とした。また、( )を付したものは推定を表す。

### 土壕

#### ①平面形

- |              |               |
|--------------|---------------|
| I 円形。        | IV 隅丸長方形，長方形。 |
| II 楕円形。      | V 不定形。        |
| III 隅丸方形，方形。 | VI 重複のため形状不明。 |

②断面形



※底面にビットを有するものには「・」を付した (a', b'……)。

③規模 (長径・長軸の長さ)

- 1 1m未満    2 1m以上2m未満    3 2m以上

④深さ (底面から確認面までの垂直線の長さ。ビットは除く。)

- a 50cm未満    b 50cm以上100cm未満    C 100cm以上

以上のものを組み合わせて，形態を「IA2b」のように表示した。

## 第2節 竪穴住居跡

### 1 縄文時代

#### 第1号住居跡（第7図）

本跡は、I次調査区の北東部E4is区を中心に確認された住居跡である。第2号住居跡の南東14mほどに位置し、東側12mほどには工事用道路が南北に走っている。

平面形は、長径4.16m、短径4.1mの円形状を呈し、長径方向はN-40°-Wを指している。ローム層への掘り込みが浅く、残存壁高は5cmで、床面は平坦でやや軟弱である。炉は、住居跡の中央部に位置している。平面形は長径71cm、短径65cmの楕円形を呈しており、床面を5~10cmほど掘りくぼめ地床かとしている。か内には、焼土が6~8cmの厚さに堆積している。ピットは9か所検出されたが、主柱穴は不明である。ピットは、長径14~71cm、短径12~60cm、深さ10~25cmの規模を有している。

覆土は2層からなり、上層および下層とも、ローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を含む褐色土が自然堆積している。下層はロームブロックを含み、上層に比べ締まっている。

遺物は、縄文土器片が17点、石が1点出土しており、その大半は覆土上層からの出土である。遺物は細片であり、本跡の時期を判定しうる遺物は検出されていない。

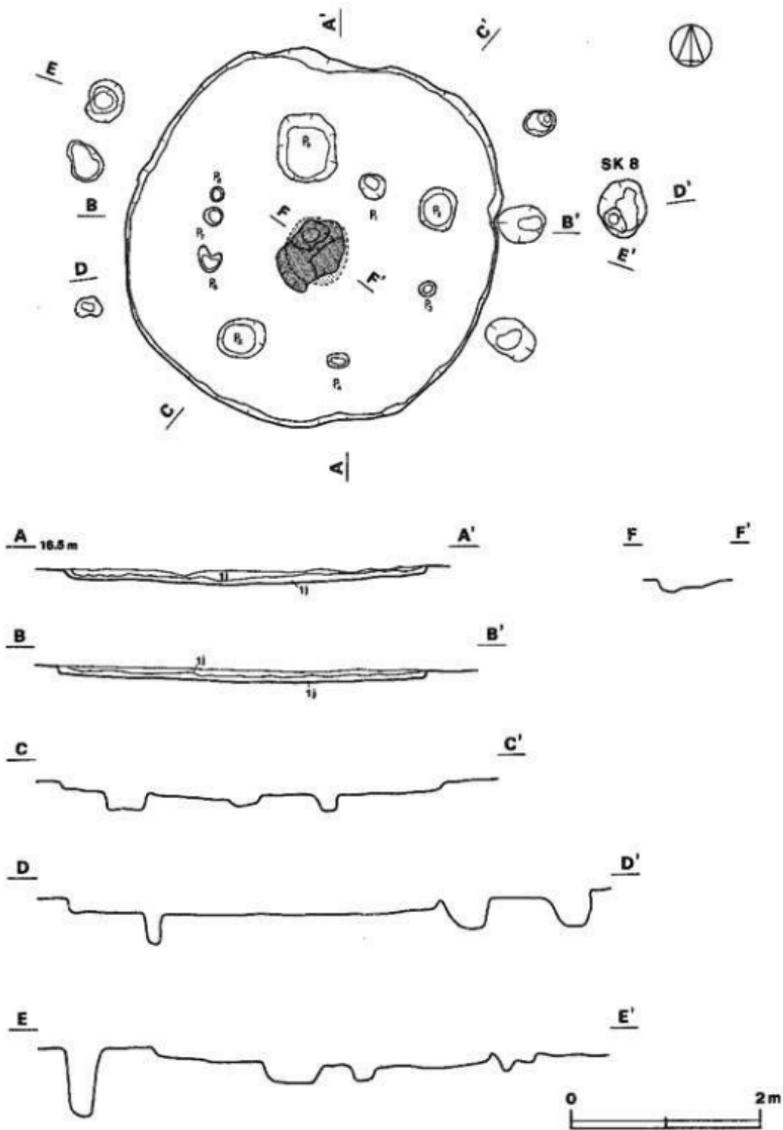
#### 第2号住居跡（第8図）

本跡は、I次調査区の北部E3fo区を中心に確認された住居跡である。第1号住居跡の北西14mほどに位置し、北西側で第3号住居跡と接している。

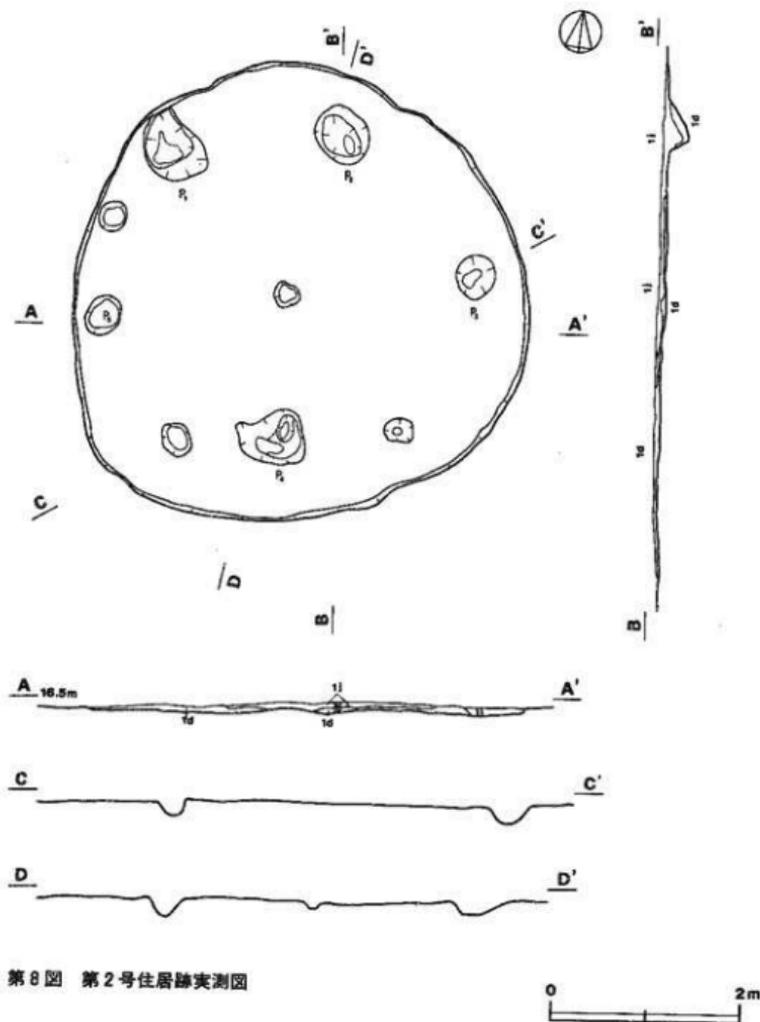
平面形は、長径4.86m、短径4.8mの円形を呈し、長径方向はN-38°-Eを指している。本跡は、第1号住居跡と同様にローム層への掘り込みが浅く、残存壁高は2~6cmである。床面は平坦でやや軟弱である。炉は検出されなかった。ピットは9か所検出されており、P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の5か所が主柱穴と思われる。主柱穴は、長径43~80cm、短径35~55cm、深さ15~25cmの規模を有しており、五角形状に配列されている。柱穴の間隔は、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>間がやや広く2.6mであるが、他は1.8~2.6mである。

覆土は2層からなり、上層に褐色土、下層に明褐色土が自然堆積している。覆土中にはローム粒子、焼土粒子を含み、上層には炭化物も含まれている。

遺物は、縄文土器片が19点、石が3点出土しており、その大半は覆土上層からの出土である。遺物は細片であり、本跡の時期を判定しうる遺物は検出されていない。



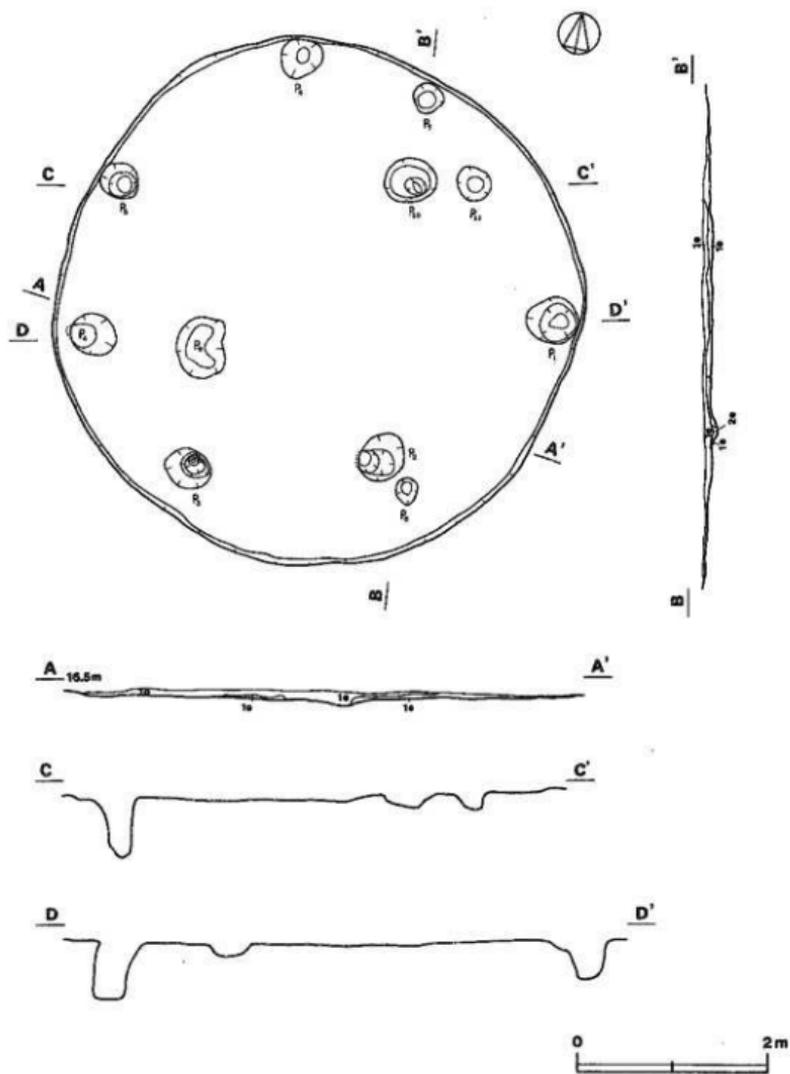
第7图 第1号住居跡実測图



第8図 第2号住居跡実測図

第3号住居跡 (第9図)

本跡は、1次調査区の北部E3es区を中心に確認された住居跡であり、南東側で第2号住居跡と接している。



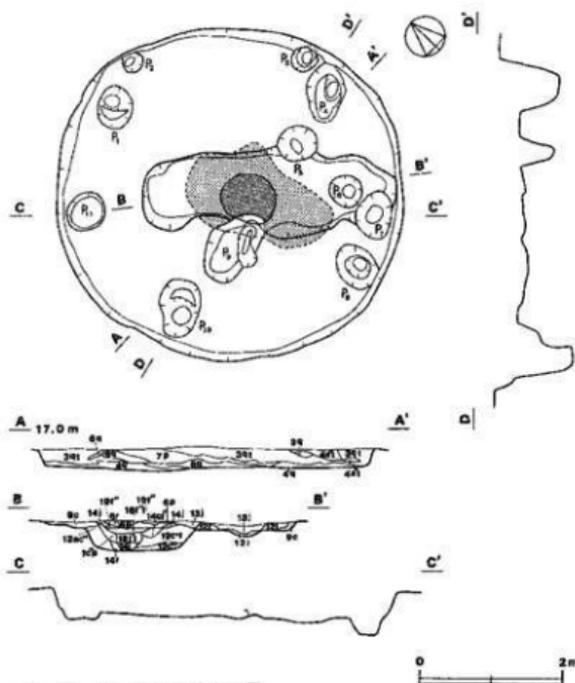
第9图 第3号住居跡実測图

平面形は、長径 5.6m、短径 5.5mの円形を呈し、長径方向はN-40°-Wを指している。本跡は、第1・2号住居跡と同様にローム層への掘り込みが浅く、残存壁高は6~9cmである。床面は平坦でやや軟弱である。炉は検出されていない。ピットは11か所検出されており、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>の6か所が主柱穴と思われる。主柱穴は、長径42~64cm、短径36~50cm、深さ30~60cmの規模を有しており、北西方向に長い長方形に配列されている。

覆土は3層からなり、上層から中層にかけては褐色土が、下層には暗褐色土が自然堆積している。覆土中にはローム粒子・炭化粒子を含み、中層にはロームブロックが含まれている。

遺物は、覆土中から縄文時代中期の土器片が7点、石が1点出土している。しかし、いずれも細片であり本跡の時期を判定しうる遺物は検出されていない。

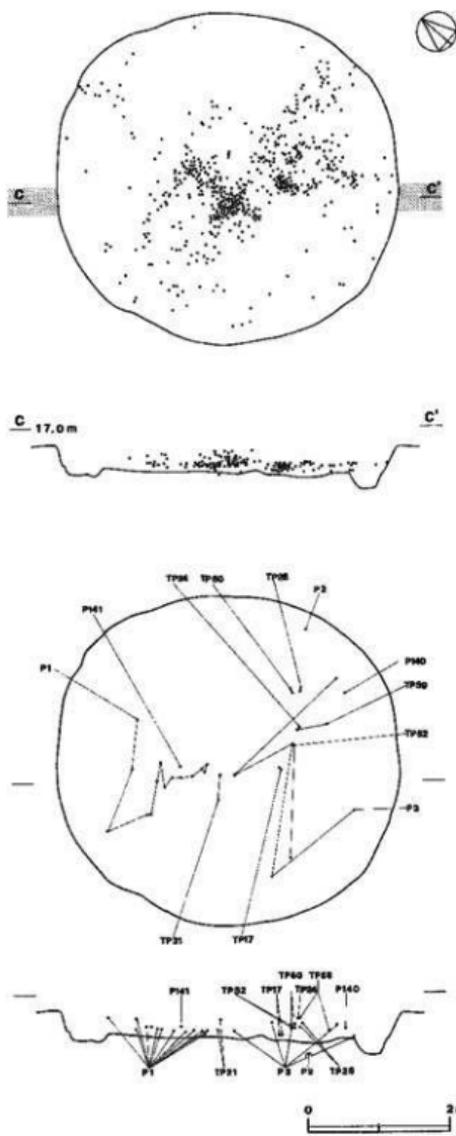
#### 第4号住居跡 (第10・11図)



第10図 第4号住居跡実測図

本跡は、II次調査区の北西端、工事用道路沿いに確認された住居跡であり、C4f0区を中心に位置している。本跡が確認された地区は畑地であったため、耕作による擾乱が帯状に深く入り込んでおり、プランの確認が困難であった。

平面形は、長径4.82m、短径4.68mの円形状を呈し、長径方向はN-46°-Wを指している。壁の上部は、耕作による擾乱を受け明確にとらえることはできなかったが、残存する壁は硬く締まっており、ほぼ垂直に立ち上



第11図 第4号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

がっている。残存壁高は24～28cmである。床面はほぼ平坦であり硬く締まっているが、一部は攪乱を受け凹状をなしている。また、床面の中央部には、炉を中心として北西から南東方向に長径3.5m、短径1.2mの長楕円形状の落ち込みが認められた。深さは5～15cmであり、この覆土中及び上部からは多数の上器片が検出されている。炉は、住居跡の中央部に位置し、長径76cm、短径65cmの楕円状に、床面を18cmほど掘りくぼめ地床がとされている。炉の中央部は、炉床の下31cmまで熱を受けており、レンガ状に赤く焼け締まっている。また、炉を中心として、北西から南東方向に、長径2.1m、短径1.16mの楕円形状に焼土の分布が認められた。ピットは11か所検出されているが、規模や配列等からP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>10</sub>の4か所が支柱穴と考えられる。支柱穴は、長径60～83cm、短径50～56cm、深さ62～83cmで台形状に配列されている。P<sub>8</sub>の覆土中からは、深鉢形土器（P<sub>3</sub>）が横位の状態で出土している。

覆土は、大きく4層に区別される。確認面下20cmの深さまで攪乱を受けており、灰褐色土・黒褐色土・暗褐色土が交互に斜めに堆積している。この部分は耕作土であり、全体としてさらさらしている。遺構本来の覆

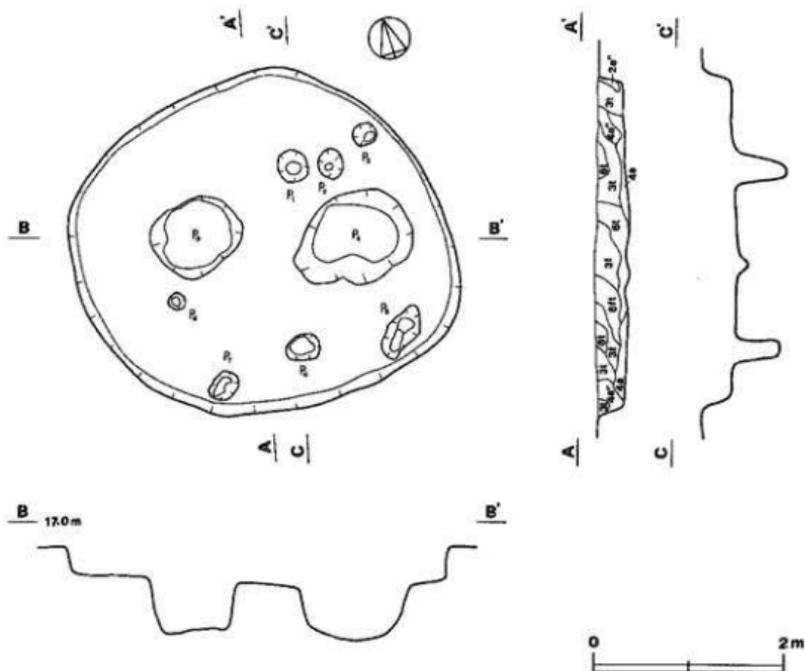
土は、その下に15cmほど残存しており、自然堆積の状態を示している。覆土中には、焼土粒子や炭化粒子が混入している。

遺物は、住居跡の中央部から南東側に集中して検出されており、縄文土器片 447点、石49点が出土している。これらの多くは覆土の中層から出土し、土器片の大半は加曾利E期に比定される。

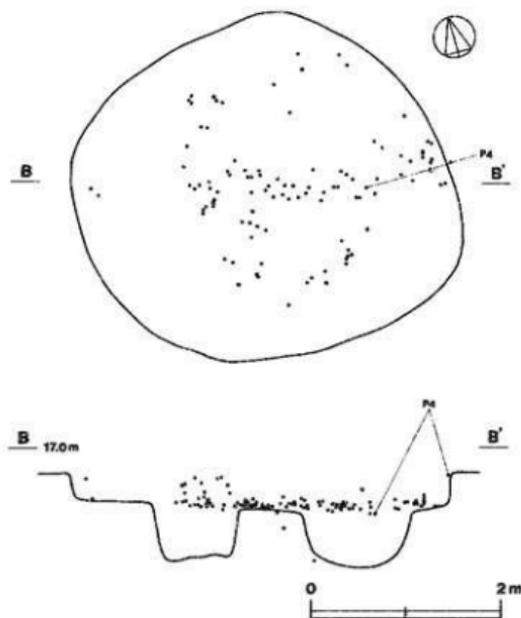
#### 第5号住居跡 (第12・13図)

本跡は、II次調査区の北部CSfs区を中心に確認された住居跡である。第4号住居跡の東16mほどに位置し、東側には第45～50号土壌が隣接している。第50号土壌の覆土中からは、本跡とほぼ同時期の阿玉台期の深鉢形土器 (P128)が出土している。本跡は、耕作により壁及び床の一部が擾乱を受けている。

平面形は、長径4.21m、短径 3.7mの楕円形状を呈し、長径方向はN-82°-Wを指している。壁は、確認面の下20cmの深さまで擾乱を受けており、検出が困難であったが、床面から10～15cm



第12図 第5号住居跡実測図



第13図 第5号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

置にあり、長径34~35cm、短径27~32cm、深さ52~57cmの規模を有している。P<sub>4</sub>とP<sub>9</sub>が主柱穴と思われるが、柱穴としては規模が大きすぎ疑問が残る。

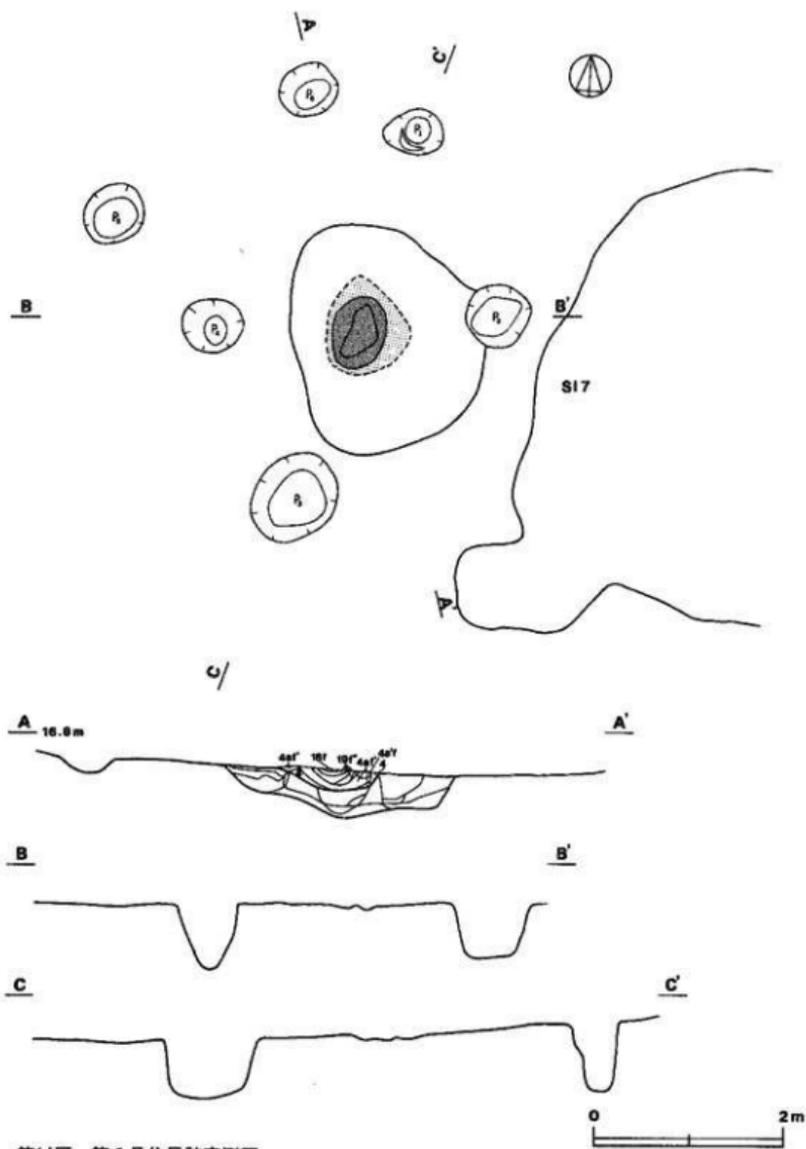
覆土は、床面近くまで攪乱を受けており、灰褐色土・暗褐色土・褐色土が斜めに交互に堆積している。この部分は耕作土であり、遺構本来の覆土は、床面上にわずかに5~10cmの厚さで残存するだけである。覆土中には、極少量の焼土粒子や炭化粒子の混入が認められる。

遺物は、住居跡の東側から中央部にかけて散在しており、縄文土器片100点、石器2点、石13点が出土している。その多くは覆土中から出土し、土器片の大半は阿玉台期に比定される。

#### 第6号住居跡(第14図)

本跡は、II次調査区の北部C5c9区を中心に確認された住居跡であり、耕作による攪乱が激しくプランの確認が困難であった。確認面で焼土の分布が認められたため、住居跡の存在を想定し調査を進めた。その結果、ほぼ中央部から東西1.8m、南北1.2mの範囲で炉と思われる焼土を検出したため、住居跡と断定するに至った。本跡は、第5号住居跡の北東14mほどに位置し、中央

の高さで立ち上がる壁の一部を手がかりとして検出した。残存壁高は10~15cmであり、垂直に立ち上がり、比較的硬く締まっている。床面は、一部に攪乱が認められるものの、全体的にはほぼ平坦で硬く締まっている。炉は検出されていない。ピットは、9か所検出されているが、柱穴と考えられるのはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>の5か所である。中でも、P<sub>4</sub>とP<sub>9</sub>は長径98~127cm、短径82~97cm、深さ54~60cmのほぼ同規模、同深度を有し、他のピットに比べ規模が大きく掘り込みもしっかりしている。また、P<sub>1</sub>とP<sub>6</sub>は、P<sub>4</sub>とP<sub>9</sub>を結ぶ線を軸としてほぼ対象の位



第14图 第6号住居跡実測図

部で第94号上壊と、東側で第7号住居跡と重複している。本跡がこれらのなかでは最も新しい。

平面形及び規模については、攪乱により壁が残存しておらずプランをとらえることができなかったため、不明である。しかし、検出された炉の位置や柱穴の配列から、直径5mほどのほぼ円形状を呈する住居跡であったものと推定される。推定プラン内の床面は、炉を中心として比較的硬く締まっている。炉は推定プランの南東寄りに位置しており、攪乱をまぬかれれば完全な形状を留めている。平面形は、長径110cm、短径72cmの楕円形を呈し、床面を20cmほど撚鉢状に掘りくぼめ地床<sup>1)</sup>としている。中央部は、炉床下27cmの深さまで熱を受けレンガ状に赤く焼けており、長期間使用されたものと思われる。また、炉を中心として、北西方向に長径2.5m、短径2mの長楕円形を呈する黒色の落ち込みが検出された。調査の結果、土壌であることが判明したため、第94号上壊と命名した。本跡の炉は、この土壌の覆土を掘り込んで形成されている。ピットは6か所検出されており、炉を中心として対称の位置に検出されたP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が主柱穴と思われる。主柱穴は、長径65～102cm、短径55～84cm、深さ60～75cmの規模を有しており、北東方向に長い長方形に配列されている。

覆土は20cmほど堆積していたが、攪乱を受けており、灰褐色土・暗褐色土が斜めに堆積している。遺構本来の覆土は残存していない。

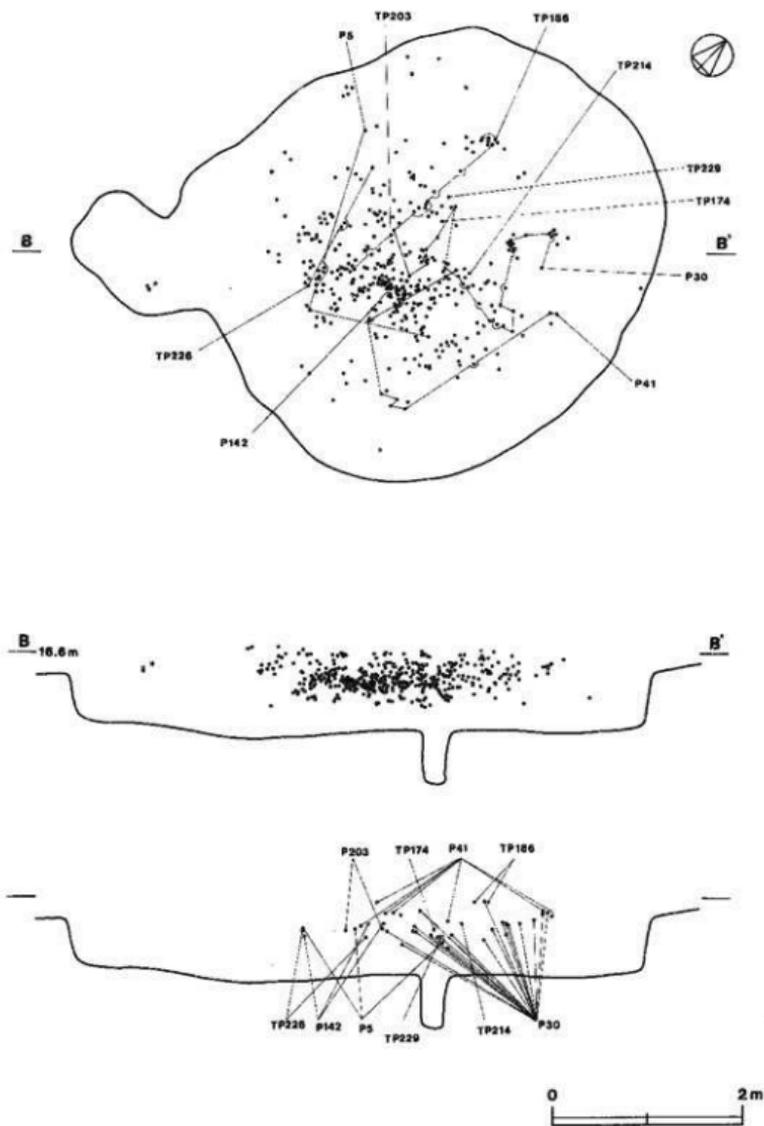
遺物は、縄文土器片108点、石器2点、石54点が出上しており、土器片の大半は加曾利E期に比定される。遺物の多くは住居跡の北側から検出されており、覆土中出土のものが大半である。P<sub>3</sub>覆土中からは磨製石斧(Q13)が出土している。

#### 第7号住居跡 (第15・16号)

本跡は、Ⅱ次調査区の北部C5c9区を中心に確認された住居跡である。第12号住居跡の西8mほどに位置し、西側で第6号住居跡と重複している。本跡の方が古い。攪乱が激しくプランの確認が困難であったため攪乱を受けていないレベルまで掘り下げプランを確認した。その結果、中央部付近に焼土粒子・炭化粒子が比較的多く検出されたため、炉の存在を想定し、直交するベルトを設定して調査を進めた。

平面形は、長径4.82m、短径4.09mの楕円形状を呈し、長径方向はN-38°-Eを指している。壁は、確認面の下20～25cmの深さまで攪乱を受けており、上部は明確でないが、中～下部にかけては遺存状態が良く、垂直に立ち上がり硬く締まっている。残存壁高は50～60cmである。床面は平坦で、全体的に硬く踏み固められている。覆土中に焼土粒子や炭化粒子の混入が認められたが、炉は検出されていない。ピットは2か所検出されている。ほぼ中央に検出されたP<sub>1</sub>は、直径35cmの円形を呈し、床面を円筒状に50cmほど掘り込んでいる。P<sub>2</sub>は直径13～15cm、深さ8cmの小穴である。P<sub>1</sub>が主柱穴と思われる。





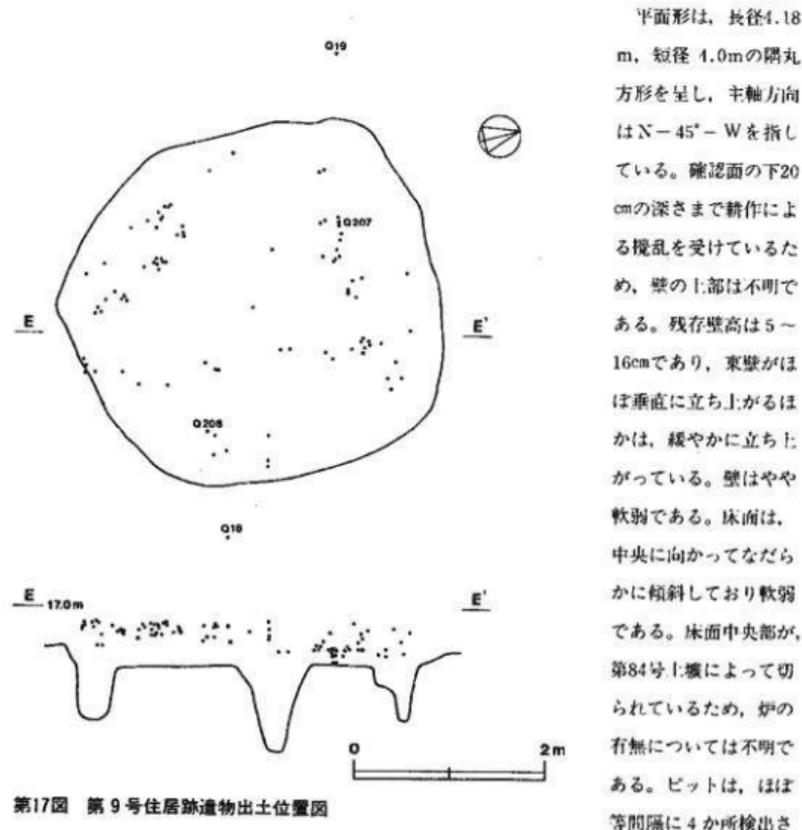
第16図 第7号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

覆土は、確認面の下20～25cmの深さまで攪乱を受けているが、下層は暗褐色及び黒褐色を呈し硬く締まっている。下層の覆土中には、焼土粒子・炭化粒子・ハードローム小ブロックが多量に含まれており、自然堆積の状態を示している。

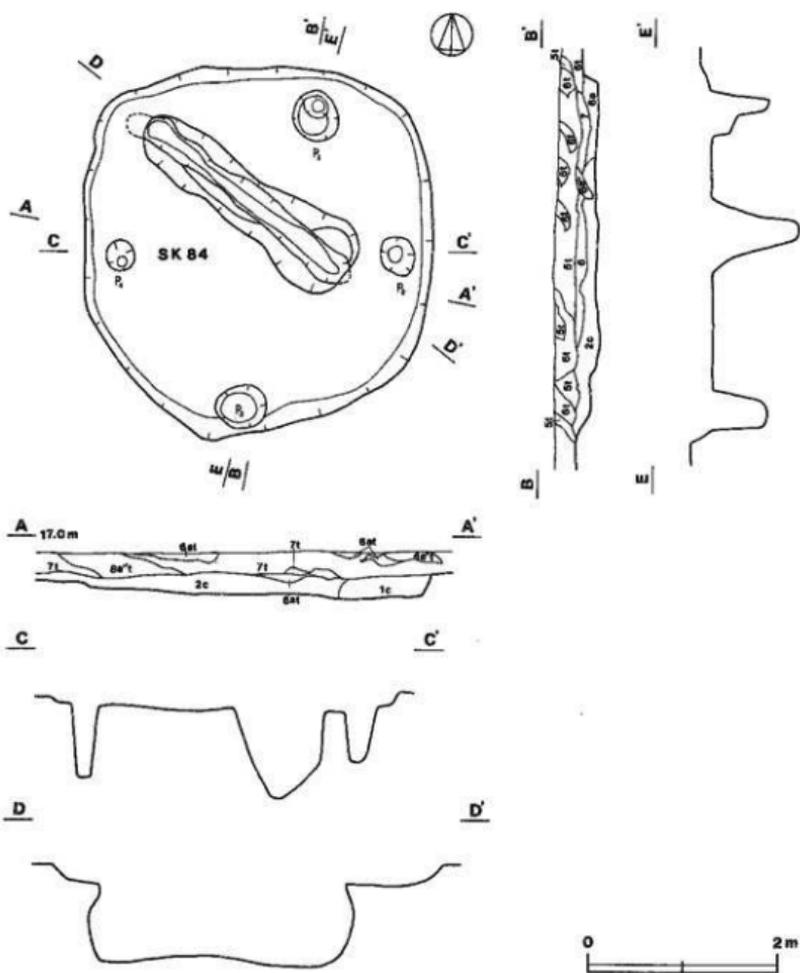
遺物は、住居跡中央部付近に集中して検出されており、覆土の中層から縄文土器片 230点、石器 2点、石30点が出土している。土器片の大半は阿玉台期に比定される。

#### 第9号住居跡（第17・18図）

本跡は、Ⅱ次調査区の北部C5a区を中心に確認された住居跡である。第10号住居跡の南西4mほどに位置し、南側0.5mには第11号住居跡が隣接している。住居跡中央部が、第84号土壌によって切られている。



第17図 第9号住居跡遺物出土位置図



第18图 第9号住居跡実測図

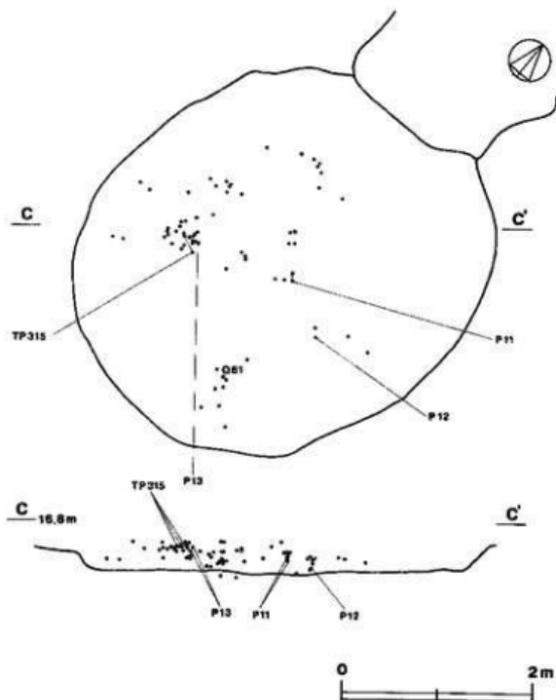
れており、長径32～54cm、短径30～48cm、深さ58～76cmの規模を有している。いずれも主柱穴と思われる。主柱穴の中でも、南壁際に検出されたP<sub>3</sub>は特にしっかりしている。

覆土は、その上半分が擾乱を受けており、暗褐色土・黒褐色土が交互に斜めに堆積している。遺構本来の覆土は、その下に20～25cmほど残存している。床面に近づくにつれて暗褐色土から褐色土に変わり、縮まりを増している。覆土中には、極少量であるが焼土粒子や炭化粒子が含まれている。

遺物は、住居跡内に散在し、覆土中から縄文土器片92点、石器5点、石19点が出上している。土器片の大半は加曾利E期に比定される。

#### 第10号住居跡 (第19・20図)

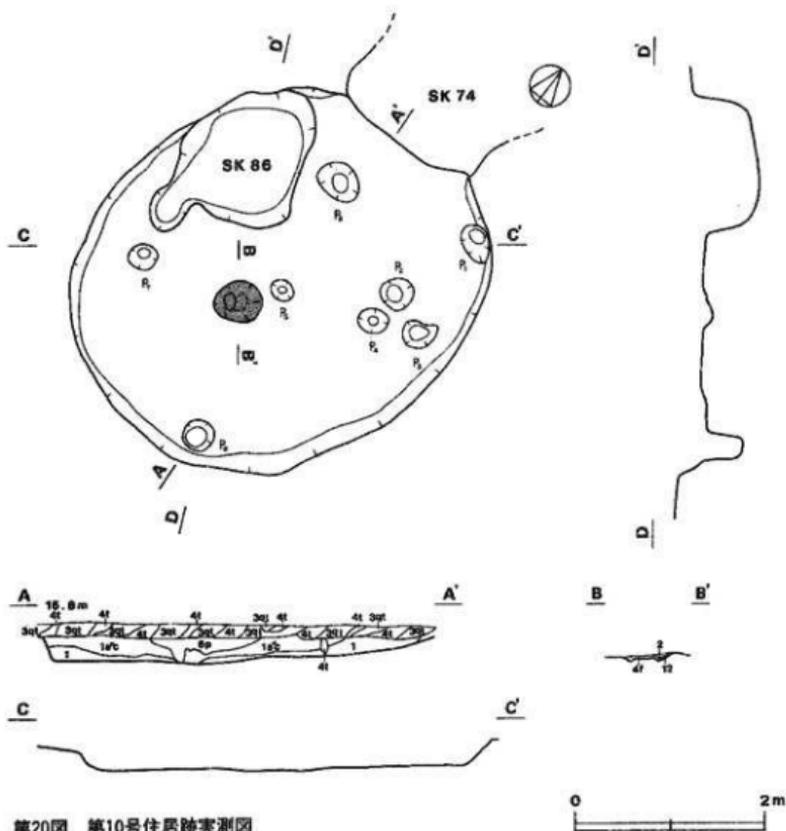
本跡は、Ⅱ次調査区の北部C6d<sub>2</sub>区を中心に確認された住居跡であり、第9号住居跡の北東2mほどに位置している。北壁の一部を第74号土壌によって切られ、西壁下の床面も第86号土壌によって切られている。



第19図 第10号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

平面形は、長径3.92m、短径3.82mの円形状を呈し、長径方向はN-30°-Eを指している。壁の上部は擾乱を受けており、残存壁高は12～30cmである。残存壁のうち東壁及び西壁は遺存状態が比較的良く縮まっているが西壁及び北壁は掘り込みが浅く遺存状態が悪い。床面は、ほぼ平坦であるが軟弱である。如は、住居跡の中央部からやや南西側に偏した位置に検出されている。長径53cm、短径43cmの楕円形状を呈し、

平面形は、長径3.92m、短径3.82mの円形状を呈し、長径方向はN-30°-Eを指している。壁の上部は擾乱を受けており、残存壁高は12～30cmである。残存壁のうち東壁及び西壁は遺存状態が比較的良く縮まっているが西壁及び北壁は掘り込みが浅く遺存状態が悪い。床面は、ほぼ平坦であるが軟弱である。如は、住居跡の中央部からやや南西側に偏した位置に検出されている。長径53cm、短径43cmの楕円形状を呈し、



第20図 第10号住居跡実測図

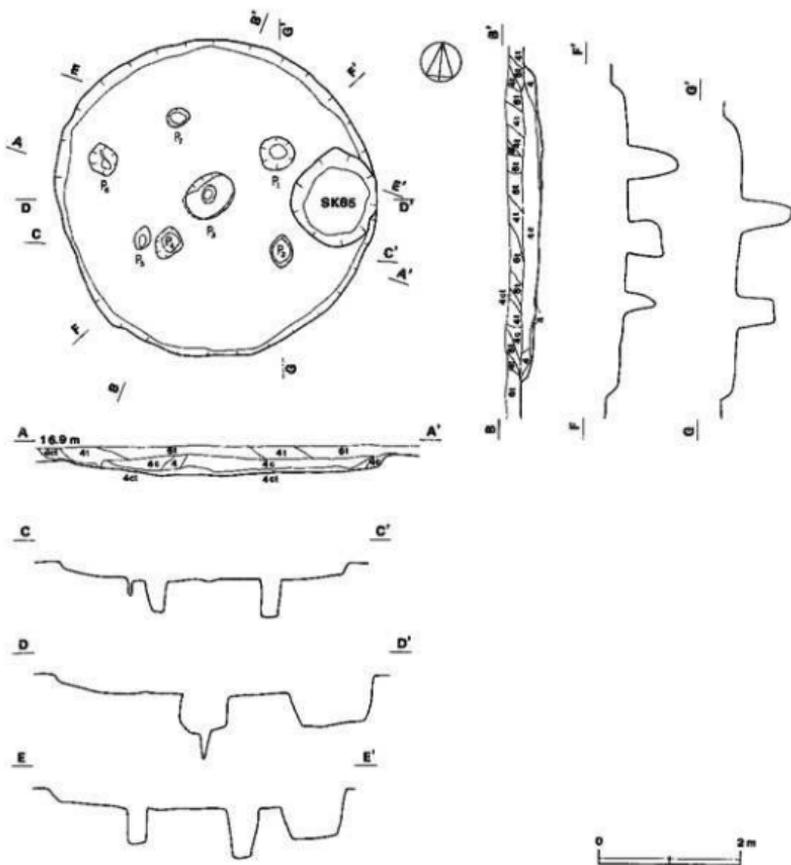
床面を5～10cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉床はさほど焼けておらず、短期間の使用を思わせる。ピットは8か所検出されており、中央部に検出されたP<sub>3</sub>を中心として、ほぼ対称の位置に検出されたP<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>5</sub>が規模、形状から主柱穴と思われる。主柱穴は長径30～48cm、短径26～34cm、深さ34～46cmの規模を有している。P<sub>3</sub>は炉に近すぎ、柱穴と考えにくい。出入口は明確でないが、炉の位置や柱穴の配列からP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間が想定される。

覆土は、確認面の下10～15cmの深さまで攪乱を受けており、灰褐色土・褐色土が交互に斜めに堆積している。遺構本来の覆土は、その下に8～27cmほど残存しており、床面に近くなるほど暗褐色土からふい褐色土に変化している。覆土中には少量の焼土粒子や炭化粒子を含み、全体として良く締まっている。

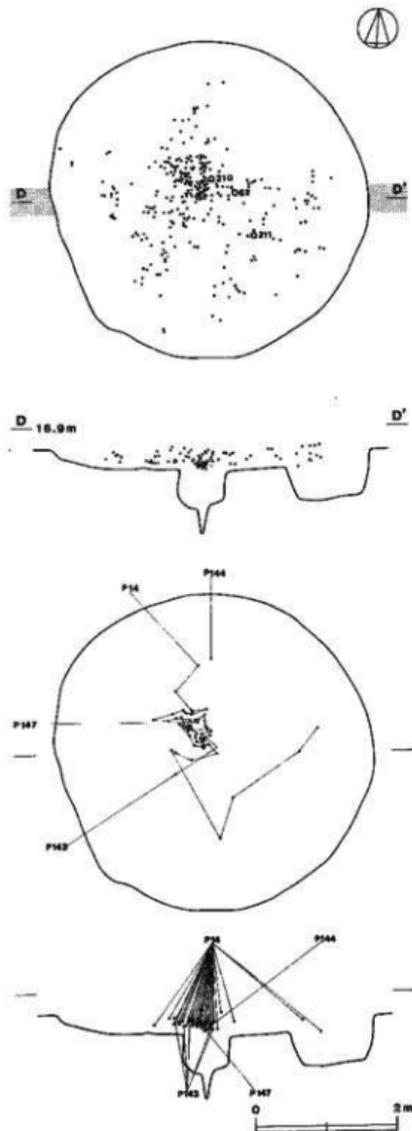
遺物は、P付近に集中するが、住居跡の西側にも散在して検出され、覆土中から縄文土器片68点、石器2点、石32点が出土している。土器片の大半は加曾E期に比定される。

#### 第11号住居跡 (第21・22図)

本跡は、II次調査区の北部C5fo区を中心に確認された住居跡であり、第9号住居跡の南側0.5mに隣接して位置している。東側で第85号土壇と重複している。第85号土壇は、長径1.4m、短径1.2mの楕円形状を呈する土壇であり、本跡の東側の床面及び壁を50cmの深さに円筒状に掘り込んで



第21図 第11号住居跡実測図



第22図 第11号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

いる。

平面形は、長径4.43m、短径4.40mの円形状を呈し、長径方向はN-52°-Wを指している。残存壁高は12~20cmであり、緩やかに立ち上がっている。壁の上部は、耕作による攪乱を受け不明であるが、残存する壁は硬く締まっている。床面は、中央に向かってゆるやかに傾斜し、多小凸凹状を呈しているが堅緻である。かは検出されていない。ピットは7か所検出されているが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>の5か所が主柱穴と思われる。主柱穴は、長径32~72cm、短径27~55cm、深さ42~99cmの規模を有している。特に、中央部から検出されたP<sub>1</sub>は、床面を92cmと深く掘り込んでおり、しっかりしている。

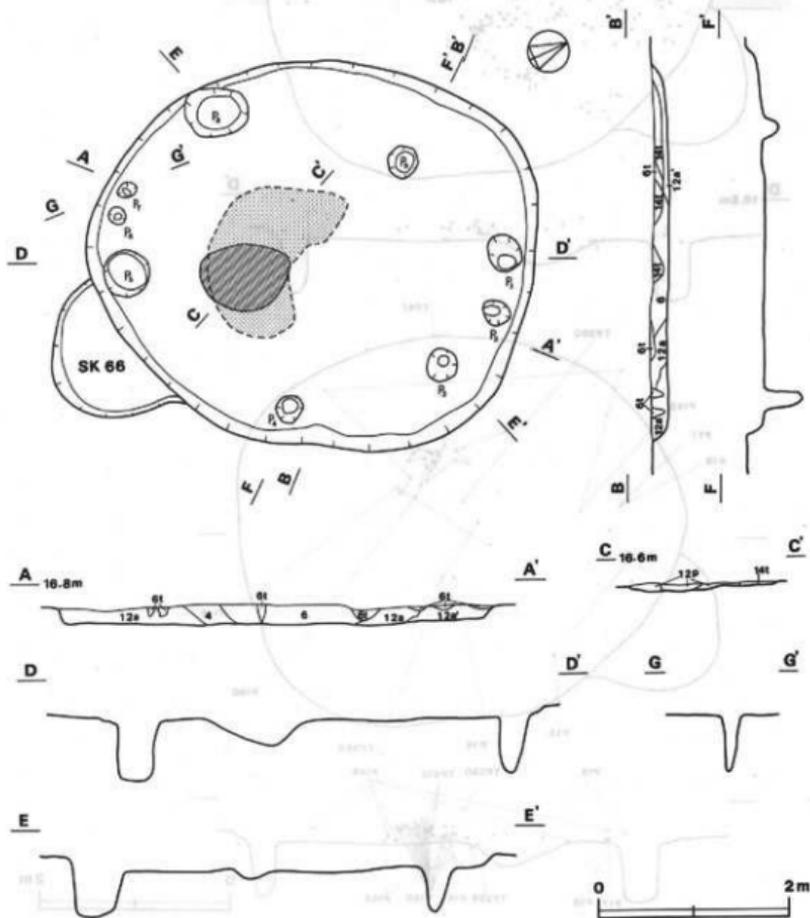
覆土は、確認面下12~25cmまで攪乱を受けており、暗褐色土と褐色土が交互に斜めに堆積している。遺構本来の覆土は、その下に15~27cmほど残存しており、中央部にはローム小ブロックを少量含む褐色土が、壁際には粒子が密で締まりのある褐色土が自然堆積している。

遺物は、縄文土器片284点、石器7点、土製品2点、石55点が出土している。これらの多くは住居跡中央部から南東側にかけて覆土の中層から出土しており、土器片の大半は阿玉台期に比定される。

第12号住居跡 (第23・24図)

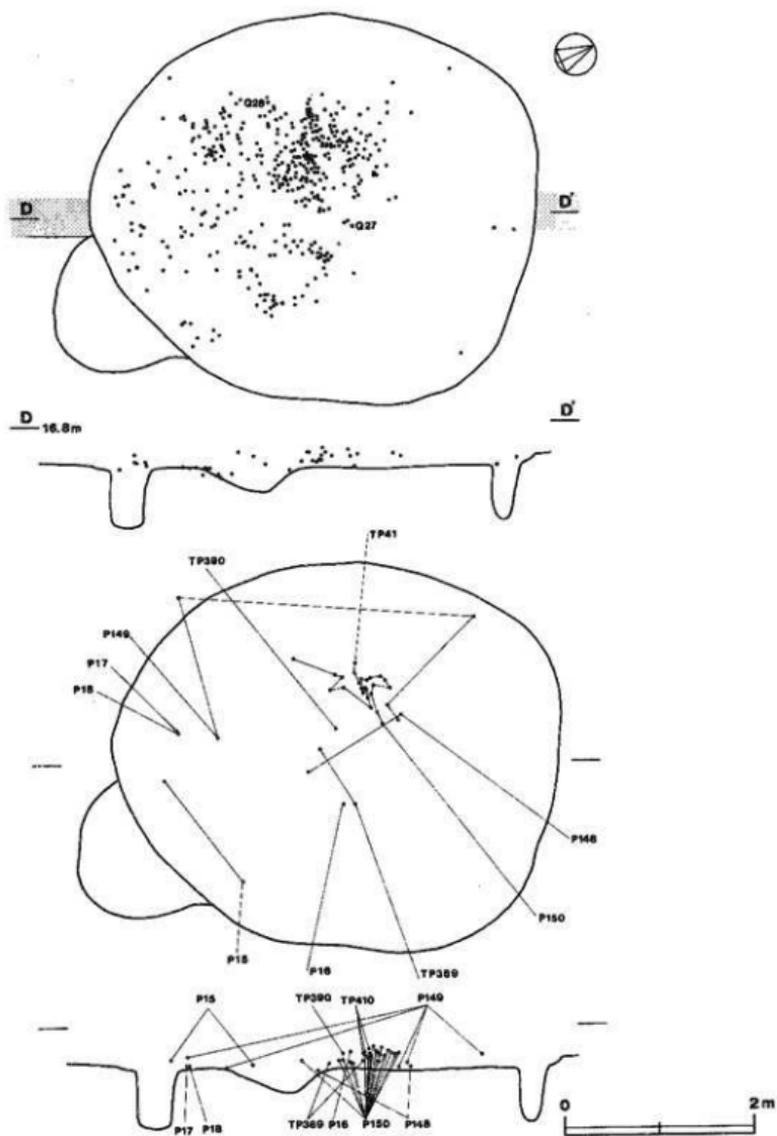
本跡は、Ⅱ次調査区の北部C6b区を中心に確認された住居跡である。第10号住居跡の北東2mほどに位置し、南側で第66号土壌と重複しているが、本跡の方が新しい。

平面形は、南西方向にやや張り出した長径4.70m、短径4.08mの楕円形状を呈し、長径方向はN-34°-Eを指している。壁の上部は攪乱を受けており不明であるが、残存壁高は3~20cmである。残存壁のうち南壁及び北壁は遺存状態が悪く明確でないが、東壁は遺存状態がよくほぼ垂直

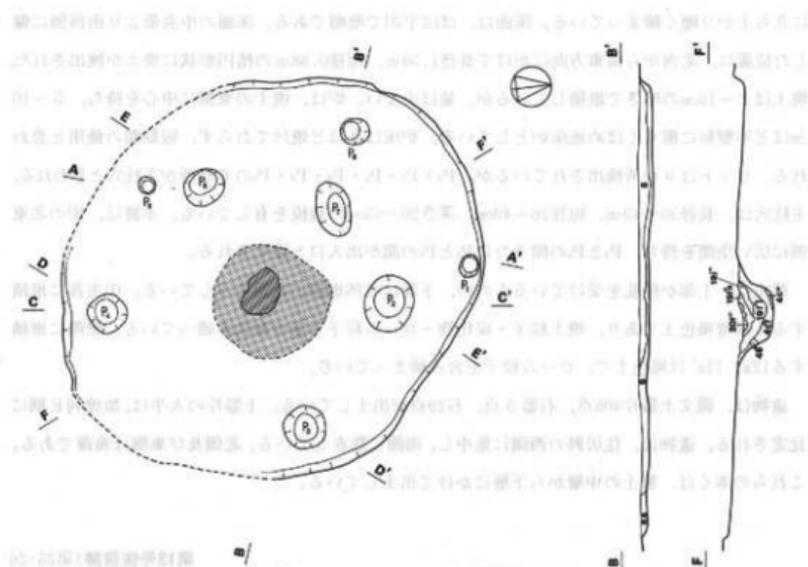


第23図 第12号住居跡実測図

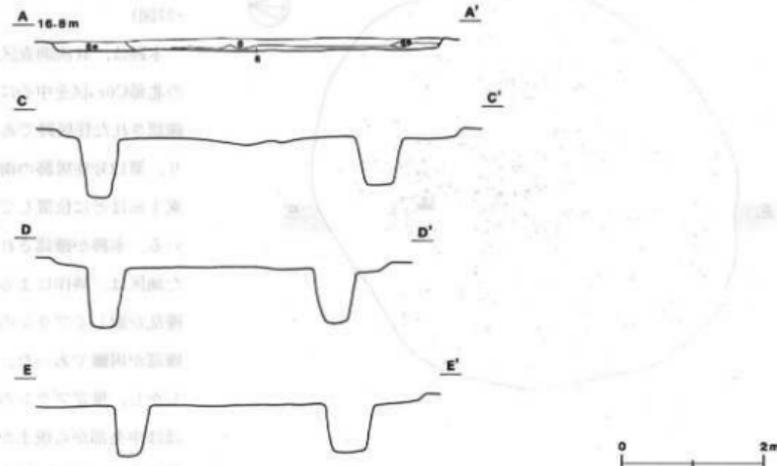
岡田隆吉・岡田隆吉・岡田隆吉・岡田隆吉・岡田隆吉・岡田隆吉・岡田隆吉・岡田隆吉・岡田隆吉・岡田隆吉



第24図 第12号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図



第25図 第13号住居跡実測図



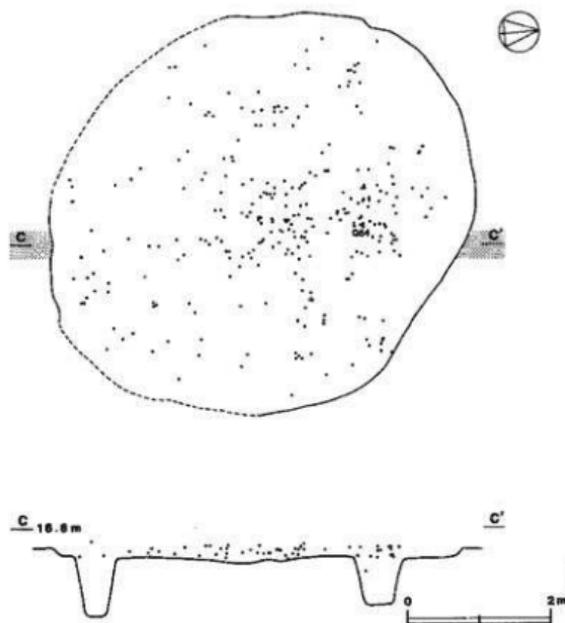
第25図 第13号住居跡実測図

同層出土の土器類等を示す。図は省略

に立ち上がり硬く締まっている。床面は、ほぼ平坦で堅緻である。床面の中央部より南西側に偏した位置に、北西から南東方向にかけて長径1.58m、短径0.88mの楕円形状に焼土が検出された。焼土は2～10cmの厚さで堆積しているが、量は少ない。炉は、焼土の東側に中心を持ち、5～10cmほど不整形に掘りくぼめ地床炉としている。炉床はさほど焼けておらず、短期間の使用と思われる。ピットは9か所検出されているが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の6か所が主柱穴と思われる。主柱穴は、長径30～49cm、短径26～49cm、深さ20～63cmの規模を有している。本跡は、炉の北東側に広い空間を持ち、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間またはP<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>の間が出入口と推定される。

覆土は、上部が攪乱を受けているものの、下部は自然堆積の状態を示している。中央部に堆積する6は暗褐色土であり、焼土粒子・炭化物・ローム粒子を極少量含み締まっている。壁際に堆積する12a、12a'は褐色土で、ローム粒子を含み締まっている。

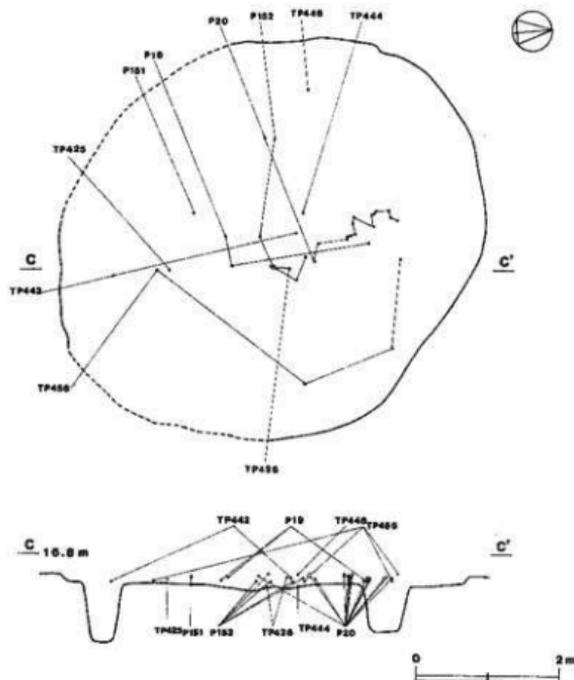
遺物は、縄文土器片405点、石器3点、石29点が出土している。土器片の大半は、加曾利E期に比定される。遺物は、住居跡の西側に集中し、南側に散在している。北側及び東側は希薄である。これらの多くは、覆土の中層から下層にかけて出土している。



第26図 第13号住居跡遺物出土位置図

#### 第13号住居跡(第25・26・27図)

本跡は、II次調査区の北部C6c4区を中心に確認された住居跡であり、第12号住居跡の南東1mほどに位置している。本跡が確認された地区は、耕作による攪乱が激しくプランの確認が困難であった。しかし、推定プランのほぼ中央部から焼土が検出され、また、焼土を囲むように柱穴と思われる落ち込みが検出されたことから、住居跡として調査を進めた



第27図 第13号住居跡土器接合関係図

の周辺が硬く踏み固められている。炉は、住居跡の中央部に位置しており、平面形は長径68cm、短径43cmの不整楕円形状で、5～12cmほど床面を掘りくぼめ地床炉としている。炉の中心部は、炉床の下42cmの深さまで熱を受けレンガ状に焼けており、長期間使用されたものと思われる。また、炉を中心として長径1.68m、短径1.6mの円形状に焼土が検出されている。ピットは8か所検出されているが、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>の5か所が主柱穴と思われる。主柱穴は、長径41～80cm、短径37～67cm、深さ38～85cmの規模を有している。P<sub>8</sub>は、他の4本に比べると規模が小さい。出入口は明確でない。

覆上は3層に区分され、床面に近くなるほど極暗褐色土から暗褐色土に変化し、ロームブロックの量が増加してくる。覆上中には焼土粒子や炭化粒子が極少量含まれ、全体として締まっている。

遺物は、縄文土器片300点、石器1点、土製品1点、石41点が出土している。その分布状況をみ

ものである。

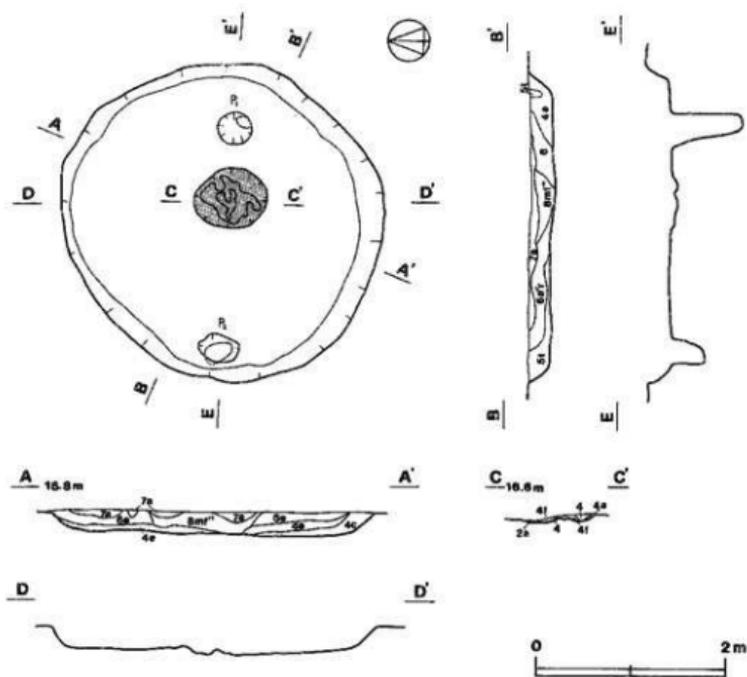
平面形は、南西側及び南東側の壁が残存していないため明確でないが、ほぼ北西から南東方向に長い長径6.24m、短径5.32mの楕円形状を呈する住居跡と思われる。また長径方向はN-44°-Wを指すものと思われる。壁は、その上部の大半が耕作によって削平されているもの、南西壁及び南東壁を除いてわずかに残存し、残存壁高は7～13cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。壁は硬く締まっており、床面は、ほぼ平坦で硬い。特に、炉

ると、住居跡の中央部や北側にわずかに集中する部分が見られるが、全体的に散在しており、その多くは、覆土の中層から出土している。土器片の大半は加曾利E期に比定される。

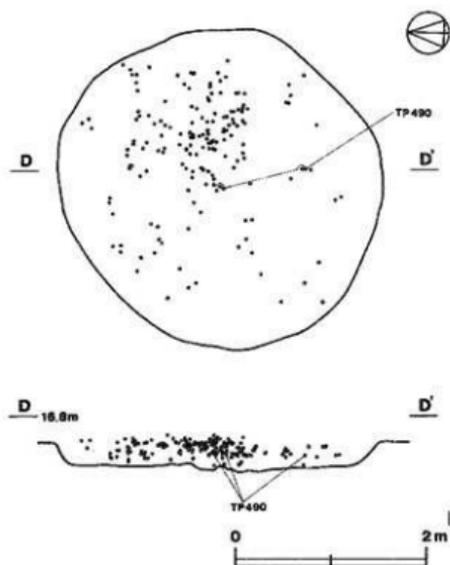
#### 第14号住居跡 (第28・29図)

本跡は、Ⅱ次調査区の北部C6d区を中心に確認された住居跡であり、第13号住居跡の南東2mほどに位置し、東側2mほどに第15号住居跡が隣接している。

平面形は、長径3.49m、短径3.14mの楕円形を呈し、長径方向はN-40°-Eを指している。残存壁高は21-25cmで、東側及び北側の壁はほぼ垂直に立ち上がり、南側及び西側の壁はやや緩やかに立ち上がっている。西側の一部は擾乱を受けているが、他は硬く締まっている。床面は、ほぼ平坦で締まっているが、特にかゝの周囲は堅緻である。かゝは、住居跡中央部よりやや北側に偏した位置に検出され、平面形は長径74cm、短径65cmの楕円形を呈し、床面を5-8cm掘りくぼめた



第28図 第14号住居跡実測図



第29図 第14号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

が覆土中から出土しており、土器片の大半は加曾利E期に比定される。

#### 第15号住居跡 (第30号)

本跡は、Ⅱ次調査区の北部C6d区を中心に確認された住居跡である。第14号住居跡の東側2mほどに位置し、北側で第25号住居跡と一部重複している。本跡の方が古い。

平面形は、長径4.44m、短径4.28mの不整形円形を呈している。長径方向はN-71°-Wを指している。壁は、上部が一部攪乱を受けており不明な点もあるが、残存壁高は15-32cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、硬く締まっている。床面は、全体的に凸凹が激しく、中央部に向かってやや傾斜しており、きわめて堅緻である。床面は東側及び西側に広い空間を持ち、出入口はP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>間が想定される。炉は検出されていない。ピットは6か所検出されているが、ほぼ中央部に検出されたP<sub>2</sub>及び北西壁際に検出されたP<sub>3</sub>が柱穴と考えられる。特に、中央部に検出されたP<sub>2</sub>は、長径42cm、短径31cmで床面を72cmほどU字状に深く掘り込んでおり、主柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>は補助的な柱穴と思われる。いずれにしても、柱穴は不規則に配列されている。

覆土は、上部が一部攪乱を受けているものの、極暗褐色土・暗褐色土・褐色土の順で自然堆積

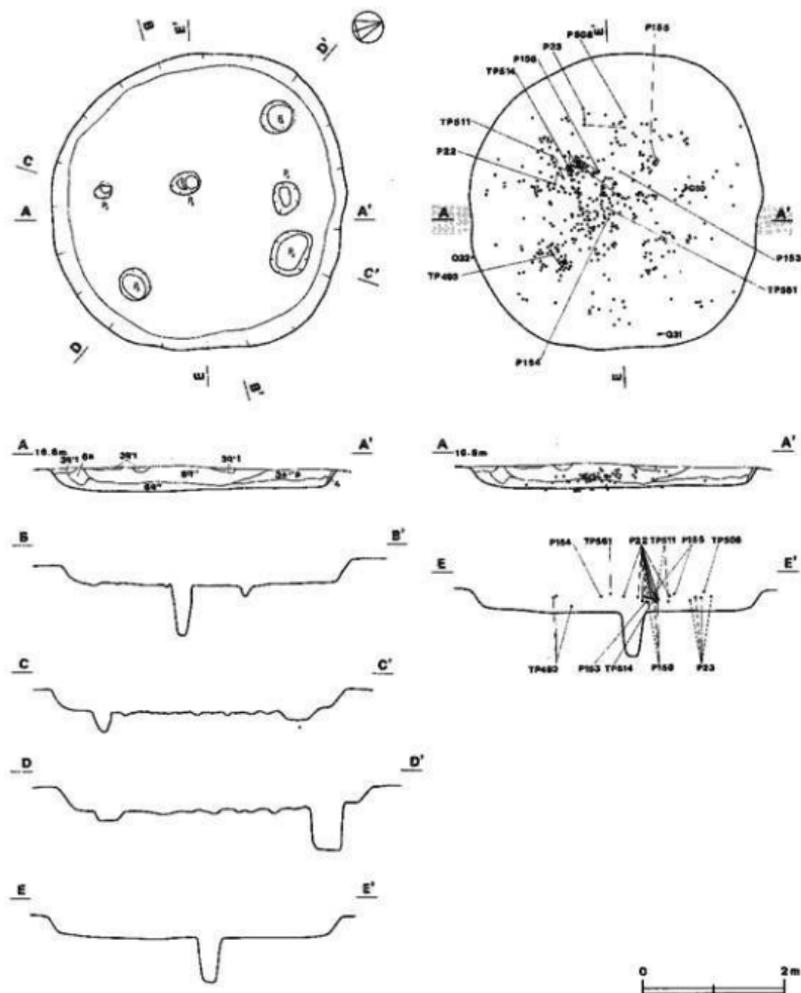
床炉としている。炉床はさほど焼けていない。ピットはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2か所検出されており、P<sub>1</sub>は直径40cm、深さ75cm、P<sub>2</sub>は長径37cm、短径30cm、深さ36cmの規模を有している。いずれもその形状や配列から主柱穴と考えられる。

覆土は、黒褐色土・暗褐色土・褐色土の順で自然堆積しており、焼土粒子・炭化粒子が極少量混入しやや締まっている。特に、中央部に堆積する8m<sup>2</sup>層には焼土粒子・炭化粒子が多量に混入している。

遺物は、縄文土器片153点、石13点が出土している。その分布状況を見ると、住居跡の北東側に集中する部分が見られ、その周囲からも散在的に検出されている。遺物のほとんど

しており、また、焼土粒子や炭化粒子を含み縮まっている。

遺物は、縄文土器片396点、石器4点、土製品6点、石62点が出土している。その多くは住居跡の中央部から南側にかけて検出されており、覆土の上層から中層にかけて出土している。土器片



第30図 第15号住居跡実測図・遺物出土位置図・土器接合関係図

の大半は阿玉台期のものである。

#### 第16号住居跡 (第31・32図)

本跡は、II次調査区の北部C5j<sub>1</sub>区を中心に確認された住居跡であり、第12号住居跡の北東4mほどに位置し、南側で第17号住居跡と重複している。本跡の方が新しい。

平面形は、長径3.60m、短径3.58mの不整形を呈している。長径方向はN-16°-Eを指している。壁の上部は、耕作による擾乱を受け不明である。残存壁高は10~17cmである。壁は、東側で最も遺存状態がよく、硬く締まっており、ほぼ垂直に立ち上がっている。他は緩やかに立ち上がっている。床面は、確認面の下20cmほどの深さから検出されている。ほぼ平坦であるが、ハードロームブロックが混じりゴツゴツして硬く締まっている。炉は、住居跡の中央部に位置し、平面形は長径77cm、短径55cmの楕円形を呈し、床面を5~8cmほど皿状に掘りくぼめ地床が<sup>1</sup>としている。掘り込みは浅いが、炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは7か所検出されている。柱穴としては、配列からP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の4か所が考えられるが、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>以外は小ピットである。また、性格は不明であるが、炉の北側と南側に接して同規模、同深度のピット (P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>) が検出されている。P<sub>5</sub>は第17号住居跡の柱穴の一つとも考えられる。

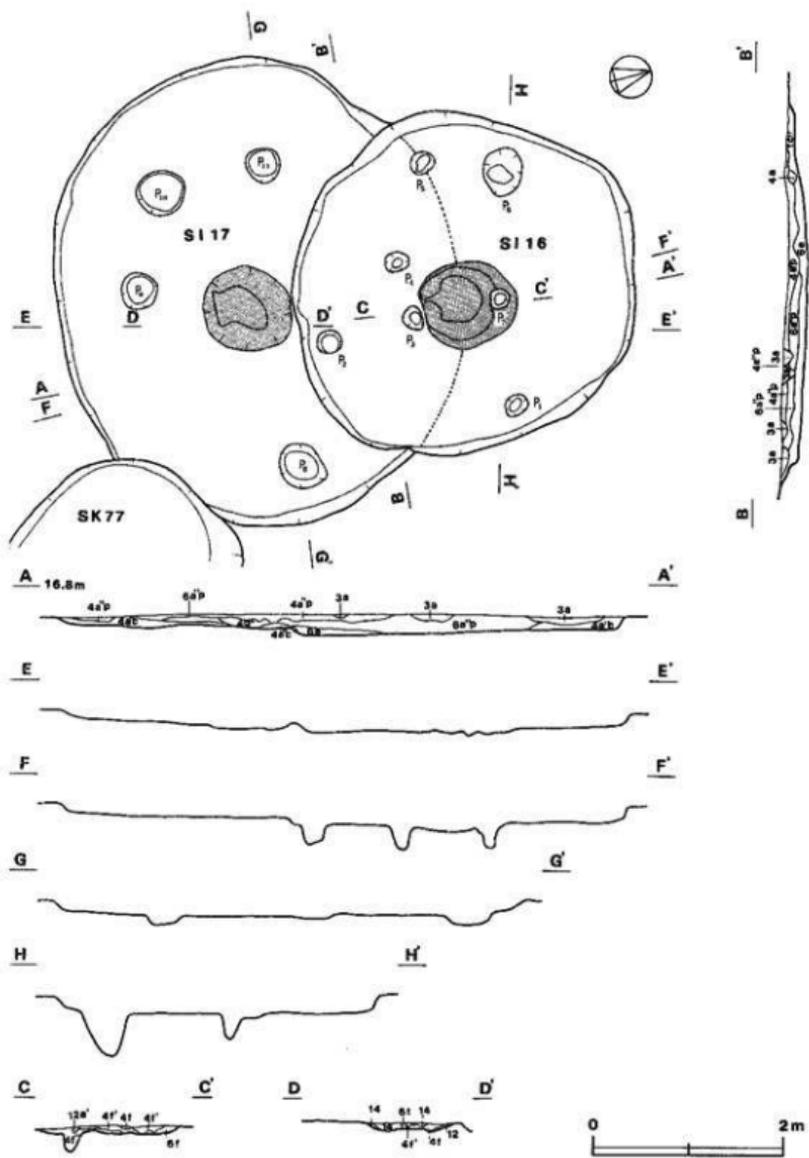
覆土は、一部擾乱を受けているが、褐色土・暗褐色土が自然堆積している。覆土中には焼土粒子や炭化粒子を少量含み、床に近づくにつれハードロームブロックが混入している。全体的によく締まっている。

遺物は、住居跡内に散在し、縄文土器片64点、石器7点、石57点が出土している。その大半は覆土中出土のものであるが、床に密着して加曾利E期の土器片が4点ほど出土している。土器片の大半は加曾利E期のものである。

#### 第17号住居跡 (第32・33図)

本跡は、II次調査区の北部C6a<sub>2</sub>区を中心に確認された住居跡であり、第12号住居跡の北東2mほどに位置している。北側で第16住居跡と、南東側で第77号土壇と重複している。いずれよりも本跡の方が古い。

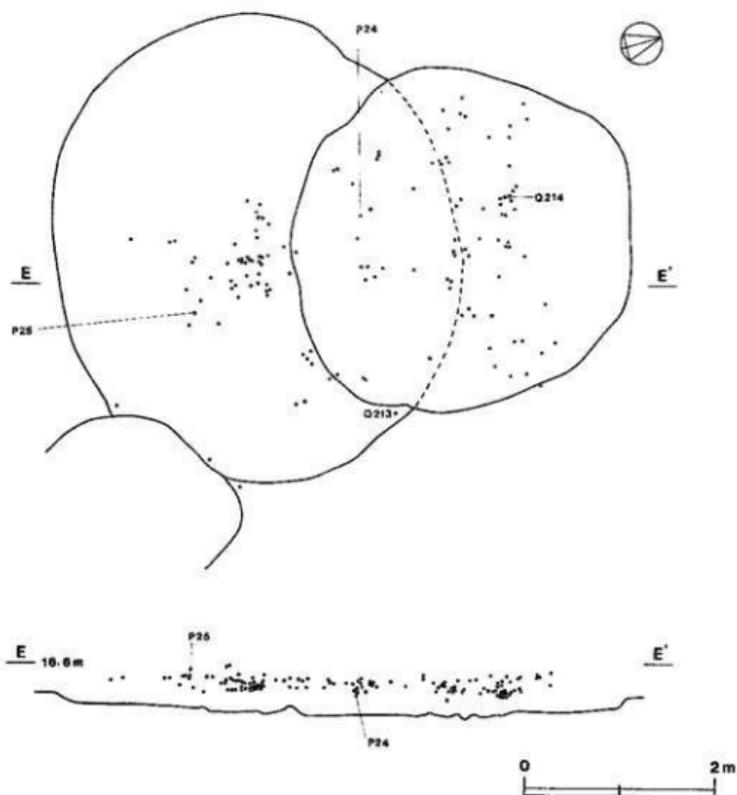
平面形及び規模については、第16号住居跡及び第77号土壇と重複しているため正確にとらえることはできないが、平面形は東西方向に長い長径4.94m、短径4.23mの楕円形状を呈する住居跡であると推定される。壁は、上部が擾乱を受け不明であるが、残存壁高は4~6cmで、緩やかに立ち上がっている。床面は、ほぼ平坦であるが、中央部に向かってやや傾斜し、炉の周辺を中心に硬く締まっている。炉は、住居跡のほぼ中央部に位置し、平面形は長径100cm、短径88cmの楕円形を呈し、床面を5~10cm皿状に掘りくぼめ地床が<sup>1</sup>としている。堆積する焼土の量は少ないが、



第31图 第16·17号住居跡実測图

か床は比較的良好に焼けている。ピットは、P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>11</sub>の4か所に検出されている。P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>11</sub>は長径37～53cm、短径36～44cm、深さ11～14cmでいずれもほぼ同規模、同深度を有しており、配列からも主柱穴と考えられる。また、第16号住居跡内に検出されたP<sub>5</sub>は、長径24cm、短径20cm、深さ26cmであり、配列から本跡に伴う可能性も考えられるがやや規模が小さく、P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>11</sub>に比べ深すぎる。P<sub>10</sub>は補助的な柱穴と思われる。

覆土は、上部が耕作による攪乱を受けているため、遺構本来の覆土は、暗褐色土が5～10cmほど自然堆積しているにすぎない。暗褐色土中にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が少量混入しよく締まっている。

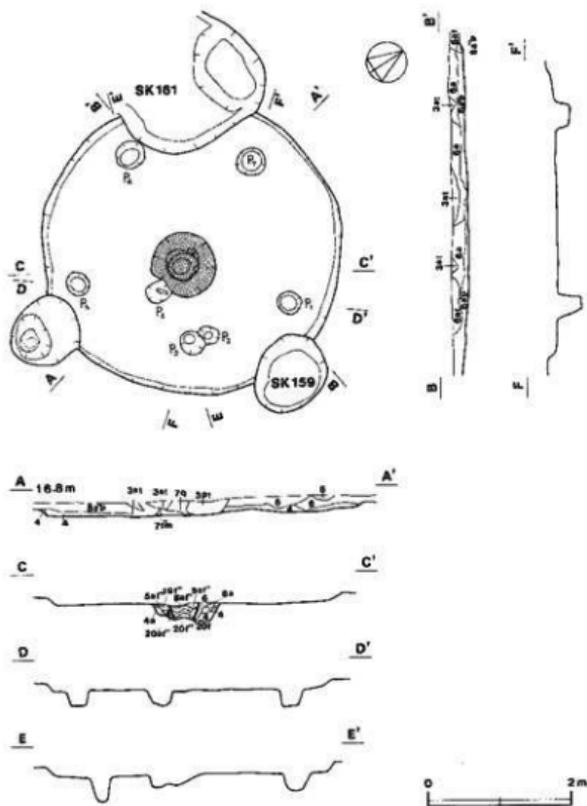


第32図 第16・17号住居跡遺物出土位置図

遺物は、縄文土器片49点、石器1点、石7点が出土している。これらは、住居跡中央部の炉の周辺から集中して検出されており、その多くは覆土の上層から出土している。土器片は、加曾利E期に比定される。

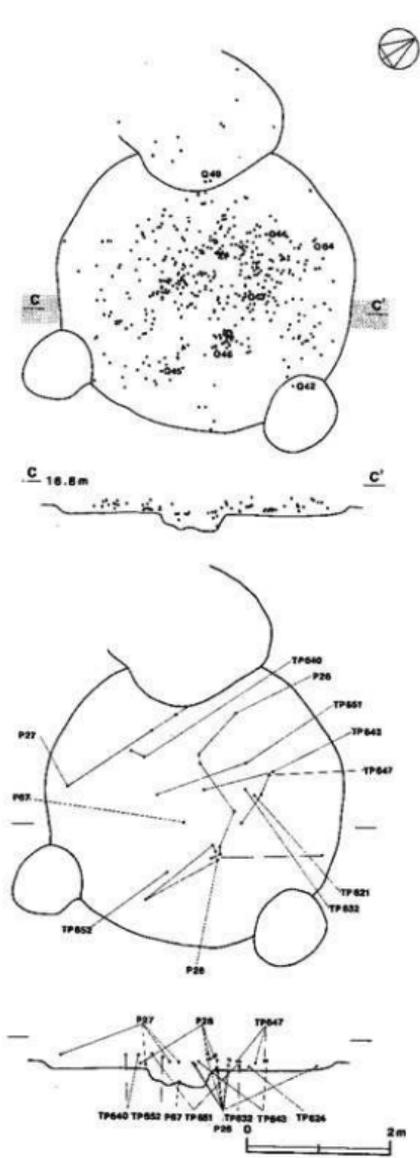
### 第18号住居跡（第33・34図）

本跡は、II次調査区の北部B6j区を中心に確認された住居跡であり、第17号住居跡の東8mほどに位置し、東側2～3mには第20・22号住居跡が隣接している。東側で第159号土壇、南側で第166号土壇、西側で第161号土壇と重複している。重複遺構のなかでは本跡が最も古い。



第33図 第18号住居跡実測図

平面形は、土壇と3か所で重複しているため推定であるが、長径4.21m、短径1.11mの円形状を呈するものと思われる。本跡の確認された地区は、耕作による擾乱が激しく確認面の下10～15cmまでその影響を受けている。壁の上部は擾乱のため不明であるが、残存壁高は10～12cmでやや緩やかに立ち上がり縮まっている。床面はロームで縮まっており、ほぼ平坦である。特に、炉の周辺は堅緻である。炉は、住居跡中央部よりやや南東側に偏した位置に検出されており、長径90cm、短径77cm、深さ36cmの楕円形状の掘り込みの中に、底部



第34図 第18号住居跡遺物出土位置図  
土器接合関係図

を欠いた加曾利E期の深鉢形土器（P67）を埋め込み、土器埋設がしている。埋設土器の内部及び南側には、焼土がブロック状に堆積し硬く締まっており、長期間使用されたものと思われる。ピットは7か所検出されている。規模、配列からP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>が主柱穴と考えられる。主柱穴は、長径32~41cm、短径22~32cm、深さ22~37cmの規模を有し、五角形状に配列されている。出入口は、Qの位置から想定してP<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>の間が最も有力である。

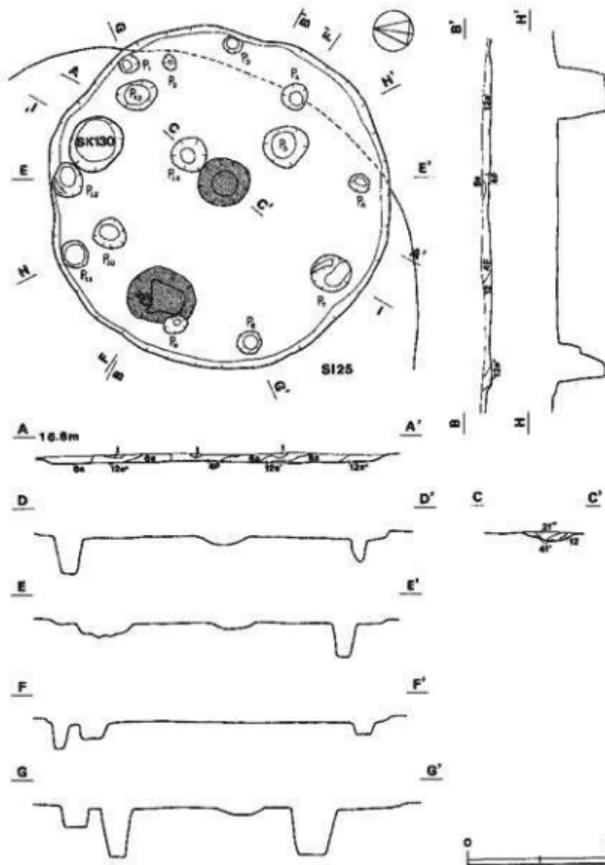
覆土は、上部が擾乱を受けているため、遺構本来の覆土は暗褐色土がわずかに10~15cmほど堆積しているだけである。覆土中には、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が少量含まれている。床面に近づくほどローム粒子の量が増し締まりを帯びて来る。

遺物は、住居跡内全域に散在しており、縄文土器片401点、石器11点、石91点が出土している。これらの多くは覆土の中層から出土しており、土器片の大半は、加曾利E期に比定される。

第19号住居跡 (第35・36図)

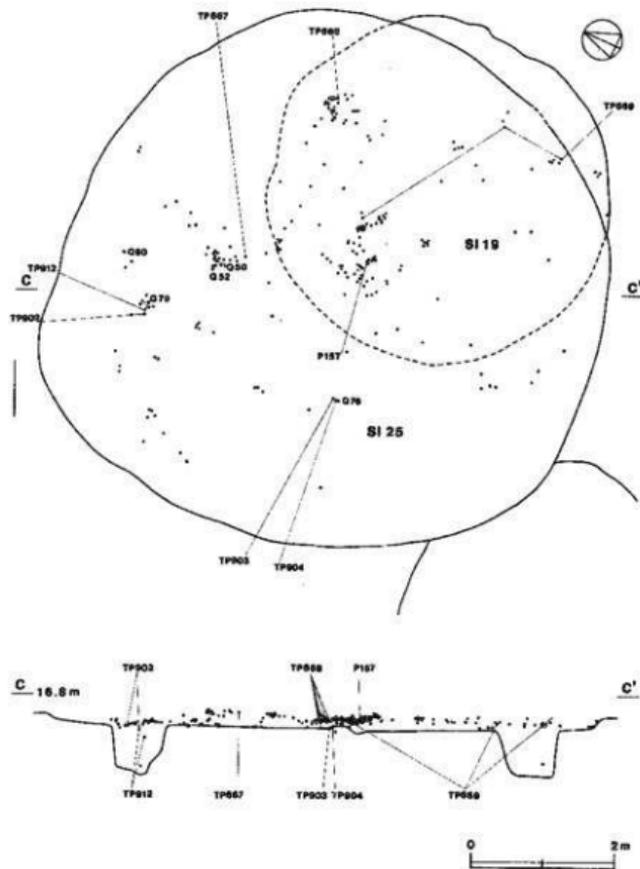
本跡は、Ⅱ次調査区の北部C6c1区を中心に確認された住居跡である。第15号住居跡の北東2mほどに位置し、第25号住居跡及び第130号土壌と重複している。いずれの遺構よりも本跡の方が新しい。

平面形は、長径4.86m、短径4.78mの円形状を呈し、長径方向はN-57.5°-Wを指している。壁は、上部が耕作による擾乱を受けており、全体的に遺存状態が悪い。残存壁高は7~11cmほどであり、東側の壁は比較的明瞭であるが西側の壁ははっきりしない。壁はやや軟弱であり、緩やかに立ち上がっている。床面は平坦であり、硬く締まっている。北壁下の床面を第130号土壌が



掘り込んでいる。炉は、住居跡のほぼ中央部に位置し、平面形は長径73cm、短径65cmの楕円形を呈し、床面を12cm皿状に掘りくぼめ地床かとしている。炉内に多量の焼土が堆積しているが、如床はさほど焼けていない。床面を調査中、住居跡の西側から検出されたPの周辺に、黒色の落ち込みと焼土粒子・炭化粒子の分布を確認した。調査したところ、本跡の西側に新たな住居

第35図 第19号住居跡実測図



第36図 第19・25号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

～57cm, 短径23～40cm, 深さ32～46cmの規模を有している。出入口は, 柱穴の配列や炉の位置から南東側が予想される。P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>14</sub>等のやや規模が大きく深いビットは, 第25号住居跡に伴うものと考えられる。

覆土は, その大部分が耕作による攪乱を受けており, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土と褐色土が交互に堆積している。

遺物は, 加曽利E期の上器片を主として出土している。しかし, 覆土が攪乱を受けていることや, 本跡とはほぼ同時期と思われる第25号住居跡が重複していることから, 遺物を層位的にとらえ

跡のプラン(第25号住居跡と命名)と地床炉を確認した。以上のことから, 本跡は第25号住居跡と重複し, 第25号住居跡の上に構築されたことが判明した。ビットは14か所検出されているが, 本跡に伴うビットはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>13</sub>の9か所と思われる。主柱穴はP<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>13</sub>とP<sub>3</sub>またはP<sub>4</sub>のうちのいずれかを加えた5か所と思われる。主柱穴は五角形に配列され, 長径26



ることは不可能である。おもな出土遺物については、第25号住居跡の項で述べることにする。

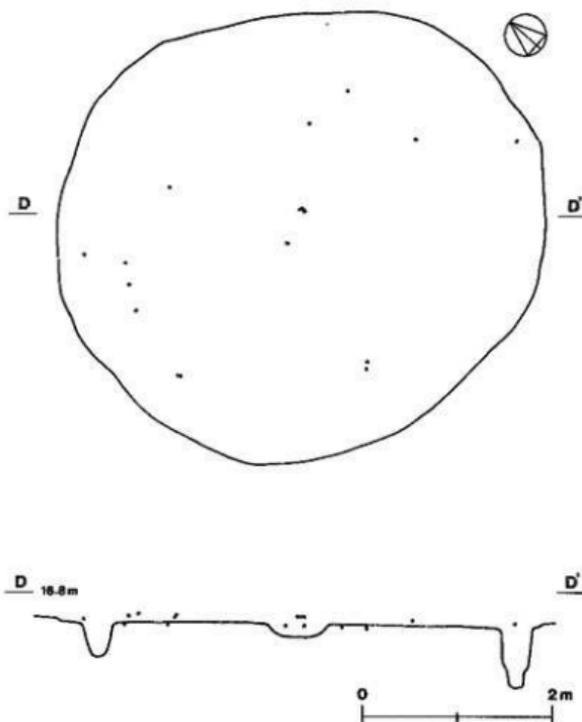
### 第20号住居跡 (第37・38図)

本跡は、II次調査区の北部C6a7区を中心に確認された住居跡である。第19号住居跡の北側1mほどに位置し、南側で第25号住居跡と一部重複している。本跡の方が新しい。

平面形は、北西方向にやや長い長径5.27m、短径4.64mの楕円形状を呈し、長径方向はN-57°-Wを指している。壁は、上部が耕作による攪乱を受けているため遺存状態が悪く、わずかに数cm残存しているだけである。このため、プランはやや不明瞭である。床面は平坦であるが、やや軟弱である。炉は、住居跡のほぼ中央部に位置し、平面形は長径72cm、短径63cmの楕円形を呈し、床面を10~15cmほど皿状に掘りくぼめ地床炉としている。覆土中には、焼土粒子を含む褐色土・

明褐色土・明赤褐色土が堆積し、炉床は熱を受け凸凹している。ピットは9か所検出されている。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>の8か所が、配列や規模から主柱穴と思われる。しかし、P<sub>6</sub>・P<sub>6</sub>は他の柱穴に比べ深さが10~15cmと浅く疑問が残る。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>を除く柱穴は、長径32~48cm、短径28~43cm、深さ30~62cmの規模を有している。P<sub>6</sub>は、検出されたピットの中では最大規模であるが、103cmと深く掘り込まれており、配列からも柱穴とは考えられない。

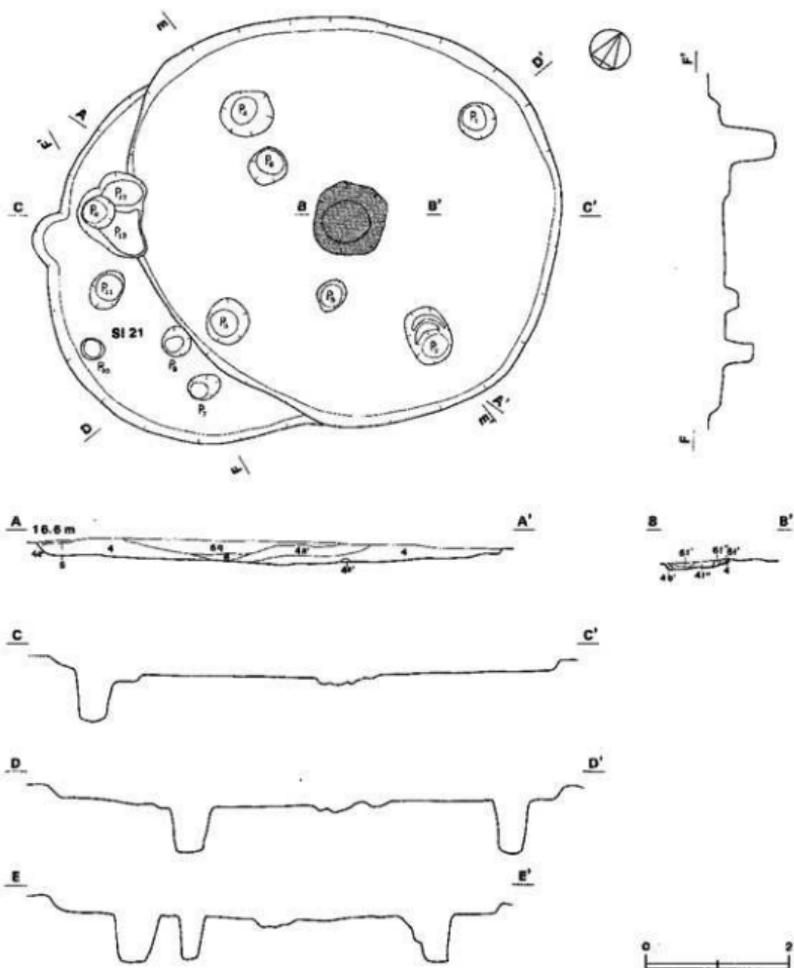
覆土は、暗褐色土・



第38図 第20号住居跡遺物出土位置図

褐色土の2層からなり、自然堆積している。床面近くには、炭化物を極少量含む暗褐色土が堆積している。褐色土は硬く締まっている。

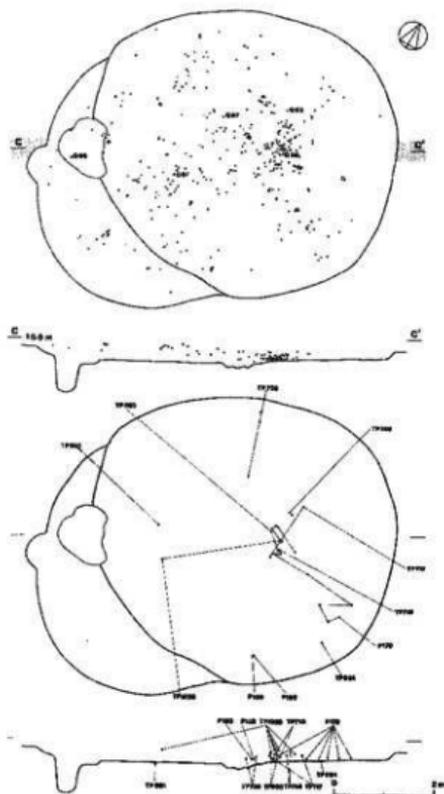
遺物は、住居跡内に散在しており、覆土中から縄文土器片12点、石12点が出土しているにすぎない。土器片は、加曾利E期に比定される。



第39図 第21・28号住居跡実測図

第21号住居跡 (第39・40図)

本跡は、Ⅱ次調査区の北部C6e区を中心に確認された住居跡である。第19号住居跡の東2mほどに位置し、北東側で第28号住居跡と重複している。本跡の方が古い。本跡が検出された地区は耕作による擾乱を受けており、遺構の確認が困難をきわめた所である。当初、一軒の住居跡を想定して調査を進めていたが、床面を検出していく過程で、本跡の床面を切り込むように暗褐色の落ち込みが確認された。暗褐色の落ち込みを調査したところ、本跡の床面下10cmの深さから硬く締まった良好な床と炉跡を検出したため、第28号住居跡と命名した。この結果、本跡は第28号住居跡と重複し、その三分の二ほどがすでに破壊されていることが判明した。重複しているため全貌は明らかでないが、直径5m前後の円形状を呈する住居跡と推定される。残存壁高は8~14cmで、やや緩やかに立ち上がり、壁は硬く締まっている。床面は、その大半が第28号住居跡によ



第40図 第21・28号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

て切られているが、残存する床面は中央部に向かって緩やかに傾斜しており、軟弱である。炉の有無については不明である。ピットは7か所検出されているが、規模や配列からP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>11</sub>が柱穴と考えられる。また、第28号住居跡内に検出されたP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の2か所も、本跡に作るものと思われる。柱穴は、長径45~58cm、短径35~45cm、深さ26~72cmの規模を有している。

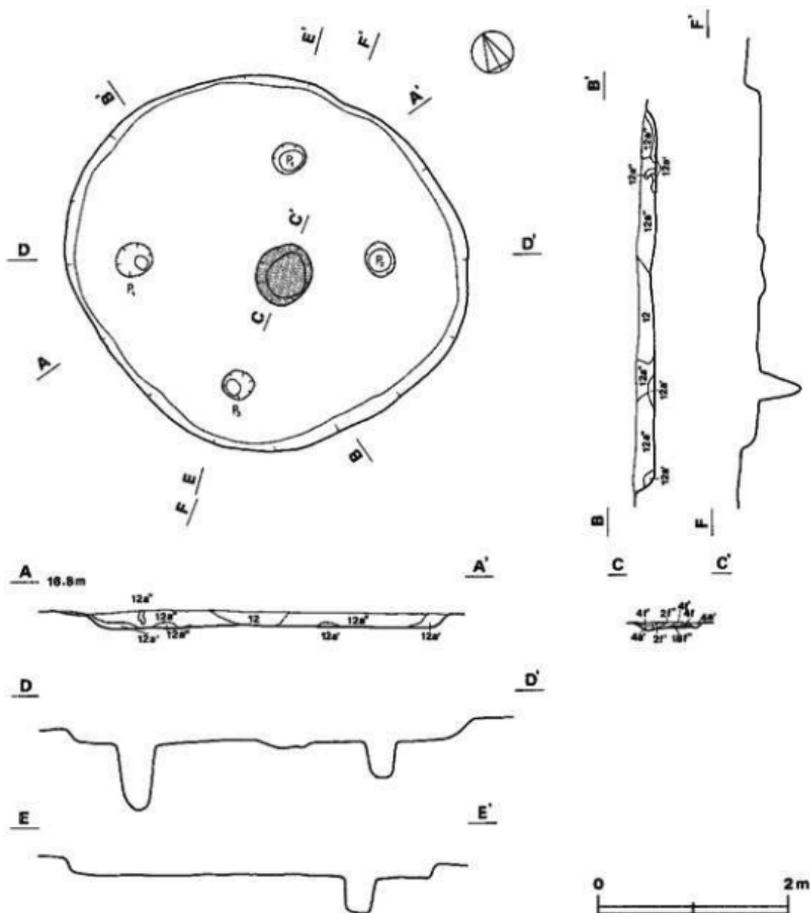
覆土は、ローム粒子や焼土粒子を少量含む暗褐色土・褐色土が自然堆積している。

遺物は、第28号住居

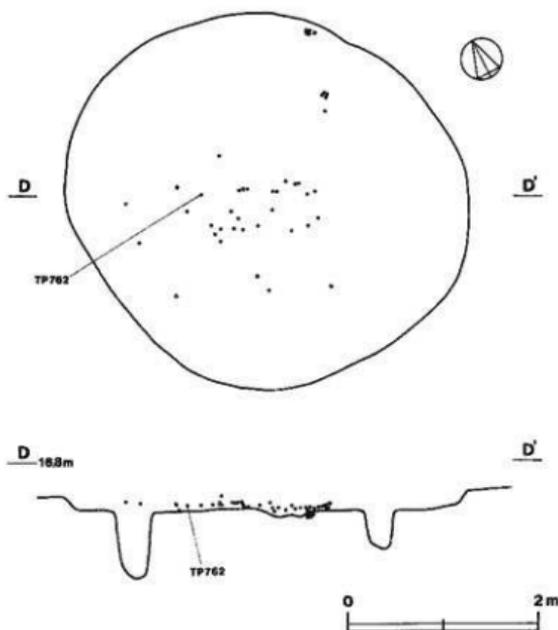
跡と重複しているため明確ではないが、本跡に伴うものとしては、縄文土器片19点、石器1点、石3点が出土しており、土器片は加曾利E期に比定される。

#### 第22号住居跡 (第41・42図)

本跡は、II次調査区の北部B6j<sub>a</sub>区を中心に確認された住居跡である。第18号住居跡の北側3mほどに位置し、西側2mには第20号住居跡が隣接している。



第41図 第22号住居跡実測図



第42図 第22号住居跡遺物出土位置図

平面形は、長径4.20m、短径3.80mの楕円形を呈し、長径方向はN-24°-Wを指している。壁は、南東側で緩やかに立ち上がるほかはほぼ垂直に立ち上がり、硬く締まっている。残存壁高は14~16cmである。床面は、北東側に緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦であり締まっている。炉は、ほぼ中央部に位置し、平面形が長径67cm、短径60cmほどの楕円形を呈し、床面を5~8cmほど肌状に掘りくぼめて地床炉としている。炉を囲

むように土器片が検出されている。炉内には焼土が堆積し、炉床はロームが焼け凸凹状をなしている。ピットはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の4か所検出されており、いずれも主柱穴と考えられる。主柱穴は東西方向に長い長方形に配列され、長径34~39cm、短径29~35cm、深さ35~69cmの規模を有している。床面は北側に広い空間を持っている。出入口は明確でない。

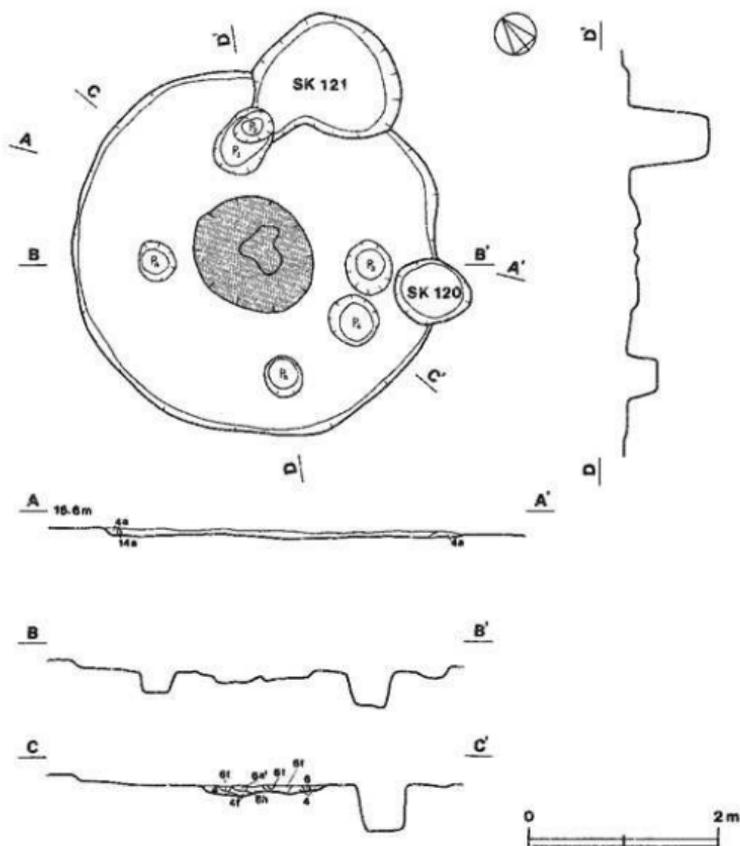
覆上は、3層からなり締まりを帯びた褐色土が自然堆積している。中央部に堆積する12は焼土粒子、炭化物を極少量含んでいる。

遺物は、住居跡中央部の炉周辺に多く、縄文土器片33点、石32点が出土している。土器片の大半は加曾利E期に比定され、床面直上から出土の遺物が多い。また、炉を囲むような形で土器片が床面直上から出土している。

第23号住居跡 (第43・44図)

本跡は、Ⅱ次調査区の北東部B7j区を中心に確認された住居跡である。第28号住居跡の北東12mほどに位置し、北側2mほどに第24号住居跡が隣接している。本跡は、北東側で第121号土竈と、南東側で第120号土竈と重複しているが、本跡の方が古い。

平面形は、重複のため一部不明であるが、残存壁等から推定して長径4.0m、短径3.80mほどの円形状を呈する住居跡と思われる。長径方向は北を指している。壁は、その大部分が耕作によって削平されており、遺存状態が悪い。残存壁高は、わずか4～8cmである。床面は、ほぼ平坦で



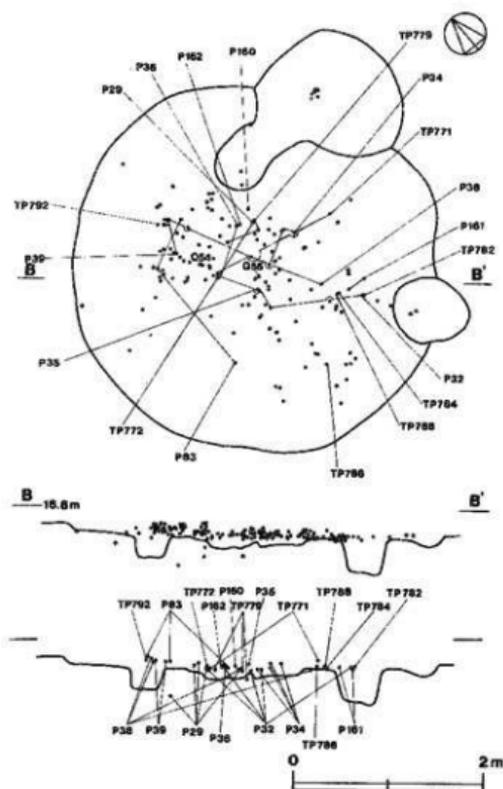
第43図 第23号住居跡実測図

あるが中央部に向かってやや傾斜し、全体的に締まっている。炉は、住居跡の中央部に位置している。一部擾乱を受けているが長径135cm、短径113cmの楕円形状を呈し、床面中央部を5~11cmほど皿状に掘りくぼめ地床炉としている。炉内には、焼土粒子や炭化粒子を含む硬く締まった暗褐色土・褐色土が堆積しており、特に中央部は、レンガ状に焼けたロームで凸凹している。また、炉を中心として北西~南東方向に長楕円形状の浅い落ち込みが認められ、この上部から遺物が集中して出土している。ピットは6か所検出されている。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>はほぼ同規模、同深度を有するが、P<sub>1</sub>はやや規模が大きく深く掘り込まれている。主柱穴は、配列からP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の4か所と考えられる。主柱穴は、北方向に長い長方形に配列され、長径45~71cm、短径39~50

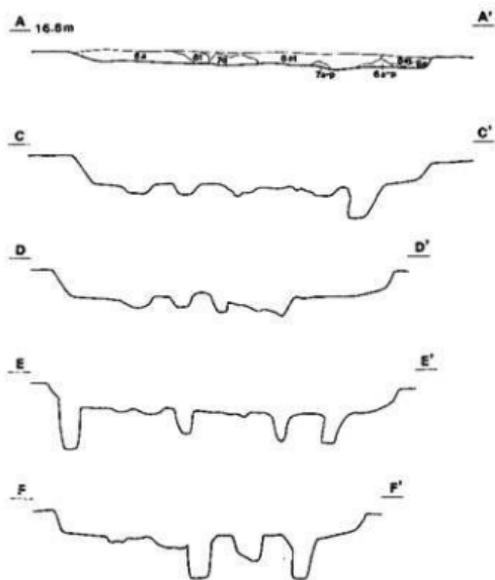
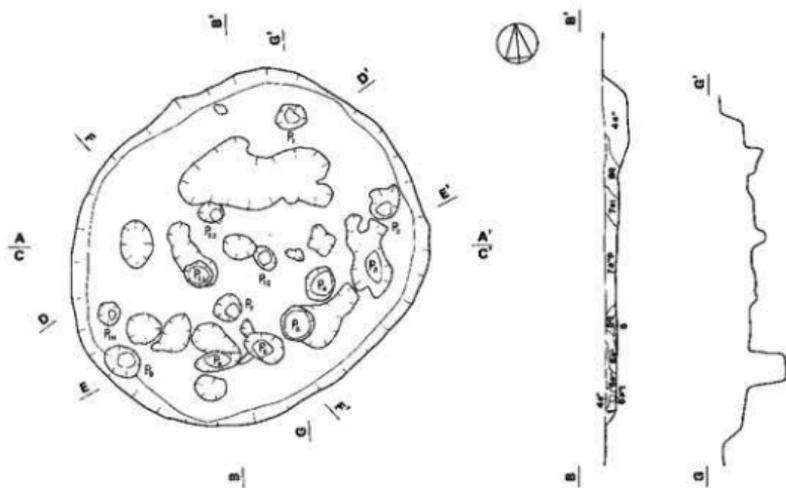
cm、深さ22~81cmの規模を有している。出入口は明確でないが、柱穴の配列等からP<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>の間が想定される。P<sub>1</sub>は、出入口の施設に伴うものとも推定される。

覆土は3層からなっている。中央部には焼土粒子・炭化物・ローム粒子を極少量含む暗褐色土が、壁際にはローム粒子を少量含む暗褐色土がそれぞれ自然堆積している。覆土は、全体的に締まっている。

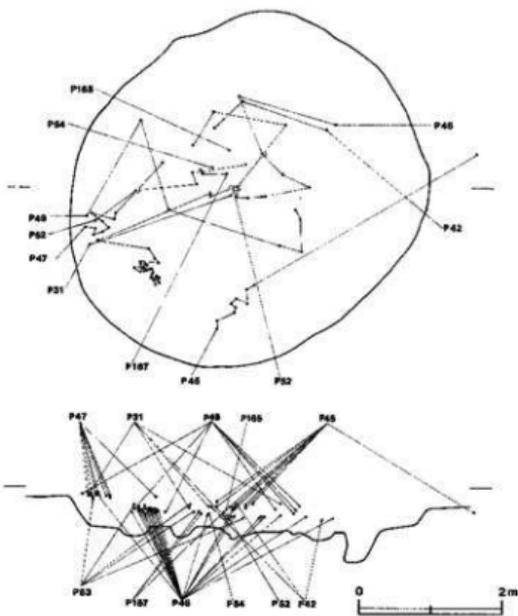
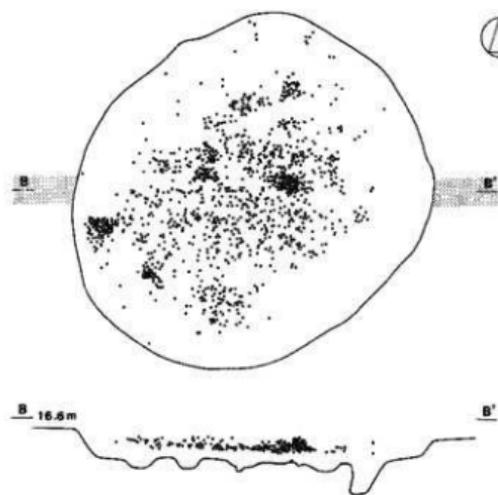
遺物は、縄文土器片132点、石器2点、土製品1点、石17点が出土している。これらの多くは覆土中からの出土であるが、床面直上からも少量ではあるが出土している。土器片の大半は阿玉台期のものである。



第44図 第23号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図



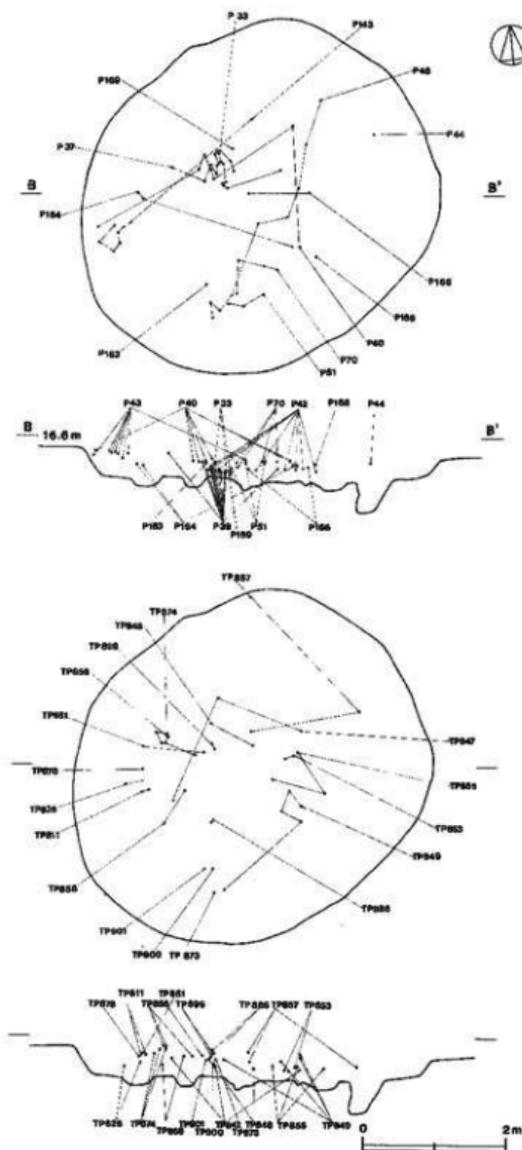
第45图 第24号住居跡実測图



第46図 第24号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

### 第24号住居跡 (第45・46・47区)

本跡は、Ⅱ次調査区の北東部B7j区を中心に確認された住居跡である。第23号住居跡の北2mほどに位置している。調査区の中では、最も北東側に位置している。本跡は、壁の一部が攪乱を受けているため明確でないが、平面形は長径5.14m、短径4.46mほどの楕円形状を呈する住居跡と思われる。長径方向はN-57°-Eを指している。壁は、東側及び南側では明確であり、残存壁高は24-25cmでほぼ垂直に立ち上がり、硬く締まっている。しかし、北側及び西側の壁の一部は、その上半が耕作による攪乱を受けており、軟弱で不明瞭な部分も認められる。床面は凸凹が激しく、全体的に硬く締まっている。特に、中央部付近は周囲に比べて幾分くぼんでおり、硬く踏み固められている。炉は検出されていない。床面上に多数の落ち込みが検出されたが、木根による攪乱と思われるものも含まれている。ピットは13か所検出されているが、そのうち明確な落ち込みとしてとらえられたものは、P<sub>0</sub>・P<sub>1</sub>・



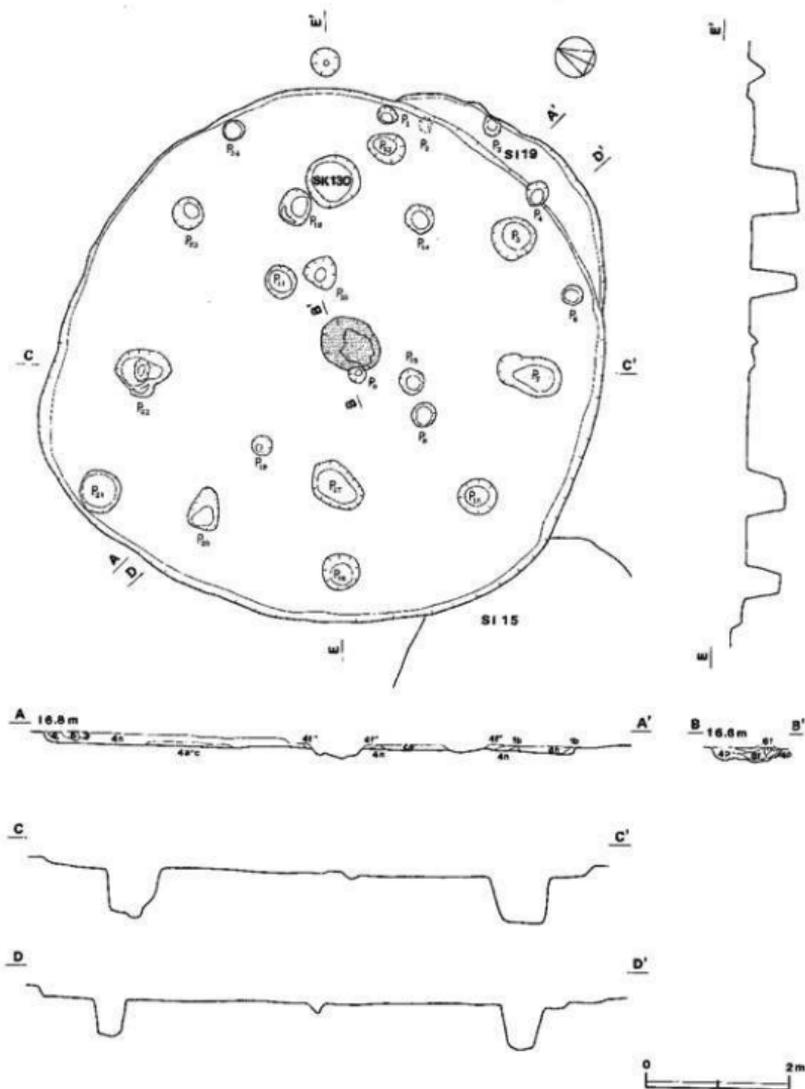
第47図 第24号住居跡土器接合関係図

P<sub>12</sub>の3か所である。住居跡の中央部に検出されたP<sub>12</sub>が主柱穴と考えられ、P<sub>5</sub>・P<sub>1</sub>の2か所は補助的な柱穴と考えられる。また、南壁下に横列するように検出されたP<sub>2</sub>~P<sub>8</sub>は、その規模、形状から察して木根跡の可能性が強い。P<sub>12</sub>は、長径36cm、短径26cm、深さ53cmであり、P<sub>5</sub>・P<sub>1</sub>は長径40~52cm、短径33~41cm、深さ60~61cmの規模を有している。

覆土は、一部で耕作による擾乱を受けているものの、中央部に黒褐色土、その両側に暗褐色土、壁際に褐色土が自然堆積している。覆土中には、焼土粒子や炭化粒子・ロームブロックが少量含まれており、やや締まっている。

遺物は、当遺跡から検出された住居跡としては、第65号住居跡に次いで2番目に多く、縄文土器片1277点、石器6点、土製品3点、石90点が出土している。土器片の大半は阿玉台期のものである。遺物は、住居跡全域から多数検出されているが、壁際にはあまり見られない。また、その多くが覆土の上層から中層にかけて出上しており、住居跡の廃絶

後周もなく周囲から投棄されたものと思われる。



第48回 第25号住居跡実測図

#### 第25号住居跡（第48図）

本跡は、II次調査区の北部C6e区を中心に確認された住居跡であり、第13号住居跡の東5mほどに位置している。北側で第20号住居跡と、東側で第19号住居跡と、南側で第15号住居跡と重複している。本跡は第15号住居跡より新しく、第19・20号住居跡より古い。本跡が確認された経緯については、第19号住居跡の項で述べた通りである。残存壁高は5～15cmであり、耕作による攪乱や重複のため、南壁を除いては明確に検出することは困難であった。

平面形は、長径7.4m、短径7.3mほどの円形状を呈する大きな住居跡である。長径方向は北を指している。床面は、ほぼ平坦であるが全体的に軟弱である。炉は、ほぼ中央に位置し、長径88cm、短径72cmの楕円形を呈し、床面を5～15cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉床はレンガ状に赤く焼けている。ピットは9か所検出されている。しかし、第19号住居跡の床面上に検出されたピットの中で、本跡に伴うものと思われるピットを含めると、計14か所になる。規模や配列から、支柱穴はP<sub>14</sub>・P<sub>1</sub>・P<sub>16</sub>・P<sub>18</sub>・P<sub>20</sub>・P<sub>22</sub>・P<sub>24</sub>・P<sub>26</sub>の8か所と思われる。支柱穴は長径43～78cm、短径40～66cm、深さ50～68cmの規模を有し、ほぼ八角形状に配列されている。出入口は不明である。

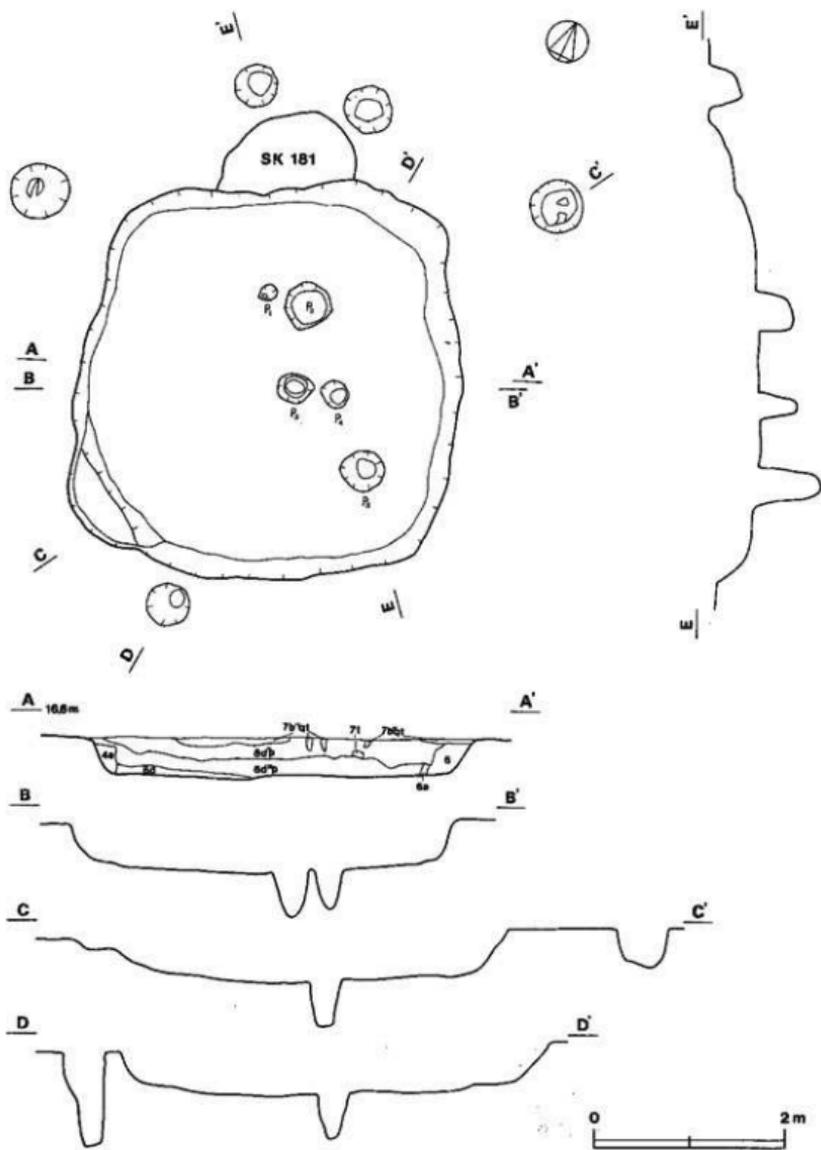
覆上は、わずかに5～18cm残存しているだけであるが自然堆積であり、上層にハードロームの小ブロックやローム粒子を含む褐色土、下層にローム粒子を含む縮まりのある褐色土が堆積している。

本跡は、ほぼ同時期の第19号住居跡と重複しており、覆土が攪乱を受けていたことなどから、遺物を層位的にとらえることが困難であったため、一部の遺物については層属が明確でない。本跡及び第19号住居跡から出土した遺物は、縄文土器片182点、石器13点、石30点、土製品2点であり、土器片の大半は加曾利E期に比定される。本跡と第19号住居跡は、いずれも加曾利E期に比定できる。

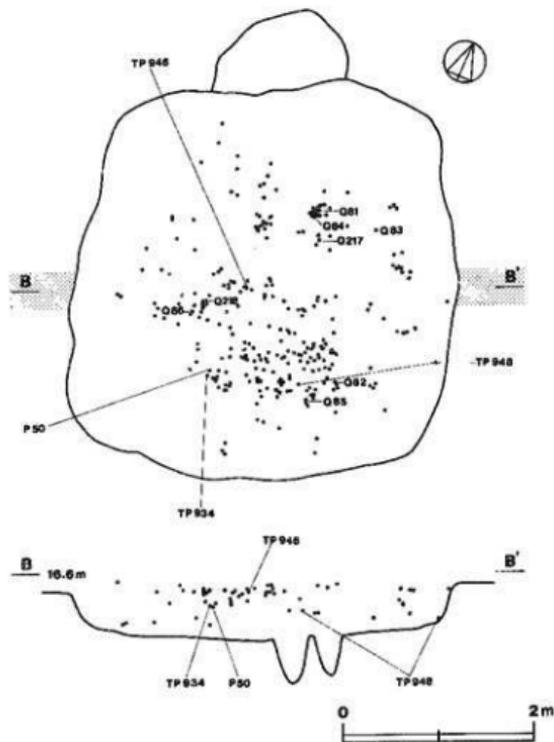
#### 第26号住居跡（第49・50図）

本跡は、II次調査区の北部C6f区を中心に確認された住居跡であり、第15号住居跡の南3mほどに位置している。北側で第181号土壌と重複し、壁の上部が一部掘り込まれている。

平面形は、長軸4.10m、短軸4.01mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-28°-Eを指している。耕作による攪乱のため、壁の上部は明確でない。残存壁高は37～48cmであり、東側及び南側でやや斜めに立ち上がり、北側及び西側ではほぼ垂直に立ち上がっている。壁の下部はハードロームできわめて堅緻である。南西コーナー部は床面から段状に立ち上がるが、壁上部が耕作による攪乱を受け不明瞭であることから、本来は他の壁と同様にやや斜めに立ち上がっていたものと思われる。床面は、壁際から中央に向かってやや傾斜し皿状を呈しているが、全体的に凸凹で非常に



第49圖 第26号位居跡実測図



第50図 第26号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

堅緻である。P<sub>5</sub>は検出されていない。ピットは5か所検出されているが、ほぼ中央部に検出されたP<sub>5</sub>とP<sub>4</sub>、南東コーナー付近に検出されたP<sub>5</sub>が柱穴と思われる。規模や配列からP<sub>5</sub>は主柱穴、P<sub>4</sub>・P<sub>3</sub>は補助的な柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は長径38cm、短径30cm、深さ50cm、P<sub>4</sub>は長径27cm、短径25cm、深さ43cm、P<sub>3</sub>は長径43cm、短径40cm、深さ68cmの規模を有している。また、住居跡の周囲にピットが5か所検出されているが、本跡との関係は明らかでない。

覆土は上部が攪乱を受けているが、遺構本

来の覆土は自然堆積の状態を示しており、上層に極暗褐色土、下層に暗褐色土、壁際に褐色土が堆積している。覆土中にはローム粒子・ハードローム小ブロック・焼上粒子・炭化粒子が少量混入しており、やや締まっている。

遺物は、住居跡の南側に集中し、北側から東側にかけて散在しており、縄文土器片214点、石器8点、土製品1点、石26点が出土している。これらは、覆土の上層から中層にかけて出土しており、土器片の大半は阿玉台期に比定される。

#### 第28号住居跡（第39・40図）

本跡は、II次調査区の北部C6b<sub>2</sub>区を中心に確認された住居跡である。第25号住居跡の東3mほどに位置し、南西側で第21号住居跡と重複しその三分の二ほどを覆り込んでいる。検出された経

緯については、第21号住居跡の項で述べたとおりである。

平面図は、長径6.4m、短径5.69mほどの円形状を呈し、長径方向はN-80°-Wを指している。耕作による擾乱を受け全体的に遺存状態が悪い。壁は、上部が耕作による擾乱を受けており、残存壁高は6~26cmである。壁の状態は、北側及び西側で比較的遺存状態がよく、残存壁高20~26cmで斜めに立ち上がり縮まっているが、他は軟弱である。床面はほぼ平坦であり硬く縮まっている。炉は中央部に検出され、長径68cm、短径65cmの円形状に10~12cmほど皿状に掘りくぼめ地床炉としている。炉内には焼上が充満し、炉床は硬く焼けて凸凹しており、長期間使用されたものと思われる。ピットは6か所検出されている。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は長径53~74cm、短径45~63cm、深さ62~72cmで、ほぼ同規模、同深度を有し配列からも主柱穴と考えられる。主柱穴は四角形に配列され、柱穴の間隔は3~3.2mである。柱穴は、円筒状にしっかり掘り込まれている。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は、重複する第21号住居跡に伴うものと考えられる。

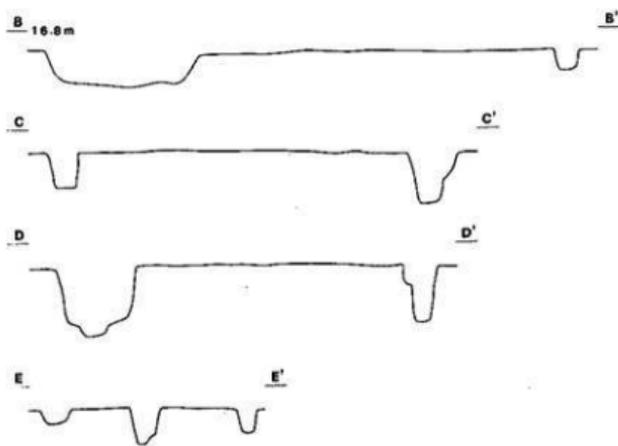
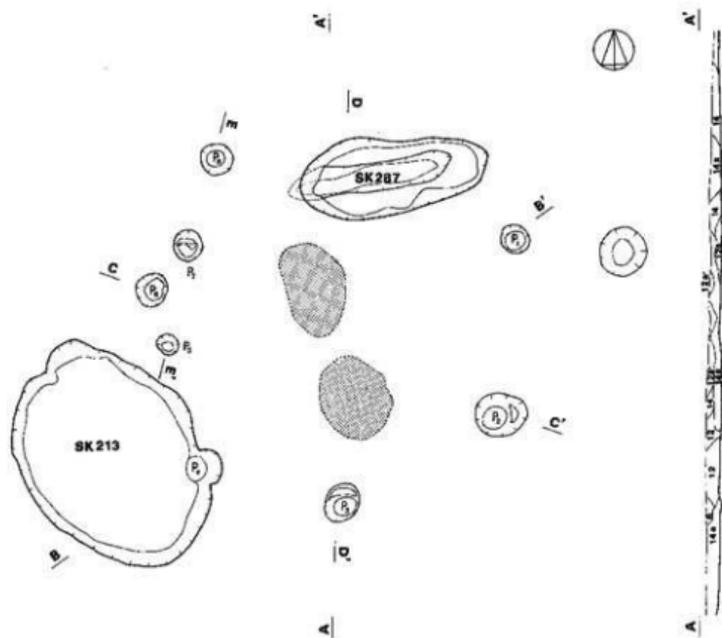
覆土は、上部が擾乱を受けているが自然堆積の状態を示しており、上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積している。上層には焼上粒子やローム粒子が極少量混入し、下層にはローム粒子が少量混入している。全体的にやや軟弱である。

遺物は、炉の周辺にわずかに集中する部分が認められるが、全体的に散在しており、縄文土器片352点、石器6点、石32点が出土している。これらは、覆土の中層から下層にかけて出土しており、土器片の大半は、加曾利E期に比定される。

### 第30号住居跡（第51図）

本跡は、II次調査区の中央部よりやや北寄りのD6b)区を中心に確認された住居跡であり、第8号住居跡の北東6mほどに位置している。本跡の推定プランは、北側で第287号土壇、南西側で第213号土壇と重複している。新旧関係は明確でない。本跡は、確認調査の過程で2か所にか<sup>2</sup>と思われる焼土の分布が認められ、また、それを囲むようにピットが検出されたことから、住居跡を想定し調査を進めたものである。

平面形及び規模については、擾乱により壁が残存しておらずプランをとらえることができなかったため不明であるが、検出された柱穴の配列から、直径6mほどのほぼ円形状を呈する住居跡であったものと推定される。床面は、全体的に縮まっており、焼上が推定プラン内の北側と南側の2か所に検出されている。北側のものは長径1.32m、短径0.86mの範囲で、南側のものは長径1.19m、短径0.98mの範囲で分布している。焼上は、いずれも覆土の上層のみ堆積しており、量も少なく軟弱であることから、炉ではなく後世に投棄されたものと考えられる。ピットは8か所検出されており、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>の5か所が主柱穴と考えられる。柱穴の配列から考えると、1か所は第287号土壇によって破壊されてしまった可能性もある。主柱穴は、ほぼ六角形状に



第51图 第30号住居跡突測図

配列されていたものと思われる。

覆土は、ローム粒子を含むやや軟弱な暗褐色土からなっている。

遺物は、覆土中から縄文時代中期の土器片が23点出土しているだけである。

### 第31号住居跡（第52図）

本跡は、II次調査区の北部C6h<sub>+</sub>を中心に確認された住居跡であり、第26号住居跡の南西7mほどに位置している。

平面形及び規模については、耕作による擾乱によりその大部分が破壊されているため不明であるが、炉の位置や柱穴の配列から、直径6mほどの円形状を呈する住居跡であったものと思われる。壁は残存しておらず、床面はその大部分が擾乱を受けており軟弱である。炉は、推定プランの中央部よりやや南西側に偏した位置に検出されている。上部は耕作により削平されているが、残存する炉は、長径94cm、短径84cmの楕円形を呈し、5~10cmの深さに皿状に掘りくぼめて地床がとじている。炉の覆土中には、焼土粒子や焼土ブロックを含む褐色土・明褐色土が堆積しているが、一部擾乱を受けている。ピットは推定プラン内に13か所検出されているが、柱穴としてはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>またはP<sub>1</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>が考えられる。柱穴はP<sub>6</sub>を除き、長径43~56cm、短径38~54cm、深さ17~32cmの規模を有している。P<sub>6</sub>は、この住居跡に伴う柱穴としては13cmと深く疑問が残る。

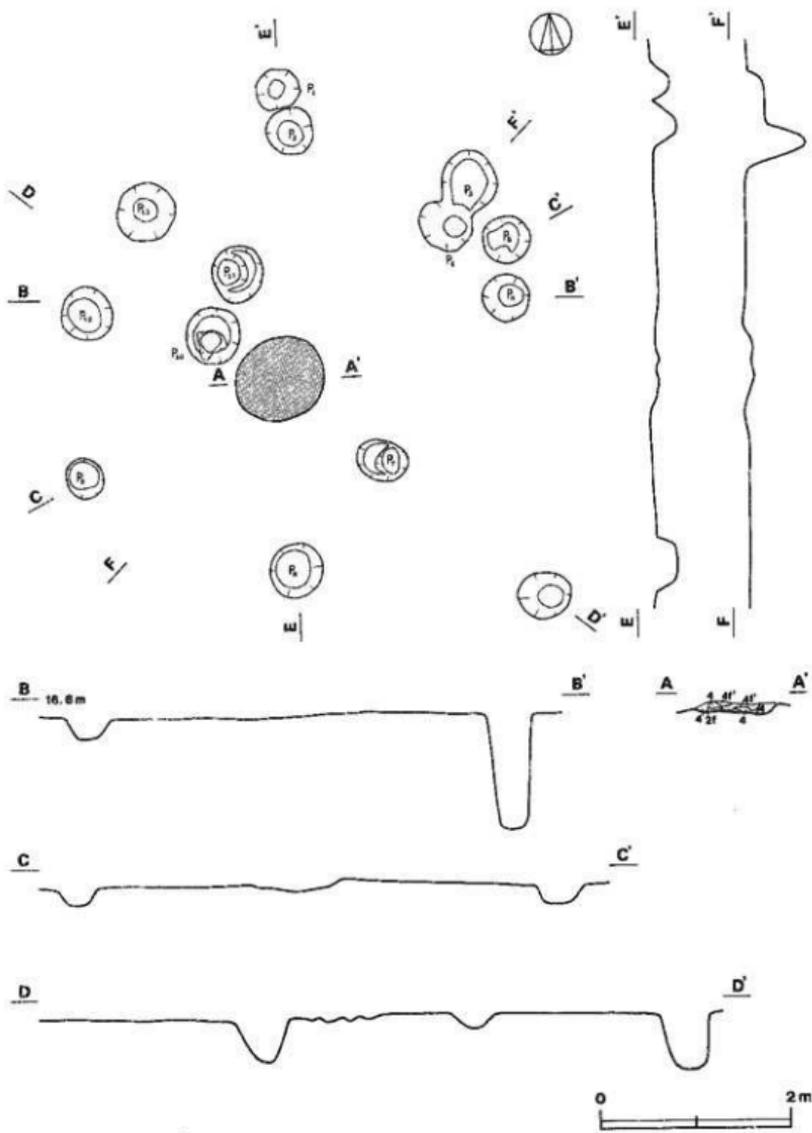
覆土中からは、縄文時代中期の土器片が数点出土しているにすぎない。

### 第32号住居跡（第53図）

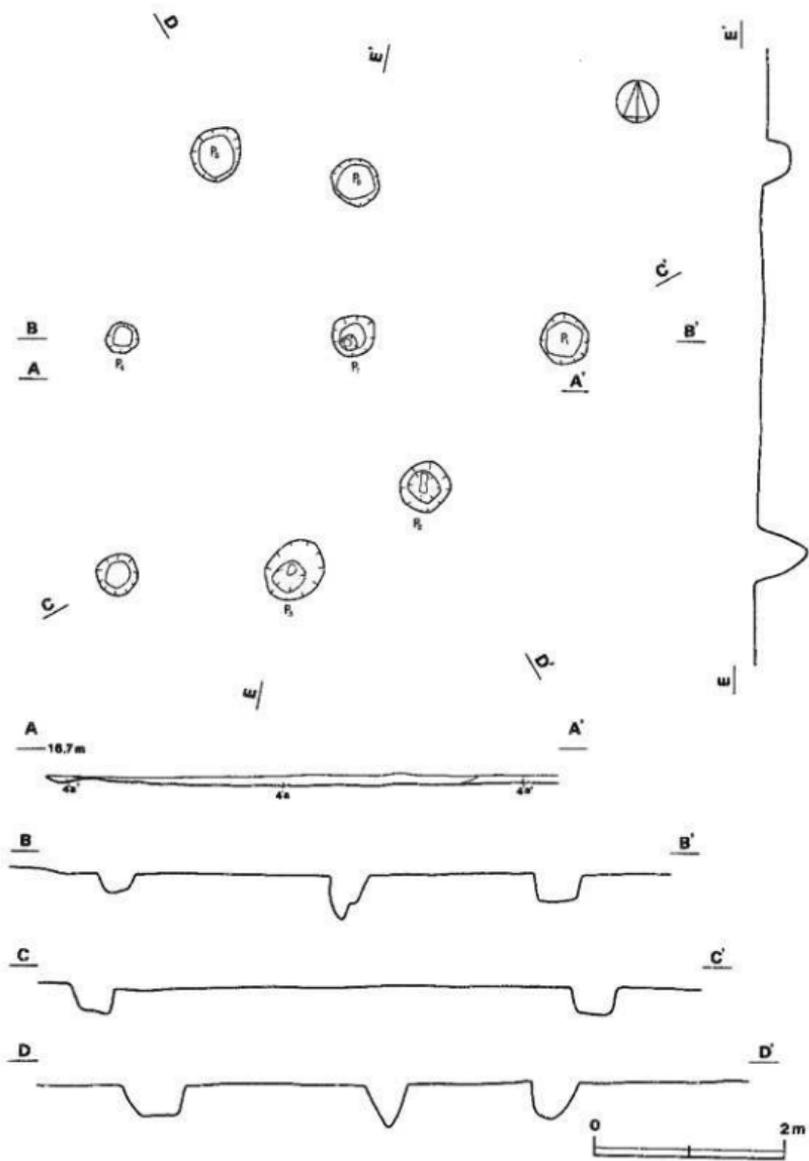
本跡は、II次調査区の北部D6a<sub>+</sub>区を中心に確認された住居跡である。第30号住居跡の北西2mほどに位置し、北西7mほどには第31号住居跡が位置している。耕作による擾乱のため、壁及び床の大部分は既に削平されており明確でない。しかし、柱穴と思われる落ち込みが、P<sub>7</sub>を中心としてその周囲にはほぼ等間隔に検出されたことや、遺物が少量ではあるが検出されていることから住居跡として取り扱った。

推定プラン内には、ピットが7か所検出されている。ほぼ中央部に検出された長径46cm、短径43cm、深さ31~46cmの規模を有するP<sub>7</sub>を中心として、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>がほぼ台形状に配列されている。これらの柱穴の間隔は2.7~3.7mであり、P<sub>1</sub>とP<sub>6</sub>の間が最も広く3.7mである。また、P<sub>2</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>はほぼ直線上に配列されている。主柱穴は明確でないが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>の5か所が考えられる。これらは長径34~68cm、短径32~56cm、深さ21~54cmの規模を有している。規模や配列から、P<sub>2</sub>・P<sub>8</sub>は補助的な役割を持つ柱穴と考えられる。炉は検出されていない。

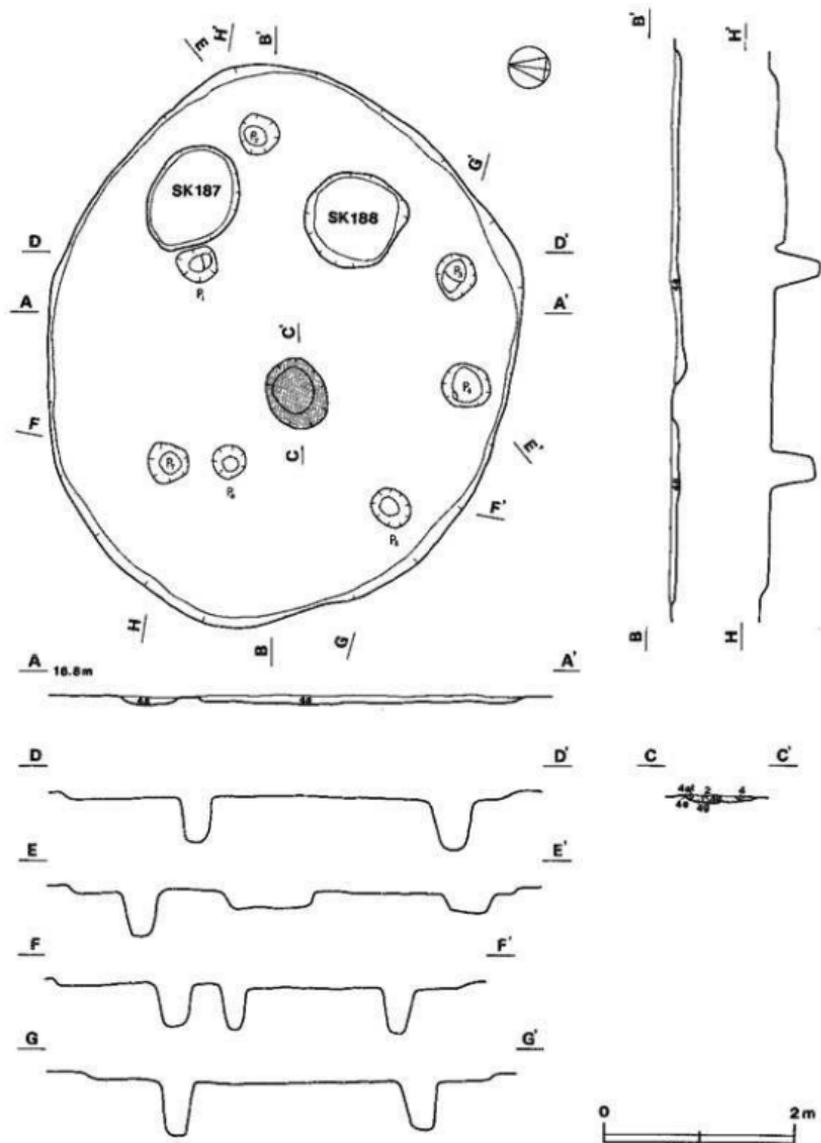
覆土は、わずかに10cmほど残存しているにすぎず、褐色を呈し、ローム粒子や焼土粒子を少量



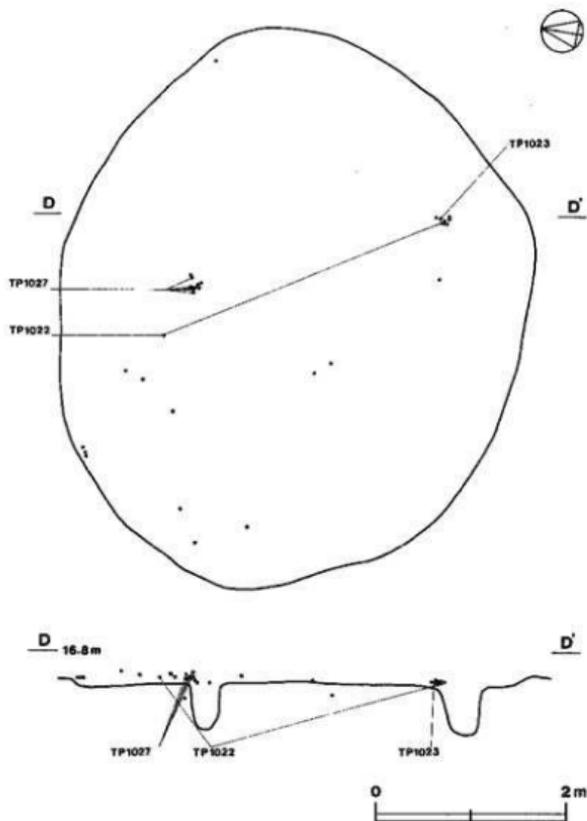
第52图 第31号住居跡実測図



第53图 第32号住居跡実測图



第54图 第33号住居跡実測図



第55図 第33号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

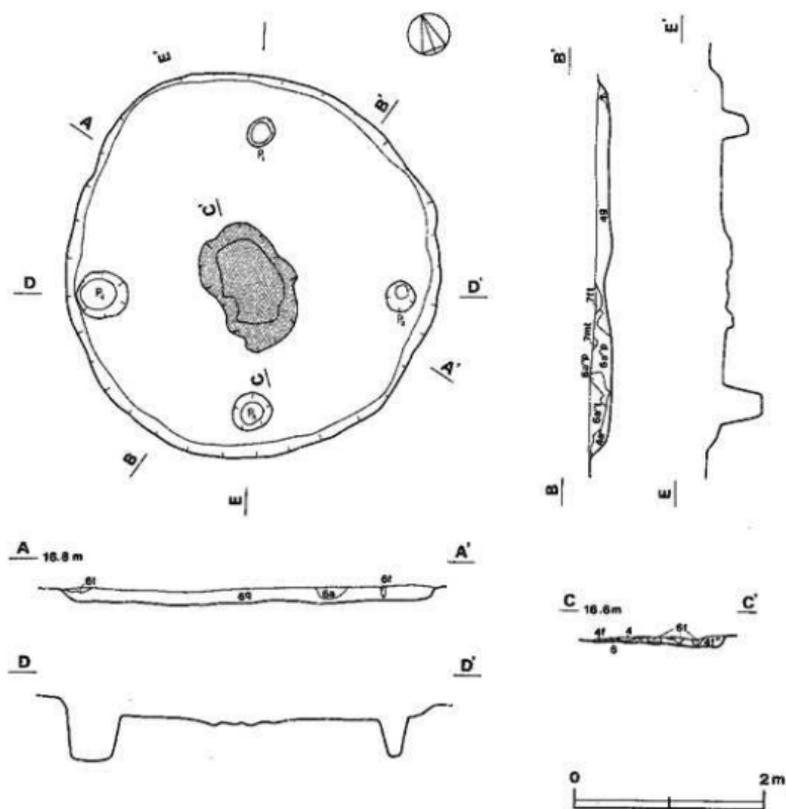
含みやや硬く締まっている。

遺物は、覆土中から縄文土器片13点、石2点が出土しており、土器片の大半は阿玉台期に比定される。

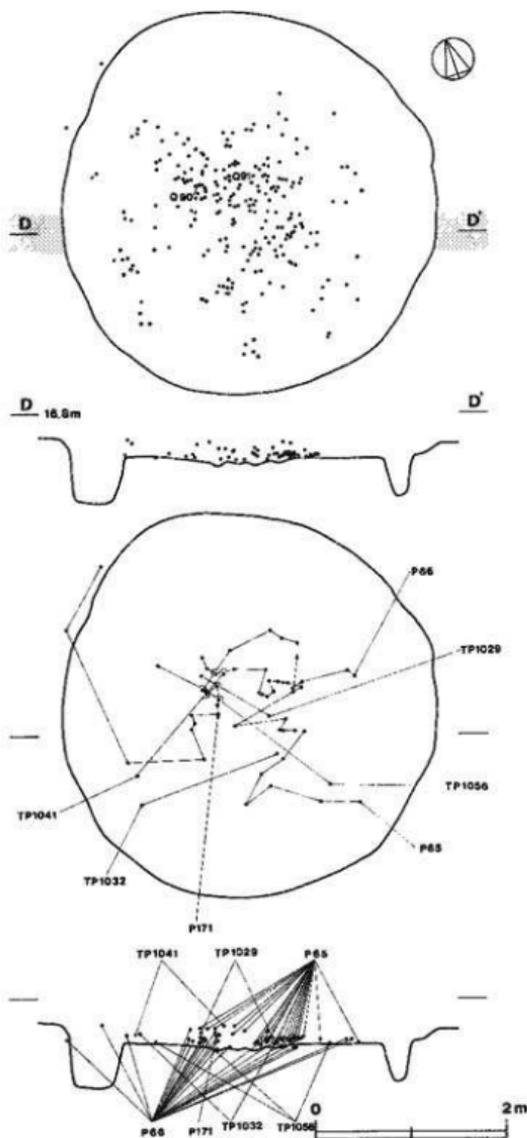
#### 第33号住居跡（第54・55図）

本跡は、Ⅱ次調査区の北西部D6a<sub>1</sub>区を中心に確認された住居跡である。第31号住居跡の南西10mほどに位置し、第187・188号土壌と重複し北東及び東側の床面の一部が張り込まれている。住居跡の上部は、耕作によって既に削平されている。

平面形は、長径5.89m、短径4.89mのやや東西方向に長い楕円形状を呈している。長径方向はN-81°-Eを指している。残存壁高は、5~10cmと極めて遺存状態が悪く、壁は緩やかに立ち上がり軟弱である。床面はほぼ平坦で硬く、特にがの周辺は踏み固められている。がは住居跡中央部からやや北西側に偏した位置に検出されており、長径75cm、短径63cmの楕円形を呈し、皿状に10cmほど掘りくぼめ地床がとしている。が内にはローム粒子やロームブロック、焼土粒子が混入する褐色土が堆積し、如床はやや熱を受け凸凹状を呈している。しかし、焼土の量が少ないことやが床がさほど焼けていないことから短期間の使用と思われる。ピットは7か所検出されており、規模や配列からP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>が主柱穴と考えられる。主柱穴は、長径40~49cm、短径37~



第56図 第34号住居跡実測図



第57図 第34号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

43cm、深さ53~66cmの規模を有している。出入口は明確でないが、柱穴の配列等からP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間もしくはP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の間が想定される。

覆上は1層であり、ローム粒子・焼土粒子・ハードロームブロックを少量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は、P<sub>1</sub>の西側及びP<sub>3</sub>の北側にわずかに集中する部分が見られるが、全体的に散在しており、縄文土器片39点、石6点が出土している。これらは覆土中から出しており、土器片の大半は加曾利E期に比定される。

#### 第34号住居跡 (第56・57図)

本跡は、Ⅱ次調査区の北西部D5b7区を中心に確認された住居跡である。第33号住居跡の南西15mほどに位置し、北西7mほどに第35号住居跡、南西7mほどに第36号住居跡が隣接している。

平面形は、長径4.11m、短径3.9mほどの円形を呈している。長径方向はN-80.5°-Eを指している。残存壁高は8~11cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。

床面は、中央部に向かって緩やかに傾斜しており、硬く締まっている。かほは、中央部からやや南側に偏した位置に検出されており、住居跡に比べて規模が大きく長径138cm、短径80cmの楕円形を呈し、床面を12cmほど掘りくぼめた地床炉としている。炉内には、焼土粒子や炭化粒子を含む暗褐色土・褐色土が堆積している。炉床は非常に硬く焼けて凸凹しており、長期間使用したものである。ピットは、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の4か所検出されており、いずれも主柱穴と思われる。主柱穴は、長径32～54cm、短径27～50cm、深さ30～52cmの規模を有している。隣り合う柱穴の間隔は2～2.4mであり、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>、P<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>の間はほぼ等間隔であるが、それに比べP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>の間はやや広くなっている。

覆土は、一部耕作による擾乱を受けているが、自然堆積であり、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含むやや締まった暗褐色土が堆積している。

遺物は、縄文土器片219点、石器3点、土製品1点、石8点が出土している。土器片の大半は加曾利E期のものであり、これらは炉を中心とした住居跡中央部に集中し、西側にも散在して出土している。覆土の中層から下層にかけての出土が多い。

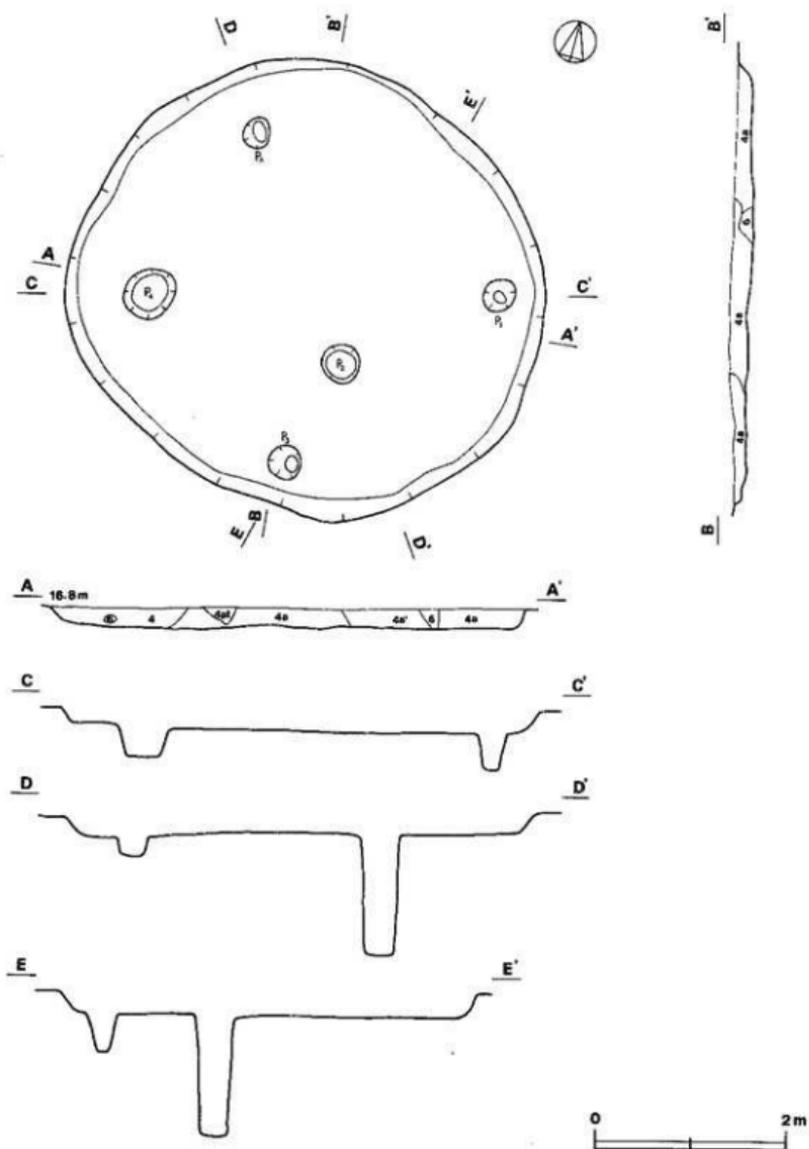
#### 第35号住居跡（第58・59図）

本跡は、II次調査区の北西部D5h<sub>4</sub>区を中心に確認された住居跡である。第34号住居跡の北西7mほどに位置している。

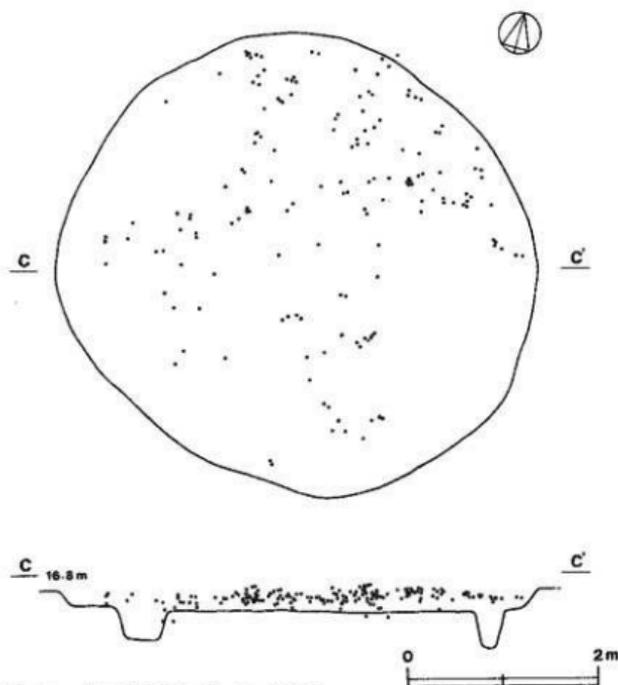
平面形は、長径5.02m、短径4.56mほどの楕円形を呈し、長径方向はN-63°-Wを指している。残存壁高は15～25cmである。壁は、北西側及び西側でやや緩やかに立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面はほぼ平坦で硬く締まっているが、中央部がやや高く、北側及び南西側の一部がやや凹んでいる。かほは検出されていない。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5か所検出されており、いずれも主柱穴と思われる。主柱穴は、長径34～58cm、短径27～50cm、深さ20～28cmの規模を有している。特に、中央部より南東側に偏した位置に検出されたP<sub>2</sub>は、長径41cm、短径40cmの円形を呈し、床面を円筒状に128cmほど深く掘り込んでいる。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>の4本は、台形状に配列されている。柱穴の間隔は2.1～3.1mで、P<sub>1</sub>とP<sub>5</sub>の間隔が最も広い。床面は、P<sub>2</sub>の北西側に広い空間が設けられている。出入口としては、北西側のP<sub>1</sub>とP<sub>5</sub>間又は南東側のP<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>間が想定される。

覆土は自然堆積の状況を示しており、大きくみると1層からなっている。中央部にはローム粒子を少量含む褐色土が、壁際にはローム粒子を少量含み、焼土粒子・炭化物を極少量含む褐色土が堆積している。また、所々にローム粒子を極少量含む暗褐色土がブロック状に混入している。

遺物は、住居跡の北側にやや集中する部分が見られるが、全体的に散在しており、覆土中から縄文土器片153点、土製品1点、石33点が出土している。土器片の大半は阿玉台期に比定される。



第58图 第35号住居跡実測図

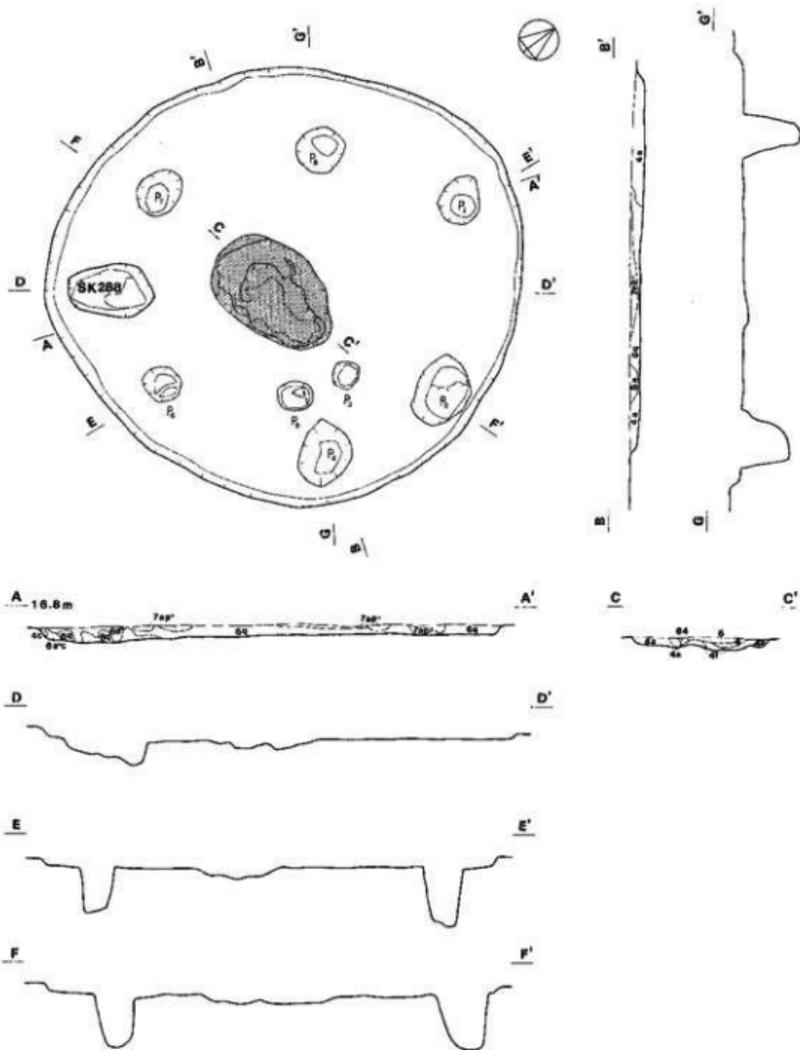


第59図 第35号住居跡遺物出土位置図

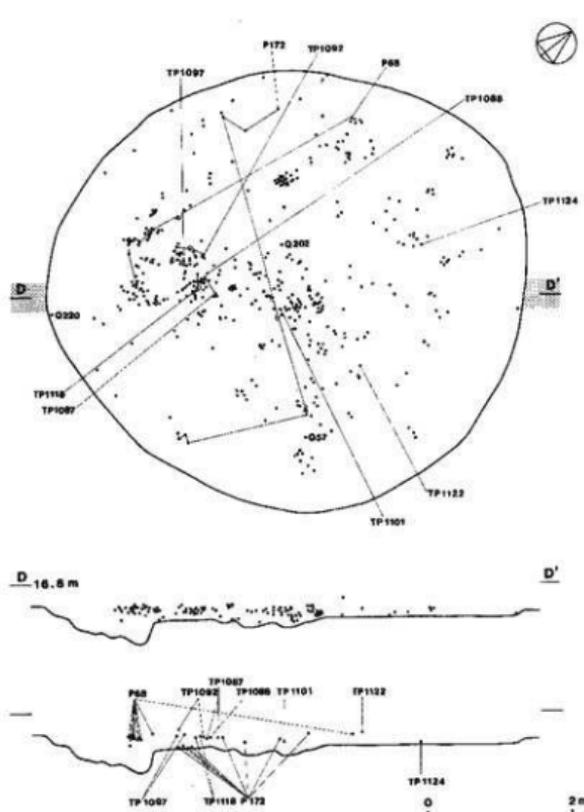
#### 第36号住居跡 (第60・61図)

本跡は、Ⅱ次調査の西部D5e4区を中心に確認された住居跡である。第35号住居跡の南7mほどに位置している。南西側の床面を第288号土壌が掘り込んでいる。

平面形は、長径6.64m、短径6.10mの円形を呈し、長径方向はN-37°-Eを指している。ロームへの掘り込みが浅く、残存壁高は6~15cmである。北東側の壁高は、6~7cmと遺存状態が悪くやや軟弱である。その他は、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面は平坦で堅緻である。炉は住居跡の中央部よりやや南側に偏した位置に検出され、長径1.92m、短径1.22mの東西に長い楕円形を呈しており、床面を15cmほど皿状に掘りくぼめ地床炉としている。炉内には上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積し、焼土粒子・炭化物・ロームブロックが混入している。炉床は凸凹で、レンガ状に硬く焼けている。南西壁下の床面を長径118cm、短径70cmの楕円形を呈する第288号土壌が21~39cmの深さに掘り込んでいる。土壌は、覆土の上層から掘り込んでおり本跡より新しい。ピットは8か所検出されており、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>の6か所が支柱穴と



第60圖 第36号住居跡実測図



第61図 第36号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

ている。覆土中には、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子が少量混入し、壁際には、壁の崩落した際に混入したと思われるハードロームの小ブロックが少量混入している。覆土は、全体的に締まっている。

遺物は、住居跡の中央部や南西側にわずかに集中する部分が見られるが、住居跡内に散在しており、縄文土器片437点、石器7点、土製品4点、石61点が出土している。これらの多くは覆土の中層から出土しており、土器片の大半は、加曾利E期に比定される。

#### 第37号住居跡 (第62・63図)

本跡は、Ⅱ次調査区の西部D5)4区を中心に確認された住居跡であり、第36号住居跡の南12mは

思われ、六角形状に配列されている。主柱穴は、長径52～101cm、短径47～74cm、深さ65～86cmの規模を有している。P<sub>4</sub>の西側に検出されたP<sub>3</sub>とP<sub>5</sub>は、規模も小さく掘り込みも浅い。柱穴の間隔は、P<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>、P<sub>1</sub>とP<sub>8</sub>の間が狭く1.8～2.1mであるが他はほぼ等間隔で2.5～2.65mである。住居跡は、炉の北側に広い床面積をもち、出入口としては、炉の位置や柱穴の配置等からP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間が想定される。

覆土は、南側で一部攪乱を受けているが自然堆積で、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土、壁際に褐色土が堆積し

どに位置している。

平面形は、長径5.62m、短径4.96mの楕円形を呈し、長径方向はN-72°-Wを指している。壁はロームへの掘り込みが浅く、残存壁高は7~12cmであり、北側で緩やかに立ち上がり、東側ではほぼ垂直に立ち上がっている。南側を除いて軟弱である。床面はほぼ平坦であるが、北西側、南側、東側がやや凹んでいる。全体的に硬く締まっているが、特に炉の周辺は堅緻である。炉は住居跡のほぼ中央部に位置し、長径187cm、短径155cmの楕円形を呈し、5~22cm床面を掘りくぼめ地床炉としている。炉は、住居跡に比較して規模が大きい。特に、F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>・F<sub>3</sub>の部分がレンガ状に硬く焼けている。中でもF<sub>1</sub>の掘り込みが最も深く、炉床が最も硬く焼けており、F<sub>1</sub>が炉の中心部と思われる。炉内には多量の焼土や灰が充満しており、長期間使用したものである。ピットは11か所検出されており、主柱穴としては、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>の4か所、もしくはP<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>を加えた6か所が考えられる。上柱穴は、長径41~67cm、短径38~58cm、深さ40~73cmの規模を有している。出入口としては、柱穴の配列や炉の位置等から、P<sub>1</sub>とP<sub>8</sub>の間もしくはP<sub>10</sub>とP<sub>8</sub>の間が想定される。

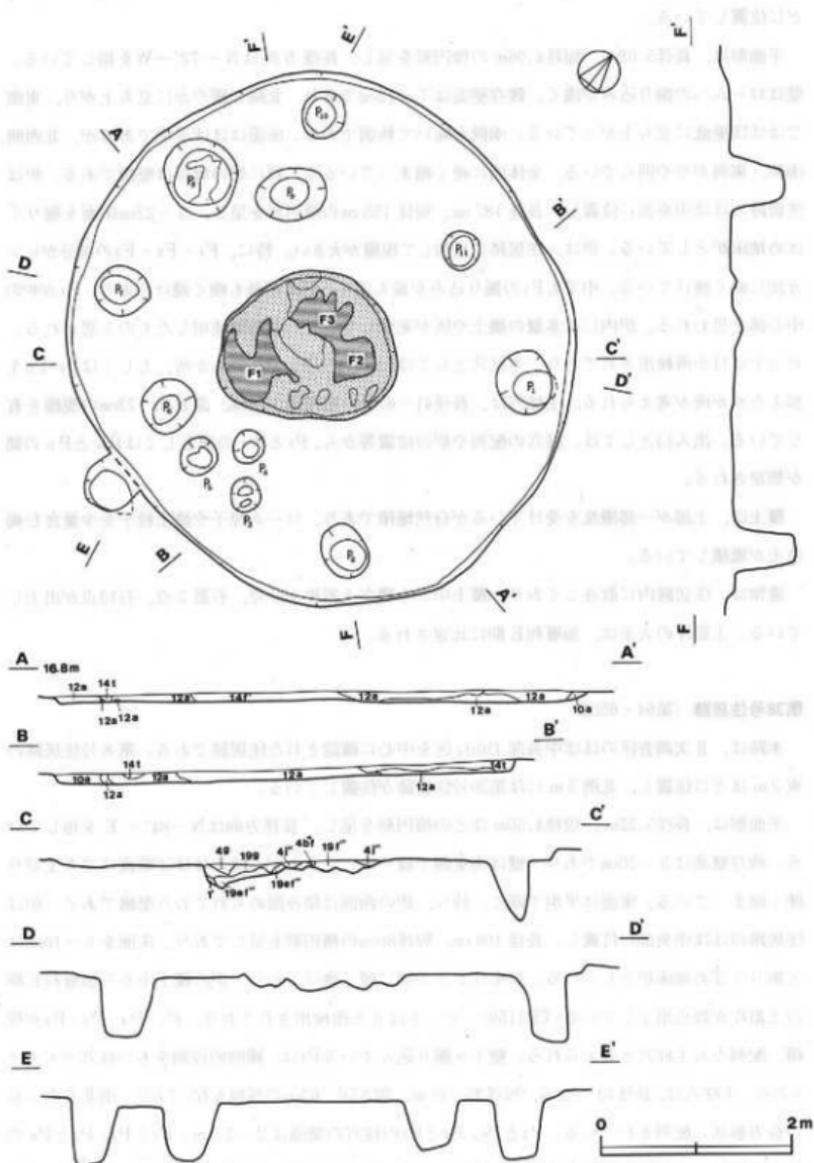
覆土は、上部が一部攪乱を受けているが自然堆積であり、ローム粒子や焼土粒子を少量含む褐色土が堆積している。

遺物は、住居跡内に散在しており、覆土中から縄文土器片150点、石器2点、石13点が出土している。土器片の大半は、加層利E期に比定される。

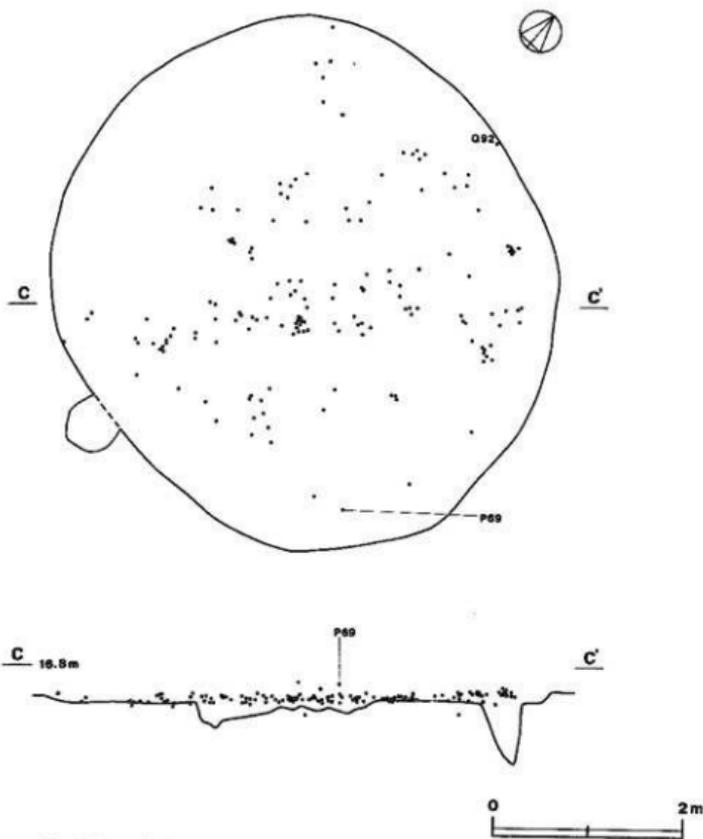
#### 第38号住居跡 (第64・65図)

本跡は、Ⅱ次調査区のほぼ中央部 D6d<sub>c</sub> 区を中心に確認された住居跡である。第8号住居跡の東2mほどに位置し、北側3mには第30号住居跡が位置している。

平面形は、長径5.22m、短径4.50mほどの楕円形を呈し、長径方向はN-84°-Eを指している。残存壁高は9~20cmであり、壁は南東側で緩やかに立ち上がるほかはほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面は平坦で硬く、特に、炉の西側は踏み固められており堅緻である。炉は住居跡のほぼ中央部に位置し、長径108cm、短径86cmの楕円形を呈しており、床面を5~10cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉床はレンガ状に硬く焼けており、炉の覆土中から加層利E期の土器片が数点出している(TP1159)。ピットは6か所検出されており、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が規模、配列から主柱穴と考えられる。壁下を掘り込んでいるP<sub>1</sub>は、補助的役割をもつ柱穴とも考えられる。主柱穴は、長径40~52cm、短径35~49cm、深さ56~62cmの規模を有しており、南北方向に長い長方形に配列されている。P<sub>2</sub>とP<sub>6</sub>、P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>の柱穴の間隔は2~2.1m、P<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>の柱穴の間隔は2.6~2.7mである。出入口としては、柱穴の配列等からP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間、またはP<sub>1</sub>とP<sub>6</sub>の間が想定される。



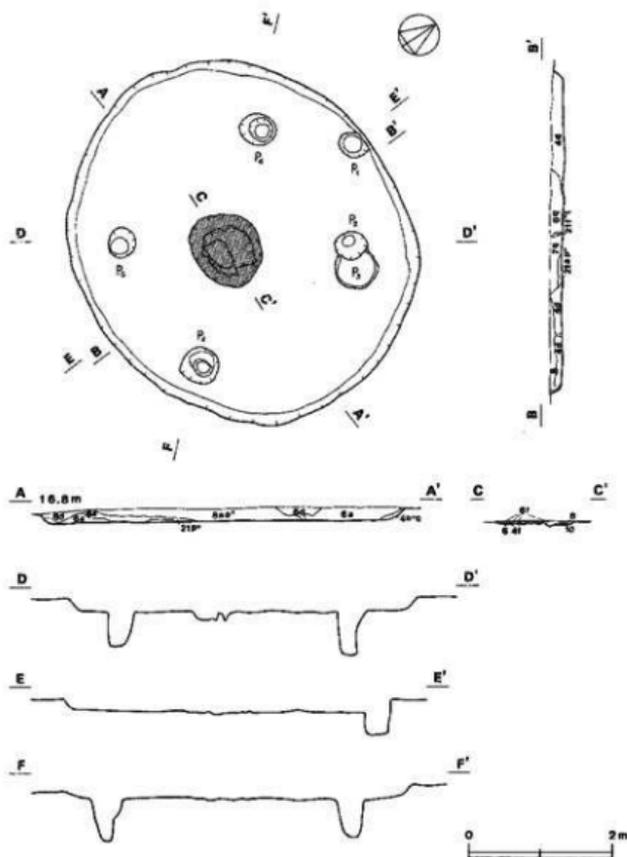
第62图 第37号住居跡実測图



第63図 第37号住居跡遺物出土位置図

覆土は自然堆積であり、上層に極暗褐色土、下層に暗褐色土、壁際に褐色土が堆積している。覆土中には、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が含まれ締まりがある。壁際にはロームブロックが混入している。

遺物は、住居跡中央部の炉の周辺に集中しており、縄文土器片 812 点、石器 3 点、石 24 点が出土している。これらの多くは、覆土の中層から出土しており、土器片の大半は、加曾利E期に比定される。

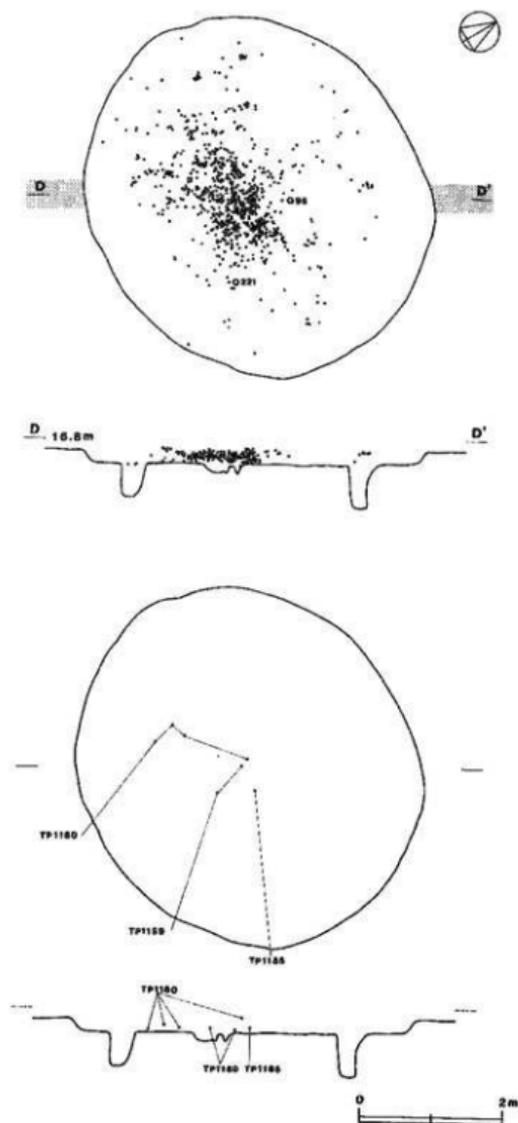


第64図 第38号住居跡実測図

### 第39号住居跡 (第66・67図)

本跡は、Ⅱ次調査区のほぼ中央部 D6c<sub>9</sub>区を中心に確認された住居跡である。第30号住居跡の東7mほどに位置し、西側で第310号土壇と重複している。本跡の方が古い。

平面形は、長径3.90m、短径3.41mの楕円形状を呈し、長径方向はN-55°-Wを指している。残存壁高は18~29cmである。壁は全体的にやや軟らかく、西側でやや段状に立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は中央部に向かって緩やかに傾斜し、やや軟弱である。炉は検出されていない。ピットは住居跡の中央部と東側に2か所検出されている。特に、中央部に検

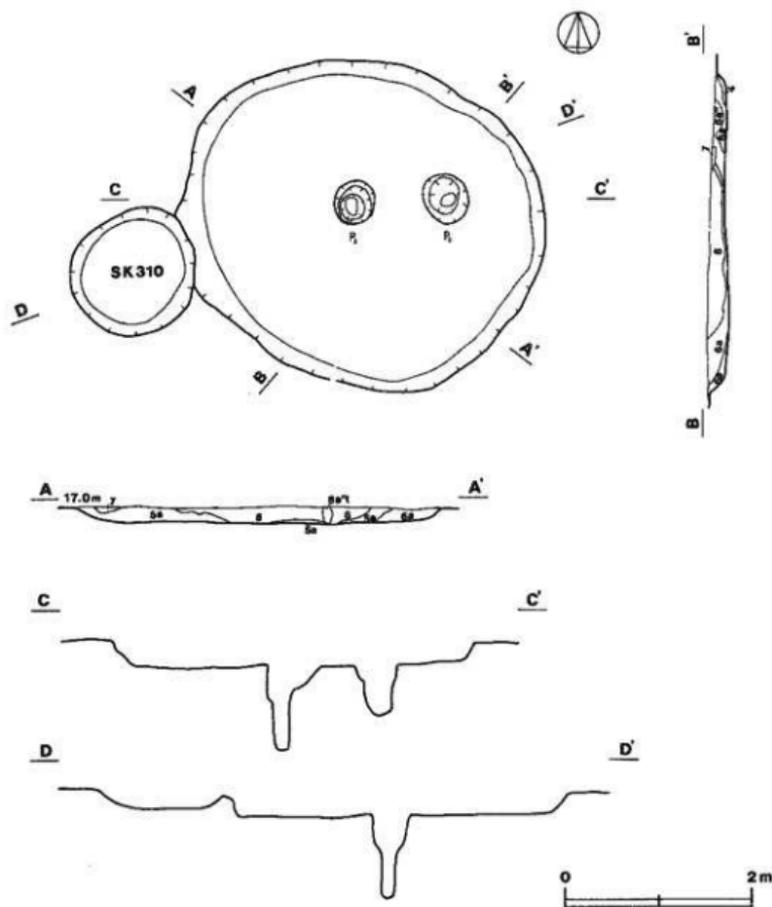


第65図 第38号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

出されたP<sub>1</sub>は、長径47cm、短径42cmの円形状に37cmほど掘り込んだあと、さらに、円筒状に55cmほど掘り込んでいる。床面からの深さは92cmと深くしっかりしている。P<sub>2</sub>は長径55cm、短径40cm、深さ53cmの規模を有している。規模や配列からP<sub>1</sub>が主柱穴、P<sub>2</sub>が補助的な柱穴と考えられる。P<sub>2</sub>の覆土上部より阿玉台期の土器片が1点出土している。

覆土は、自然堆積であり、上層に極暗褐色土、下層に暗褐色土、壁際に褐色土が堆積している。覆土中にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が含まれており、全体的に絡まっている。

遺物は、住居跡の中央部や北側に多く見られ、覆土の上層から中層にかけて縄文土器片163点、土製品1点、石7点が出土している。土器片の大半は、阿玉台期に比定される。

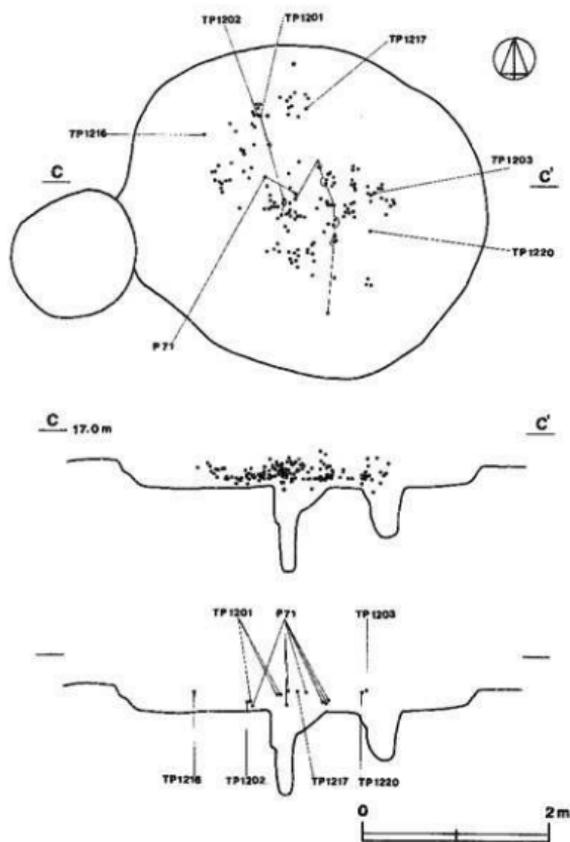


第66図 第39号住居跡実測図

第40号住居跡 (第68・69図)

本跡は、Ⅱ次調査区のほぼ中央部D6f<sub>0</sub>区を中心に確認された住居跡である。第39号住居跡の南10mほどに位置し、北側0.5mには隣接して第4号溝が東西に走っている。

平面形は、長径3.62m、短径3.05mの楕円形を呈し、長径方向はN-72°-Eを指している。残存壁高は18~25cmであり、壁は垂直に立ち上がり硬く締まっている。遺存状態は良好である。床面は、やや凸凹しており硬く締まっている。特に、中央部付近は踏み固められており、堅緻で



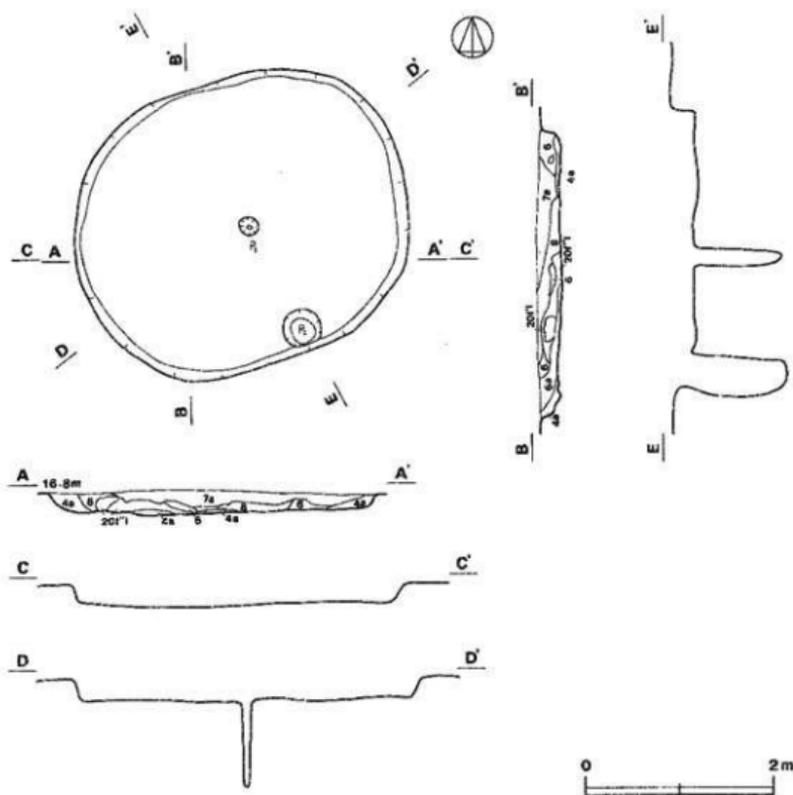
第67図 第39号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

あり、規模は小さいが床面から95cmと深くしっかりと掘り込まれている。規模は小さいが配列からP<sub>1</sub>が主柱穴、P<sub>2</sub>が補助的な柱穴と考えられる。P<sub>2</sub>覆土中より阿玉台期の土器片が出土している。

覆土は、上層に黒褐色土、中層から下層にかけて極暗褐色土、暗褐色土、壁際及び床面直上に褐色土が堆積している。覆土中には、ローム粒子・焼土粒子が極少量含まれている。焼土は、6a層が堆積した直後に投棄されたものと思われる。

遺物は、焼土が多量に検出された住居跡の南西側から中央部に集中しており、覆土の上層から中層にかけて、縄文土器片 387 点、石器 1 点、土製品 1 点、石 44 点が出土している。土器片の大

ある。炉は検出されていない。住居跡の西側からは、長径1.35m、短径1.15mの楕円形を呈する範囲に多量の焼土が検出されている。この焼土は、すでに確認面において認められ壁際から住居跡中央部に向かって15~20cmの厚さで斜めに堆積している。焼土の一部が床面にまで堆積していることから、本跡の廃絶後まもなく、南西方向から住居跡の中央部に向かって投棄されたものと思われ、本跡に伴うものとは考えられない。ピットは、住居跡中央部と南東壁下の2か所に検出されている。中央部に検出されたP<sub>1</sub>は、平面形が直径20cmほどの円形状の柱穴で



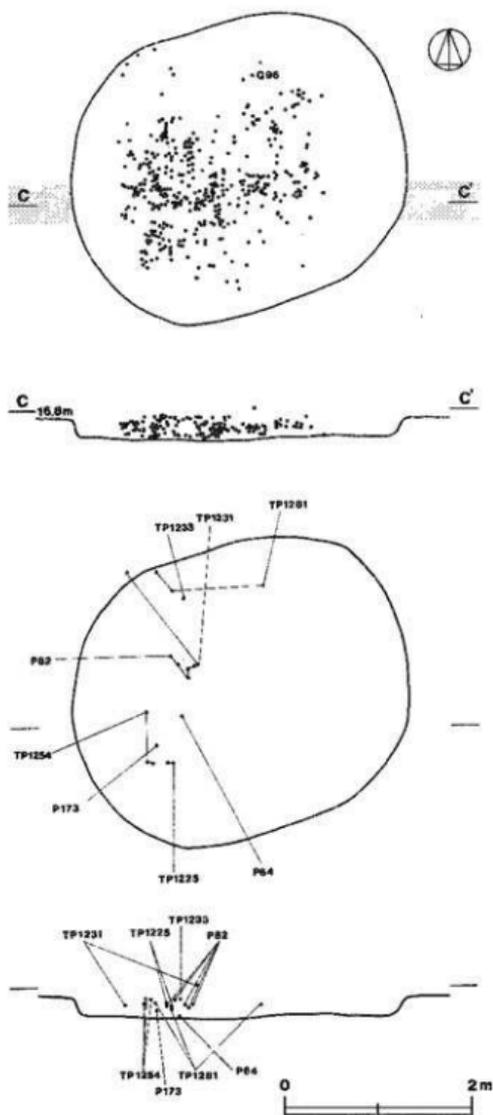
第68図 第40号住居跡実測図

半は、阿玉台期に比定される。

#### 第41号住居跡（第70・71図）

本跡は、Ⅱ次調査区の東部D7j<sub>8</sub>区を中心に確認された住居跡である。第40号住居跡の南東30mほどに位置し、北東8mほどには第42号住居跡が位置している。11mほど東側は調査区外となっている。

平面形は、長径3.18m、短径2.9mのほぼ円形を呈し、長径方向はN-43°-Eを指している。残存壁高は15~26cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面は全体的に凸凹

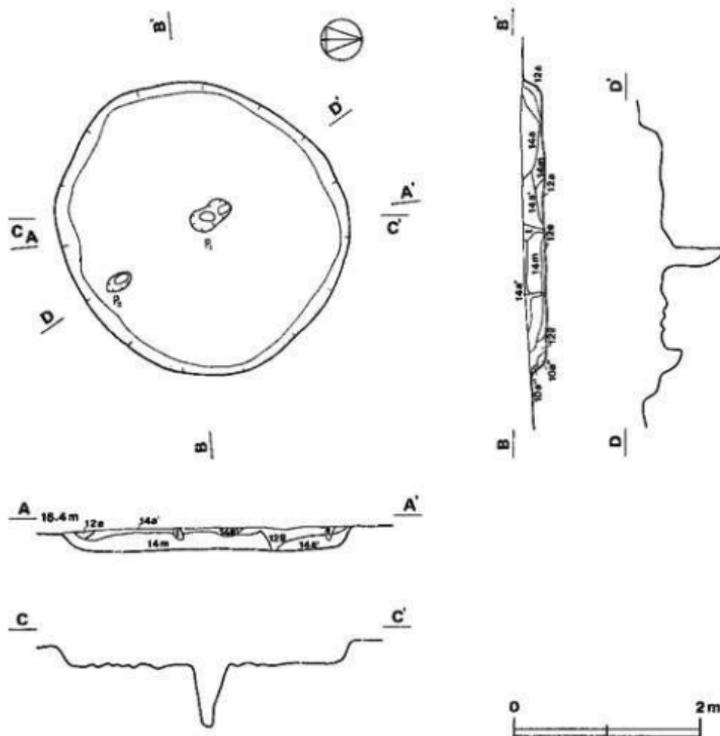


第69図 第40号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

が激しいが、よく踏み固められており、きわめて堅緻である。伊は検出されていない。ピットは、住居跡中央部と南東壁下の2か所に検出されている。中央部に検出されたP<sub>1</sub>は、長径45cm、短径27cmの長楕円形状に、床面を67cmの深さまでしっかりと掘り込んでいる。南東壁下に検出されたP<sub>2</sub>は、長径30cm、短径18cmの長楕円形状に掘り込まれているが、P<sub>1</sub>に比べ深さが22cmと浅い。規模や配列からP<sub>1</sub>が支柱穴、P<sub>2</sub>が補助的な柱穴と考えられる。

覆土は一部攪乱を受けているが、自然堆積の状態を示している。上層に暗褐色土、下層に褐色土、壁際に黄褐色土が堆積し、覆土中にはローム粒子・炭化粒子・焼土粒子が少量混入している。

遺物は、阿玉台期の土器片が極少量出土しているだけであるが、床面直上のものが多い。

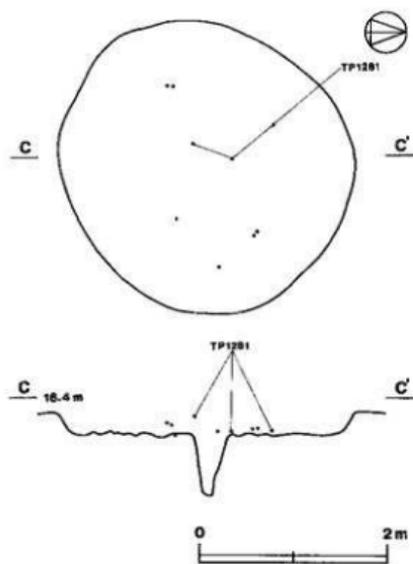


第70図 第41号住居跡実測図

#### 第42号住居跡 (第72・73図)

本跡は、Ⅱ次調査区の東部D7he区を中心に確認された住居跡である。第41号住居跡の北東8mほどに位置し、東側1.5mに隣接して第5号溝が南北に走っている。2mほど東側は調査区域外であり、溝と平行して農道が走っている。

平面形は、長軸3.84m、短軸3.32mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-30°-Wを指している。残存壁高は11~23cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり締まっている。床面はやや凸凹状であるが、全体的に踏み固められている。特に、炉の周辺とその南東側はよく踏み固められており堅緻である。炉は、住居跡の中央部に位置し、長径55cm、短径48cmほどの楕円形状に、床面を32cmほど掘りくぼめ、その中央部に底部を欠いた深鉢形土器 (P 127) を埋設して、土器埋設炉としている。掘り方と埋設土器との空き間には、ロームブロックをつめ込み固定している。埋設土器の内部に



第71図 第41号住居跡遺物出土位置図・土器  
接合関係図

覆土は、自然堆積であり、上層には暗褐色土、下層には褐色土が堆積している。覆土中にはローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含み、やや締まっている。

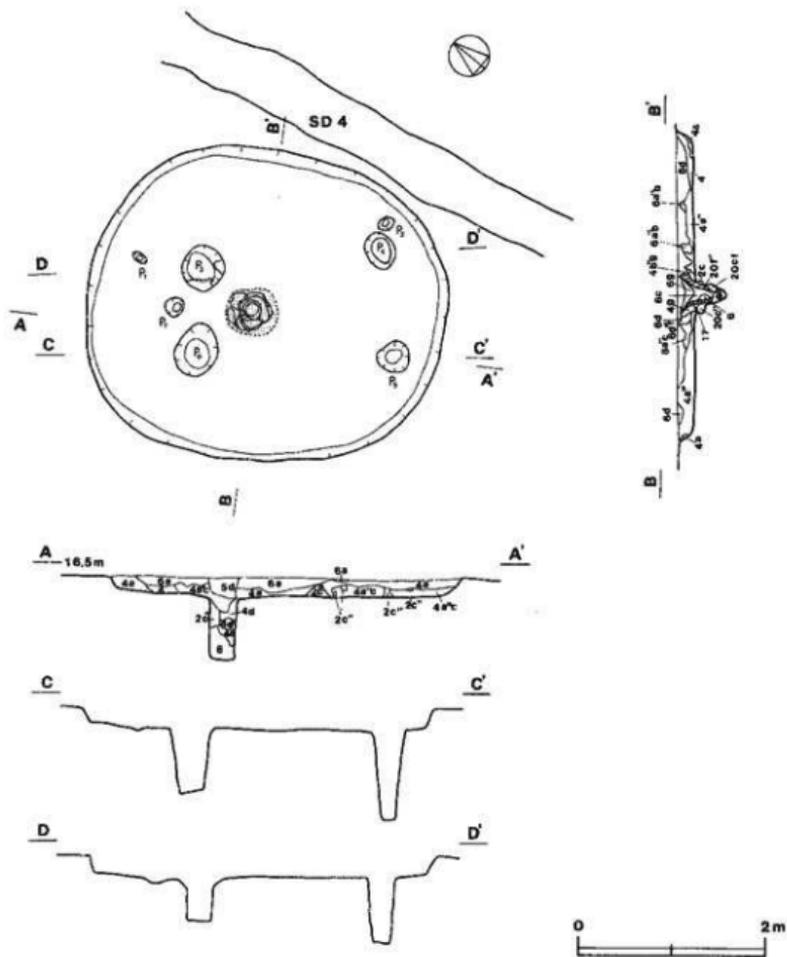
遺物は、炉内埋設土器1点、縄文土器片35点、石1点が出土している。縄文土器片の大半は阿玉台期のものであり、これらは、住居跡の東側及び北西側のP<sub>6</sub>付近に集中し、覆土の中層及びP<sub>4</sub>覆土中（P85）から出土している。

#### 第44号住居跡（第74図）

本跡は、Ⅱ次調査区の東端部D7g<sub>0</sub>区を中心に検出された住居跡である。第42号住居跡の北東4mほどに位置し、西側に接して第5号溝が南北に走っている。本跡の三分の二は東側の調査区域外に広がっていたため、一部拡張調査を実施した。

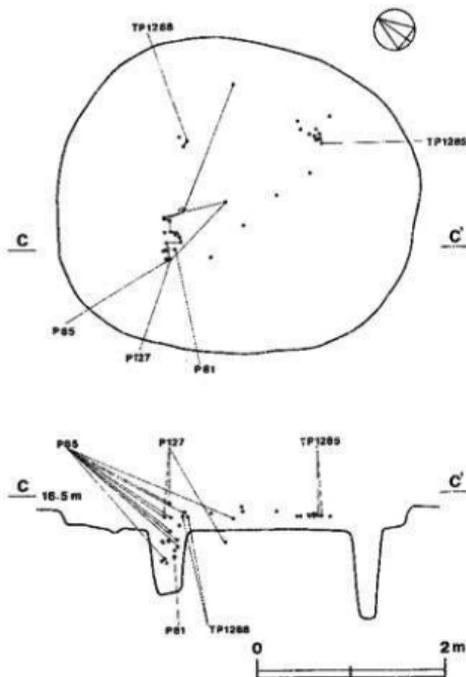
平面形は、長径3.18m、短径2.29mの楕円形を呈し、長径方向はN-10°-Wを指している。残存壁高は12~16cmで、壁は、西側を除きほぼ垂直に立ち上がり締まっている。西壁の一部は擾乱を受けており、やや軟弱である。床はやや凸凹状を呈しており、特に、中央部を中心に硬く締まっている。炉は検出されていない。ピットは2か所検出されており、いずれも柱穴と思われる。

は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む締まりのある暗褐色土が堆積している。埋設土器の周囲の土は、熱を受け暗赤褐色を呈しており、レンガ状に硬く焼けている。ピットは7か所検出されているが、支柱穴としては、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の4か所が考えられる。支柱穴は、長径35~55cm、短径30~44cm、深さ47~100cmの規模を有しており、北西~南東方向に長軸を持つ長方形に配列されている。P<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>とP<sub>5</sub>の柱穴の間隔は約2m、P<sub>2</sub>とP<sub>6</sub>、P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>の柱穴の間隔は約1mであり、4本の柱穴はほぼ規則的に配列されている。出入口は、炉の南東側に広い床面積を有していることや、特にこの部分が硬く踏み固められていることから、住居跡の南側のP<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>の間が想定される。



第72図 第42号住居跡実測図

中央部から検出されたP<sub>1</sub>は、直径30cmほどの円形を呈し段状に掘り込まれている。上段は14cmと浅く、下段はそこからさらに16cmほど掘り込まれている。西壁下に検出されたP<sub>2</sub>は、長径32cm・短径23cmの楕円形状に、25cmほどの深さに掘り込まれている。中央部から検出されたP<sub>1</sub>は、第39・40号住居跡のように炉を持たず、中央部に深いビットを有する同形態の住居跡に比べて掘り込み



第73図 第42号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

平面形は、長径3.8m、短径3.39mの楕円形を呈し、長径方向はN-7°-Eを指している。残存壁高は15~23cmであり、壁は、北側で一部攪乱を受けているが、ほぼ垂直に立ち上がり締まっている。床面は、やや凸凹状を呈し、硬く締まっている。炉は、住居跡中央部からやや南側に偏した位置に検出されており、長径85cm、短径83cmほどの円形状を呈し、床面を5~10cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉床は熱を受けレンガ状となり凸凹している。ピットは7か所検出されている。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>が主柱穴と思われるが、P<sub>2</sub>・P<sub>7</sub>に比べP<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>は規模が小さく掘り込みが浅い。上柱穴は、長径26~40cm、短径22~38cm、深さ15~48cmの規模で台形状に配列されている。出入口は明確でないが、柱穴の配列等からP<sub>2</sub>・P<sub>7</sub>間が想定される。柱穴の間隔は1.7~2mである。

覆土は、自然堆積であり、上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積している。下層には炭化粒子が少量含まれている。

遺物は少量であり、縄文土器片14点、石器1点、石7点が出土しているにすぎない。これらは、

が浅いが、主柱穴と思われる。P<sub>2</sub>は、規模や位置から補助的な柱穴と思われる。

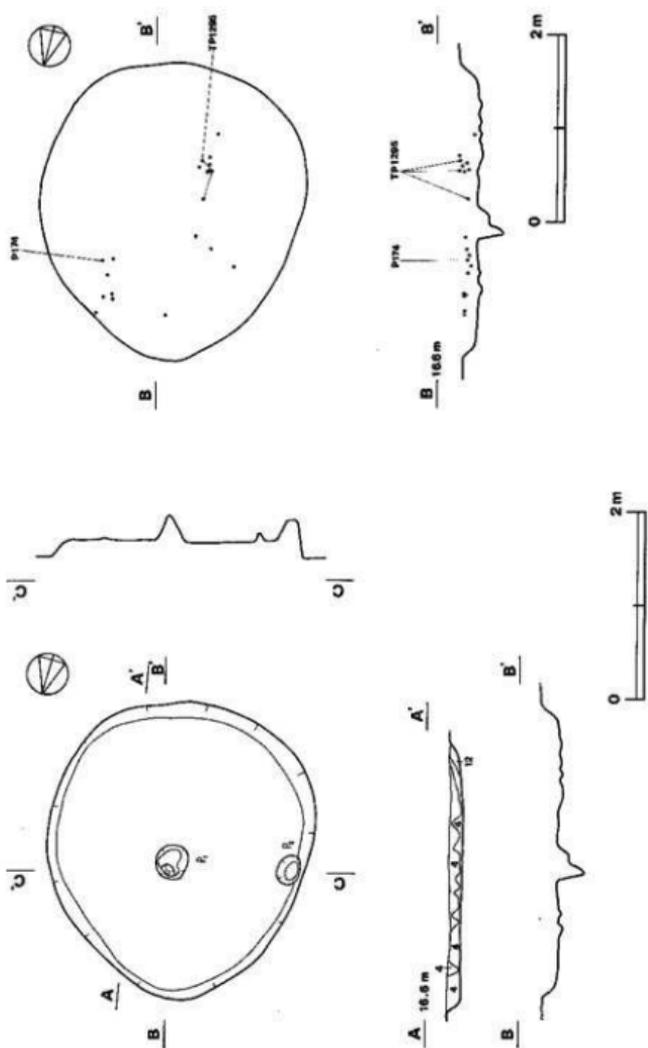
覆土は、自然堆積であり、上層にはローム粒子・焼土粒子を極少量含む褐色土が、下層及び壁際にはローム粒子を極少量含む褐色土がそれぞれ堆積している。

遺物は、阿玉台期の土器片が20点ほど出土しているにすぎない。これらは、住居跡の北側及び南西側から散在的に検出されており、覆土の中層からの出土が多い。

#### 第45号住居跡 (第75・76図)

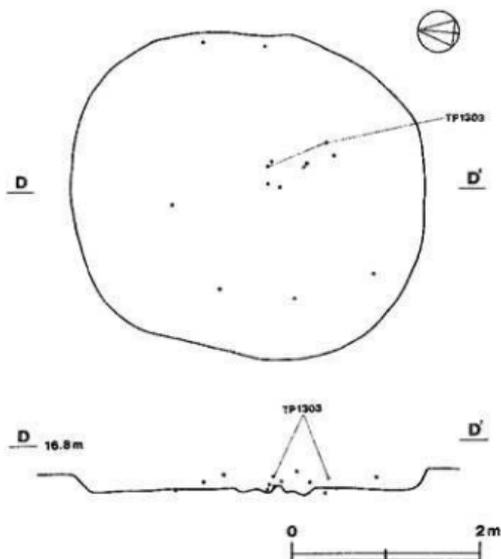
本跡は、Ⅱ次調査区の南東部E7ds区を中心に確認された住居跡である。第41号住居跡の南西20mほどに位置し、南東1mほどには第46号住居跡が隣接している。

住居跡内に散在し、覆土中から出土している。土器片は、加曾利E期のものが主である。



第74図 第44号住居跡実測図・遺物出土位置図・土器断合図





第76図 第45号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

平面形は、長径3.15m、短径2.77mの楕円形を呈し、長径方向はN-35°-Eを指している。残存壁高は14~25cmであり、壁は、西側で緩やかに立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がり縮まっている。床面は、凸凹状を呈しており堅緻である。炉は検出されていない。ピットは3か所検出されているが、柱穴としてはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>の2か所が考えられる。中央部に検出されたP<sub>1</sub>は、長径43cm、短径32cmの楕円形状で、円筒状に40cmほど床面を掘り込んでいる。北壁

下に検出されたP<sub>2</sub>は、長径40cm、短径26cmの楕円形状で、18cmの深さである。配列や規模等からP<sub>1</sub>が支柱穴、P<sub>2</sub>が補助的な柱穴と思われる。P<sub>3</sub>は形状や覆土の状態から木根跡と思われる。

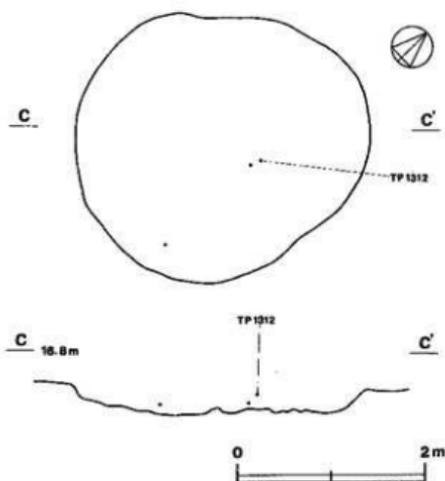
覆土は、自然堆積であり、上層から中層にかけて、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む縮まりを帯びた黒褐色土が、下層には粘性のある褐色土が堆積している。

遺物は、覆土中より阿玉台期の土器片5点、石1点が出土しただけである。遺物は少ないが、住居跡の形態から阿玉台期の住居跡と思われる。

#### 第47号住居跡（第78図）

本跡は、Ⅱ次調査区の南部E6f<sub>3</sub>区を中心に確認された住居跡である。第45号住居跡の南西26mほどに位置し、南側1mほどには第53号住居跡が隣接している。

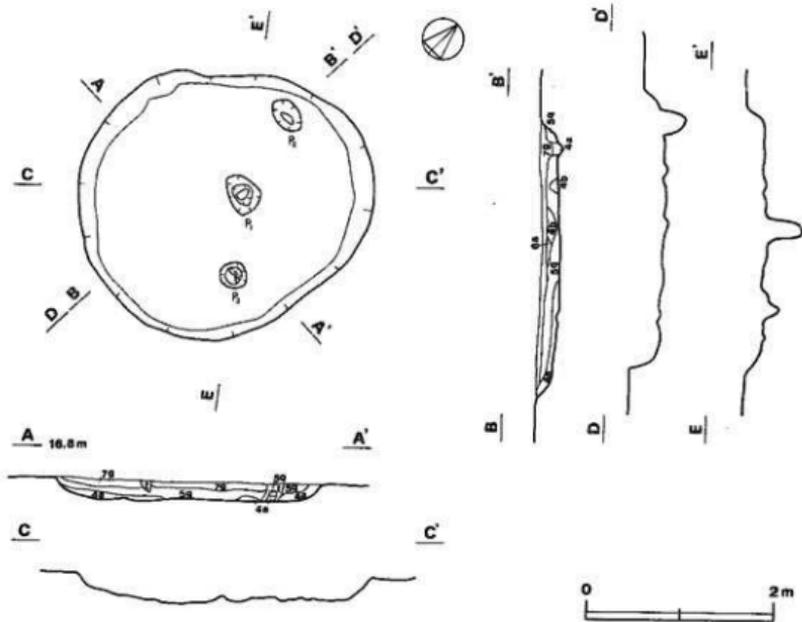
平面形は、長径2.9m、短径2.68mの楕円形を呈し、長径方向はN-55.5°-Wを指している。残存壁高は15~22cmであり、壁は、北東及び東側で緩やかに立ち上がるほかは、ほぼ垂直に立ち上がり硬く縮まっている。特に、西壁は遺存状態が良好である。床面は、やや凸凹状を呈しており、硬く縮まっている。炉は検出されていない。ピットは、中央部よりやや東側に偏した位置に1か所検出されているだけである。P<sub>1</sub>は、直径20cmほどの不整形を呈しており、床面を18cmほ



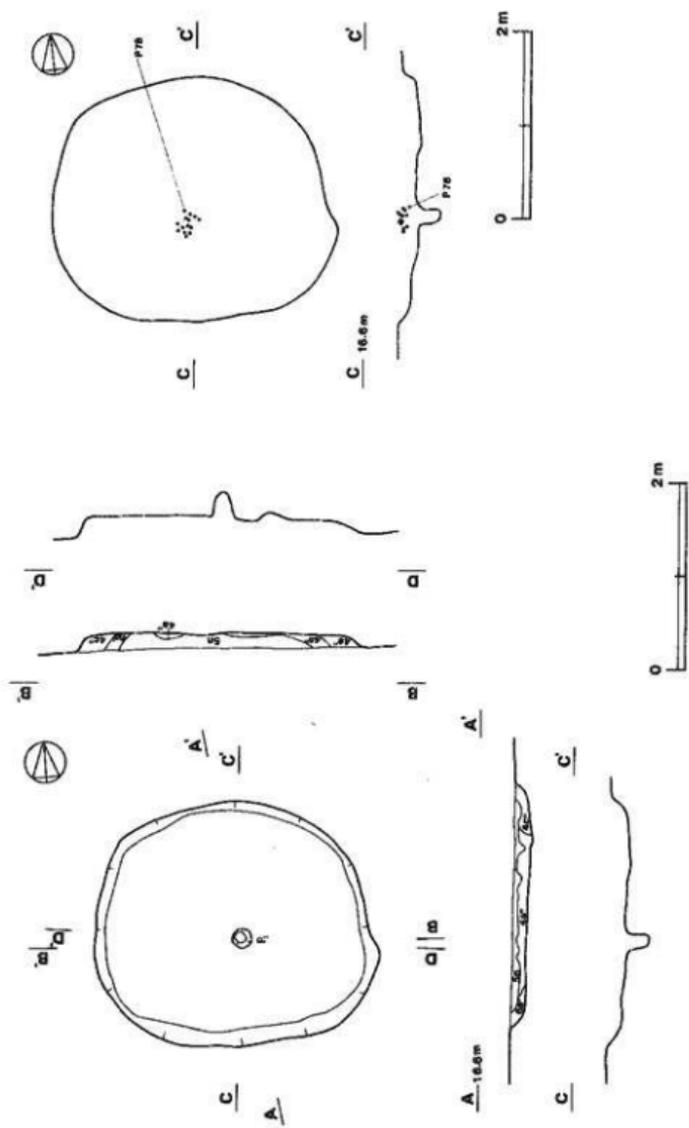
と「U」字状に掘り込んでいる。規模は小さいが主柱穴と考えられる。

覆土は、自然堆積である。上層にはローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を含む黒褐色土が、下層にはローム粒子を多く含む褐色土が、壁際にはロームブロックを含む暗褐色土・褐色土がそれぞれ堆積している。

遺物は極めて少なく、住居跡中央部覆土中より阿玉台期の土器片が15点ほど出土しているだけである。



第77図 第46号住居跡実測図・遺物出土位置図



第78图 第47号住居跡実測図・遺物出土位置図

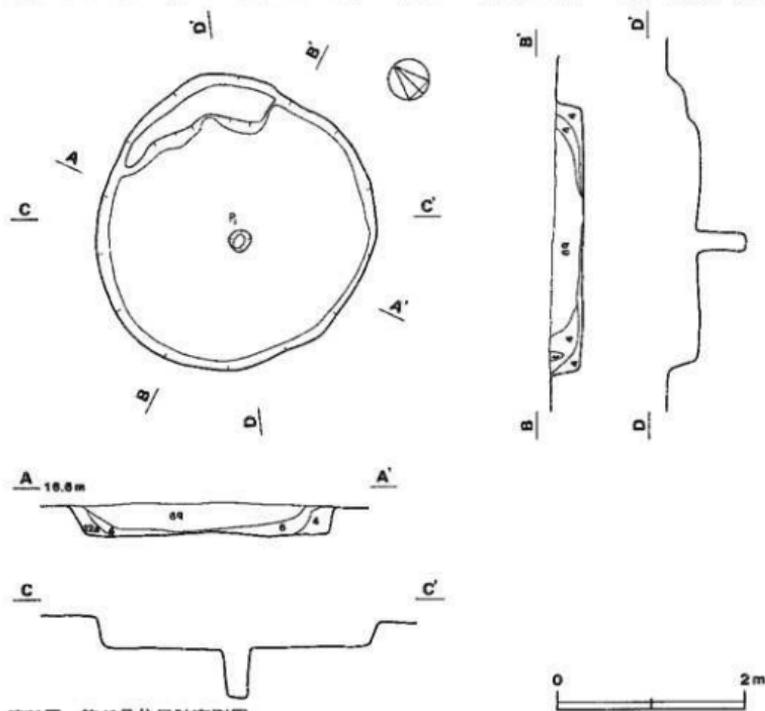
第48号住居跡（第79・80図）

本跡は、Ⅱ次調査の南東部E7js区を中心に確認された住居跡である。第46号住居跡の南18mほどに位置し、東側2mほどには第49号住居跡が隣接している。

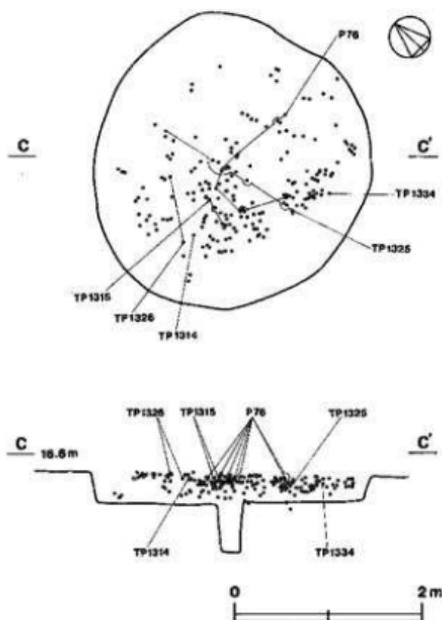
平面形は、長径3.15m、短径2.98mほどの円形を呈し、長径方向はN-41°-Wを指している。残存壁高は25~34cmである。北東壁は段状になっており、床面から斜めに9cmほど立ち上がった後、幅35cmほどの平坦面を経てさらに16cmほど斜めに立ち上がっている。他の壁は、垂直に立ち上がっている。壁は、全体的に硬く締まっている。床面は、やや凹凸状を呈しており、堅緻である。灰は検出されていない。ピットは、床面中央部に1か所検出されているだけである。P1は直径24cmほどの円形状を呈しており、規模は小さいが、床面中央部を円筒状に54cmと深くしっかりと掘り込んでおり、支柱穴と考えられる。

覆土は3層からなり、自然堆積している。上層には暗褐色土、下層及び壁際には褐色土が堆積している。覆土中には、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含み、硬く締まっている。

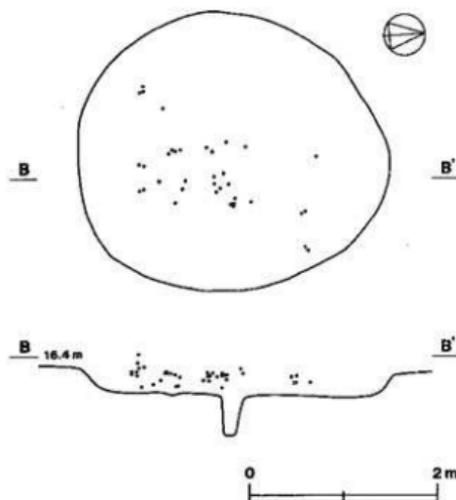
遺物は、住居跡の中央部から南西側に集中して検出され、縄文土器片195点、土製品1点、石



第79図 第48号住居跡実測図



第80図 第48号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図



第81図 第49号住居跡遺物出土位置図

8点が出土している。土器片の大半は阿玉台期に比定され、その多くは覆土の上層から中層にかけて出土している。

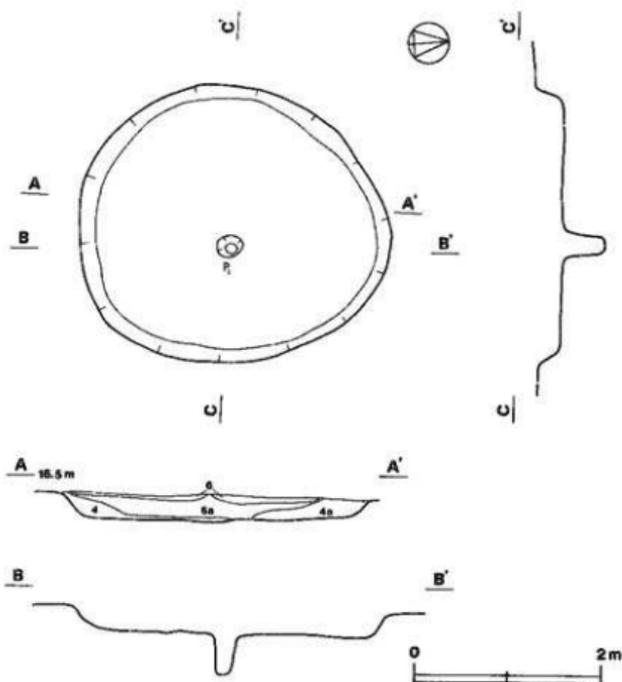
#### 第49号住居跡 (第81・82図)

本跡は、Ⅱ次調査区の北東部E7j6区を中心に確認された住居跡である。第48号住居跡の東2mほどに位置している。

平面形は、長径3.35m、短径2.95mほどの楕円形を呈し、長径方向はN-14°-Eを指している。残存壁高は21~30cmであり、壁は、西側でやや緩やかに立ち上がるほかは垂直に立ち上がり、硬く締まっている。床面は平坦で、全体的に硬く踏み固められており、堅緻である。炉は検出されていない。ピットは中央部に1か所だけ検出されている。主柱穴と思われるP<sub>1</sub>は、長径29cm、短径24cmの楕円形を呈しており、床面を円筒形状に46cmほど掘り込んでいる。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に褐色土が自然堆積している。6a層は、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子を極少量含み、硬く締まっている。

遺物は、住居跡の南東側から散在的に検出され、覆土中から縄文土器片28点、石3点が出土している。土器片の大半は阿玉台期に比定される。



第82図 第49号住居跡実測図

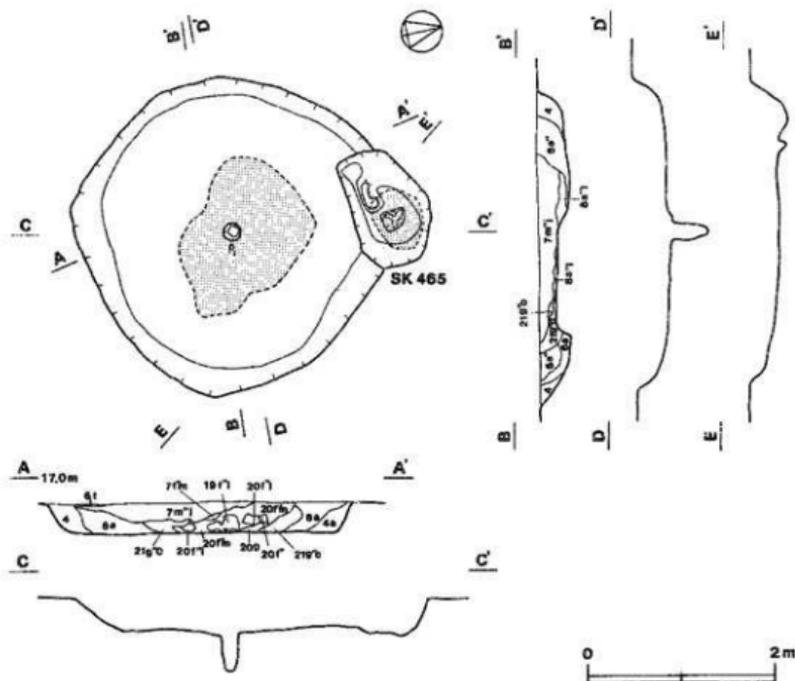
#### 第50号住居跡 (第83・84図)

本跡は、Ⅱ次調査区の南部E6ha区を中心に確認された住居跡である。第47号住居跡の南東10mほどに位置し、西側4～6mには第51・52・53号住居跡が位置している。北側で第465号土壇に切られている。

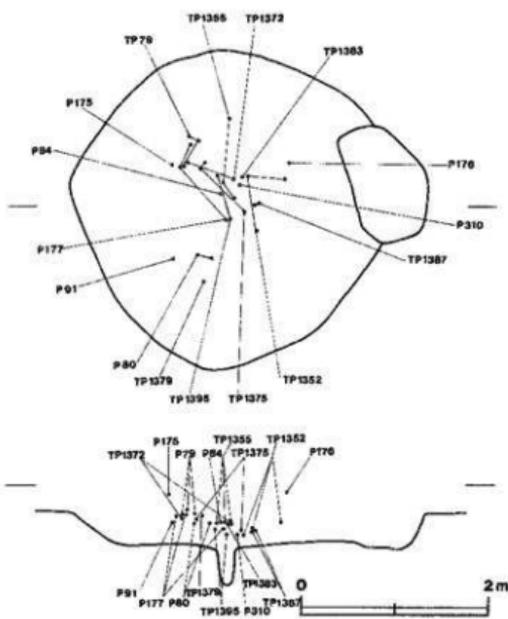
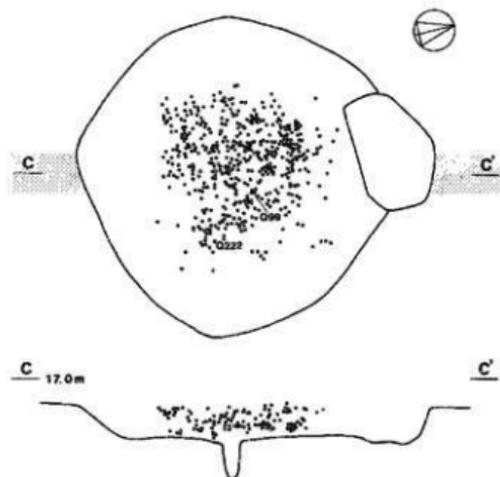
平面形は、長径3.28m、短径3.17mほどの円形状を呈し、長径方向はN-34°-Wを指している。残存壁高は17～35cmであり、壁は、南側及び東側のコーナー部を除いては、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面は多少凸凹状を呈しており、周囲に比較して中央がややくぼみ、非常に硬く踏み固められている。南西側は、なだらかに高くなっている。炉は検出されていない。住居跡の中央部からは、長径1.74m、短径1.10mの不整楕円形の範囲に多量の焼土が検出されている。焼土は、確認面においてすでに検出されており、床面直上まで30cmの厚さで堆積している。焼土は、その堆積状況から本跡に伴うものではなく、住居跡の廃絶直後に周囲から、特に北東側から中央部方向に向けて投棄されたものと考えられる。第465号土壇は、本跡の北側の床面及び

壁の一部を掘り込んで構築しており、形状は、長径1.3m、短径0.83mの長楕円形を呈している。土壁の北東側の底面は、熱を受けレンガ状に赤く焼け凸凹している。第465号土壁に伴う遺物は出土していないが、状況から本跡とほぼ同時期かそれ以降のものと思われる。本跡内に投棄されていた多量の焼土との関連も窺われる。本跡の周囲から第465号土壁と同様の性格の第392・393・395号土壁が検出されていることも記述しておきたい。ピットは、住居跡中央部に1か所検出されているだけである。P<sub>1</sub>は、直径20cmほどの円形を呈し、床面を「U」字状に深さ43cmほど掘り込んでいる。規模は小さいが、深くしっかりと掘り込まれており上柱穴と考えられる。

覆土は、壁際にローム粒子・ローム小ブロックを含む4、4a層が、その上に暗褐色土を呈する6a層が自然堆積しており、その直後に多量の焼土、灰、炭化物が北東方向から投棄された様子が窺われる。最後に周囲から流れ込んだと思われる7m<sup>2</sup>層が堆積している。



第83図 第50号住居跡実測図



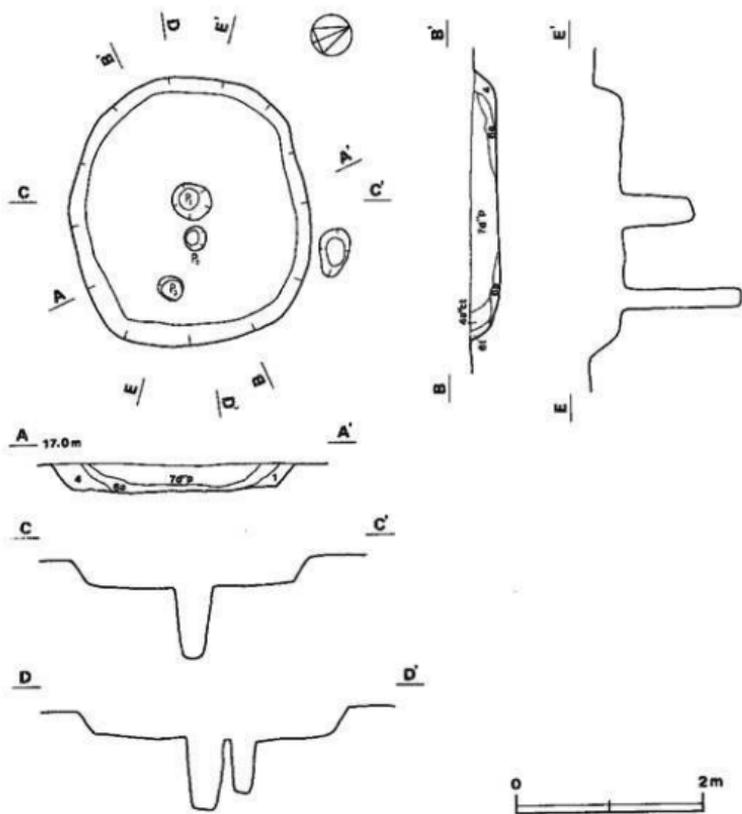
第84図 第50号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

遺物は、縄文土器片 509 点、石器 2 点、石 21 点が出土している。これらは、住居跡中央部の覆土の上層から中層にかけて多く出まし、土器片の大半は阿玉台期に比定される。P80 は第 53 号住居跡、P84 は第 52 号住居跡から出土した土器片と接合した。P80 は小片が接合したものであり層属は明確でないが、P84 は第 52 号住居跡に伴う土器である。いずれの住居跡も本跡と隣接しており、ほぼ同時期に営まれたものと思われる。

第51号住居跡 (第85・86図)

本跡は、Ⅱ次調査区の南部E67区を中心に確認された住居跡である。第50号住居跡の南西4mほどに位置し、北側2mには第52号住居跡、南側1mほどには第402、403号土壌が隣接している。

平面形は、長径2.87m、短径2.56mの楕円形を呈する小形の住居跡であり、長径方向はN-70°-Wを指している。残存壁高は24~30cmであり、壁は、西側及び東側の一部に擾乱が見られるが、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面は、やや凸凹状を呈しており、堅緻である。特に、西側の床面はよく踏み固められている。床面中央部のP1付近に少量の焼土粒子・炭化物が検出さ

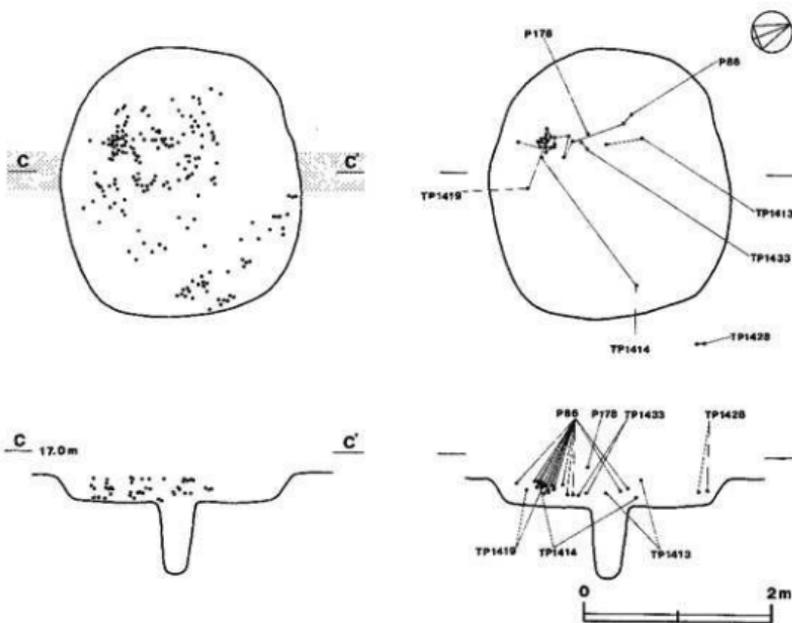


第85図 第51号住居跡実測図

れたが、灰は検出されなかった。ピットは、3か所検出されている。住居跡中央部に検出されたP<sub>1</sub>は、直径40cmほどの円形を呈し、円筒形状に77cmほど床面を掘り込んでいる。P<sub>2</sub>はP<sub>1</sub>の東側に位置し、直径26cmの円形を呈し、54cmの深さを有している。P<sub>3</sub>は東壁下に検出され、直径30cm、深さ130cmの規模を有している。規模や配列からP<sub>1</sub>が主柱穴、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は補助的な柱穴と考えられる。

覆土は、3層からなり、上層にローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を比較的多く含む黒褐色土、中層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土、下層に褐色土がそれぞれ自然堆積している。

遺物は、住居跡の南西側に集中し、東側に散在しており、縄文土器片207点、石2点が出土している。これらの多くは、覆土の上層から中層にかけて出土しており、土器片の大半は、阿玉台期に比定される。



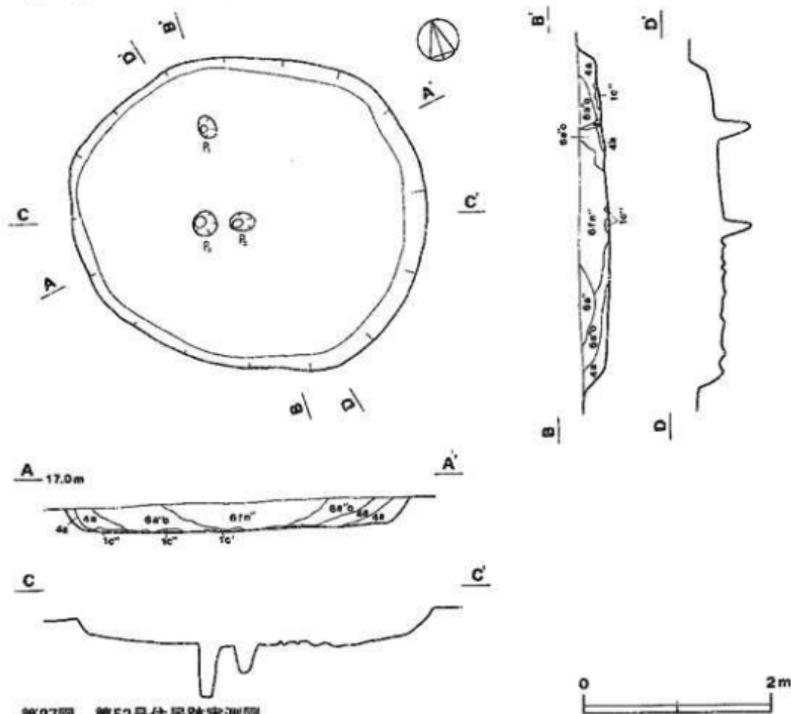
第86図 第51号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

第52号住居跡 (第87・88図)

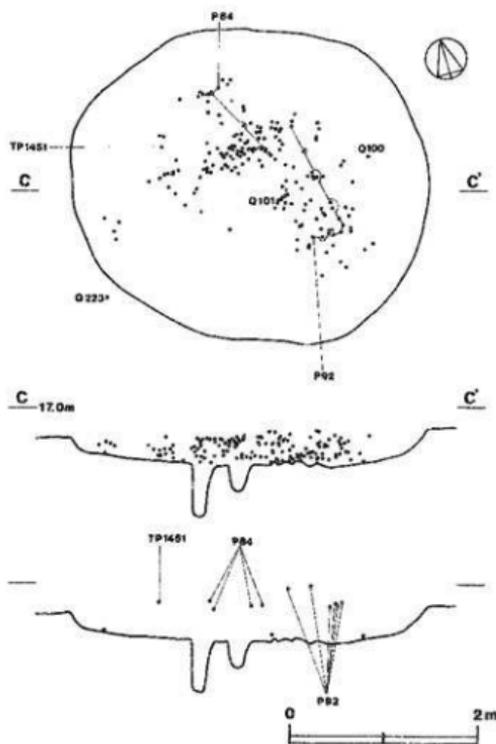
本跡は、Ⅱ次調査区の南部E6hs区を中心に確認された住居跡である。第50号住居跡の西4mほどに位置し、北側1mに第53号住居跡、南側2mに第51号住居跡が隣接している。

平面形は、長径3.86m、短径3.32mほどの楕円形を呈しており、長径方向はN-61°-Wを指している。残存壁高は18~26cmであり、壁は、北西壁が緩やかに立ち上がるほかは、垂直に立ち上っており硬く締まっている。北東壁の上部は、一部攪乱を受けている。床面は、北西側がなだらかで中央部に比べやや高くなっているが、そのほかは多少凸凹状を呈している。全体的に硬く締まっているが、特に西壁付近は堅緻である。炉は検出されていないが、P<sub>3</sub>の表面に炭化物が極少量検出されている。ピットは、住居跡中央部にP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>、北壁下にP<sub>1</sub>の計3か所検出されている。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は長径25~27cm、短径18~20cm、深さ33~41cmを有するほぼ同規模の柱穴である。P<sub>3</sub>は直径26~27cmの円形を呈する柱穴であり、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>に比べ掘り込みが60cmと深くしっかりしている。規模や配列からP<sub>3</sub>が主柱穴、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は補助的な柱穴と考えられる。

覆土は、自然堆積であり、上層に暗褐色土、下層及び壁際に褐色土が堆積している。覆土中に



第87図 第52号住居跡実測図



第88図 第52号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

23cmであり、壁は、北西側で掘り込みが浅く緩やかに立ち上がっているほかは、ほぼ垂直に立ち上がっている。南側の壁は、特にしっかりしているが、他は軟弱である。床面は、凸凹状を呈しており硬い。特に中央部は凸凹が激しく、北西側の床面はやや高くなっており堅緻である。炉は検出されていない。ピットは、2か所検出されている。住居跡の中央部から検出されたP<sub>1</sub>は、不整形を呈し、床面を「V」字状に31cm掘り込んでいる。位置、形状から主柱穴と考えられる。西壁下に検出されたP<sub>2</sub>は、形状や掘り込みの状況から柱穴とは考えにくい。

覆土は自然地積であり、上層にローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土が、下層に焼土粒子を極少量含む褐色土が、隙間にはローム粒子を含む黄褐色土がそれぞれ堆積している。覆土は全体的に硬く締まっている。

遺物は、住居跡のやや南側に偏した位置から散在的に検出され、縄文土器片10点、石3点が出土しているにすぎない。土器片は阿玉台期に比定され、覆土から出土している。

は焼土粒子・炭化粒子を少量含む、やや締まっている。

遺物は、縄文土器片189点、石器3点、石8点が出ている。土器片の大半は阿玉台期のものであり、住居跡の中央部付近に集中して検出されており、覆土の中層からの出土が多い。

#### 第53号住居跡(第89-90図)

本跡は、Ⅱ次調査区の南部E6ge区を中心に確認された住居跡である。第52号住居跡の北1mほどに位置し、北西側1mには第47号住居跡が隣接している。

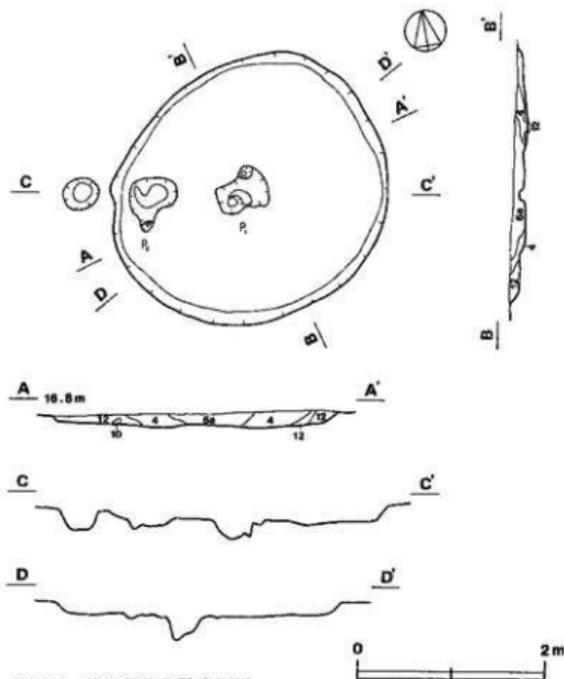
平面形は、長径3.03m、短径2.7mの楕円形を呈し、長径方向はN-60°-Eを指している。残存壁高は7～

### 第54号住居跡

(第91・92図)

本跡は、Ⅱ次調査区  
の南部E6c7を中心に確  
認された住居跡である。  
第47号住居跡の北東9  
mほどに位置し、北西  
側3mほどには第56号  
住居跡が隣接している。

平面形は、長径3.64  
m、短径3.43mほどの  
円形を呈し、長径方向  
はN-7°-Eを指して  
いる。残存壁高は8~  
13cmであり、壁は垂直  
に立ち上がり、全体的  
に硬く締まっているが、  
上部は一部攪乱を受け  
ている。床面は、平坦  
で堅緻である。炉は、

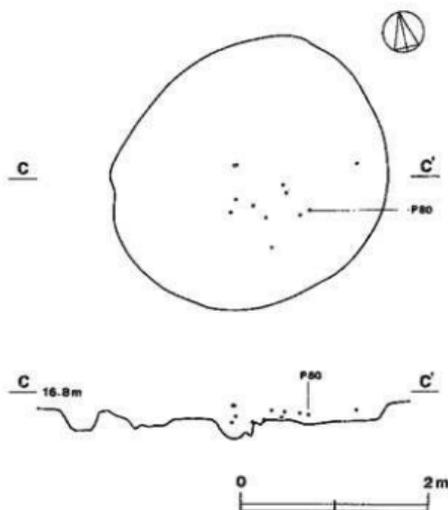


第89図 第53号住居跡実測図

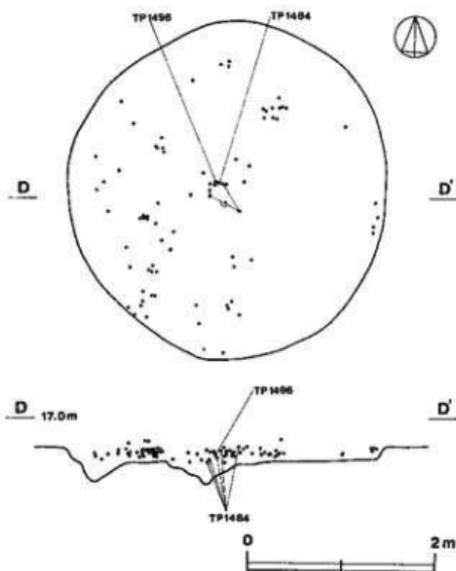
床面中央部からやや西側に偏した位置に検出され、長径84cm、短径80cmのほぼ円形状を呈し、床面を15~20cmほど掘りくぼめ地床炉としている。炉内には焼土が充填し、炉床はレンガ状に硬く焼けており、長期間使用されたものと思われる。ピットは、炉の北東側にP<sub>1</sub>、南東壁際にP<sub>2</sub>、西壁際にP<sub>3</sub>の計3か所検出されている。いずれも土柱穴と考えられ、長径34~53cm、短径33~48cm、深さ22~78cmの規模を有している。特に、P<sub>1</sub>は78cmと深く掘り込まれている。

覆土は、中央部に暗褐色土、壁際に褐色土が堆積している。中央部に堆積している6a<sup>+</sup>p層は、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含み締まっている。

遺物は、住居跡の西側に散在しており、覆土の上層から中層にかけて縄文土器片76点、石3点が出土している。土器片は、阿玉台期に比定される。



第90図 第53号住居跡遺物出土位置図



第91図 第54号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

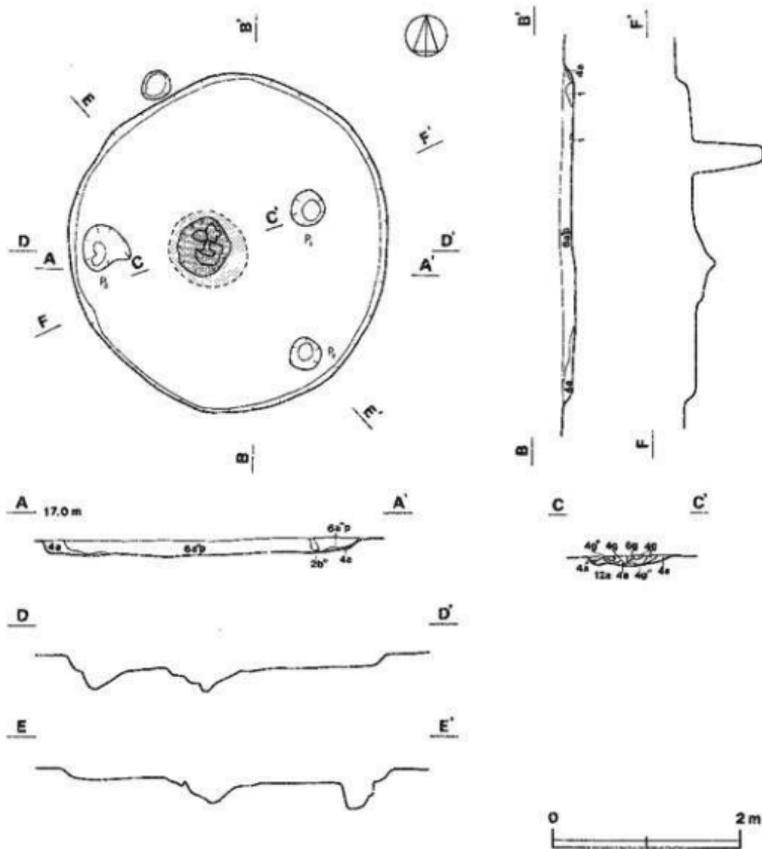
### 第55号住居跡（第93図）

本跡は、Ⅱ次調査区の南東部E7ii区を中心に確認された住居跡であり、第50号住居跡の南東9mほどに位置している。

平面形は、長径2.8m、短径2.55mの円形を呈し、長径方向はN-22°-Wを指している。残存壁高は12~28cmであり、壁は南東側で緩やかに立ち上がっているほかは、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面は凸凹が激しく、きわめて硬く締まっている。灰は検出されていない。ピットは3か所検出されている。P<sub>2</sub>は長径27cm、短径21cm、深さ42cmであり、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>は長径27cm、短径17~18cm、深さ16~22cmの規模を有している。規模や配列等から、中央部から検出されたP<sub>2</sub>が主柱穴、南西壁際及び北東壁際から検出されたP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>は補助的な柱穴と思われる。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に褐色土が自然堆積している。

遺物は、覆土上層から阿玉台期の土器片がわずかに6点出土しているにすぎない。しかし、平面形状や柱穴の配列が、当遺跡から検出された第50号住居跡等の阿玉台期の住居跡に類似していることから、同期の住居跡と思われる。

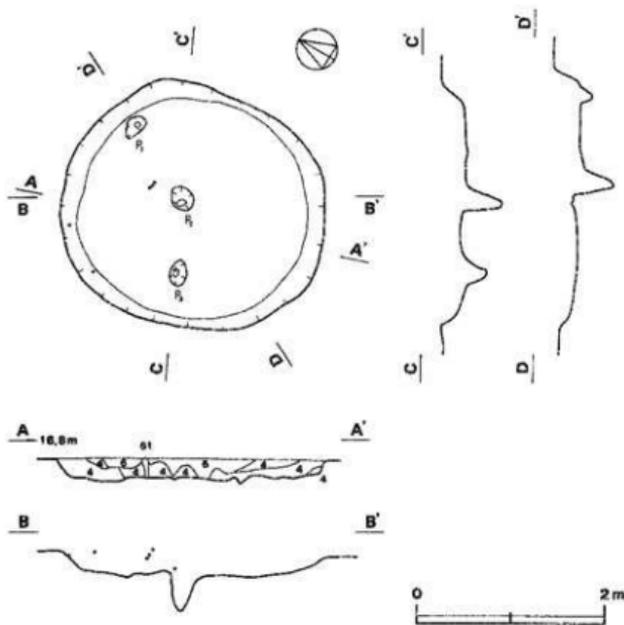


第92図 第54号住居跡実測図

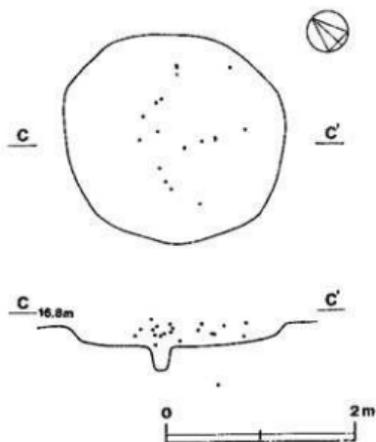
### 第56号住居跡 (第94・95図)

本跡は、Ⅱ次調査区の南部E6c区を中心に確認された住居跡である。第54号住居跡の北西3mほどに位置し、北側6mほどには第57号住居跡が位置している。

平面形は、長径2.45m、短径2.25mのほぼ円形を呈し、長径方向はN-16°-Wを指している。残存壁高は10-15cmで、壁は全体的に緩やかに立ち上がり硬く締まっているが、北壁は一部攪乱を受けている。床面は中央部に向かってやや傾斜し、ハードロームブロックを多く含む硬く締まっている。炉は検出されていない。ピットは2か所検出されている。北壁下に検出されたP1は、



第93図 第55号住居跡実測図・遺物出土位置図

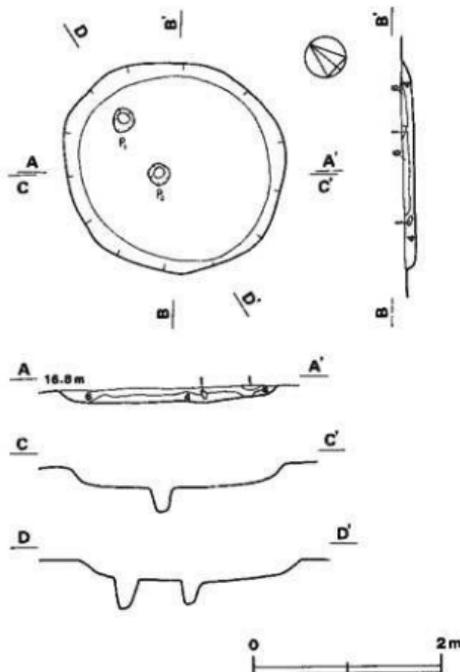


第94図 第56号住居跡遺物出土位置図

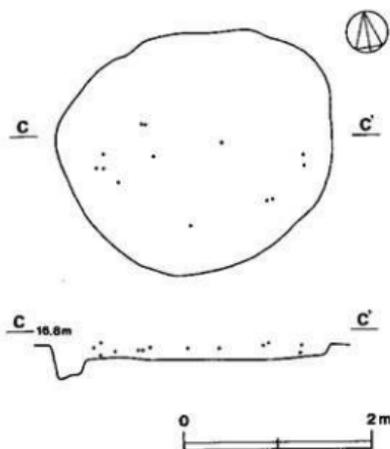
長径27cm、短径23cm、深さ33cm、床面中央よりやや西側に偏した位置に検出されたP<sub>2</sub>は、直径21~22cmの円形状を呈し、深さ27cmの規模を有している。規模や配列からP<sub>2</sub>が主柱穴、P<sub>1</sub>が補助的な柱穴と思われる。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に褐色土が自然堆積している。覆土にはローム粒子を含んでいる。

遺物は、阿玉台期の土器片18点が出土している。これらは、住居跡中央付近の覆土から散在的に出土している。



第95図 第56号住居跡実測図



第96図 第57号住居跡遺物出土位置図

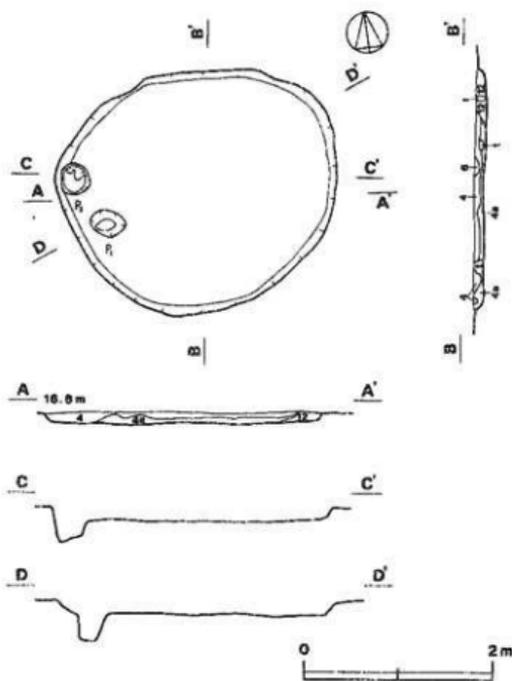
### 第57号住居跡 (第96・97図)

本跡は、Ⅱ次調査区の中央部E6a区を中心に確認された住居跡であり、第56号住居跡の北6mほどに位置している。

平面形は、長径2.96m、短径2.6mの楕円形を呈し、長径方向はN-65°-Eを指している。残存壁高は9~14cmであり、壁は、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面は、平坦で硬い。炉は検出されていない。ピットは、西壁下に2か所検出されている。P<sub>1</sub>は長径37cm、短径28cmの楕円形を呈しており、深さは31cmで底面は平坦で硬い。P<sub>2</sub>は、西壁の一部を掘り込んでおり、長径40cm、短径38cm、深さ18~32cmで、底面が凸凹状を呈している。柱穴としてはP<sub>1</sub>が考えられる。P<sub>2</sub>は、形状や覆土の状況から本根による攪乱と思われる。ただ、これまでの阿玉台期の住居跡のように、住居跡の中央部に柱穴は検出されていない。

覆土は、大別すると2層からなり、上層にローム粒子を含む褐色土が、下層にはローム粒子を極少量含む褐色土がそれぞれ自然堆積している。

遺物は、阿玉台期の土器片12点、石2点が出土している。これらは、住居跡内に散在して覆土から出土している。



第97図 第57号住居跡実測図

cm, P<sub>2</sub>は長径37cm, 短径28cm, 深さ20cm, P<sub>3</sub>は直径25cm, 深さ16cmの規模を有している。いずれも掘り込みが16~20cmと浅いが、形状や規模、柱穴の配列からP<sub>1</sub>が主柱穴、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は補助的な柱穴と考えられる。

覆土は3層からなり、上層から中層に暗褐色土、下層に濃い褐色土が自然堆積している。上層から中層にはローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子が極少量含まれ、下層には多量のローム粒子、少量のハードロームブロックが含まれている。

遺物は、覆土中より縄文土器片が14点出土しているだけである。土器片は阿玉台期に比定されるものが13点、加曾利E期に比定されるものが1点である。出土遺物は少ないが、住居跡の形態などから阿玉台期の住居跡と思われる。

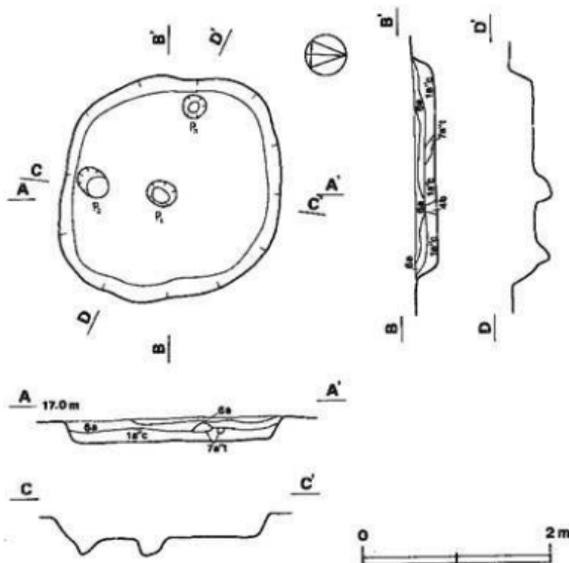
#### 第59号住居跡 (第100・101図)

本跡は、Ⅱ次調査区の南東部F7e7区を中心に確認された住居跡である。第49号住居跡の南19m

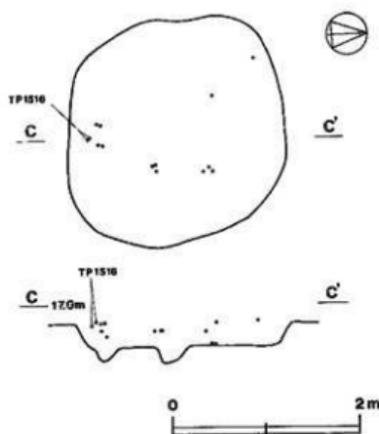
#### 第58号住居跡 (第98・99図)

本跡は、Ⅱ次調査区の南部E6b7区を中心に確認された住居跡である。第51号住居跡の南7mほどに位置し、西側1mほどには隣接して第6号溝が南北に走っている。

平面形は、長径2.96m, 短径2.6mの不整形円形を呈し、長径方向は北を指している。残存壁高は24~28cmであり、壁は、ほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっているが、北壁の一部が攪乱を受けている。床面は平坦で締まっている。炉は検出されていない。ピットは、住居跡の中央部にP<sub>1</sub>, 西壁下にP<sub>2</sub>, 南壁下にはP<sub>3</sub>の計3か所検出されている。P<sub>1</sub>は長径32cm, 短径26cm, 深さ19



第98図 第58号住居跡実測図

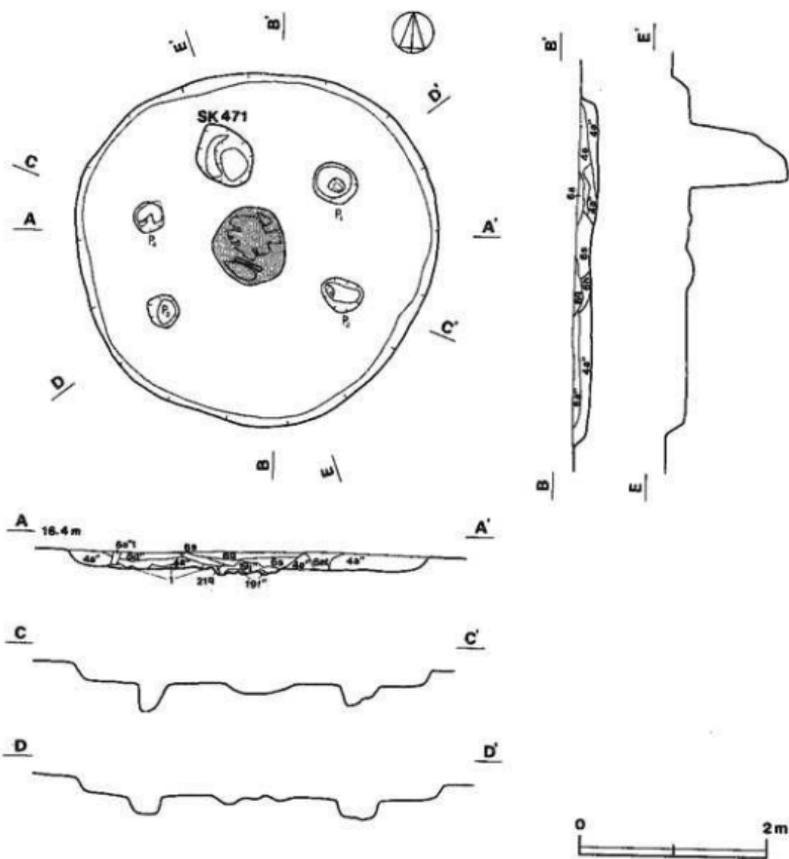


第99図 第58号住居跡遺物出土位置図

ほどに位置し、南東側1mほどには第60号住居跡が隣接している。

平面形は、長径3.89m、短径3.8mの円形を呈し、長径方向はN-52.5°-Eを指している。残存壁高は14~21cmであり、壁は、垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面はほぼ平坦で硬く、特に炉の北側は堅緻である。炉は住居跡の中央部に位置し、長径83cm、短径76cmの楕円形を呈し

ており、床面を楕円状に10~12cm掘り込み地床炉としている。炉内には焼土が充填しが床はレンガ状に硬く焼けており、長期間使用したものである。炉の北側に性格は不明であるが、土層などから本跡に伴うものと考えられる第471号土壇が位置している。第471号土壇は、長径74cm、短径57cmの楕円形を呈し、床面を77~108cmの深さに掘り込んでいる。主柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の4か所であり、長径33~48cm、短径30~43cm、深さ20~33cmの規模を有し、長方形に配列されている。柱穴の間隔はP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の間が1.2m、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の間が2mとなっており、東西方向に長軸をもっている。また、炉の南側に広い床面積をもち、出入口としては、柱穴の配列

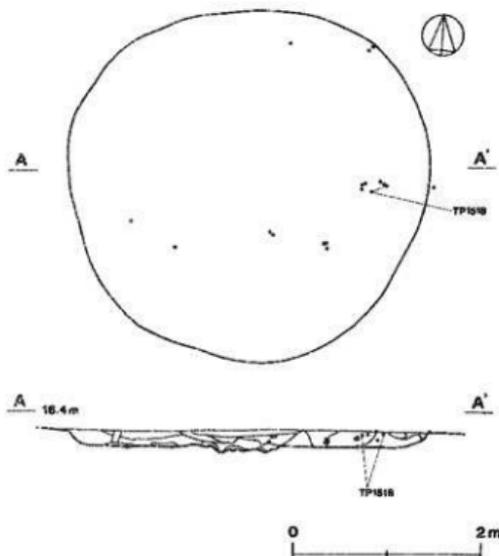


第100図 第59号住居跡実測図

や炉の位置等からP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>間が考えられる。

覆土は、暗褐色土・褐色土からなり、覆土中にはローム粒子・焼上粒子・炭化粒子が少量含まれている。

遺物は、住居跡の東側の覆土の上層から中層にかけて、加曾利E期の土器片11点、石器1点、石6点が検出されている。



第101図 第59号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

床炉としている。炉内には焼土が充満し、炉床はレンガ状に硬く焼けており、長期間使用されたものと思われる。ピットは、P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5か所検出されており、五角形状に配列されている。いずれも主柱穴と考えられ、長径34～39cm、短径28～37cm、深さ25～45cmの規模を有している。柱穴は、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>がほぼ同規模で掘り込みもしっかりしているが、P<sub>5</sub>はやや小規模で掘り込みが浅い。住居跡は、炉の北東側に広い床面積をもち、柱穴の配列などからP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の間、またはP<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>の間が出入口と考えられる。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積している。覆土の上層には、ハードロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が極少量含まれている。

遺物は、炉の周辺及び住居跡の南側から集中して検出され、覆土の上層から中層にかけて縄文土器片151点、石器7点、土製品1点、石5点が出土している。土器片の大半は、加曾利E期に比定される。

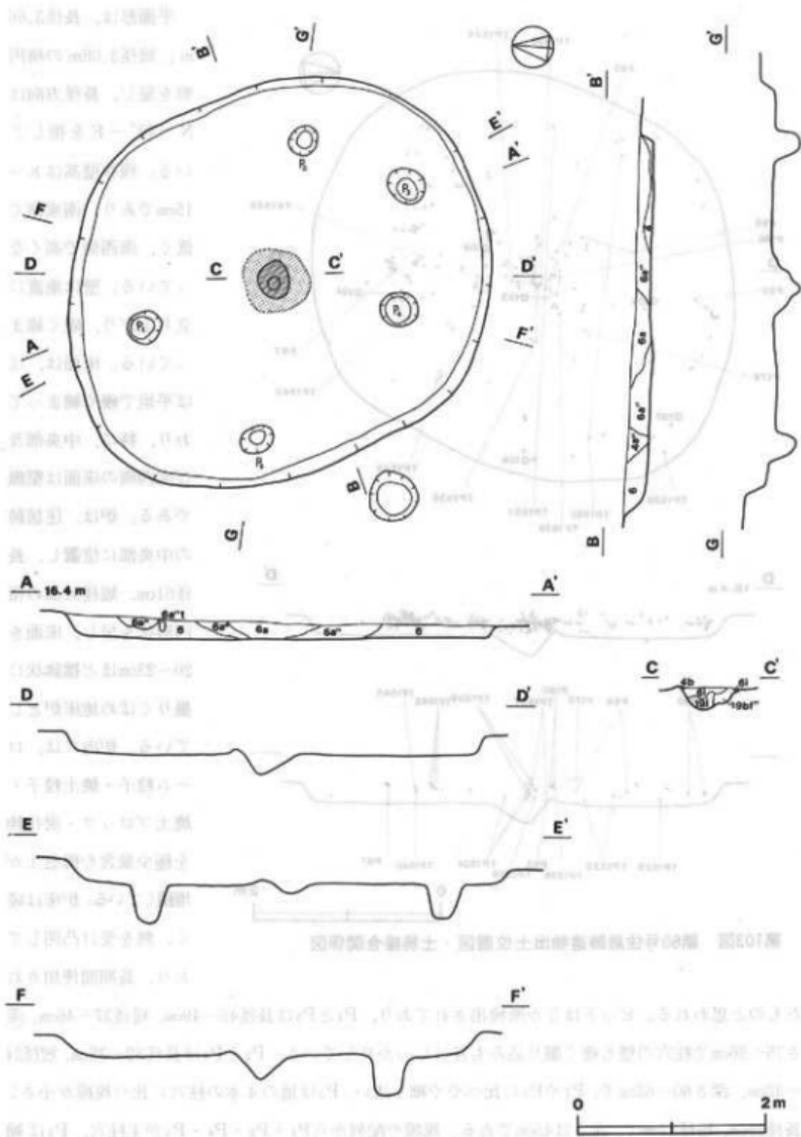
#### 第61号住居跡（第104・105図）

本跡は、Ⅱ次調査区の南西部E7cs区を中心に確認された住居跡である。第59号住居跡の北東7mほどに位置している。

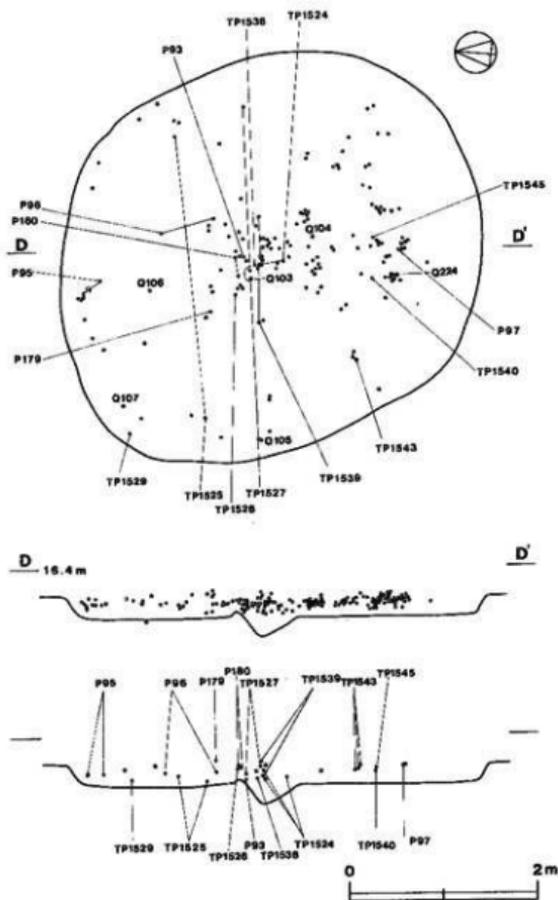
#### 第60号住居跡（第102・103図）

本跡は、Ⅱ次調査区の南東部F7a区を中心に確認された住居跡である。第59号住居跡の南東1mほどに位置している。

平面形は、長径4.7m、短径4.08mの楕円形を呈し、長径方向はN-33°-Wを指している。残存壁高は14～24cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面は平坦で堅緻である。がは、住居跡の中央部に位置し、長径70cm、短径65cmの楕円形状を呈しており、床面を30～35cmほど錘鉢状に掘りくぼめ地



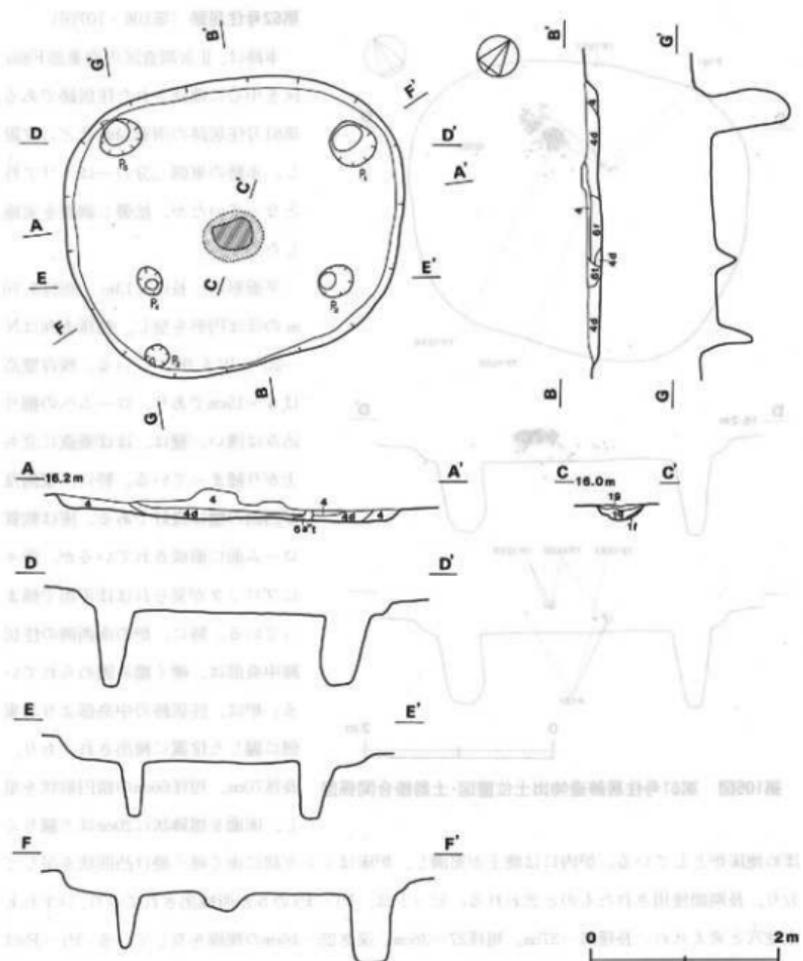
第102图 第60号住居跡実測图



第103図 第60号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

たものと思われる。ピットは5か所検出されており、 $P_1$ と $P_3$ は長径45~49cm、短径37~46cm、深さ75~86cmで柱穴の壁も硬く掘り込みも特にしっかりしている。 $P_2$ と $P_4$ は長径32~38cm、短径24~32cm、深さ60~62cmで、 $P_1$ や $P_3$ に比べやや細く浅い。 $P_3$ は他の4本の柱穴に比べ規模が小さく長径25cm、短径22cmで、深さは45cmである。規模や配列から $P_1$ ・ $P_2$ ・ $P_4$ ・ $P_3$ が主柱穴、 $P_5$ は補助的な柱穴と考えられる。主柱穴は台形状に配列され、炉の北西側に広い床面積を有している。出入り口としては、柱穴の配列や床面の状態等から、南西方向の $P_3$ と $P_4$ の間、もしくは $P_4$ と $P_3$ の間

平面形は、長径3.66m、短径3.08mの楕円形を呈し、長径方向は $N-43^{\circ}-E$ を指している。残存壁高は8~15cmであり、南東側で低く、南西側で高くなっている。壁は垂直に立ち上がり、硬く締まっている。床面は、ほぼ平坦で硬く締まっており、特に、中央部及び南西側の床面は堅緻である。炉は、住居跡の中央部に位置し、長径61cm、短径51cmの楕円形状を呈し、床面を20~23cmほど揺鉢状に掘りくぼめ地床がとれている。炉内には、ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック・炭化物を極少量含む褐色土が堆積している。炉床は硬く、熱を受け凸凹しており、長期間使用され

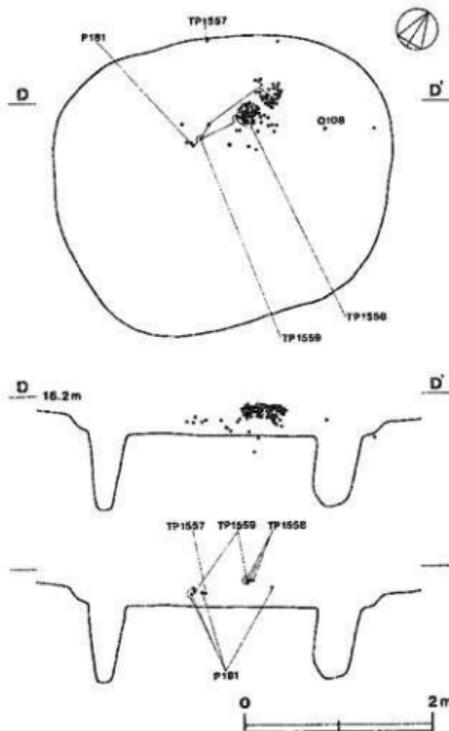


第104図 第61号住居跡実測図

が想定される。

覆土は、上層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む褐色土が、下層にローム粒子・ハードロームブロックを少量、焼土粒子を極少量含む褐色土がそれぞれ堆積している。

遺物は、住居跡の北側に集中し、覆土の上層から中層にかけて縄文土器片 128 点、石器 1 点、石 1 点が出土している。土器片の大半は加曾利E期に比定される。



第105図 第61号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

ばめ地床炉としている。炉内には焼土が充満し、炉床はレンガ状に赤く硬く焼け凸凹状を呈しており、長期間使用されたものと思われる。ピットは、 $P_1 \sim P_5$ の5か所検出されており、いずれも土柱穴と考えられ、長径31~37cm、短径27~36cm、深さ25~46cmの規模を有している。 $P_1 \sim P_5$ はほぼ直線上に並び、5本の柱穴がほぼ台形状に配列されている。炉の位置や柱穴の配列等から、 $P_2$ と $P_3$ 間または $P_3$ と $P_4$ 間が出入口と想定される。

覆土は、上層にローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土が、下層にローム粒子を多く含み、ハードロームブロックを極少量含む暗褐色土が、壁際に褐色土がそれぞれ堆積している。

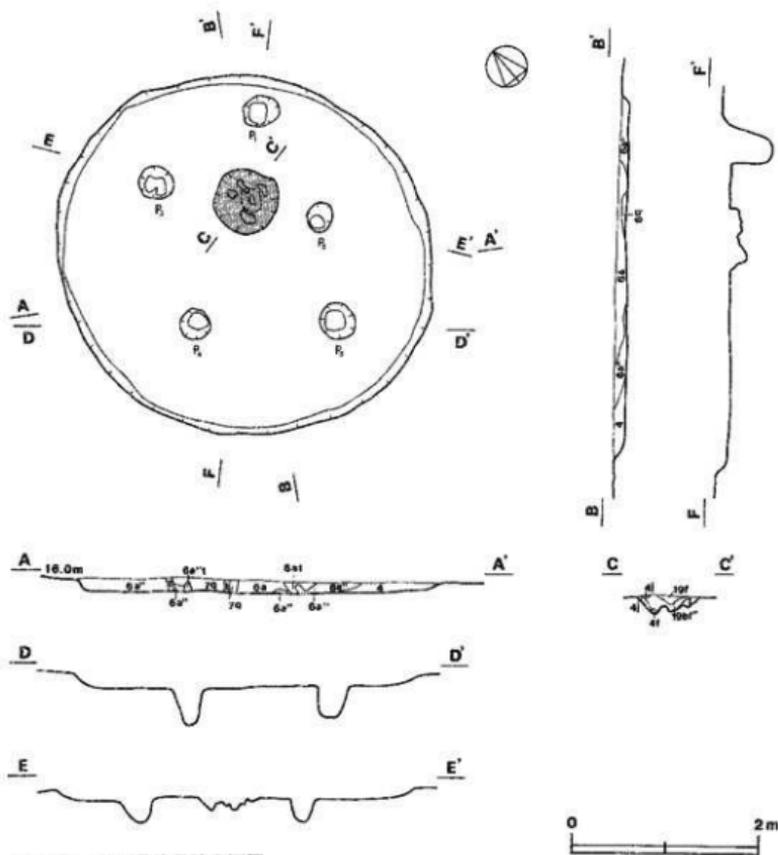
遺物は、炉の南西側の住居跡中央部付近に散在し、覆土中から縄文土器片51点、石器1点、土製品1点、石6点が出土している。土器片は、加曾利E期に比定される。

#### 第62号住居跡 (第106・107図)

本跡は、Ⅱ次調査区の南東部F8d区を中心に確認された住居跡である。第61号住居跡の南東14mほどに位置し、本跡の東側二分の一はエリア外となっていたが、拡張し調査を実施した。

平面形は、長径4.13m、短径3.76mのほぼ円形を呈し、長径方向は $N-20^{\circ}-W$ を指している。残存壁高は6~15cmであり、ロームへの掘り込みは浅い。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり縮まっている。特に、東側及び西側の壁は良好である。床は軟質ローム面に形成されているが、所々にブロックが見られほぼ平坦で縮まっている。特に、炉の南西側の住居跡中央部は、硬く踏み固められている。炉は、住居跡の中央部より北東側に偏した位置に検出されており、長径70cm、短径66cmの楕円形状を呈

し、床面を掃鉢状に20cmほど掘りく

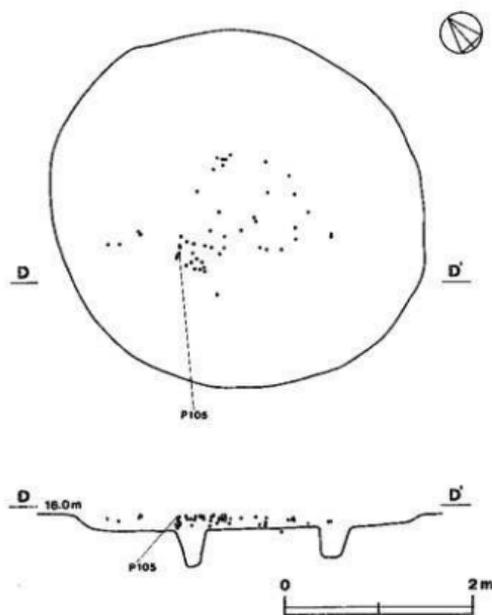


第106図 第62号住居跡実測図

#### 第64号住居跡 (第108頁)

本跡は、Ⅱ次調査区の南部F6h7区を中心に確認された住居跡である。第58号住居跡の南20mほどに位置し、東側0.2mには隣接して第6号溝が南北に走っている。

平面形は、長径4.08m、短径3.84mの円形状を呈し、長径方向はN-46.5°-Wを指している。残存壁高は10~15cmで、ロームへの掘り込みは浅い。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるがあまり明瞭でなく、北壁及び南壁の一部は木根による攪乱を受けている。床面は、ほぼ平坦であるが軟弱である。住居跡の北西側の床面上に、床面より浮いた状態で焼土を検出する。焼土は確認面におい



第107図 第62号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

です。すでにその分布が認められており、また堆積状況からも本跡の埋没後に投棄されたものと思われる。炉は検出されていない。ピットは8か所検出されているが、柱穴としてはP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>の4か所が考えられる。これらはほぼ一直線に配列されており特異な形態を示している。

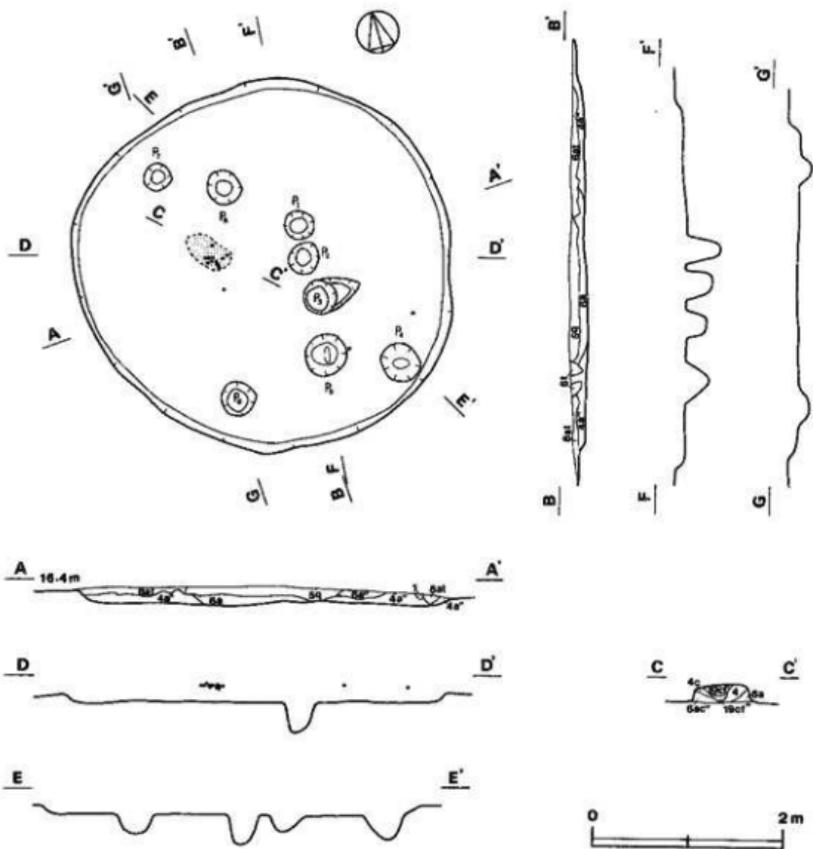
覆土は、自然堆積の状態を示しており、上層に黒褐色土、中層に暗褐色土、下層に褐色土がそれぞれ堆積している。

遺物は、少量であり住居跡の北西側及び南東側の覆土中から、阿玉台期の土器片が14点出土しているだけである。

#### 第65号住居跡 (第109・110・111・112図)

本跡は、Ⅱ次調査区の南部F6cs区に確認された住居跡である。第58号住居跡の西6mほどに位置し、周囲には第498～500号の3基の土壌が隣接している。確認面における平面形は、長径5m、短径4mほどの長楕円形を呈しており、当遺跡から検出された住居跡としては、第25号住居跡に次いで規模が大きく、確認面における形状から、当初は2軒の住居跡が重複していることを考慮して調査を進めた。しかし、調査の過程で重複関係は認められず、いわゆる「二段掘り込み」の特異な構造をもつ住居跡であることが判明した。

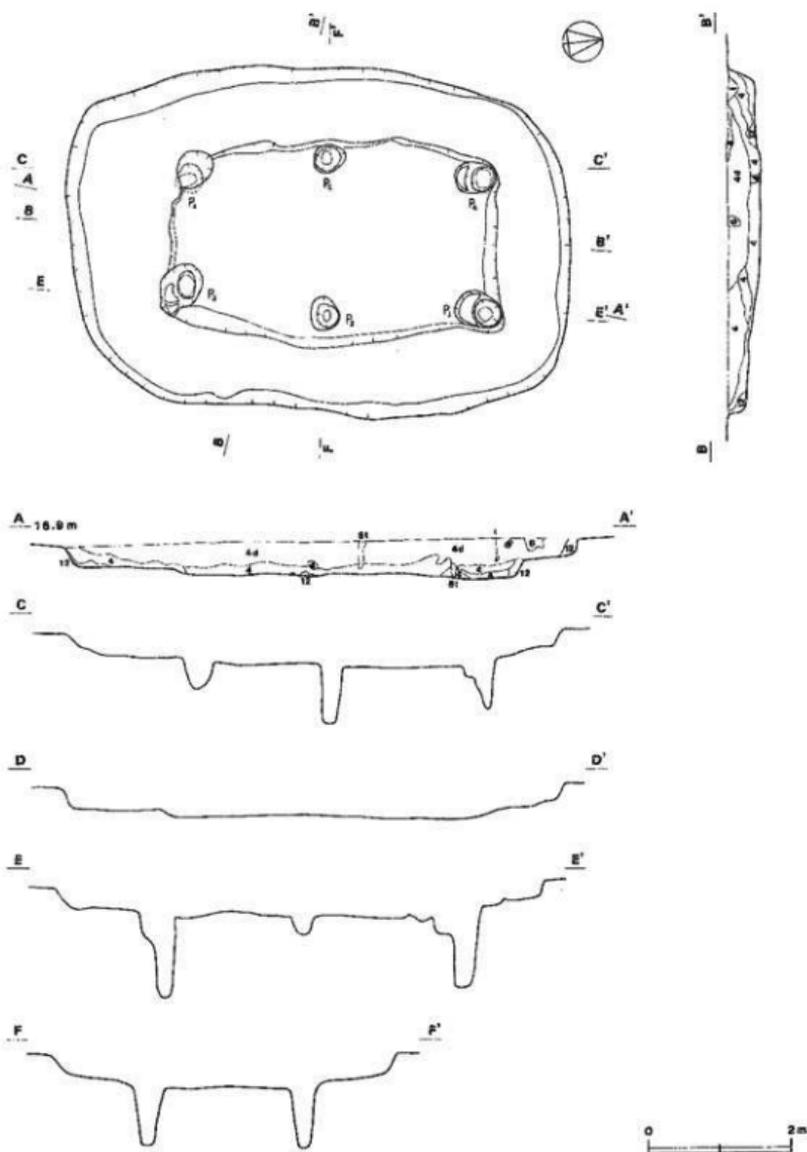
主軸方向はN-6°-Eを指しており、平面形は、上段の掘り込みが、長軸6.96m、短軸4.75mの隅丸長方形を呈し、壁高は21～24cmであり、垂直に立ち上がり硬く締まっている。床面はハードロームで堅緻である。下段の掘り込みは、長軸4.54m、短軸2.9mの長方形を呈し、上段との高低差は10～27cmである。床面はほぼ平坦で堅緻であり、床面積は13.2㎡である。柱穴は、下段の掘り込みの中から検出されたP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>の計6か所である。コーナー部に検出されたP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>の4か所は、ほぼ同規模、同深度を有しており長径57～75cm、短径43～



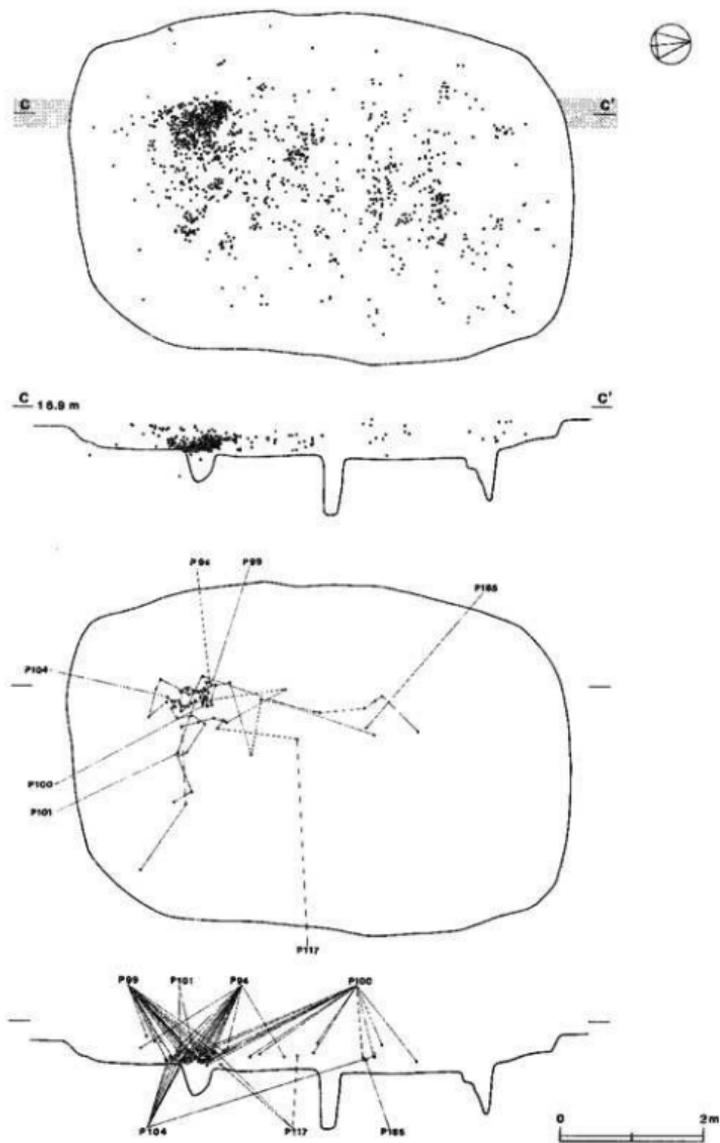
第108図 第64号住居跡実測図・遺物出土位置図

55cmの楕円形状を呈し、97～120cmほどの深さにしっかりと掘り込まれている。P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>はやや規模が小さく長径43～45cm、短径38cmの楕円形を呈し、深さは82～83cmである。壁溝及びがは検出されていない。

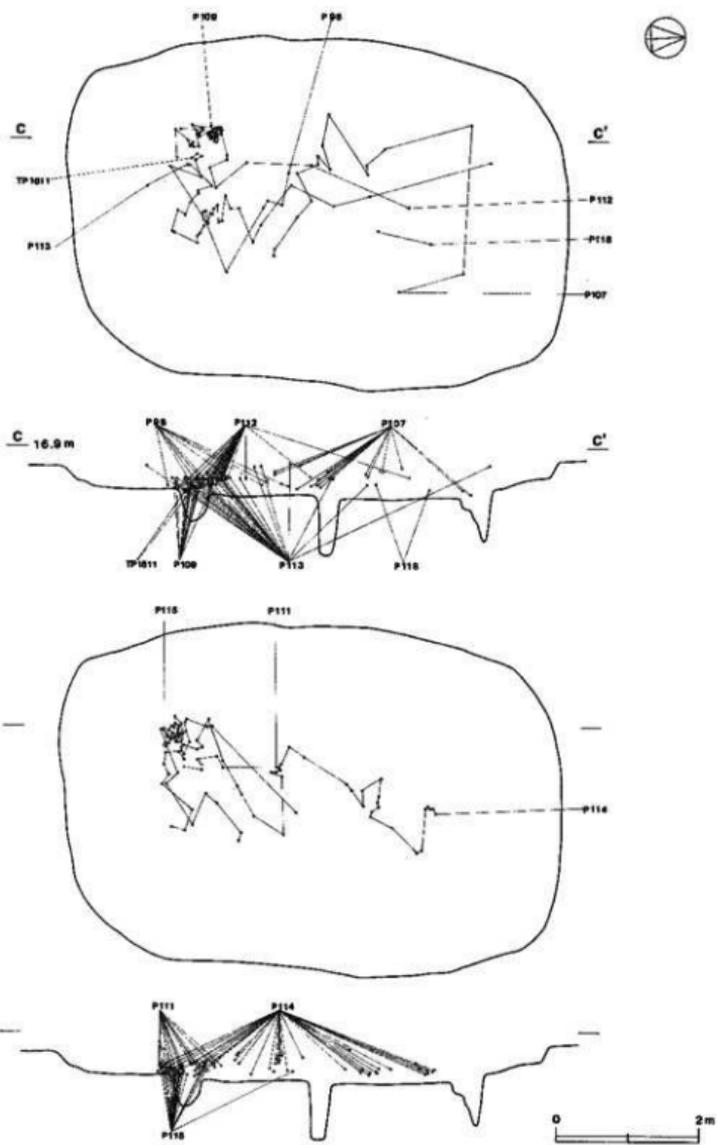
覆土は、上層にローム粒子・ローム小ブロックを少量含み、焼土粒子・炭化物を極少量含む褐色土が、下層にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を各々極少量含む褐色土が、壁際には縮まりのある褐色土が自然堆積している。覆土は、全体的によく締まっている。



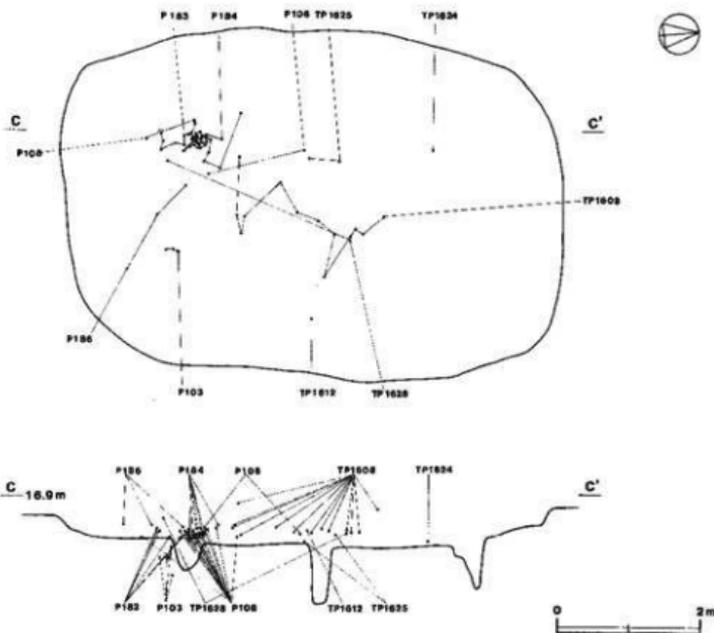
第109图 第65号住居跡実測图



第110圖 第65号住居跡遺物出土位置圖・土器接合關係圖(1)



第111图 第65号住居跡土器接合關係図(2)



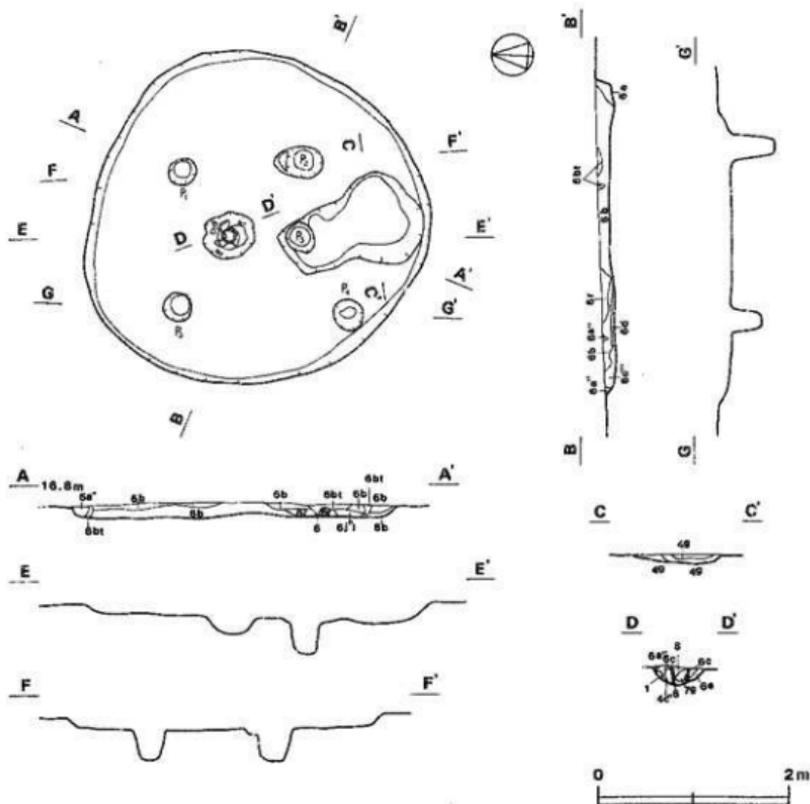
第112図 第65号住居跡土器接合関係図(3)

遺物は、当遺跡から検出された遺構の中で最も多く、縄文土器片1134点、石器4点、石25点が出土している。縄文土器片は阿玉台期のものであり、13個体分がほぼ完形に復元された。これらの多くは、下段の掘り込みの覆土の下層及び床面直上から出土している。また、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>の覆土中からも阿玉台期の土器片が出土している。

#### 第66号住居跡 (第113・114図)

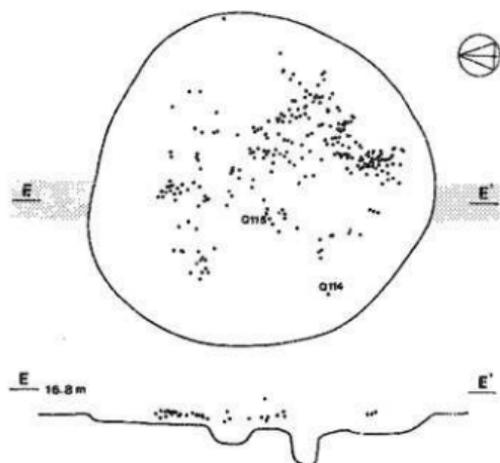
本跡は、Ⅱ次調査区の南西部F6a1区を中心に確認された住居跡である。第65号住居跡の北西10mほどに位置している。

平面形は、長径3.58m、短径3.47mのほぼ円形状を呈しており、長径方向はN-20°-Wを指している。残存壁高は6~21cmであり、南壁及び西壁は緩やかに立ち上がり、東壁及び北壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で硬い。南側には、住居跡の埋没後に掘り込まれたと思われる1.54×0.62mの不定形の落ち込みが検出されている。この落ち込みの覆土中には、投棄さ



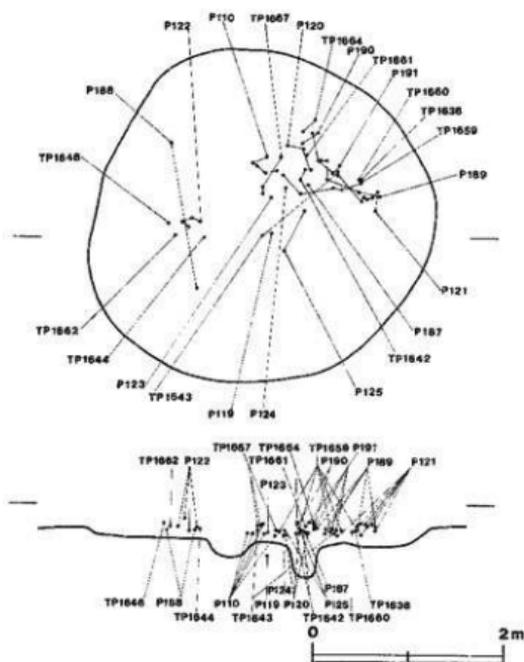
第113図 第66号住居跡実測図

れたと思われる少量の焼土が検出されている。遺物は出土していない。炉は、住居跡の北西側に偏した位置に検出されており、長径55cm、短径46cmの不整楕円形を呈し挿鉢状に床面を20cmほど掘り込まれている。その掘り方の中央部に、底部を欠いた深鉢形土器 (P 119) が埋設されている。埋設土器は掘り方とのすき間に詰め込まれたロームブロックで支えられている。埋設土器の覆土中には焼上粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土や黒褐色土が堆積しているが、炉床はさほど焼けておらず短期間の使用であったと思われる。ピットは5か所検出され、台形状に配列されているP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>が主柱穴と思われる。上柱穴は、長径30~52cm、短径28~33cm、深さ32~51cmの規模を有している。



覆土は、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は、住居跡の南東側に集中し、炉の周辺に散在しており、縄文土器片 257 点、石器 4 点、土製品 1 点、石 8 点が出土している。これらの多くは覆土中から出土しており、土器片の大半は阿玉台期に比定される。



第114図 第66号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

## 2 古墳時代

### 第8号住居跡 (第115・116図)

本跡は、Ⅱ次調査区の中央部からやや北側に偏したD6fs区を中心に確認された住居跡である。第30号住居跡の南西5mほどに位置し、南側7mほどには第4号溝が東西に延びている。

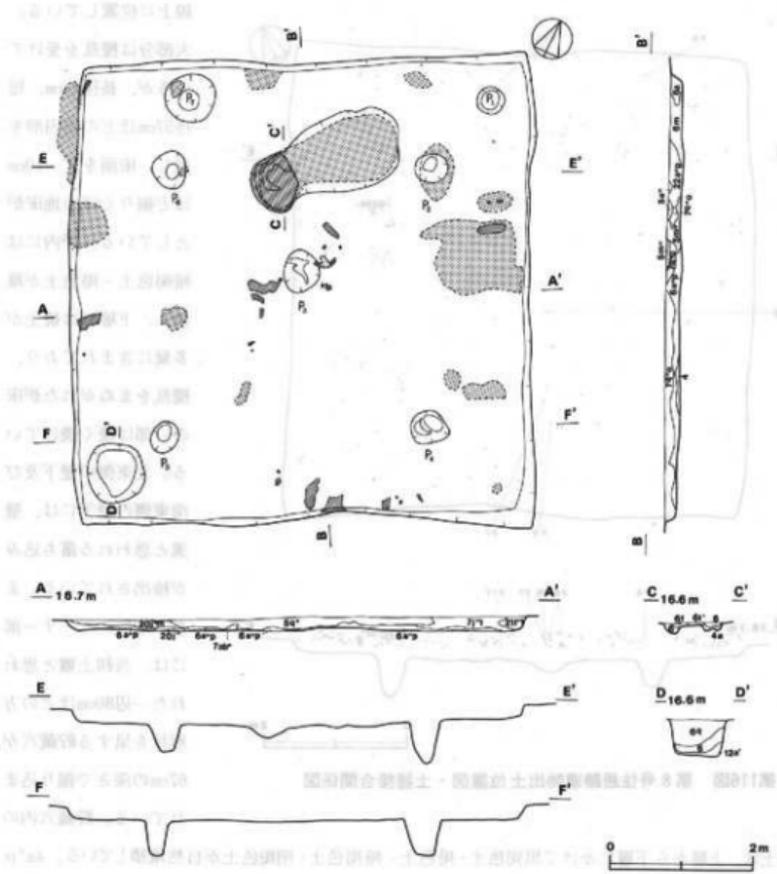
平面形は、長軸6.04m、短軸6.02mの方形を呈し、長軸方向はN-62°-Wを指している。壁は削取であるが、全体的にロームへの掘り込みは浅く、残存壁高は15~17cmである。東壁及び北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁及び南壁は緩やかに立ち上がっている。壁はやや軟弱であり、壁溝は検出されていない。床面は半畳で硬く締まっている。特に、炉の周辺は堅緻である。炉は、住居跡の北壁寄り位置し、長径80cm、短径58cmの楕円形を呈し、床面を17cmほど皿状に掘りくぼめ地床炉としている。炉床はさほど熱を受けておらず、短期間使用されたものと思われる。炉の周辺から北東側にかけて、長径2.2m、短径1.1mの不整楕円形を呈する深さ5cmほどの凸凹状の落ち込みが検出される。その覆土中には、多量の炭化粒子や焼土粒子が混入しており、底面はやや熱を受けている。炉から掻き出された焼土や灰が堆積したものと思われる。ピットは7か所検出されているが、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>が規模や配列から主柱穴と思われる。主柱穴は、長径45~56cm、短径38~47cm、深さ50~59cmの規模を有しており、方形に規則的に配列されている。柱穴の間隔は3.7mである。貯蔵穴は、南西コーナー部に検出されており、開口部は長径80cm、短径75cmの円形状を呈し、住居跡の床面を円筒状に50cmほど掘り込み構築されている。出入口は明確でないが、炉の位置や柱穴の配列などから南東方向と推定される。

覆土は、自然堆積の状態を示し、中層までは黒褐色土が主体であり、床面に近づくにつれ暗褐色土が主体となる。覆土中には、焼土粒子や炭化粒子、炭化物を多く含んでいる。特に、壁の周辺や床面上からも焼土や炭化物が多量に検出されていることから、火災に遭ったものと思われる。

遺物は、住居跡内に散在し、土器片138点、石器1点、石22点が出土している。土器片の多くは周囲から流れ込んだと思われる縄文土器片で、覆土中から出土している。本跡に伴う遺物としては、床面直上から土師器片少量と貯蔵穴内からヒスイの匂玉(Q59)が1点出土しているにすぎない。土師器片は古墳時代の和泉期に比定される。

### 第27号住居跡 (第117・118図)

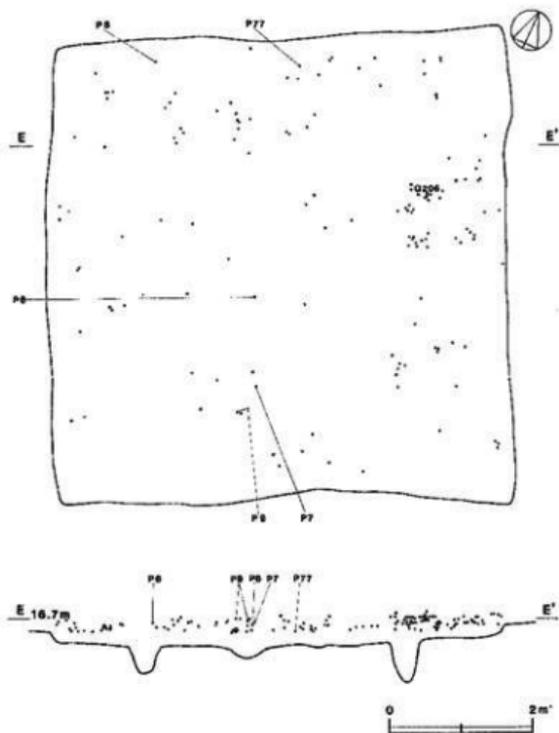
本跡は、Ⅱ次調査区の北東部C7fs区を中心に確認された住居跡である。第29号住居跡の北東12mほどに位置し、北西側2mほどには第139号土壇が隣接している。本跡が確認された地区は擾乱が激しく、耕作痕が帯状に深く入り込んでおり、壁及び床の大部分は破壊されている。当初は



第115図 第8号住居跡実測図

プランが不明であり、土壌として調査を進めた。しかし、周囲を調査する過程で、一部破壊をまぬがれた炉と思われる焼土塊や、柱穴と思われるピットが検出され、それらの配列状況から住居跡の存在を確認した。

平面形は、一辺が5.16mほどの方形を呈する住居跡であり、主軸方向はN-50°-Eである。壁は、帯状に走る耕作痕の間にわずかに2~3cm残存するだけであり、軟弱である。床面は、ほぼ平坦であったものと思われるが、その大部分はすでに確認面に露出し、攪乱を受けている。しかし、攪乱をまぬがれた部分の床面は縮まっている。炉は住居跡の北側、P1とP2の2柱穴を結ぶ

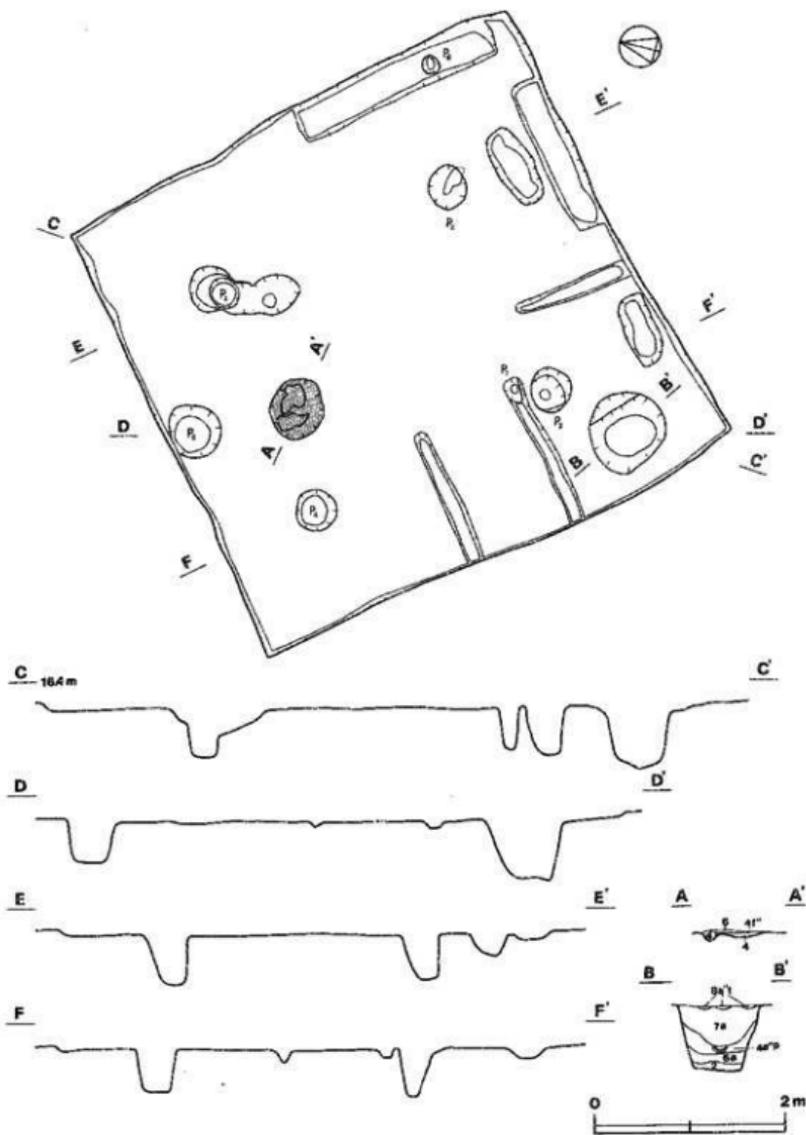


第116図 第8号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

線上に位置している。大部分は攪乱を受けているが、長径63cm、短径57cmほどの楕円形を呈し、床面を4~10cmほど掘りくぼめ地床がとしている。炉内には暗褐色土・褐色土が堆積し、下層には焼土が多量に含まれており、攪乱をまぬがれた炉床の一部は硬く焼けている。北東側の壁下及び南東側の壁下には、壁溝と思われる落ち込みが検出されている。また、南側のコーナー部には、当初土壇とされた一辺80cmほどの方形を呈する貯蔵穴が、67cmの深さで掘り込まれている。貯蔵穴内の覆土は、上層から下層にかけて黒褐色土・褐色土・暗褐色土・明褐色土が自然堆積している。4a<sup>+</sup>p層には、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物が混入している。この貯蔵穴を囲むように2条の細長い溝が検出され、また、貯蔵穴の北西側にはさらに平行するもう1条の溝が検出されている。これらは、間仕切りの機能をもつものとも考えられる。出入口としては、炉の位置や柱穴の配置等から、南西側に並行して走る溝の間かもしくは南東側が想定される。ピットは6か所検出されているが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が主柱穴と考えられる。主柱穴は、長径43~52cm、短径40~46cm、深さ47~54cmであり、ほぼ同規模、同深度を有し方形に配列されている。

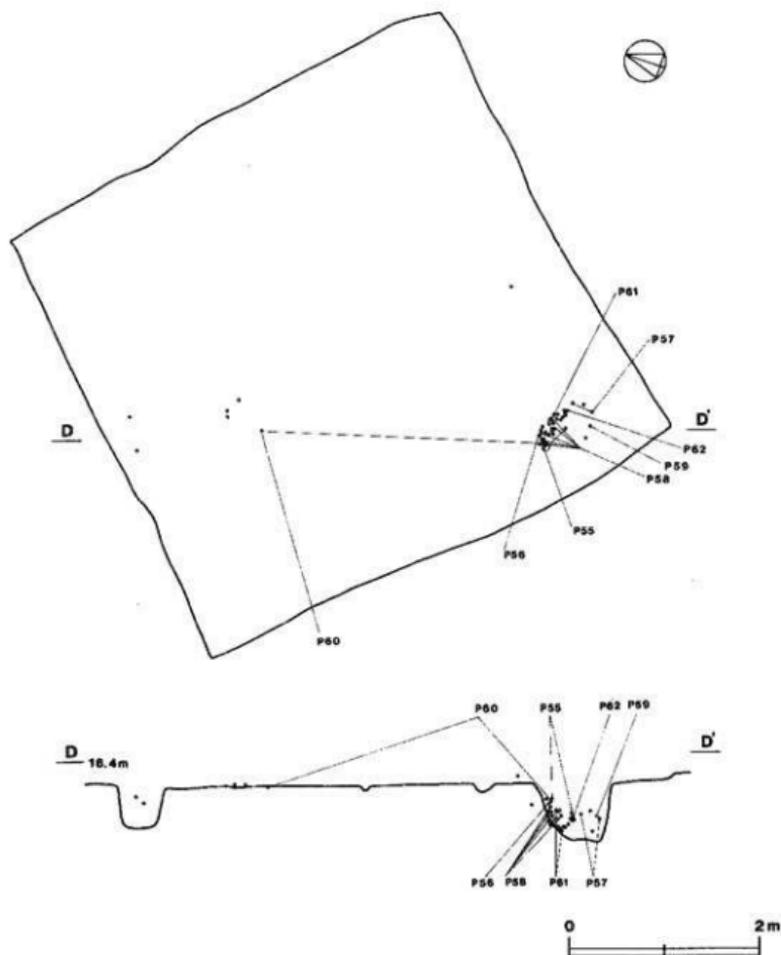
覆土は、黒褐色土がわずかに残存していただけである。

線上に位置している。大部分は攪乱を受けているが、長径63cm、短径57cmほどの楕円形を呈し、床面を4~10cmほど掘りくぼめ地床がとしている。炉内には暗褐色土・褐色土が堆積し、下層には焼土が多量に含まれており、攪乱をまぬがれた炉床の一部は硬く焼けている。北東側の壁下及び南東側の壁下には、壁溝と思われる落ち込みが検出されている。また、南側のコーナー部には、当初土壇とされた一辺80cmほどの方形を呈する貯蔵穴が、67cmの深さで掘り込まれている。貯蔵穴内の



第117图 第27号住居跡実測图

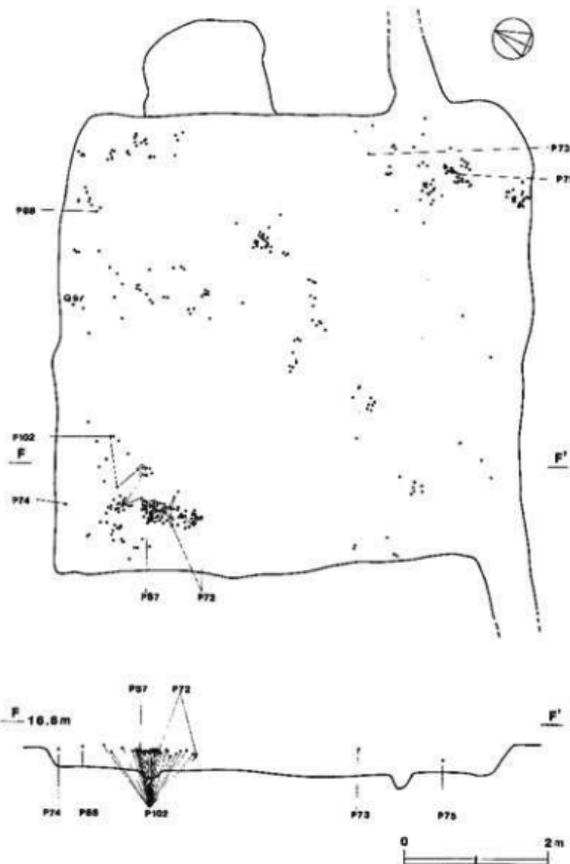
遺物は、覆土中から土師器片24点、縄文土器片18点、石16点が検出されている。また、貯蔵穴内からは、ほぼ完形の甕 (P 59) と土師器の口縁部破片 (P 56・57) が、P<sub>s</sub>の覆土中からは土師器片がそれぞれ出土している。遺物から、本跡は古墳時代の和泉期に比定されるものと思われる。



第118図 第27号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

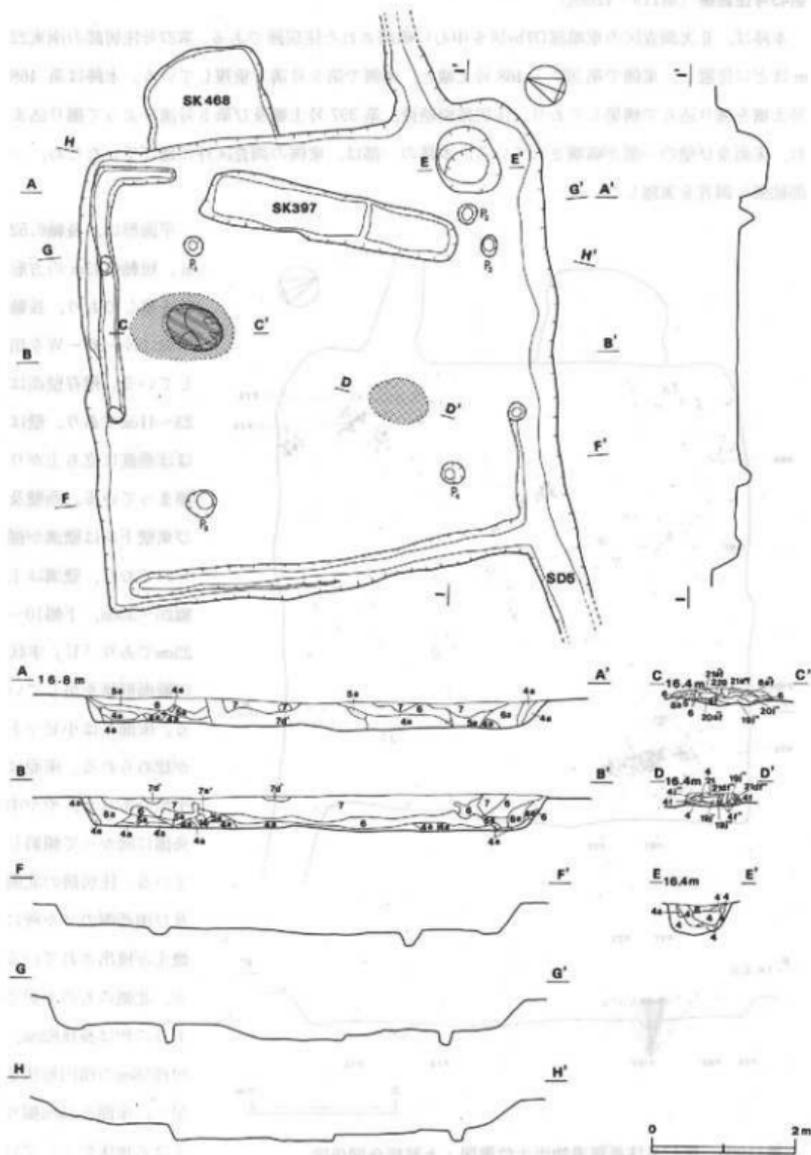
第43号住居跡 (第119・120図)

本跡は、Ⅱ次調査区の東端部D7b9区を中心に確認された住居跡である。第27号住居跡の南東22mほどに位置し、東側で第397・468号土壇と、南側で第5号溝と重複している。本跡は第468号土壇を掘り込んで構築しており、住居跡廃絶後、第397号土壇及び第5号溝によって掘り込まれ、床面及び壁の一部が破壊されている。本跡の一部は、東側の調査区外に延びていたため、一部拡張し調査を実施した。



第119図 第43号住居跡遺物出土位置図・土器接合関係図

平面形は、長軸6.52m、短軸6.43mの方形状を呈しており、長軸方向はN-26°-Wを指している。残存壁高は23~41cmであり、壁はほぼ垂直に立ち上がり縮まっている。西壁及び東壁下には壁溝が掘られており、壁溝は上幅20~30cm、下幅10~25cmであり「U」字状の断面形状を呈している。床面には小ビットが認められる。床面は平坦であるが、やや中央部に向かって傾斜している。住居跡の北側及び南西側の2か所に焼土が検出されているが、北側のものが炉である。炉は長径82cm、短径58cmの楕円形状を呈し、床面を13cm掘りくぼめた地床炉としている。炉床はさほど焼け



第120图 第43号住居跡実測图

ていない。南西側から検出された焼土は、床面より浮いており投棄されたものと思われる。南東コーナー部には貯蔵穴が掘られている。貯蔵穴は長径102cm、短径80cmの楕円形を呈し、床面を40cmほど掘り込んで構築されている。覆土は上層に暗褐色土、下層に褐色土が自然堆積し、中層及び床面からは土師器片が出土している。第397号土坑は、長軸3.55m、短軸0.7mの長方形を呈する土坑であり、その掘り込みは確認面から認められ、本跡の床面を6～28cm掘り込んでいる。また、第5号溝は、本跡の南壁下の覆土を掘り込み一部を破壊している。ピットは5か所検出されているが、規模や配置からP<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>の4か所が主柱穴と考えられる。主柱穴は長径26～41cm、短径23～37cm、深さ20～33cmの規模である。柱穴の間隔は3.5mであるが、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>間がやや広い。柱穴は不整形に配列されている。出入口としては、がの位置や柱穴の配列等から南東方向が想定される。

覆土は、上層に黒色土、中層に暗褐色土、下層に褐色土が自然堆積している。覆土中にはローム粒子を少量含んでいる。

遺物は、土器片348点、石器2点、土製品1点、石35点が検出されている。土器片の大半は土師器片であり、古墳時代の和泉期に比定されるものと思われる。これらは、住居跡の北西の壁際、炉の周辺及び貯蔵穴の上部の3か所に集中して検出され、その大半は覆土中層から出土している。また周辺から流れ込んだと思われる縄文土器片が覆土の中から出土している。

### 3 奈良・平安時代

#### 第29号住居跡 (第121・122図)

本跡は、Ⅱ次調査区の北東部C7g1区を中心に確認された住居跡である。第27号住居跡の南西12mほどに位置している。本跡は耕作による攪乱を受け、壁及び床の大部分はすでに破壊されている。確認調査の過程で、カマドの一部と思われる焼土塊と砂質粘土を検出したため、プランは不明であるが住居跡として調査を進めた。

壁はすでに破壊されており、壁溝も検出されなかったため、平面形や規模については不明である。検出された柱穴やカマドの位置等から推定するなら、長軸5m、短軸4mほどの長方形を呈し、N-39°-Wに上軸方向を持つ住居跡であったものと思われる。

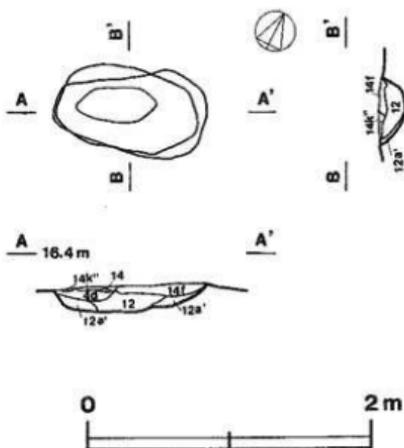
床面は、耕作痕が東西方向に帯状に深く入り込んでいるため、その間にわずかに床面と思われるやや縮まったロームが認められたにすぎない。

カマドは、推定プランの北東側、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を結ぶ線の外側に位置している。しかし、大半は攪乱を受けており、規模は不明である。

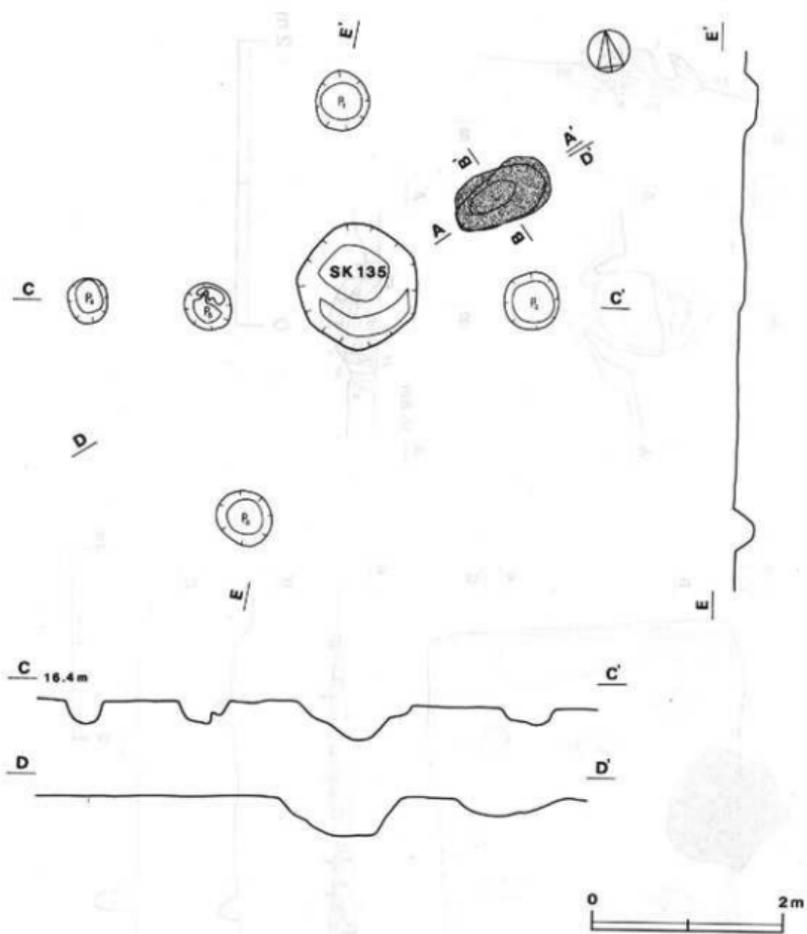
ピットは、推定床面上に5か所検出されている。規模や配列等から、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の4か所が主柱穴と思われる。主柱穴は、長径48~63cm、短径41~58cm、深さ13~25cmの規模を有している。また、柱穴の間隔

はP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>、P<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>間が2.9m、P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>間が3.4~3.7mであり、主柱穴は、長方形に規則的に配列されている。住居跡の中央部からやや北東に偏した位置に、第135号土壌が重複している。

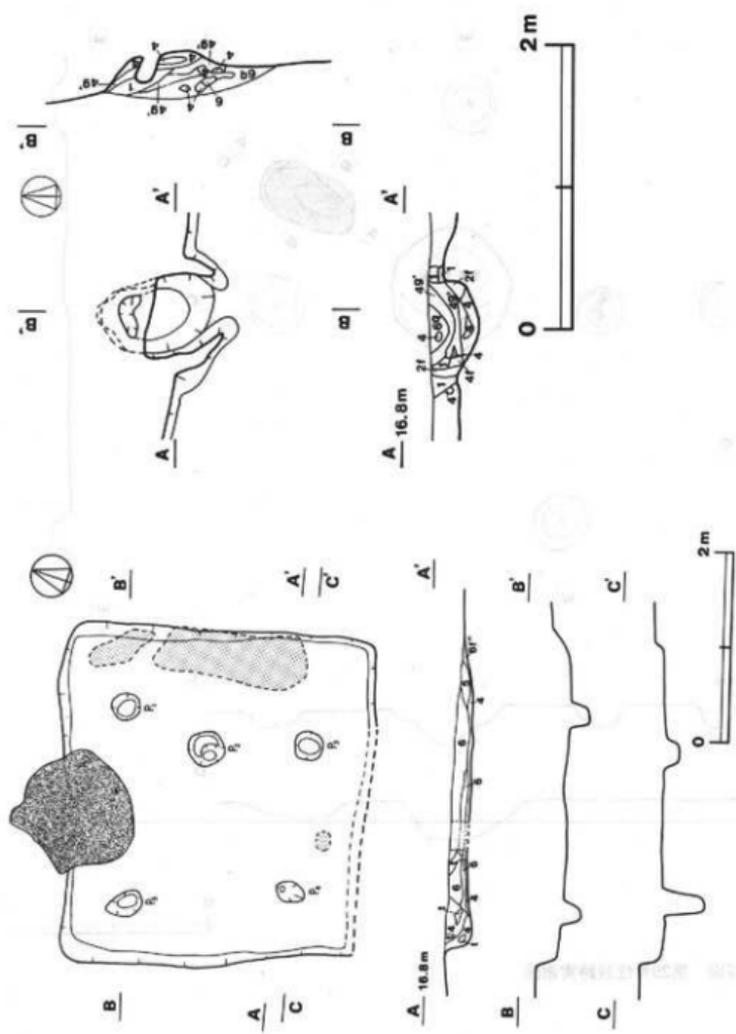
遺物は、カマド内から須恵器の小破片が、第135号土壌からは須恵器及び土師器の小破片がわずかに出土しているだけである。本跡と第135号土壌との構築時期には、さほど時間差は認められない。出土遺物が少なく時期を明確にすることは困難であるが、奈良・平安時代の住居跡と思われる。



第121図 第29号住居跡カマド実測図



第122图 第29号住居跡実測図



第123图 第63号住居跡実測图

### 第63号住居跡（第123図）

本跡は、Ⅱ次調査区の最も南端部に位置する住居跡であり、E7a区を中心に確認されたものである。第59号住居跡の南西18mほどに位置している。本跡の三分の一は、南側を東西に走る農道の下に広がっており、また後世の人為的な攪乱を受けていたため不明な部分が多い。

平面形は、長軸3.5m、短軸3.1mの隅丸形状を呈するものと思われ、上軸方向はN-47°-Wを指している。壁は西壁の一部が攪乱を受けており、また南壁は不明となっている。残存壁高は、北壁が19~20cm、西壁が22~24cm、東壁は8~15cmであり、全体的にはほぼ垂直に立ち上がるが軟弱である。床面は、ロームで多少凹凸状を呈しており軟弱である。カマドは、北壁中央部に構築されており、遺存度は比較的良好である。煙道部は、北壁を25cmほど掘り込んでつくられ、火床は床面を15~25cm掘り込んでつくられている。袖部は、砂質粘土混じりのロームで構築され、内側はレンガ状に赤く焼けて硬くなっている。ピットは5か所検出されている。P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>~P<sub>5</sub>は各々対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。規模は長径31~40cm、短径22~29cmであり、深さはP<sub>4</sub>が43cmと深い、他は18~23cmである。P<sub>2</sub>は形状や覆土の状態から木根痕と思われる。壁際及びカマド周辺には、多量の焼土が堆積し、少量の炭化物も混入しており、火災に遭ったものと思われる。

覆土は、木根による攪乱を受けているが、自然堆積の状態を示し黒褐色土、暗褐色土を主体とし、床面に近づくにつれて褐色土を呈する。覆土中には、ローム粒子・焼土粒子を極少量含んでいる。

遺物は極めて少なく、カマド内覆土中から土師器片8点、石1点が出土しているだけである。

### 第3節 土壌

当遺跡において番号を付して調査した土壌の数は、Ⅰ次調査区で44基、Ⅱ次調査区で460基の総計504基である。しかし、その後出土遺物を整理し遺構の状況等を詳細に検討した結果、第25・47・284・364・500・502号の6基の土壌を欠番とし除外した。その結果、当遺跡から検出された最終的な土壌の数は498基となった。

これらの土壌の多くは、当遺跡の所在する台地の北側の谷津に対して馬蹄形状に配列される一群と、東側に「U」字状に入り込む谷津に対してこれを囲むように配列される一群とに大別することができる。また、東側の土壌群の一部は、隣接する大谷津B遺跡に続いている。遺跡の中央部(E5, F3~5区)からは、後世の土取りや工事用道路によって分断されており明確でないが、土壌は十数基検出されているにすぎない。また、北西側(G2~4, H1~4, I1~4区)にはわずかに数基が散在するにすぎない。遺跡全体から見ると土壌は、遺跡の北側及び東側を中心に密集して検出されている。

当遺跡から検出された土壌の多くは、ローム層への掘り込みが浅く、全体的に小規模である。また、遺物の出土量も少なく、時期決定資料に乏しいものが多い。しかしながら、特徴的な土壌として、トラップ=ピット(Tピット)と呼ばれる陥し穴状の土壌が9基、炉穴と思われる土壌が4基検出されている。また、第300号土壌からは阿玉台期の人面把手の破片が、第213号土壌からは多量の阿玉台期の土器片が出土している。土壌については、数が多いため一覧表(表2)にまとめて記載することとし、詳しくは第5章第1節で述べることにする。また、土壌出土遺物については第4章第3節、第5章第2節で取り扱うことにする。

表2 土壌一覧表

土壌番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	式面	層土	ピット数	出土遺物	形態	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
1	E4d	N-77°-E	楕円形	1.35×0.98	18	Ⅲ	4	N		縄文土器片1点	ⅡB2a	
2	E4f	(N-29°-E)	不定形	1.10×0.92	9	Ⅲ	1	N	2		VB'2a	北西、西側にピット
3	E4c	(N-70°-W)	不定形	1.75×0.87	38	Ⅱ	3	90			VC1a	
4	E4e	N-90°	楕円形	0.83×0.65	42	Ⅱ	1	N	1		ⅡC'1a	東壁段状
5	F4e	N-41°-E	楕円形	1.65×1.20	27	Ⅲ	2	N		石1点	ⅡB2a	
6	E4c		不整形	1.15×1.05	35	Ⅱ	4	N			I B2a	
7	F4g		不整形	0.90×0.77	20	Ⅱ	1	N			I B1a	

上層 番号	位置	方向	平面形	規 模		壁面	前面	覆土	ピット 数	出し遺物	形態	備 考
				長さ×短径[m]	高さ[m]							
8	E4h4	N-15°-E	楕円形	0.62×0.51	35	I	4	N	1		ⅡB1a	西側にピット
9	E4i2	(N-79°-E)	不定形	0.98×0.63	20	I	4	(N)			VB1a	底面段状
10	E4i2		円形	0.65×0.62	10	Ⅲ	2	N		石1点	I B1a	
11	E4h2	N-45°-W	楕円形	2.24×1.53	20~ 200	V	2	N		縄文土器片2点	ⅡE3a	トクラービット
12	F3f9	(N-23°-E)	不定形	2.23×1.77	25	Ⅱ	1	N	5		VB3a	南、東側に小ピット
13	F3g2	N-73°-E	楕円形	2.28×1.73	20	Ⅲ	1	N	3	縄文土器片98点 石1点	ⅡF3a	東、南内にピット
14	E3f6	(N-65°-E)	不定形	1.20×0.85	28	Ⅲ	4	N			VC2a	
15	F3e4	(N-48°-W)	不定形	1.40×1.35	21	Ⅲ	2	N		縄文土器片18点	VB2a	
16	E3e2	N-22°-E	不整形楕円形	1.45×1.18	42	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片10点	ⅡC2a	北東に深いピット
17	F3h2	(N-45°-E)	不定形	1.24×1.07	8	Ⅱ	1	N		縄文土器片12点	V B2a	
18	E3g1		不整形円形	1.67×1.65	65	Ⅱ	1	N			I A2b	
19	E2e8					65	I	4	N			SD1、SK21と重複、形状不明
20	F2h8	N-50°-E	不整形方形	0.83×0.68	25	Ⅱ	2	N		縄文土器片7点 石1点	ⅢF1a	
21	E2e8					23	I	4	N	縄文土器片3点		SD1、SK19と重複、形状不明
22	E2h8	N-45°-W	不整形楕円形	2.43×1.75	33	Ⅱ	2	N		石8点	ⅡB3a	
23	H4c7	(N-76°-W)	不定形	2.27×1.12	63	Ⅱ	4	N			V B3b	
24	F2d6	(N-22°-E)	不定形	3.93×3.47	20	Ⅲ	1	N			V B3a	
26	F2e6		不整形円形	2.25×2.15	50	Ⅱ	1	N			I A3a	
27	F2d9					37	I	1	N			SD1と重複、形状、規模不明
28	F2e6		不整形円形	1.53×1.30	40	I	1	N			I A2a	
29	F2h6	(N-90°)	不定形	1.66×0.43	42	Ⅱ	3	N		縄文土器片1点	V B2a	
30	F2i5	(N-48°-W)	不定形	4.38×2.53	66	Ⅲ	4	(N)			VD3b	SK24を切っ ている、SK25 を伴う
31	F2i6	N-8°-W	楕円形	1.04×0.82	40	Ⅱ	3	(N)			ⅡB2a	SK24を切っ ている
32	F2i2	(N-29°-W)	不定形	1.00×0.66	60	Ⅳ	4	N			V A2b	SK24と重複
33	G2a4	(N-33°-W)	不定形	6.75×4.52	68	V	4	N		縄文土器片2点	V B3b	SK27と重複
34	F2j2	(N-12°-E)	不定形	(2.00×1.42)	13	Ⅱ	2	N		縄文土器片3点 石器1点	SK30-32、 35と重複	
35	F2i5	(N-40°-W)	不定形	1.70×1.52	24	I	1	N			V B2a	SK24と重複
36	F2j2	(N-18°-E)	不定形	2.21×2.12	67	Ⅱ	4	N			VD3b	一部段状を呈 する
37	G2a4	(N-30°-W)	不定形	1.33×0.82	80	I	4	N			VC2b	SK23と重複
38	F2e6	N-21°-E	不整形楕円形	2.15×1.44	37	I	1	N		縄文土器片7点 石3点	V A3a	
39	F2b7		不整形円形	1.25×1.22	18	I	4	(N)		縄文土器片4点 石1点	ⅡB2a	
40	F2e8	(N-21°-E)	不定形	1.52×1.20	46	Ⅱ	4	N	1		VA'2a	北側にピット
41	H2a7	(N-13°-E)	不定形	2.60×2.38	92	Ⅲ	4	(N)	1		VB'3b	西側にピット

土曜番号	位置	方向	平面形	規模		変面	変面	壁土	ピット数	出土遺物	形態	備考
				長さ×短径(m)	深さ(m)							
42	I1ba	(N-80°-W)	不定形	3.20×2.35	11	II	4	N			V A3a	
43	G3ha	N-49°-E	楕円形	1.76×1.48	45	II	1	N			II A2a	
44	H4er	N-90°	不整形楕円形	3.50×1.23	75	II	2	(N)			II B3b	
45	C5ge		円形	0.24×0.24	22	IV	2	K	縄文土器片10点 石13点		J A1a	
46	C5er	(N-33°-E)	不定形	1.94×1.44	25	V	3	K	縄文土器片74点 石2点		V C2a	
48	C5ea	(N-32.5°E)	不定形	2.00×1.14	72	II	4	A	縄文土器片26点		VA3b	北側にピット
49	C5fe	(N-67.5°E)	不定形	1.55×1.07	27	II	1	(N)			V B2a	
50	C5de		円形	0.45×0.43	100	I	1	(N)	縄文土器片3点 漆器1点(P-130)		I A1c	阿波子川の遺跡(縄文4期)
51	C5de	N-60°-W	不整形楕円形	0.50×0.38	125	I	1	(N)			II A1c	
52	C6ez	N-7°-W	楕円形	3.26×1.27	62	II	1	(N)	1	縄文土器片86点 石6点	II B'3b	北西にピット
53	C6fa	N-65°-E	楕円形	1.25×0.65	20	III	1	N	1		II B'2a	北西側にピット
54	C6da	N-45°-W	楕円形	3.15×1.29	32	II	1	N	縄文土器片21点		II B3a	
55	C6da	N-12°-E	楕円形	1.08×0.86	32	II	1	N			II A2a	
56	C6ea		不整形円形	0.72×0.68	42	II	1	(N)			I A1a	
57	C6ba		円形	0.63×0.57	34	II	1	(N)			I A1a	
58	C6fa	N-9°-W	楕円形	1.06×0.73	79	I	1	N	縄文土器片37点 石1点		II A2b	
59	C6gr	N-50°-E	楕円形	2.50×1.55	17.5	III	2	N	縄文土器片8点		II B3a	
60	C6fa	N-90°	楕円形	2.22×1.82	26	II	1	N	縄文土器片18点 石1点		II B3a	
61	C6fa	N-8°-E	楕円形	1.06×0.71	26	II	1	N	縄文土器片22点 石2点		II A2a	
62	C6ez	(N-46.5°E)	不定形	2.30×1.08	35	II	1	(N)	縄文土器片4点		V A3a	
63	C6fa	N-73°-W	楕円形	1.18×0.76	26	I	1	(N)	縄文土器片1点 石1点		II A2a	
64	C6ea		円形	0.76×0.65	28	II	1	N			I A1a	
65	C6ea	N-47.5°E	楕円形	1.00×0.91	21	II	1	N	縄文土器片4点		II B2a	
66	C6ez				18	II	1	N	縄文土器片3点			S121に切りか れている。形状、 層位不明
67	C6da	N-29°-E	楕円形	2.65×1.54	45	III	1	(N)	縄文土器片61点		II B3a	底面段状
68	C6cs	N-29°-E	楕円形	0.94×0.70	21	III	2	N			II B1a	
69	C6bs	N-33°-E	楕円形	2.38×1.49	30	II	1	N	縄文土器片17点		II A3a	
70	C6bs	N-43.5°E	楕円形	1.35×0.82	27	II	1	N	縄文土器片16点 石3点		II B2a	
71	C6ba	N-31°-W	楕円形	1.10×0.88	27	II	1	N			II A2a	
72	C6ea		円形	1.75×1.56	63	II	1	N	縄文土器片21点 石3点		I A2b	
73	C6ea	N-59°-W	楕円形	1.34×1.11	28	II	1	N	縄文土器片1点		II A2a	
74	C6ez	(N-15°-W)	不定形	2.98×1.80	43	II	4	(A)	縄文土器片107点 石5点		V B3a	S K 75と重複
75	C6ci	(N-62.5°E)	不定形	0.99×0.88	59	II	2	(A)	縄文土器片11点 石1点		V A1b	S K 74を切っ ている

土曜番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	ピット数	出土遺物	形跡	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
76	C6a4	N-27°-W	楕円形	0.83×0.56	73	Ⅱ	1	(N)	1	縄文土器片9点 石2点	ⅡB'1b	SK77の東側に張り出しがある。
77	C6a3	N-29°-W	不整楕円形	3.17×1.93	28	Ⅱ	1	(N)			ⅡB3a	SK76と重複
78	C6a4	N-40°-E	楕円形	0.82×0.70	31	I	1	N			ⅡC1a	
79	C6a5	(N-20°-W)	不定形	3.24×2.22	21	Ⅱ	1	K		縄文土器片96点 石17点	V B3a	南側に張り出し
80	C6b4	(N-55°-W)	不定形	2.69×1.62	25	Ⅱ	1	N		縄文土器片29点 石3点	V B3a	
81	B6js	N-45°-W	楕円形	1.60×1.37	23	Ⅱ	1	N		縄文土器片8点 石3点	ⅡB2a	
82	CSj1	N-90°	楕円形	1.06×0.81	16	Ⅲ	2	N	1		ⅡB'2a	東側にピット
83	B6js	(N-73°-W)	不定形	1.80×1.21	20	Ⅲ	1	N	1	縄文土器片1点	V B'2a	東側にピット
84	C5ee	N-51°-W	楕円形	2.64×0.54	77	I	1	N		縄文土器片16点	ⅡE3b	トラップを掘り込み
85	C5fe	N-55°-W	楕円形	1.39×1.08	48	Ⅲ	1	N		縄文土器片13点	I A2a	SK11を掘り込んでいる
86	C6d1	(N-12°-E)	不定形	2.09×1.22	58	Ⅳ	2	(N)			V D3b	SK19を掘り込みしている 直交関係
87	B6is	N-47°-W	楕円形	1.47×1.18	23	Ⅱ	1	N	1	縄文土器片4点 石3点	ⅡB'2a	西側にピット
88	B6hs	(N-27°-E)	不定形	1.29×0.98	28	Ⅱ	1	N	1	縄文土器片3点 石3点	V B'2a	東側に小ピット
89	B6hs	N-81°-E	楕円形	2.46×1.79	18	Ⅲ	1	N		縄文土器片6点 石3点	ⅡB3a	
90	B6is	N-62°-W	隅丸長方形	1.89×1.05	24	Ⅱ	1	N		縄文土器片25点 石2点	ⅡB2a	SK97を切っている
91	B6js				24	Ⅱ	1	N		縄文土器片4点		SK99と重複 形跡、規模不明
92	B6is		円形	0.78×0.68	22	Ⅱ	1	N			I A1a	
93	CSbe				28	Ⅱ	1	N	1	縄文土器片3点 石2点		SK94と重複 形跡、規模不明
94	B6hs	N-26.5°W	楕円形	2.44×2.02	40	Ⅱ	2	(N)			ⅡB3a	掘土を掘り込み SK17のものを 形成
95	B6is		円形	0.79×0.74	25	Ⅱ	1	N			I A1a	
96	B6is		円形	0.82×0.56	30	Ⅱ	2	N			I A1a	
97	B6hs				16	Ⅲ	2	N				SK90と重複 形跡、規模不明
98	B6hs	N-42°-E	楕円形	1.63×1.14	35	Ⅱ	1	N			ⅡA2a	
99	B6hs	N-24°-E	楕円形	1.73×1.16	32	Ⅱ	1	N			ⅡB2a	
100	B6is	N-43°-E	楕円形	1.65×1.35	29	Ⅱ	2	N			ⅡA2a	
101	B6is	N-37.5°W	楕円形	1.63×1.14	10	Ⅱ	1	N			ⅡB2a	
102	B6is	N-22°-W	楕円形	1.47×1.11	33	Ⅱ	1	N		縄文土器片8点	ⅡA2a	
103	B6is	N-80°-W	楕円形	2.04×1.40	28	Ⅱ	2	(N)	1	縄文土器片56点 石31点 石器1点	ⅡB'3a	東側に小ピット
104	B6js	N-85°-E	楕円形	2.44×1.83	34	Ⅱ	2	N			ⅡB3a	SK127と重複
105	C6aa		円形	1.61×1.45	44	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片62点 石6点	I A'2a	南西側に深い ピット
106	B6hs	N-90°	楕円形	1.33×0.91	35	Ⅱ	1	N		縄文土器片18点 石1点	ⅡA2a	
107	B6gs	N-18°-E	楕円形	1.72×1.20	14	Ⅱ	1	(N)	1	縄文土器片28点	ⅡB'2a	南東側に小ピット
108	B6is	N-7°-W	楕円形	1.26×0.98	25	Ⅱ	1	(N)			ⅡA2a	

土器番号	位置	方向	平面形	規 模		取面	取由	層土	ピット数	出土遺物	形態	備考
				長径×短径(m)	高さ(m)							
109	B7h	N-75°-W	不整形円形	1.82×1.39	21	Ⅱ	2	N		石1点	ⅡB2a	
110	B7i	N-20°-E	楕円形	1.27×0.95	16	Ⅱ	2	N		縄文土器片17点 石9点	ⅡB2a	
111	B6i	N-60°-E	楕円形	0.85×0.69	29	Ⅱ	2	N			ⅡB1a	
112	B7i		円形	0.81×0.71	25	Ⅱ	1	N			I A1a	
113	B7i		円形	0.94×0.79	37	Ⅱ	5	N		縄文土器片8点	I A1a	
114	B7i	N-30°-W	楕円形	1.74×1.38	22	Ⅱ	1	N		縄文土器片4点 石7点	ⅡB2a	
115	B7i2	N-11.5°-W	楕円形	1.72×1.34	39	Ⅱ	2	N		縄文土器片5点 石9点	ⅡA2a	
116	B7a		円形	1.20×1.11	37	Ⅱ	2	N		縄文土器片9点 石5点	I A2a	
117	C7a1		円形	2.01×1.94	23	Ⅱ	4	N	1	縄文土器片54点 石11点	I B'3a	北西側凹面 北西側に深い ピット
118	B6i	N-33°-W	楕円形	1.63×0.99	36	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片108点 石14点 石器1点	ⅡA'2a	南東側にピット
119	C7a2		円形	0.90×0.77	16	Ⅱ	4	N			I B1a	
120	C7a		円形	0.82×0.72	14	Ⅱ	2	N		縄文土器片1点 土製器1点	I B1a	
121	C7j	(N-76°-W)	不定形	2.08×0.97	102	Ⅱ	1	N	1	石1点	VB'3c	西側にピット
122	C7b	N-36°-E	楕円形	1.54×1.20	22	Ⅱ	2	N	1		ⅡB'2a	北西側に深い ピット
123	C7a	N-10°-W	楕円形	1.13×0.92	29	Ⅱ	1	N			ⅡB2a	
124	C7a5		不整形円形	1.24×1.22	62	Ⅱ	2	N			I A2b	
125	C6b		円形	1.86×1.59	26	Ⅱ	2	N		縄文土器片3点 石4点	I B2a	
126	B6h	N-72°-W	楕円形	2.28×1.60	20	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片8点 石3点	ⅡB'3a	北側に浅いピット
127	B6i					Ⅱ	2	N				5x104, 5x105 と重複。形状 記載不明
128	C5e	N-23°-W	楕円形	2.78×1.26	10~ 116	Ⅱ	2	N			ⅡE3c	トラップピット
129	C6g	N-78°-W	楕円形	1.82×1.24	15	Ⅱ	2	N	1		ⅡB'2a	
130	C6h		円形	0.78×0.70	72	I	1	N			I A1b	
131	C6f	N-43°-W	楕円形	1.63×1.38	30	Ⅲ	2	N			ⅡB2a	
132	C6f	N-45°-W	楕円形	2.58×1.23	20~ 122	I	1	A			ⅡE3c	トラップピット
133	C6d	N-30°-W	楕円形	2.27×1.83	29	Ⅱ	1	N	1		ⅡB'3a	南側に浅いピット
134	C5g		円形	2.56×2.41	26	Ⅱ	1	N	4	縄文土器片86点 石10点 石器1点	I B'3a	底面に小ピット
135	C7g		円形	1.30×1.28	39	Ⅲ	1	K		縄文土器片6点 土製器2点 石1点 石器1点	I A2a	
136	B6h	(N-63°-W)	不定形	1.11×0.68	30	Ⅲ	4	N	1	石1点	VB'2a	北西側に小ピット
137	B6h		円形	1.00×0.98	27	Ⅱ	4	N		縄文土器片8点 石4点	I B2a	
138	D6a	N-19°-E	不整形長方形	2.56×1.47	10	Ⅱ	1	N	1	縄文土器片127点 土製器2点	ⅡB'3a	南側に深いピット
139	C7c		円形	3.74×3.13	18	Ⅱ	2	N	6	縄文土器片6点 石4点	I B'3a	底面に小ピット
140	C7g		円形	1.46×1.45	31	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片19点 石15点	ⅡD'2b	袋状を呈する
141	C7i		円形	2.06×1.74	41	Ⅲ	2	N			I E3a	トラップピット

土曜番号	位置	方向	平面形	規模		築年	築高	築材	ビツ数	出土遺物	形態	備考
				長さ×短さ	2.2倍							
142	C7ha	N-50.5°W	楕円形	2.78×1.94	25	Ⅱ	2	N	縄文土器片2点 石6点	ⅡB3a		
143	C7ha	N-64°E	楕円形	1.43×1.11	26	Ⅱ	2	(N)	石1点	ⅡB2a		
144	C7fa	N-27°W	楕円形	2.12×1.06	28	Ⅱ	2	(N)		ⅡA3a		
145	C7fa	N-14.5°W	楕円形	1.43×1.04	31	Ⅱ	4	N		ⅡA2a		
146	C7hr	N-1.5°W	楕円形	2.32×1.43	31	Ⅱ	2	K	縄文土器片19点 石13点	ⅡB3a		
147	C7ir	N-88°E	楕円形	1.89×1.50	18	Ⅱ	1	N	縄文土器片2点 石5点	ⅡB2a		
148	C7ha	N-30.5°W	楕円形	1.50×1.07	11	Ⅱ	4	N		ⅡB2a		
149	C7ha	N-37°W	楕円形	1.37×0.91	12	Ⅱ	4	N		ⅡB2a		
150	C6ia	N-5°W	楕円形	1.34×1.09	18	Ⅱ	2	N		ⅡB2a		
151	C7ja	N-22°W	楕円形	1.45×1.10	24	Ⅱ	2	(N)		ⅡA2a		
152	C6ja	N-29°W	楕円形	1.58×1.14	20	Ⅱ	2	N		ⅡB2a		
153	C7ia	N-11°W	不整形楕円形	0.95×0.75	28	Ⅱ	4	N		ⅡB1a	底面に小ビツト	
154	D7ba	N-74°E	楕円形	1.18×0.88	30	Ⅱ	2	N		ⅡA2a	南側に深いビツト	
155	D7ba		円形	2.23×2.18	51	Ⅱ	2	N		ⅡA3b	北側に深いビツト	
156	C7a1	N-61.5°E	楕円形	2.07×1.26	16	Ⅱ	4	N		ⅡB3a		
157	D6ba	(N-58°W)	不定形	1.83×1.70	18	Ⅱ	2	N		V B2a		
158	B6ia	N-40°W	不整形楕円形	3.02×1.93	34	Ⅱ	2	N	縄文土器片1点	(ⅡB3a)	SK127と重複	
159	B6ja		円形	1.13×1.03	34	Ⅱ	2	N		I A2a	SH8を掘り込む	
153	B6ja				47	Ⅱ	1	N			SH8H17に切込 られている形跡 不明	
161	B6ia				34	Ⅱ	1	N	縄文土器片20点 石3点 石器3点		SK100, SK106 と206と重複 が既記(既記不明)	
162	B6ja	N-16.5°E	楕円形	2.09×1.03	31	Ⅱ	4	(A)		ⅡB3a		
163	B6ia	N-90°	楕円形	1.60×1.14	22	Ⅱ	2	N	縄文土器片4点	ⅡB2a		
164	B6ia		円形	1.29×1.08	23	Ⅱ	2	N	縄文土器片5点 石2点	I B2a		
165	B6ia	N-53.5°E	楕円形	1.67×1.21	44	Ⅱ	2	N	石2点	ⅡB2a		
166	C6aa	(N-11.5°W)	不定形	1.00×0.86	30	Ⅱ	2	N		V A2a	SH8を切っ ている	
167	B6ia	N-59°W	楕円形	1.78×1.44	21	Ⅱ	1	N	縄文土器片6点 石7点	ⅡB2a		
168	B6ia	N-31°E	楕円形	1.52×1.20	12	Ⅱ	2	N		ⅡB2a	SK170と重複	
169	B6ia		円形	1.24×1.16	13	Ⅱ	1	N		I B2a	南側に小ビツト	
170	B6ia	N-38°W	楕円形	1.14×0.92	26	Ⅱ	4	N		ⅡA2a	SK168と重複	
171	B6ia	N-30.5°W	楕円形	1.06×0.73	15	Ⅱ	2	N		ⅡB2a		
172	B6ja		円形	0.72×0.61	32	Ⅱ	1	N		I A1a		
173	B6ja	N-71°W	楕円形	0.97×0.72	19	Ⅱ	2	N		ⅡB1a		
174	C6dr	N-81°W	不整形楕円形	0.92×0.81	27	Ⅱ	2	N		I B1a		

上層番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	瓦葺	ピット数	出土遺物	形態	備考
				長×幅(m)	深さ(m)						
175	C6es	N-61.5°W	楕円形	1.05×0.85	17	Ⅱ	2	(N)		Ⅱ B2a	
176	C7es	N-11°W	楕円形	2.44×1.36	32	Ⅱ	2	N		Ⅱ B3a	
177	B6is				32	Ⅱ	2	N 1			SK179は切られている。既述に小ピット
178	B6ir	N-73.5°W	楕円形	1.60×1.17	46	Ⅱ	1	N		Ⅱ A2a	
179	B6is	N-58°W	楕円形	1.25×0.89	98	Ⅱ	1	N		Ⅱ A2b	SK177を切っている
180	B6js	N-42.5°E	不整形	0.76×0.69	(32)	Ⅱ	2	N 2	縄文土器片5点 石4点	IC'1(a)	
181	C6es				27	Ⅱ	2	(N)	縄文土器片5点 石4点		SK186は切られている。形状、風化不明
182	C6je	N-18.5°W	楕円形	1.98×1.63	63	Ⅱ	4	N	縄文土器片23点 石4点 土製土4点	Ⅱ C2b	
183	D6as		円形	0.87×0.82	27	Ⅱ	2	N		I B1a	
184	C6is	(N-44.5°W)	不定形	2.55×1.50	19	Ⅱ	2	N 1		VB'3a	北側に小ピット
185	C6is	N-44°E	楕円形	1.77×1.33	27	Ⅱ	1	N 1		Ⅱ A2a	
186	C6is		円形	1.34×1.29	19	Ⅱ	4	N		I B2a	
187	D6is	N-67°W	楕円形	1.19×0.90	24	Ⅱ	4	N		Ⅱ A2a	
188	D6is	N-10°W	不整形	1.09×1.00	31	Ⅱ	2	N		I A2a	
189	D5be		円形	2.00×1.73	27	Ⅱ	1	N		I A3a	
190	D5be	N-9.5°W	楕円形	1.22×0.78	27	Ⅱ	2	N		Ⅱ B2a	
191	D5be	N-33°E	楕円形	1.81×1.24	23	Ⅱ	2	N	縄文土器片2点	Ⅱ B2a	
192	D3ao	N-6°E	不整形楕円形	1.23×0.94	47	Ⅱ	4	N		Ⅱ A2a	
193	D6as	N-47.5°W	楕円形	1.83×1.35	19	Ⅱ	2	N	縄文土器片2点	Ⅱ B2a	
194	D5as	N 29.5°W	楕円形	1.27×1.05	30	Ⅱ	2	N	縄文土器片1点	Ⅱ B2a	
195	D5be	(N-72°E)	不定形	1.99×1.04	13	Ⅱ	1	N 2	縄文土器片5点 石1点	VB'2a	西側に深いピット
196	D5es		円形	1.17×1.14	21	Ⅱ	2	N 1	縄文土器片4点 石1点	IB'2a	南西側に深いピット
197	D5as	N-79°W	楕円形	2.98×2.05	13	Ⅱ	4	(N)	縄文土器片25点 石4点	Ⅱ B3a	
198	D5as	N-48°W	楕円形	2.87×2.00	15	Ⅱ	4	N	縄文土器片23点 石7点	Ⅱ B3a	
199	D5as	N-18°W	楕円形	2.42×1.75	18	Ⅱ	2	N	縄文土器片19点 石1点	Ⅱ B3a	
200	D5be		円形	1.45×1.33	37	Ⅱ	2	N 1	縄文土器片14点 石1点	IB'2a	北面凸出 南東側に傾斜
201	C6ie	N-90°	楕円形	3.35×2.55	15	Ⅱ	4	N	縄文土器片11点 土師器片1点	Ⅱ B3a	
202	C6is	N-60°E	楕円形	1.37×1.10	31	Ⅱ	4	N		Ⅱ B2a	
203	C6is	N 46.5°W	楕円形	0.93×0.75	63	Ⅱ	2	N		Ⅱ C1b	
204	C6is	N-59°W	楕円形	1.17×0.90	42	I	1	N 2		Ⅱ A'2a	北西、南東側に深いピット
205	C6js	N-85°E	楕円形	1.45×1.04	20	Ⅱ	2	N		Ⅱ B2a	
206	B6js	N-72°W	楕円形	(1.35)×0.99	52	Ⅱ	2	(N)		Ⅱ A2b	
207	C6is	N-38°W	楕円形	2.60×1.15	29	Ⅱ	1	N		Ⅱ A3a	

調査 番号	位置	方向	平面形	規 模			地面 高	底高	壁1	ピット 数	出土遺物	形態	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)								
208	C6ja		円 形	0.80×0.75	35	II	2	N			I B1a		
209	C6ja	(N-24°-E)	不定形	0.91×0.71	29	II	4	N		縄文土器片10点	V B1a		
210	D6ba	N-10.5°W	楕円形	1.67×1.07	34	II	2	N	1	縄文土器片30点 石4点 石製1点	II B'2a	南側にピット	
211	D6ba	N-59°-E	楕円形	1.55×1.26	25	II	4	N		縄文土器片6点 石2点	II B2a		
212	D6aa		円 形	0.80×0.74	55	II	2	N	1		I A1b	北側にピット	
213	D6ca	N-25.5°W	不整形円形	3.35×2.52	47	II	2	N		縄文土器片106点 石10点 石製2点	II A3a		
214	D6bs	N-8.5°W	長方形	3.95×0.65	35	II	4	N		石器2点	IV B3a		
215	D6ca		円 形	0.79×0.76	35	II	2	N			I C1a		
216	D6ca	N-90°	楕円形	1.11×0.85	20	III	2	N			II B2c		
217	D6ca		円 形	2.74×2.40	28	II	5	N	3	縄文土器片38点	IB'3a	底面に浅いピット	
218	D6d1		円 形	2.33×1.95	20	II	1	N	1		IB'3a	南西側が円筒状に落ち込む	
219	D5d0	N-17.5°W	楕円形	2.20×1.32	60	III	5	N			II C3b		
220	D6f1	N-22°-E	楕円形	1.45×1.08	14	III	2	N			II B2a		
221	D5ea		円 形	0.87×0.80	23	II	2	N			I B1a		
222	D5e0	N-4°-E	楕円形	1.35×1.15	98	II	2	N	2		II B'2b	南側に深いピット	
223	D5e0	N-65°-E	楕円形	(1.95×1.57)	30	II	2	N			II A2a	SK224と重複	
224	D5e0	N-23.5°W	楕円形	(1.40×0.90)	52	III	4	N		縄文土器片13点 石1点	II B2b	SK223と重複	
225	D5ca	N-16°-W	楕円形	1.72×1.25	30	I	4	N		縄文土器片12点	II B2a		
226	D6ba	N-23°-W	楕円形	1.44×1.04	22	II	1	N		縄文土器片7点	II B2a		
227	D5ca		円 形	1.50×1.40	27	II	2	N			I B2a		
228	D5e7		円 形	1.72×1.60	31	III	2	N		縄文土器片19点 石2点	I C2a		
229	D5da	N-70°-W	楕円形	3.32×1.65	21	II	4	N		縄文土器片18点 石1点	II B3a		
230	D5ca	N-0°	楕円形	2.20×1.17	23	II	1	N			II B3a		
231	D5e7	N 75.5°W	楕円形	3.70×2.34	69	I	1	N			II A3b		
232	D6da	N-65°-E	楕円形	1.80×1.49	25	II	1	N		縄文土器片21点	II B2a		
233	D5da		円 形	1.28×1.16	29	II	1	N			I B2a		
234	D5da		円 形	1.45×1.27	39	II	2	N	1	縄文土器片14点	II B'2a	南側にピット	
235	D5d1		不整形円形	1.00×0.85	25	IV	4	N	1		I C'2a	南西側に深いピット	
236	D5e2		円 形	1.47×1.29	20	II	1	N	1	縄文土器片1点	IB'2a	南側に深いピット	
237	D5e3		円 形	0.89×0.82	22	II	2	N		縄文土器片1点	I B1a		
238	D5e3	N-29°-E	楕円形	1.55×1.24	17	II	2	N			II B2a		
239	D6e2	N-50°-E	楕円形	1.64×1.12	23	II	2	N			II B2a		
240	D5e2		円 形	0.85×0.70	18	V	1	N			II A'1a		

調査番号	位置	方向	平面形	規模		壁幅	窓高	窓数	土遺物	形態	備考	
				長さ×幅(m)	高さ(m)							
241	D5e2	N-50°E	楕円形	0.93×0.70	38	Ⅱ	2	N		ⅡA1a		
242	D5e2	N-40.5°E	楕円形	1.42×1.04	30	Ⅱ	2	N	1	ⅡB'2a	北東側に小ピット	
243	D5d2		円形	1.07×1.00	31	Ⅱ	2	N		ⅡB2a		
244	D5b2	N-65°E	楕円形	1.97×1.20	27	Ⅱ	3	N		ⅡB2a		
245	D5b2	N 12.5°W	楕円形	1.77×1.31	33	Ⅱ	1	N		ⅡB2a		
246	D5e2	N-40°W	楕円形	1.50×1.10	74	Ⅱ	2	N	縄文土器片12点	ⅡC2b	南部、段状に立ち上がる	
247	D5d2	N-67.5°W	楕円形	1.07×0.62	30	Ⅱ	2	N		ⅡA'2a		
248	D5e2	N-14.5°W	不整形円形	2.40×1.03	30	Ⅱ	1	N	1	ⅡB'3a	北側に小ピット	
249	D5e2	N-0°	隅丸方形	1.50×1.45	23	Ⅱ	1	N		ⅡB2a		
250	D5d2		円形	0.82×0.69	36	Ⅰ	2	N		ⅠA1a		
251	D5e2	N-0°	隅丸方形	2.07×2.04	29	Ⅱ	4	N	縄文土器片156点 石7点	ⅡB3a		
252	D5e2		円形	0.98×0.83	30	Ⅰ	2	N	1	ⅠB'1a	西側に小ピット	
253	D5d2		円形	1.72×1.50	22	Ⅱ	1	N	縄文土器片19点	ⅡB2a		
254	D5d2	N-39.5°W	楕円形	2.19×1.54	22	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片6点	ⅡB3a	南西側に小ピット
255	C6j2		円形	2.31×1.93	43	Ⅱ	2	N	縄文土器片21点	ⅠA3a		
256	D4c2	N-6°W	不整形円形	2.84×1.82	97	Ⅱ	2	N	縄文土器片7点	ⅡA3b		
257	D4c2	N-90°	不整形円形	1.80×1.33	91	Ⅱ	5	N		ⅡA2b	北側の一部段状	
258	D5j2	N-4°W	不整形円形	1.35×0.85	23	Ⅱ	4	N	石1点	ⅡB2a		
259	D5b2	N-65°W	楕円形	2.20×1.72	22-130	Ⅱ	1	N	1	ⅡB'3a-c	北側が落ち込み深いピット	
260	D5j2	N-85°W	楕円形	2.73×1.89	10	Ⅱ	2	N		ⅡB3a		
261	D5j2	N-48.5°E	楕円形	1.55×1.30	15	Ⅱ	4	N		ⅡB2a		
262	D5i2		円形	1.45×1.22	10	Ⅱ	1	N		ⅠB2a		
263	D5b2	N-90°	楕円形	1.40×1.09	71	Ⅲ	4	N		ⅡE2b	トラック・ピット	
264	D5j2		円形	1.56×1.43	11	Ⅲ	2	N	1	縄文土器片4点	ⅡB'2a	底面中央部に浅いピット
265	D5j2	N-63°W	楕円形	1.84×1.52	34	Ⅱ	1	N	1	縄文土器片10点	ⅡB'2a	南東側に深いピット
266	D5j2	(N-64°E)	不定形	1.69×1.34	26	Ⅱ	2	N	1	ⅡB'2a	26N207と重複 北東側に深いピット 底面凸凹が激しい	
267	D5j2		円形	1.43×1.40	19	Ⅱ	5	N	多	ⅡB'2a		
268	D5b2		円形	1.70×1.46	17	Ⅰ	5	N	1	縄文土器片22点	ⅡA'2a	
269	E5a2		円形	1.90×1.68	14	Ⅱ	4	N		ⅠB2a		
270	D5h2		円形	1.52×1.29	32	Ⅱ	5	N		ⅠB2a		
271	D5j2		円形	1.48×1.35	20	Ⅱ	4	N	縄文土器片8点	ⅡB2a		
272	D5d2	N-78°E	楕円形	1.03×0.66	26	Ⅱ	3	N		ⅡB2a		
273	D5j2		円形	0.84×0.81	63	Ⅱ	2	N		ⅠA3b		

[調査号]	位置	方向	平面形	規模		柱間	底高	覆土	ピット数	出土遺物	形態	備考
				長×短(m)	深(m)							
274	D6h1	N-16.5°W	不整形円形	2.22×1.10	29	Ⅱ	4	N	1		ⅡB'3a	南東側内周状に落ち込む
275	D6f1		円形	0.65×0.63	30	Ⅱ	2	N			ⅠA1a	
276	D6h1	N-17°-W	楕円形	1.38×1.12	32	V	2	N			ⅡB2b	中央部落ち込む
277	D6g2		不整形円形	1.23×1.10	35	I	2	N	1	縄文土器片6点	ⅠB'2a	南西側内周状に落ち込む
278	D6f1	N-46.5°E	楕円形	1.57×1.24	64	Ⅱ	1	N			ⅡA2b	
279	D6e2	N-65°-E	不整形円形	1.80×1.36	60	Ⅱ	2	N	1		ⅢA'2b	中央部に深いピット
280	D6h2	N-64.5°W	楕円形	1.45×1.00	22	Ⅱ	4	N		縄文土器片16点	ⅡB2a	
281	D6h1		円形	0.80×0.76	46	Ⅱ	1	N		縄文土器片1点	ⅠA1a	
282	D6h1		円形	0.85×0.75	38	Ⅱ	2	N	1		ⅠA'1b	
283	D6e2		円形	1.10×1.00	39	Ⅱ	1	N		縄文土器片5点	ⅠA2a	北西側に傾斜
285	D6f1	N-30°-E	楕円形	2.60×1.15	67	Ⅱ	1	N			ⅡB3b	
286	D5f1	N-27°-E	不整形円形	2.86×1.94	73	Ⅱ	4	A		縄文土器片3点	ⅡA3b	
287	D6b7	N-79.5°E	楕円形	2.53×1.02	98	Ⅱ	2	N			ⅡE3b	トラップーピット西側周状
288	D6f1	N-37°-E	楕円形	1.17×0.70	46	Ⅱ	2	N			ⅡC2a	北西側北東側に傾斜
289	D6f1	N-52°-E	楕円形	1.50×0.95	31	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片1点 石1点	ⅡB'2a	SK290を切る西側にピット
290	D6f1	N-42.5°W	楕円形	(1.84×1.73)	21	Ⅱ	2	N		縄文土器片10点	ⅡB2a)	SK286と重複
291	D6f1	N-85°-W	楕円形	1.00×0.75	90	Ⅱ	2	N	1		ⅡA'2b	東側に円筒状のピット
292	D6f1	N-52°-E	不整形円形	1.95×1.10	29	Ⅱ	2	N		縄文土器片1点 石1点	ⅡA2a	
293	D6e2	N-52.5°W	楕円形	1.50×1.01	112	Ⅳ	4	N			ⅡE2c	トラップーピット
294	D6f7	N-6°-E	楕円形	2.02×1.36	24	Ⅱ	1	N		縄文土器片31点	ⅡA'3a	SK288に切られている
295	D6f1	N-0°	楕円形	2.55×1.69	32	Ⅱ	2	N	3	縄文土器片33点 石1点	ⅡB'3a	中央部上部に溝状、北側にピット
296	D6e2	N-27.5°E	楕円形	1.53×1.35	36	Ⅱ	3	N	1		ⅡA'2a	ほぼ中央部にピット
297	D6f7	N-85.5°E	楕円形	2.10×1.25	19	Ⅱ	1	N		縄文土器片12点	ⅡB3a	
298	D6f7	N-58°-E	楕円形	1.72×1.35	27	Ⅱ	1	N	1	縄文土器片10点 石1点	ⅡB'2a	SK294と重複
299	D6e2	N-81.5°W	楕円形	2.82×1.80	42	Ⅲ	2	N		縄文土器片4点	ⅡB3a	
300	D6d1	N-17°-E	隅丸方形	1.54×1.49	29	Ⅱ	2	N		縄文土器片17点 石3点	ⅡA2a	入蓋把手(阿古台)
301	D6e2	N-50.5°W	楕円形	1.87×1.44	32	Ⅱ	2	N	1		ⅡB'2a	
302	D6f1	N-67.5°E	楕円形	1.50×1.25	22	Ⅱ	1	N			ⅡA2a	
303	D6f1	N-49.5°W	楕円形	1.10×0.85	38	Ⅱ	2	N			ⅡA2a	
304	D6f1		円形	0.80×0.70	25	I	2	N		縄文土器片1点	ⅠB1a	
305	D6b2		円形	1.87×1.82	20	Ⅲ	2	N			ⅠB2a	
306	D6e7	N-31°-W	不整形方形	2.82×1.32	92	V	4	N		縄文土器片2点 石1点	ⅢC3b	中央部に円筒状の落ち込み
307	D6d1		円形	1.45×1.29	32	Ⅱ	2	N		縄文土器片9点	ⅠB2a	

土層番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	底面	傾斜	ピット数	出土遺物	形態	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
308	D6ca		円形	0.87×0.75	28	II	I	N		I B1a	SK311を切っている	
309	D6br	N-51°-W	楕円形	3.12×1.20	45	II	4	N	縄文土器片21点 石1点	II A3a		
310	D6da		円形	1.39×1.28	22	III	2	N	縄文土器片10点 石2点	I B2a		
311	D6ca	N-40°-E	(楕円形)	(1.96×1.40)	23	II	2	N	1	(II A2a)	SK308に切られている	
312	D6ca	N-76°-W	楕円形	1.86×1.29	21	II	4	N		II B2a		
313	D6fr	N-90°	不整形	1.00×0.90	20	II	1	N	1	I B'2a	北西側に小ピット	
314	D6da		円形	1.23×1.09	34	II	2	N	1	縄文土器片8点	1A'2a	北西側にピット
315	D6fa	N-67°-E	楕円形	0.90×0.71	15	II	2	N		II B1a		
316	D6fs		円形	0.73×0.62	22	III	1	N		I B1a		
317	D6es	N-17°-W	楕円形	0.70×0.56	25	II	2	N		II B1a		
318	D6da	(N-24°-E)	不定形	1.22×1.10	22	III	4	N	2	縄文土器片14点	VB'2a	内側に小ピット、断面底部に細粒
319	D6ga	N-14.5°E	楕円形	2.00×1.62	27	II	2	N		縄文土器片15点 石1点	II B3a	
320	D6br		円形	0.98×0.95	23	II	2	N			I B1a	
321	D6bs	N-90°	楕円形	1.40×0.94	30	II	2	N			II A2a	
322	D6gs		円形	1.20×1.12	31	II	2	N			I B2a	
323	D6gs	N-59.5°W	不整形	1.10×1.00	32	II	2	N	2		I A2a	西側に小ピット
324	D7ba		円形	1.40×1.38	41	II	1	N	1		I A2a	
325	D6ba	N-18.5°W	楕円形	1.18×0.85	21	II	2	N			II B2a	
326	D7es	N-63.5°E	楕円形	1.50×1.35	36	II	2	N			II A2a	
327	D7es		円形	0.86×0.82	40	V	5	N	1		1A'1a	中央部川溝状に落ち込む
328	D7es		円形	1.09×1.00	36	V	4	N	2		1A'2a	北西側にピット
329	D7as	N-36°-W	不整形	2.60×2.36	13	II	1	N	2	縄文土器片6点 石2点	1B'3a	北西側、中央部にピット
330	D7es	(N-47.5°W)	不定形	1.70×0.85	30	II	2	N	2	縄文土器片12点 石2点	VA'2a	北西側、東側に深いピット
331	D7fa	N-81°-W	不整形	1.90×1.70	43	II	5	N			1C'2a	
332	D7da	N-27.5°W	不整形	1.38×1.25	110	II	2	N	1		1A'2c	西側に内溝状の深いピット
333	D7gs	N-0°	楕円形	1.01×0.80	47	II	4	N			II A2a	
334	D7hs		円形	1.00×0.85	21	II	1	N			I A2a	
335	D7ha		円形	0.70×0.65	24	II	2	N			I A1a	
336	D7ha	N-30°-E	楕円形	1.40×1.12	29	I	1	N			II A2a	
337	D7hs	N-23°-E	楕円形	1.50×1.22	35	II	1	N			II A2a	
338	D7fs	N-0°	楕円形	1.05×0.85	65	III	1	N	1		II B'2b	中央部に深いピット
339	D7gs	N-69.5°E	楕円形	1.53×1.22	30	III	1	(A)			II B2a	
340	D7is	(N-46°-E)	不定形	3.13×1.64	78	V	2	N		縄文土器片31点 石4点、石片1点	V B3b	

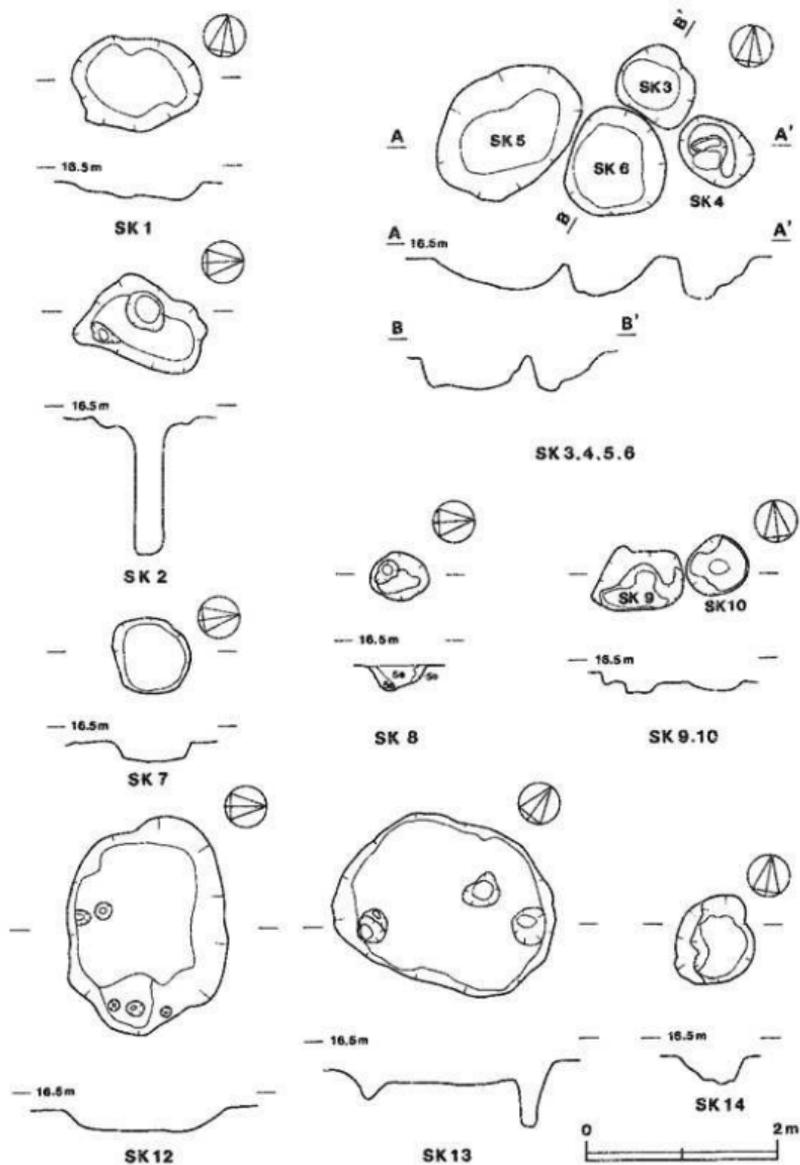
土曜番号	位置	方向	平面形	規模		壁面	式面	層上	ピット数	出土遺物	形態	備考
				長径×短径(m)	深(m)							
341	D7i1		円形	0.74×0.67	25	Ⅱ	2	N			I A1a	
342	D7i1	N-75°-W	楕円形	1.52×1.14	26	Ⅱ	1	0C			II B2a	
343	D7j1	N-27°-E	楕円形	1.07×0.86	13	Ⅱ	2	N	縄文土器片3点		II B2a	
344	D7j2	N-84°-W	楕円形	1.49×0.11	30	Ⅱ	2	N			II B2a	
345	D7j1		円形	1.18×1.13	29	I	2	N	縄文土器片8点		I B2a	
346	D7g1	N-38°-E	楕円形	0.82×0.72	34	Ⅱ	2	N			II A1a	
347	D7j1	N-52°-W	不整形楕円形	1.21×1.05	46	I	4	N 1	縄文土器片23点		II A2a	
348	D7i1	N-90°	楕円形	2.14×1.60	27	Ⅱ	1	N			II A3a	
349	D7i1	N-75°-E	楕円形	1.47×1.00	24	Ⅱ	2	N			II B2a	
350	D7h1	N-90°	楕円形	0.98×0.86	27	Ⅱ	1	N			II A1a	
351	D7i1		円形	1.25×1.24	25	Ⅱ	1	N			I B2a	
352	D7i1		円形	0.95×0.86	18	Ⅱ	2	N 1			IB'1a	中央部に小ピット
353	D6i1	N-28°-E	不整形楕円形	1.27×1.16	23	Ⅱ	1	N			II B2a	
354	D6j1	N 44.5°E	楕円形	1.02×0.81	21	Ⅱ	1	N			II B2a	
355	D6j1	N-37.5°E	隅丸方形	1.44×1.32	29	Ⅱ	2	N			II B2a	
356	D7i1	N-14.5°E	楕円形	1.03×0.69	28	Ⅱ	2	N	縄文土器片2点		II B2a	
357	D7g1	N-38°-W	楕円形	2.87×2.05	29	Ⅱ	1	N	縄文土器片1点 石1点		II B3a	
358	D7g7	N-71°-W	楕円形	1.12×0.90	53	Ⅱ	2	N 1	縄文土器片8点		II A'2b	内側に不定形の窪み込み小ピット
359	D7g7	N-36°-E	楕円形	1.22×0.83	23	I	2	N 3			II B'2a	南東側にピット
360	D7g1	N-82°-E	楕円形	1.70×1.24	28	Ⅱ	4	N 1	縄文土器片2点		II B2a	
361	D7g1	N-66.5°E	不整形楕円形	1.88×1.20	50	Ⅲ	1	N	縄文土器片1点		II B2a	
362	D7e1	N-18.5°E	楕円形	1.55×1.48	47	Ⅱ	4	N			II C2a	
363	D7d1	N-7°-E	楕円形	1.49×1.32	43	Ⅱ	4	N 1			II A'2a	中央部に小ピット
365	E7j1	N-67°-W	楕円形	2.21×1.42	83	I	5	K			I B3b	表面凸凹が激しい
366	E7h1		円形	1.73×1.52	20	Ⅲ	2	N 1			II B'2a	南東側に小ピット
367	F8b1	N-22.5°E	楕円形	3.15×1.79	13	Ⅱ	4	N	石1点		I A3a	
368	E7h1		円形	1.73×1.52	29	Ⅱ	2	N 1			II B2a	南側に不定形の落ち込み
369	E7e1	N-21.5°E	楕円形	3.15×1.79	13	Ⅲ	5	N 3			I B3a	底面凸凹
370	E7h1		円形	1.25×1.15	72	V	4	N 3			I A2b	底面に小ピット
371	E7e1	N-25°-W	楕円形	0.87×0.70	38	V	2	N 1			II C'1a	北西側に深いピット
372	E7b1	N-35°-W	楕円形	1.78×1.62	34	Ⅲ	2	N			II B2a	
373	E7b1	N-64°-W	楕円形	1.23×0.77	28	Ⅲ	2	N			II B2a	
374	E7e1		円形	0.97×0.86	22	Ⅱ	4	N			I B1a	

土曜番号	位置	方向	平面形	規模		壁高	壁1	ピツト数	出土遺物	形態	備考		
				長さ×短さ(m)	深さ(m)								
375	E7c4		不整形四角	1.22×1.15		18	Ⅲ	2	N		I B2a		
376	E7d4	N-90°	楕円形	1.10×0.85		20	Ⅲ	2	N		II B2a		
377	E7d2	N-42°-E	楕円形	1.17×1.00		17	Ⅱ	1	N		II B2a		
378	E7c3	N-28°-W	楕円形	1.03×0.80		30	Ⅱ	1	N	1	II B'2a	南東側に小ピツト	
379	E7a4		円形	0.77×0.75		34	Ⅱ	2	N		縄文土器片1点	I A1a	
380	E7a3		円形	0.89×0.84		23	Ⅲ	2	N		縄文土器片3点	I B1a	
381	E7c2		円形	1.19×1.07		20	Ⅱ	1	N		縄文土器片1点	I B2a	
382	E7b2		円形	1.70×1.69		28	Ⅲ	2	N		縄文土器片4点 石1点	I B2a	
383	E7b1	N-57°-W	楕円形	1.38×1.09		20	Ⅱ	2	(N)			II B2a	
384	E7c1	N-56°-W	楕円形	1.38×1.10		23	Ⅲ	2	N		縄文土器片4点	II B2a	
385	E7c1		円形	1.10×0.92		24	Ⅲ	2	(N)			I B2a	
386	E6e9	N-23°-W	不整形四角	0.87×0.72		20	V	1	N		縄文土器片2点	I B1a	
387	E6e8	N-24°-W	不整形四角	1.36×1.17		29	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片5点	II B'2a	北東側に円筒状の落ち込み
388	E6e8	N-32°-W	不整形四角	1.40×1.23		33	Ⅱ	5	N	1	縄文土器片10点	I B2a	北東側にピツト 底面凸凹
389	E6d7		円形	1.15×1.12		41	Ⅱ	2	N		縄文土器片21点	I A2a	
390	E6a8		円形	1.59×1.43		14	Ⅲ	2	N			I B2a	
391	E6e7	N-57.5°E	不定形	1.78×1.35		18	Ⅱ	4	N	2		V B'2a	南西側に小ピツト
392	E6f9	N-13°-W	楕円形	1.58×0.80		36	Ⅱ	4	N			II B2a	北西側の底面レンガ状に埋まっている(伊六)
393	E6f8	N-23°-W	楕円形	1.58×0.80		36	Ⅲ	5	N			II B2a	南側の底面レンガ状に埋まっている(伊六)
394	E6f8	N-55°-W	楕円形	1.17×0.93		14	Ⅱ	2	N			II B2a	
395	E7h1	N-55°-E	楕円形	1.24×0.77		23	Ⅲ	4	N	2		II B2a	北東側の底面レンガ状に埋まっている(伊六)
396	E6f8		円形	0.70×0.68		29	Ⅱ	1	N	2	縄文土器片4点	I B'1a	南西側に円筒状の深いピツト
397	D5e4	N-75°-W	長方形	3.53×0.68		28	Ⅱ	1	(N)		石1点	IV B3a	S43を掘りこみ入っている 穴箇内蔵
398	E7h2	N-35°-E	不整形四角	4.10×2.25		24	Ⅱ	2	(N)	3		II B'3a	南側に浅い落ち込みピツト
399	E7h3		円形	0.93×0.90		25	Ⅱ	1	N			I B1a	
400	D6j9		円形	0.93×0.83		17	Ⅲ	4	N	2	縄文土器片5点	IA'1a	西北にピツト
401	F6a8	N-41°-E	楕円形	1.44×1.06		47	Ⅲ	4	N	1	縄文土器片6点	II C'2a	中央部にピツト
402	E6j8	N-70°-E	不整形四角	2.02×0.96		54	Ⅱ	2	N			II A3b	SD6と重複
403	E6j6	N-27°-E	楕円形	1.74×1.10		46	Ⅱ	2	N			II B2a	SD6と重複
404	F6a8		円形	1.32×1.14		36	Ⅱ	1	N			I A2a	SD6と重複
405	E6a7		円形	0.75×0.73		19	Ⅱ	2	N			I A1a	
406	E6d4		円形	0.87×0.85		30	Ⅱ	2	N			I C1a	
407	E6c5	N-82.2°E	不整形四角	1.70×1.15		43	V	2	N		縄文土器片9点	I A2a	

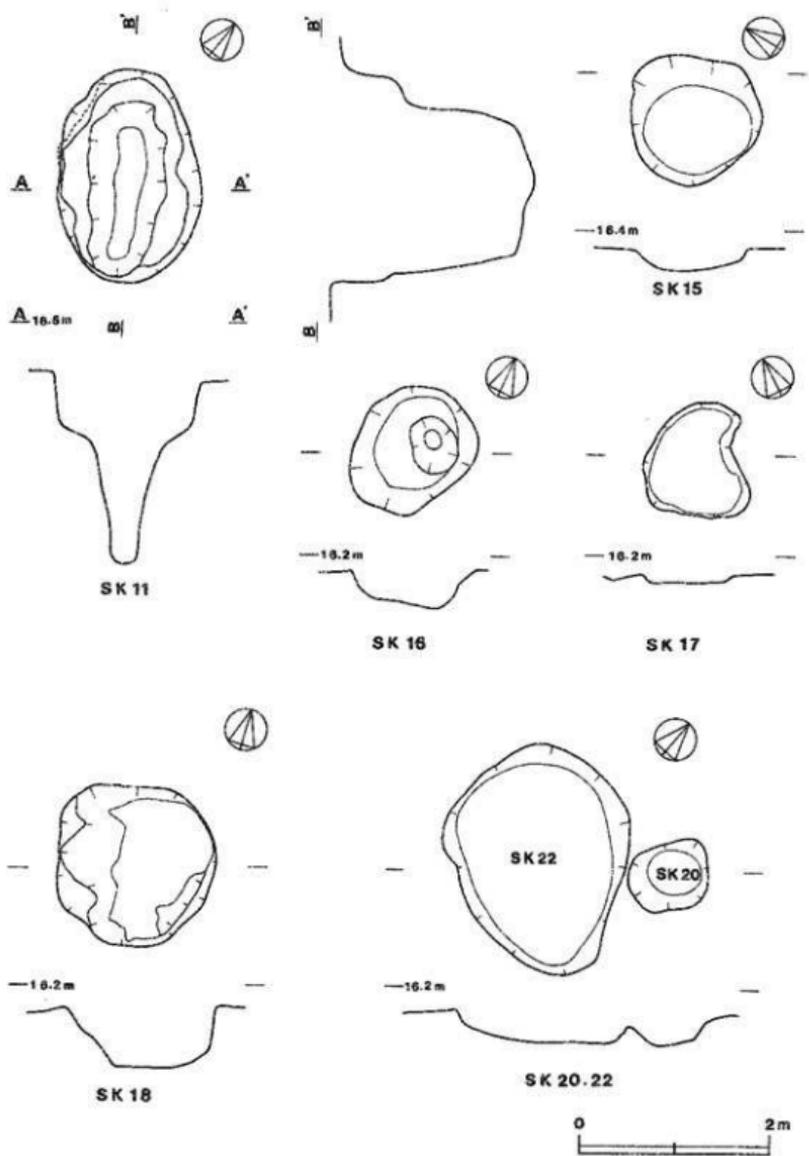
上層番号	位置	方向	平面形	規模		母土	N	敷上	ピツ数	出土遺物	形態	備考
				長径×短径(m)	深さ(m)							
408	F6c4		円形	0.79×0.78	12	Ⅱ	2	N	1		ⅡC'1a	北側にピット
409	F8b2	N-84.5°W	楕円形	1.02×0.91	42	Ⅱ	1	N			ⅡA2a	
410	F8c1	N-59.5°E	楕円形	1.90×1.36	49	Ⅱ	4	N			ⅡA2a	
411	F8c2		円形	0.95×0.82	84	Ⅱ	2	N			I A1b	
412	F8g2		円形	0.86×0.80	32	Ⅱ	2	N			I C1a	
413	F7f4		円形	0.82×0.70	18	Ⅲ	4	N	1		ⅡC'1a	南側にピット
414	F7e4	N-15.3°W	楕円形	0.84×0.63	19	Ⅱ	1	N			ⅡA1a	
415	F7e4		円形	0.71×0.64	18	Ⅱ	1	N	1		I C1a	南西側にピット
416	F7e4	(N-65.5°W)	不定形	1.97×0.72	41	Ⅱ	5	N			V A2a	
417	F7e4	N-77.5°W	楕円形	1.44×1.10	28	Ⅱ	1	N			ⅡA2a	
418	F7f4	N-16°W	楕円形	0.87×0.70	32	Ⅱ	4	N	1		ⅡA'1a	南東側にピット
419	F7g7		円形	1.75×1.70	25	Ⅱ	2	N		縄文土器片12点 石3点	ⅡB2a	
420	F7g4		円形	0.94×0.85	32	Ⅲ	2	N			I B1a	
421	F7g3		不整形	1.17×1.12	30	Ⅲ	2	N		縄文土器片4点	I B2a	
422	F7f4	N-33°E	不整形楕円形	2.19×1.70	25	Ⅱ	1	N		縄文土器片6点	ⅡB3a	
423	F7g2	N-79°E	楕円形	1.79×0.95	33	Ⅱ	2	N			ⅡA1a	
424	F7g2	N-38°W	楕円形	0.67×0.52	25	Ⅱ	2	N			ⅡA1a	
425	F7c4		円形	0.78×0.67	30	Ⅱ	3	N			I C1a	後面北西側に傾斜
426	F7e4		円形	0.62×0.57	32	Ⅱ	3	N	1		ⅡC'1a	北側にピット
427	F7c7	N-65°W	楕円形	2.00×0.57	17	Ⅱ	1	N	1		ⅡB'3a	北側にピット
428	F7d7	N-66°W	楕円形	0.93×0.77	33	Ⅱ	1	N		縄文土器片4点	ⅡA1a	
429	F7e4		円形	0.80×0.72	29	Ⅱ	2	N	1		ⅡA'1a	北東側にピット
430	F7d4		円形	0.62×0.56	29	Ⅲ	2	N	1		I B1a	
431	F7d4		円形	1.03×0.97	33	Ⅱ	4	N			I B2a	
432	F7c4		円形	1.42×1.25	23	Ⅱ	4	N	1		ⅡB'2a	後面北西側に傾斜 北側にピット
433	F7c4		円形	0.67×0.63	32	Ⅱ	1	(A)	1	縄文土器片1点	ⅡA'1a	北東側に小ピット
434	F7f4		円形	0.74×0.69	32	Ⅱ	1	N			I A1a	
435	F7d4	N-49°E	楕円形	1.56×1.30	35	Ⅱ	2	N			ⅡB'2a	南西側に小ピット
436	F7d4		円形	0.86×0.83	28	Ⅱ	1	N			I A1a	
437	F7c4	N-84°E	楕円形	1.98×1.13	68	Ⅱ	2	N			ⅡA2b	
438	F7b4	N-28.5°E	不整形楕円形	2.85×1.04	41	Ⅱ	4	N	1		ⅡB'3a	北西側に小ピット
439	F7b4	N-11.5°E	楕円形	1.82×1.12	39	Ⅱ	2	N			ⅡA2a	
440	F7b7	(N-39.5°W)	不定形	1.89×1.20	12	Ⅲ	4	N			V B2a	北西側にピット

土層番号	位置	方向	平面形	規模		築年	底面	覆土	ピロティ数	出土遺物	形態	備考
				長径×短径(m)	高さ(m)							
441	F7ca	N-52°-W	楕円形	1.28×0.80	19	Ⅱ	4	N			ⅡB2a	
442	F7c7	N-12°-E	楕円形	1.32×0.65	31	Ⅳ	4	N	1		ⅡA'2a	北東側に小ピロティ南側委状
443	F7c7		円形	0.62×0.52	28	Ⅱ	1	N			I A1a	
444	F7d7		円形	0.93×0.91	98	Ⅱ	2	N		縄文1器片1点	I C1b	
445	F7d7		円形	0.75×0.63	82	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片2点 石1点	JA'1b	北東側にピロティ
446	F7c7		円形	0.54×0.54	56	Ⅱ	1	N	1		IC'1b	北東側落ち込む
447	F7ca	N-46°-W	楕円形	0.96×0.66	27	Ⅱ	4	N		縄文土器片2点	ⅡA1a	
448	F7ea	N-75°-W	楕円形	0.64×0.42	28	Ⅱ	2	N			ⅡB1a	
449	F7ea		円形	0.60×0.51	20	Ⅱ	1	N			I B1a	
450	F7fa		円形	0.80×0.70	30	Ⅱ	2	N			I B1a	
451	F7g7		円形	0.58×0.52	30	I	1	N			I A1a	
452	F7g7	N-61°-E	楕円形	1.15×0.84	23	I	4	N			ⅡB2a	
453	F7gs	(N-90°)	不定形	1.82×1.65	26	Ⅱ	1	N			VB2a	
454	E7b4		円形	0.73×0.62	26	I	2	N			I B1a	
455	E7b3	N-37.5°E	楕円形	0.95×0.70	30	I	2	N	1		ⅡB'1a	北西側に円筒状の落ち込み
456	F7ca	N-45°-E	楕円形	0.96×0.80	27	I	4	N			ⅡA1a	
457	F7ca		円形	0.60×0.60	17	I	2	N	1		IB'1a	北東側に小ピロティ
458	F7ba	N-38.5°W	不整形円形	1.54×1.05	19	I	1	N			ⅡB2a	
459	F7ba	N-85°-E	不整形円形	2.67×1.12	22	I	4	N			ⅡB3a	
460	F7ba	N-37°-E	楕円形	2.96×2.41	28	I	1	N	2	縄文土器片14点 石2点	ⅡB'3a	北西側、南東側にピロティ
461	F7a7	N-71.5°E	楕円形	2.35×1.79	20	Ⅱ	2	N			ⅡB3a	
462	F7da		不整形円形	2.48×2.29	130	V	4	K	1		IA'3c	南側にピロティ
463	F7fa		円形	1.40×1.20	59	I	2	N			I A2b	
464	F7fa		円形	1.15×1.03	24	Ⅲ	2	N			I B2a	
465	E6ha	N-86°-E	楕円形	1.28×0.61	40	Ⅲ	5	N	1		ⅡB2a	S150と重複、両面傾斜ラフ状に覆かれている
466	E7ba	N-40°-E	楕円形	1.20×0.97	38	Ⅱ	4	N			ⅡA2a	
467	E7ca		円形	1.06×1.00	29	Ⅲ	2	N			I B2a	
468	D7aa				(25)	Ⅱ	1	N		縄文土器片3点		S143と重複、両面傾斜ラフ状に覆かれている
469	F8ca	N-4°-E	楕円形	2.47×1.74	82	Ⅲ	2	00			ⅡA3b	南東側円筒状に落ち込む
470	F7ca		不整形円形	2.85×2.60	16	Ⅱ	1	N			I B3a	
471	F7er	N-40°-W	不整形円形	0.73×0.58	108	Ⅱ	2	N			ⅡA1c	
472	F7fs		円形	0.84×0.75	26	Ⅱ	1	N			I A1a	
473	F7ha	N-83.5°E	楕円形	2.24×1.16	56	Ⅱ	2	N	1		ⅡB3b	西側にピロティ

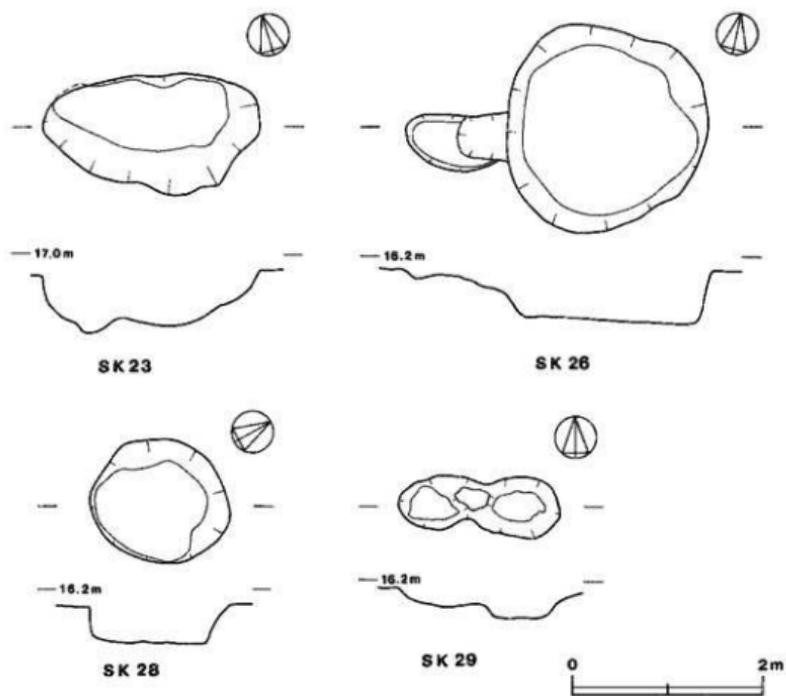
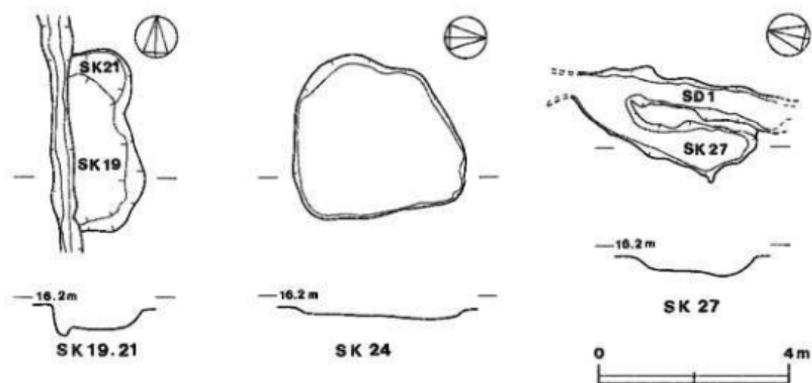
土壌番号	位置	方向	平面形	規模		壁高	底面	甕上	ピット数	出土遺物	形態	備考
				長さ×短径	深さ							
474	F7a	N-38.5°W	楕円形	0.79×0.64	24	Ⅱ	2	(0)			ⅡC1a	北面北西に傾斜
475	F7i		円形	1.23×1.09	40	Ⅱ	2	N			I A2a	
476	E8c		不整形円形	1.29×1.09	45	Ⅲ	4	N			I B2a	
477	F8c		円形	1.17×1.02	38	Ⅱ	2	N			I A2a	
478	F6g	N-64°E	楕円形	1.55×0.84	28	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片9点	ⅡB2a	北東側にピット
479	F6c	N-90°	不定形	3.25×1.33	72	Ⅲ	2	A	1	縄文土器片29点	ⅤA'3b	中央部にピット
480	F6c	N-71°E	不整形円形	2.26×1.39	33	Ⅲ	5	N	2		ⅡB'3a	東西にピット
481	F5c		不整形円形	1.24×1.08	64	Ⅱ	3	N		縄文土器片4点	I A2b	
482	F5b	N-66.5°W	楕円形	2.12×1.70	36	Ⅱ	4	N	3	縄文土器片49点	ⅡA'3a	東西にピット
483	F5a	N-18.5°W	楕円形	1.89×1.36	51	Ⅱ	1	N	2		ⅡA'2b	南西側にピット
484	F5a		円形	1.04×0.96	49	Ⅱ	2	N	1		IA'2a	中央部に深いピット
485	F5a		円形	0.90×0.84	50	Ⅱ	2	N	1	縄文土器片2点	IA'1a	南西側にピット
486	F5a	N-7°W	楕円形	1.72×1.15	23	Ⅲ	2	N			ⅡB2a	
487	F5b		不整形円形	1.30×1.22	40	Ⅱ	2	N	1		IA'2a	西側に深いピット
488	F3b				22	Ⅱ	4	N	2	縄文土器片7点		SK488によって知られている形状。形状不明
489	F3a	N-64°W	不整形円形	1.25×0.96	56	Ⅲ	1	N		縄文土器片2点 石器1点	ⅡA2b	
490	F5b		円形	0.91×0.87	34	Ⅱ	2	N	1		IA'1a	南西側に深いピット
491	F5a	N-47°W	不定形	1.14×0.85	26	Ⅱ	4	N	1	縄文土器片4点	ⅤB'2a	
492	F5a	N-38°E	楕円形	1.32×0.88	34	Ⅱ	1	(0)	1		ⅡB'2a	SK488と重複 底面にピット
493	F6d				16	Ⅲ	4	N	2			SD6と重複 形状規模不明
494	E6c		円形	1.02×0.93	56	Ⅱ	2	N		縄文土器片15点	I A2b	
495	E6c		不整形円形	1.06×1.04	36	Ⅱ	2	N		縄文土器片4点 石1点	I A2a	
496	E6b	N-31.5°W	円形	0.71×0.63	108	Ⅱ	1	N			I A1c	
497	E6b	N-31.5°W	不整形円形	1.09×0.72	26	V	1	N	1	縄文土器片6点 石1点	ⅡB'2a	南側にピット
498	E6c		円形	0.85×0.75	33	I	2	N			I A1a	
499	F6d		円形	1.00×0.92	48	Ⅱ	3	N		縄文土器片5点	I A2a	
501	F6f	N-59°W	不整形円形	2.72×1.29	63	Ⅱ	4	N			ⅡC3b	
503	F6f		円形	1.09×0.95	20	Ⅲ	5	N	2		I B2a	北西、南東にピット
504	F6f		円形	2.48×2.40	37	Ⅱ	4	N		縄文土器片13点	I B3a	



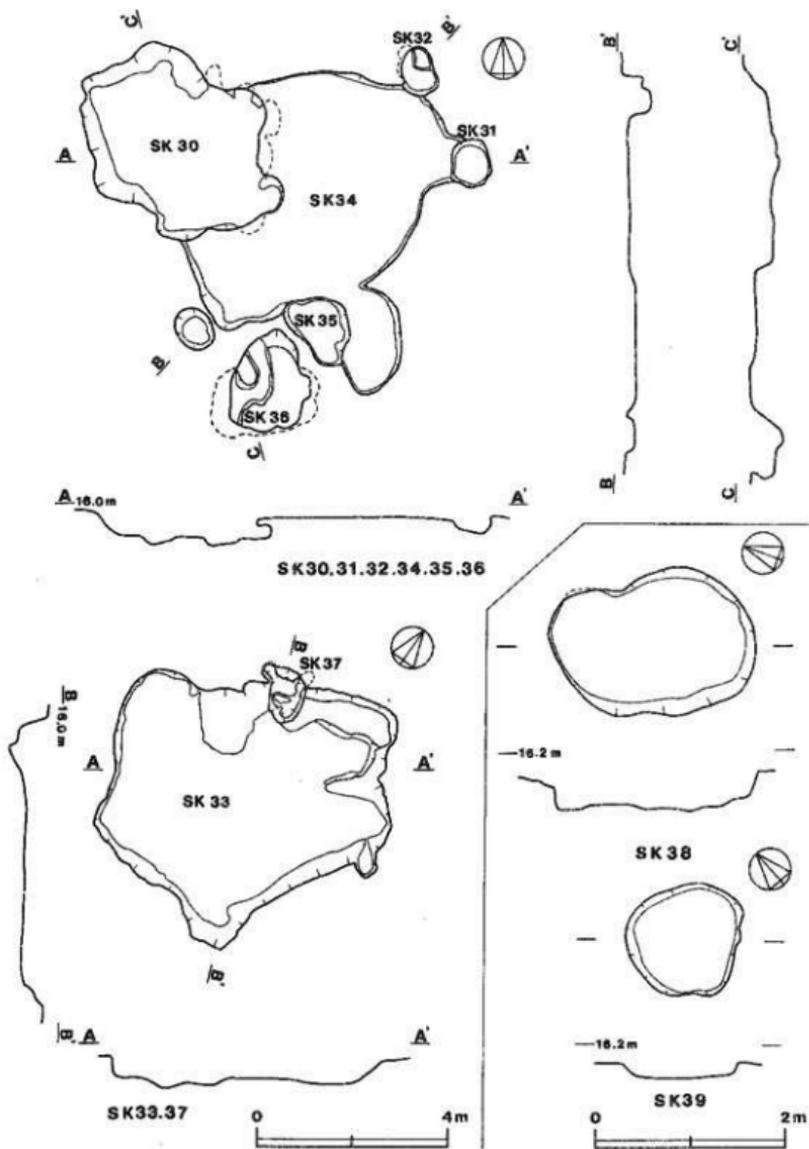
第124图 土壤实测图(1)



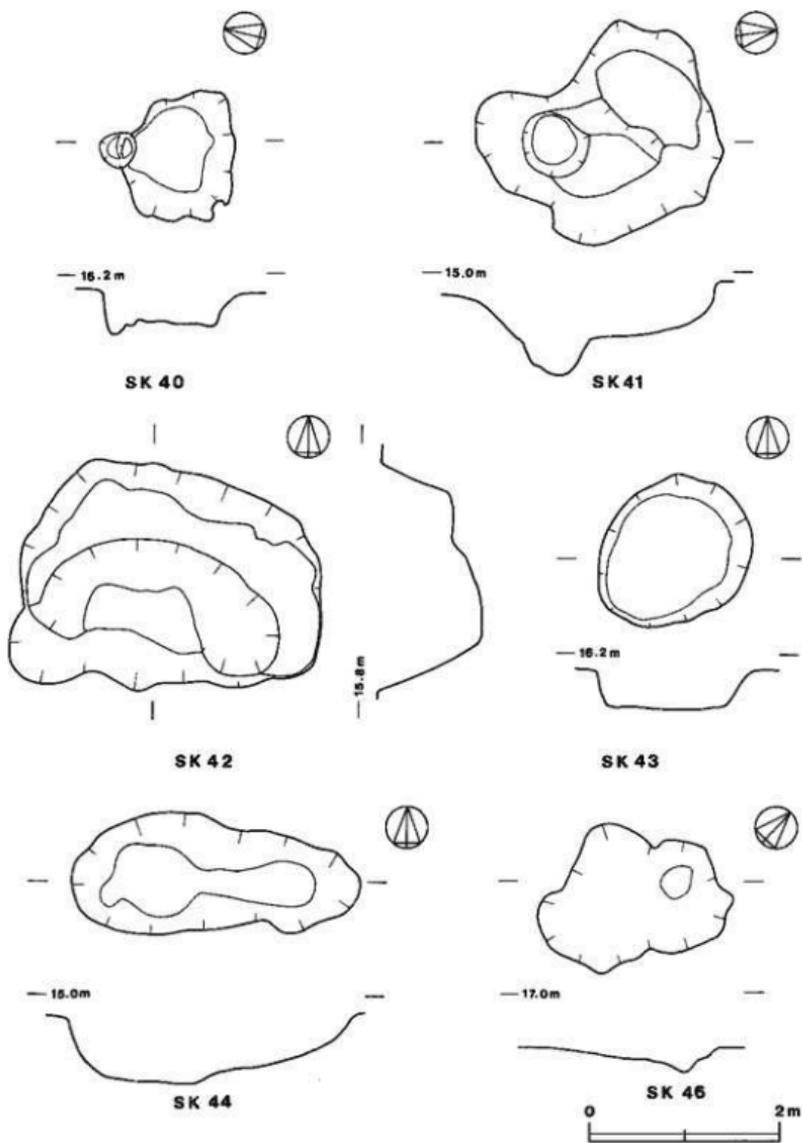
第125图 土壤实测图(2)



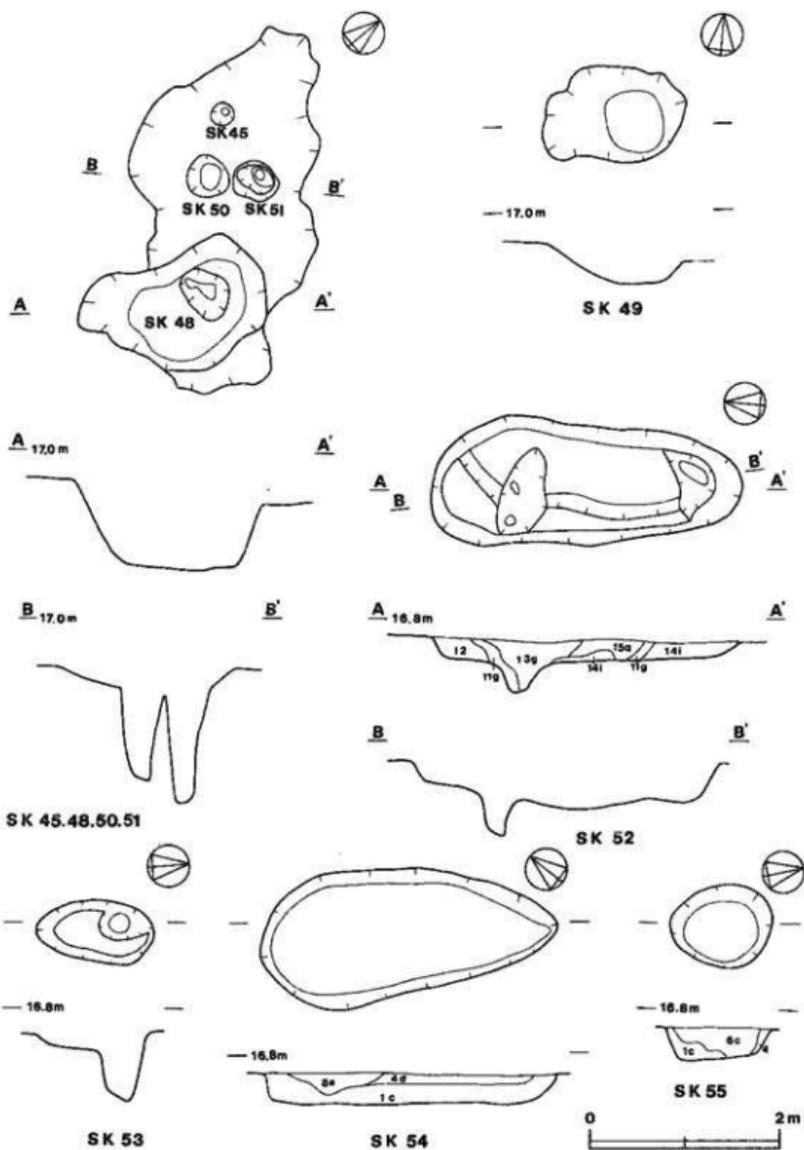
第126図 土坑実測図(3)



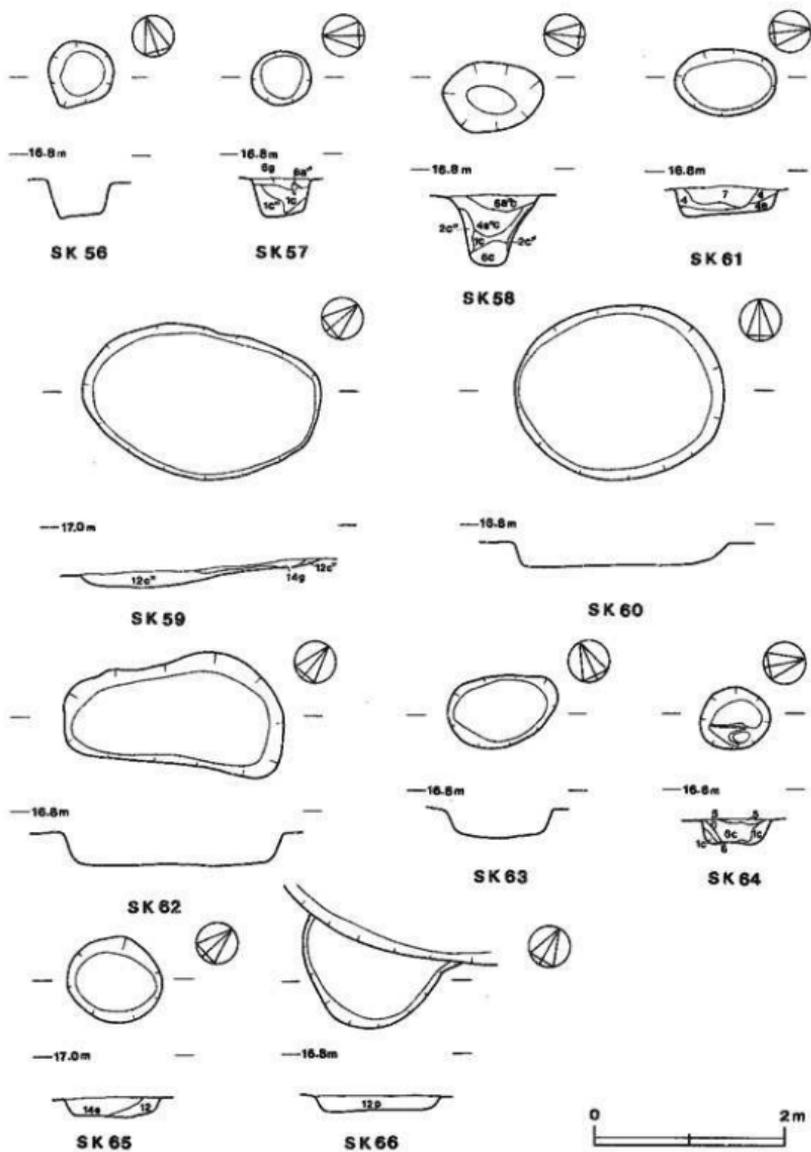
第127图 土壤实测图(4)



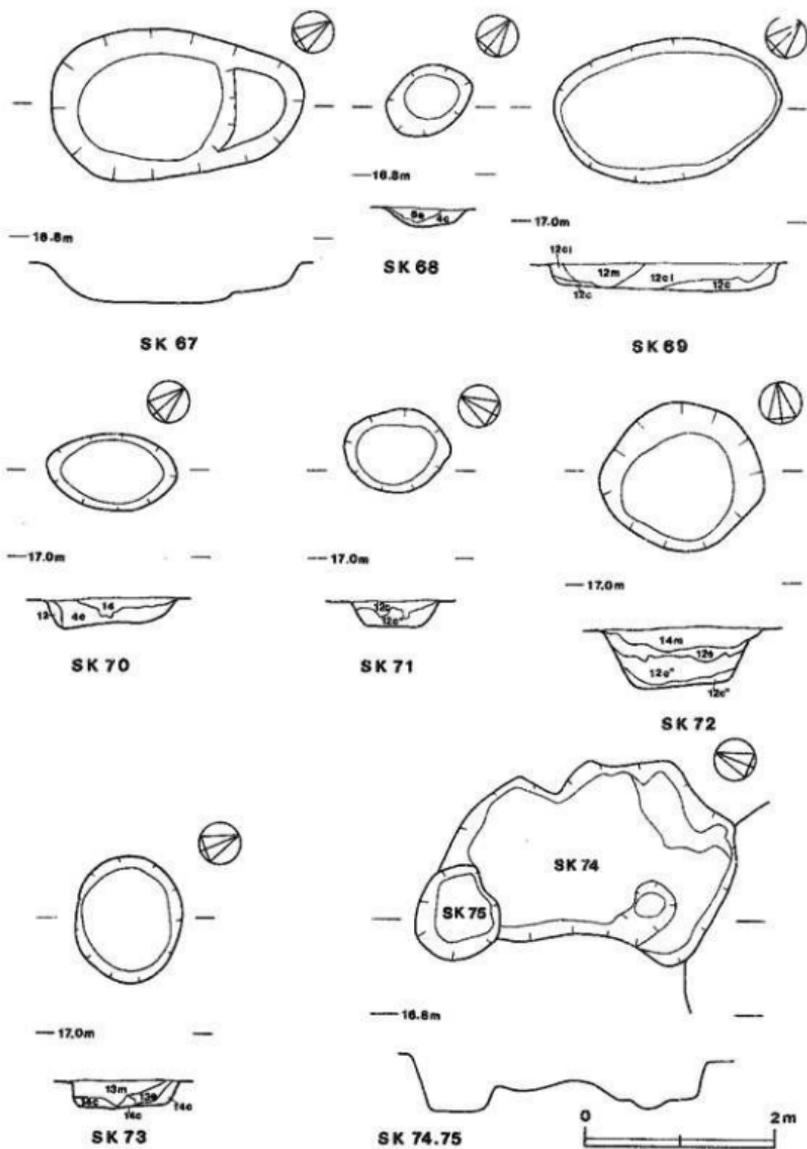
第128图 土壤夹测图 (5)



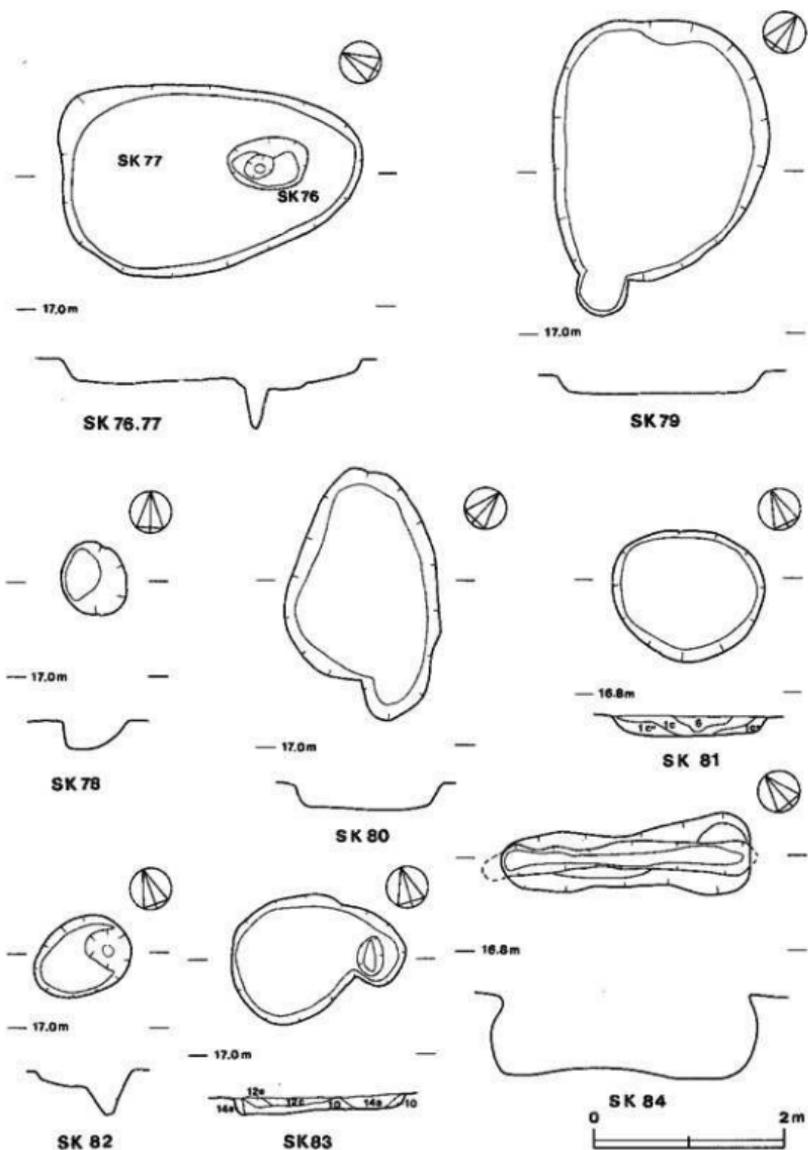
第129圖 土壤実測図(6)



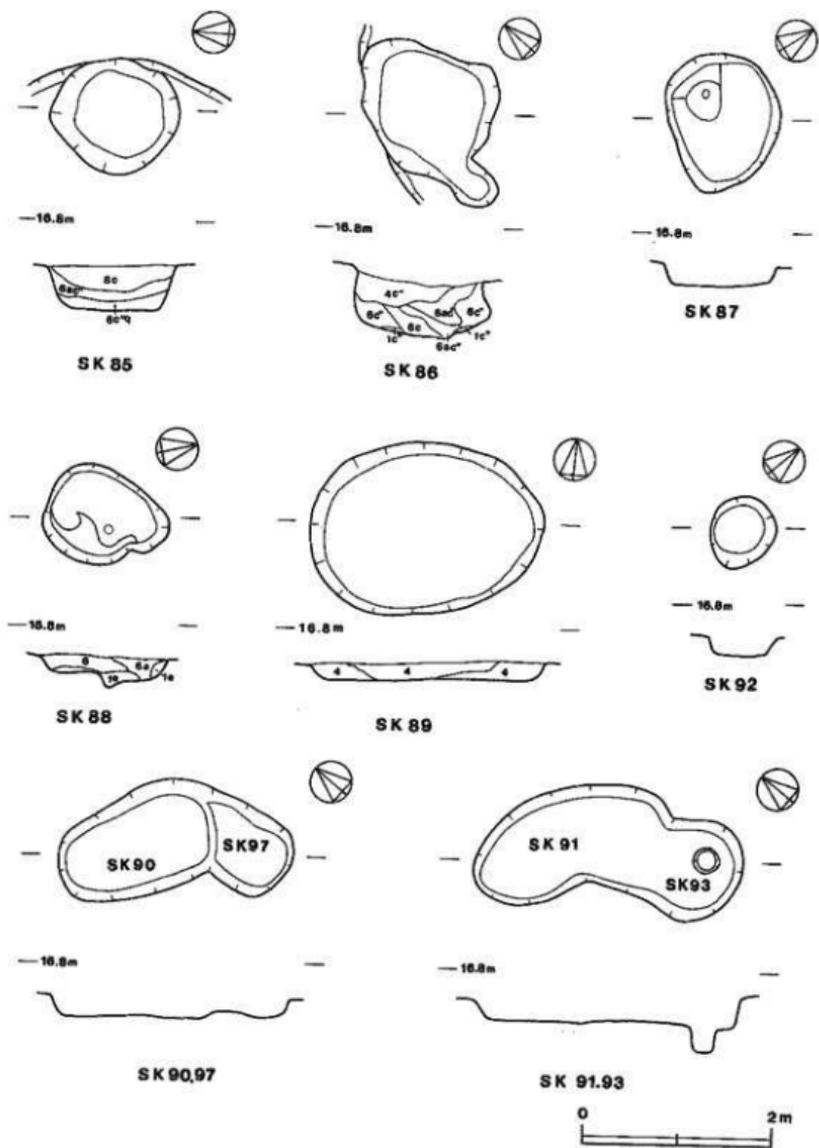
第130图 土壤实测图(7)



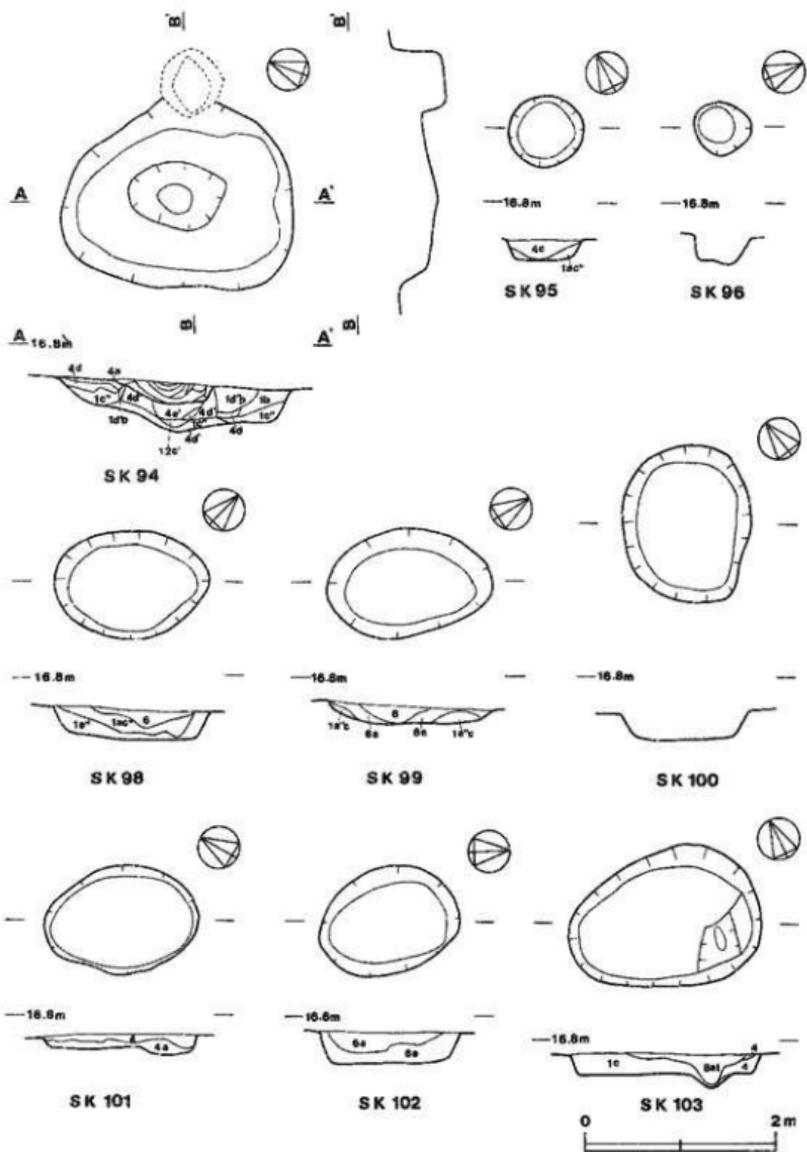
第131图 土壤実測図(8)

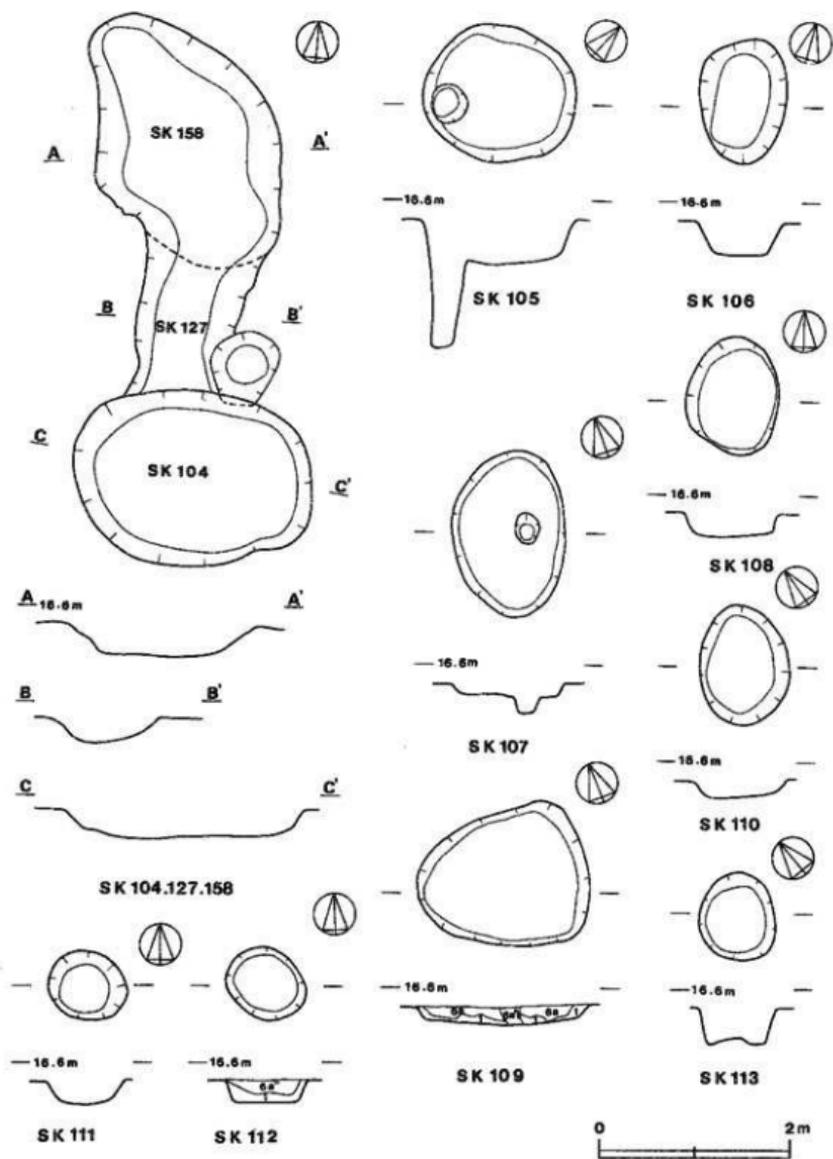


第132圖 土坑実測図(9)

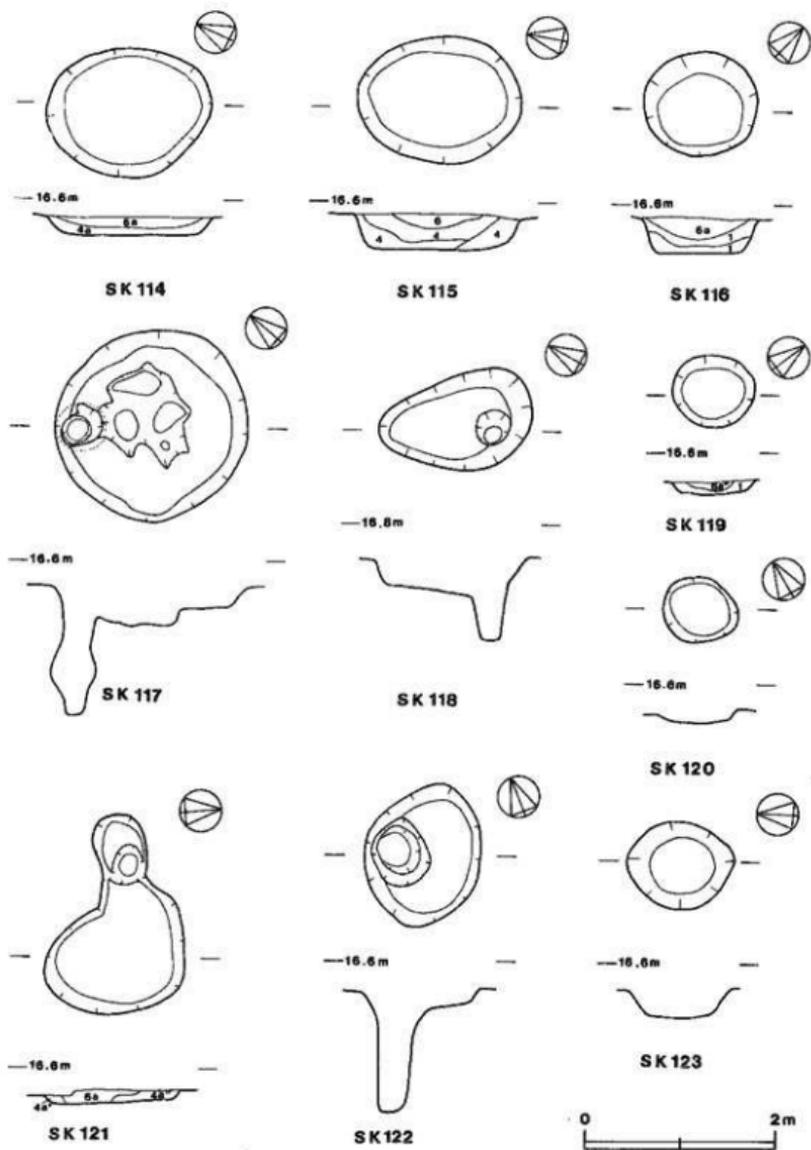


第133圖 土壤実測圖 (10)

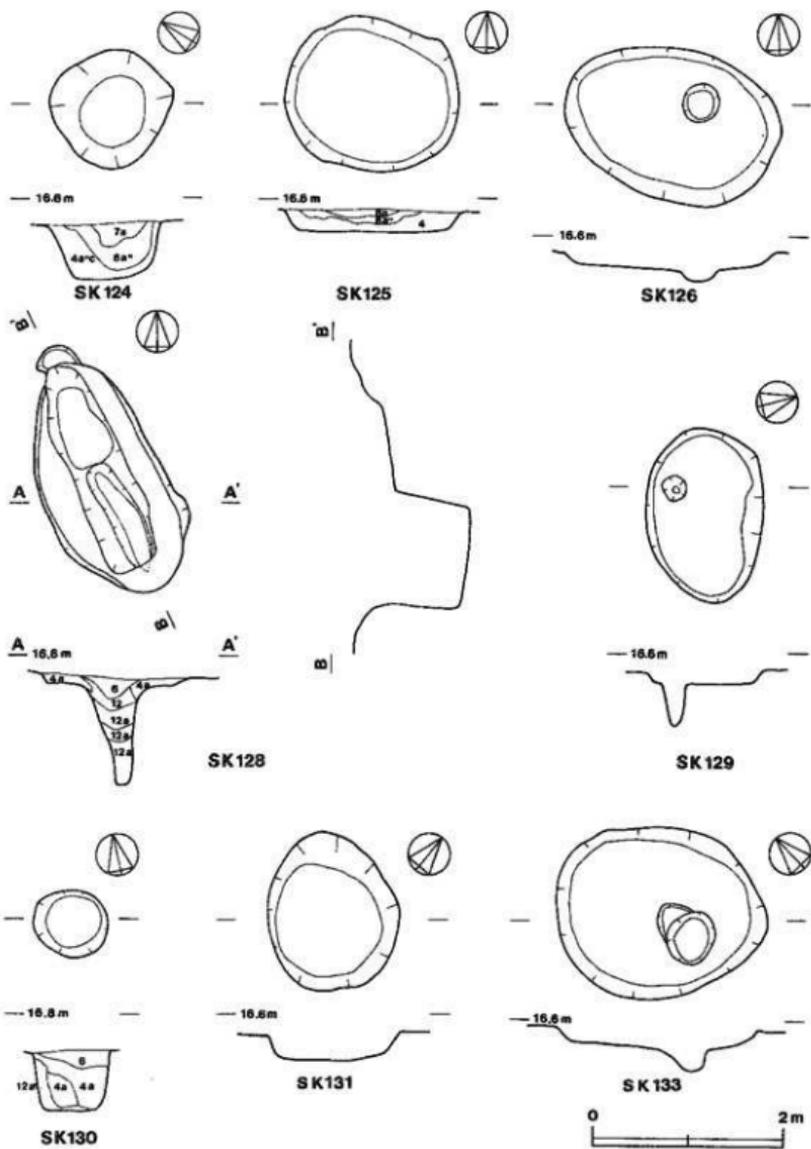




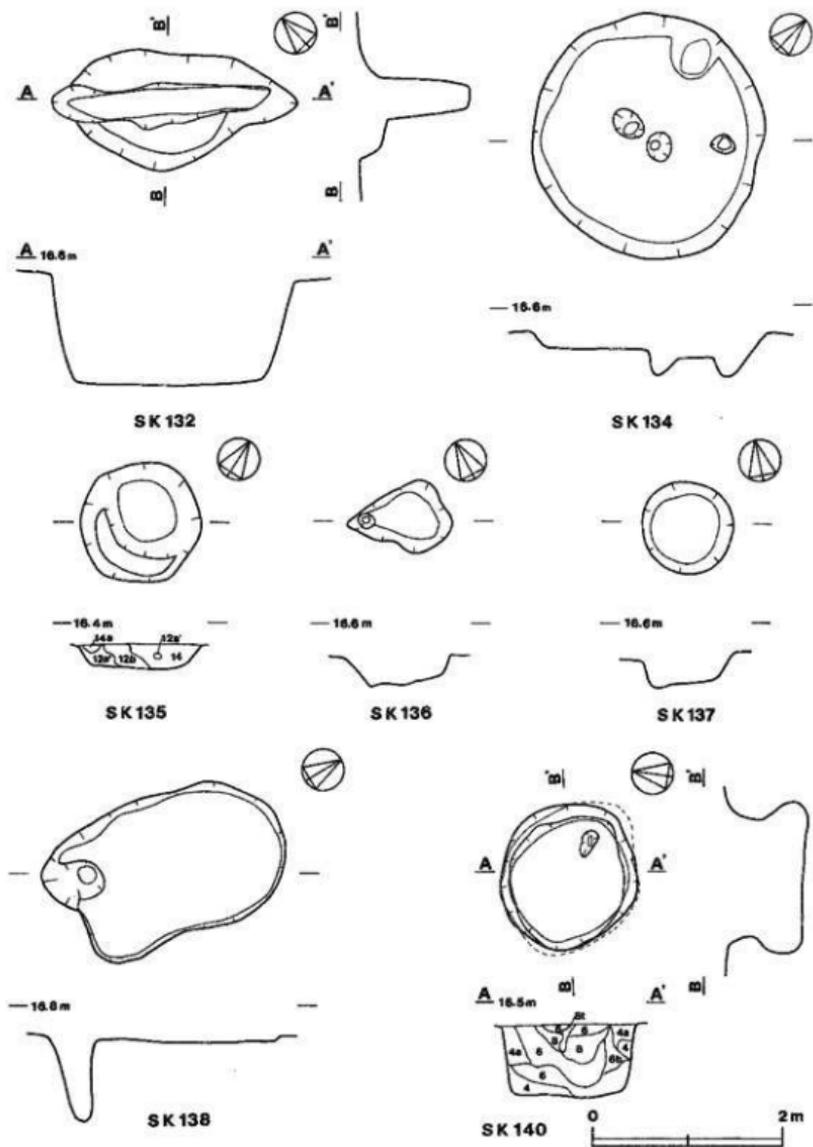
第135圖 土壙実測図 (12)



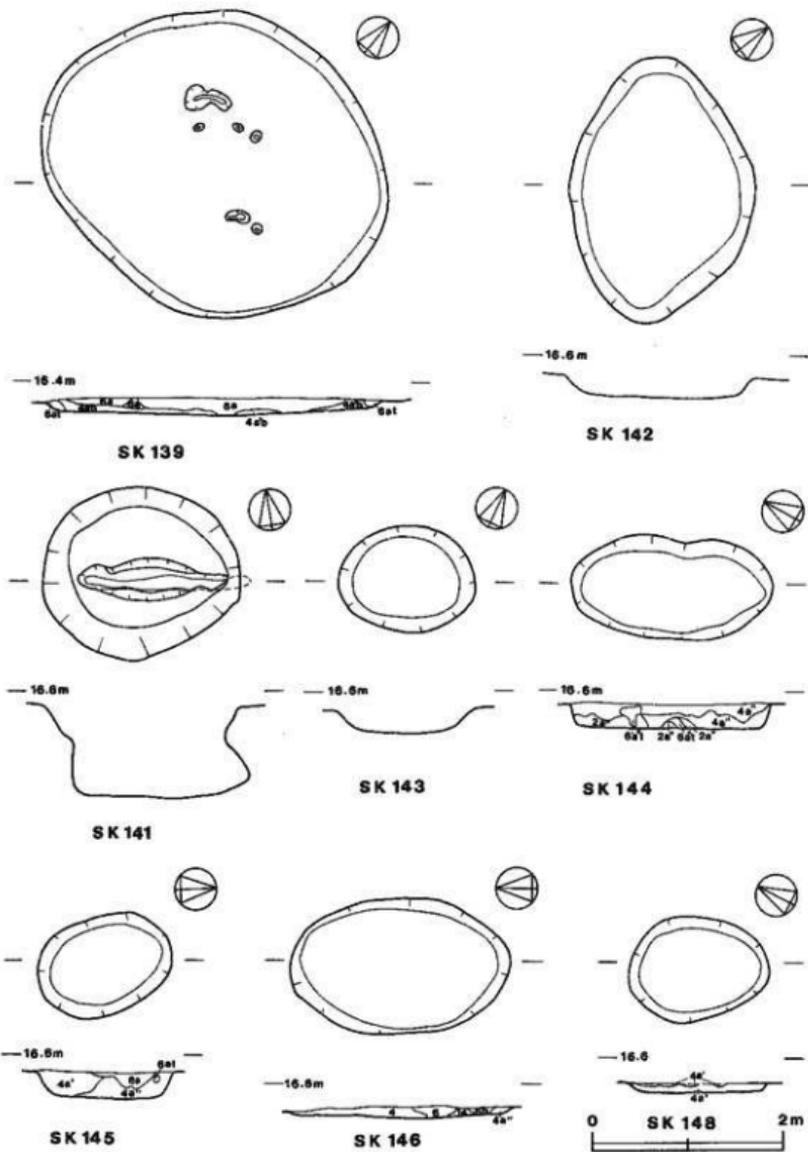
第136图 土壤实测图 (13)



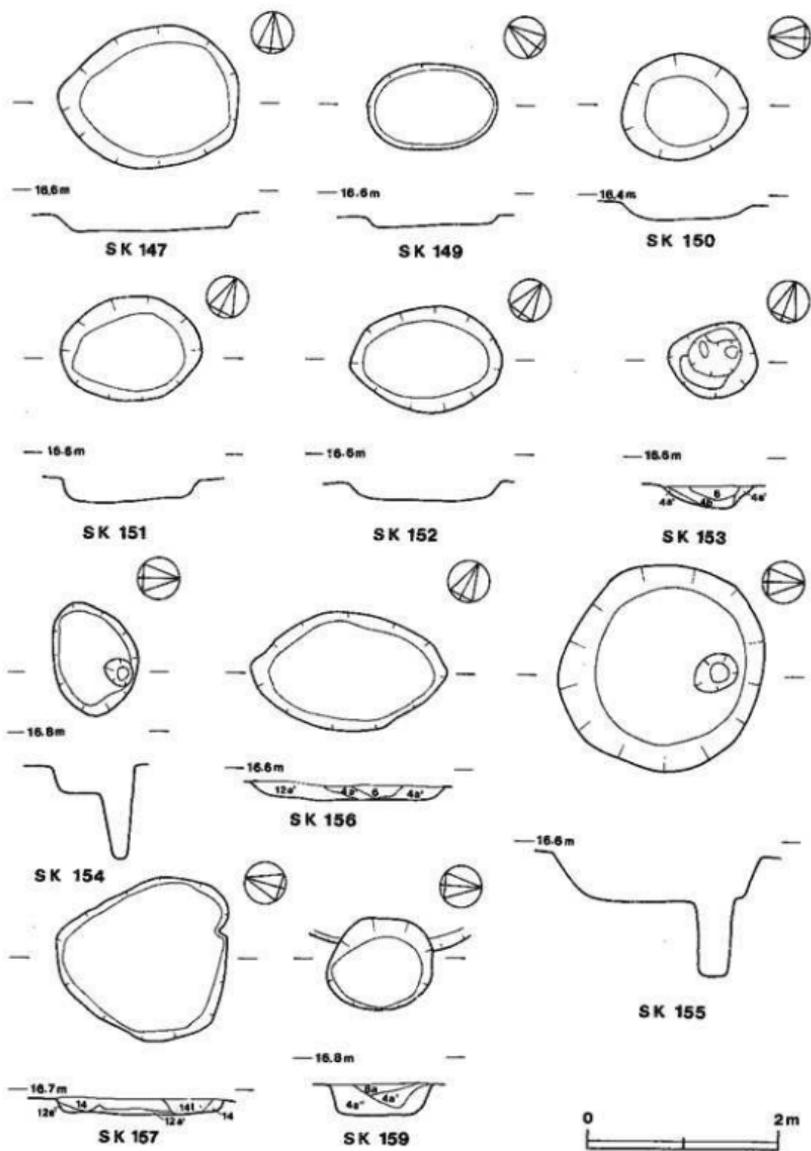
第137图 土壤探测图 (14)



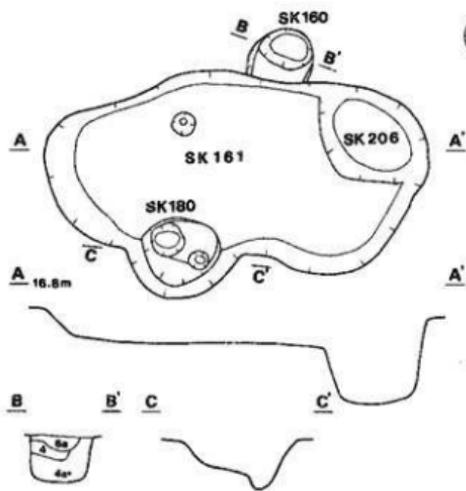
第138图 土壤测试图 (15)



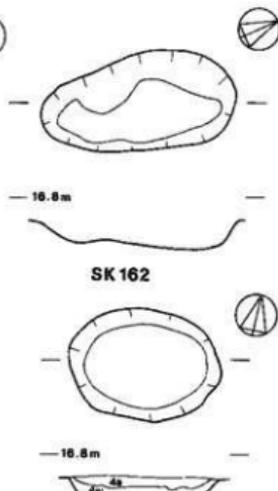
第139圖 土坑突測圖 (16)



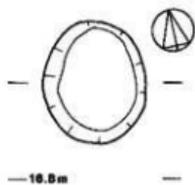
第140図 土墳実測図 (17)



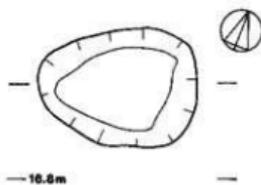
SK 160.161. 180.206



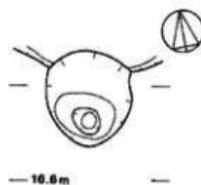
SK 162



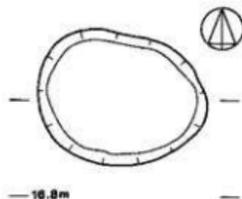
SK 164



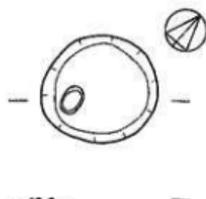
SK 165



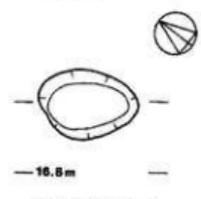
SK 166



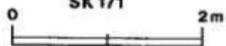
SK 167



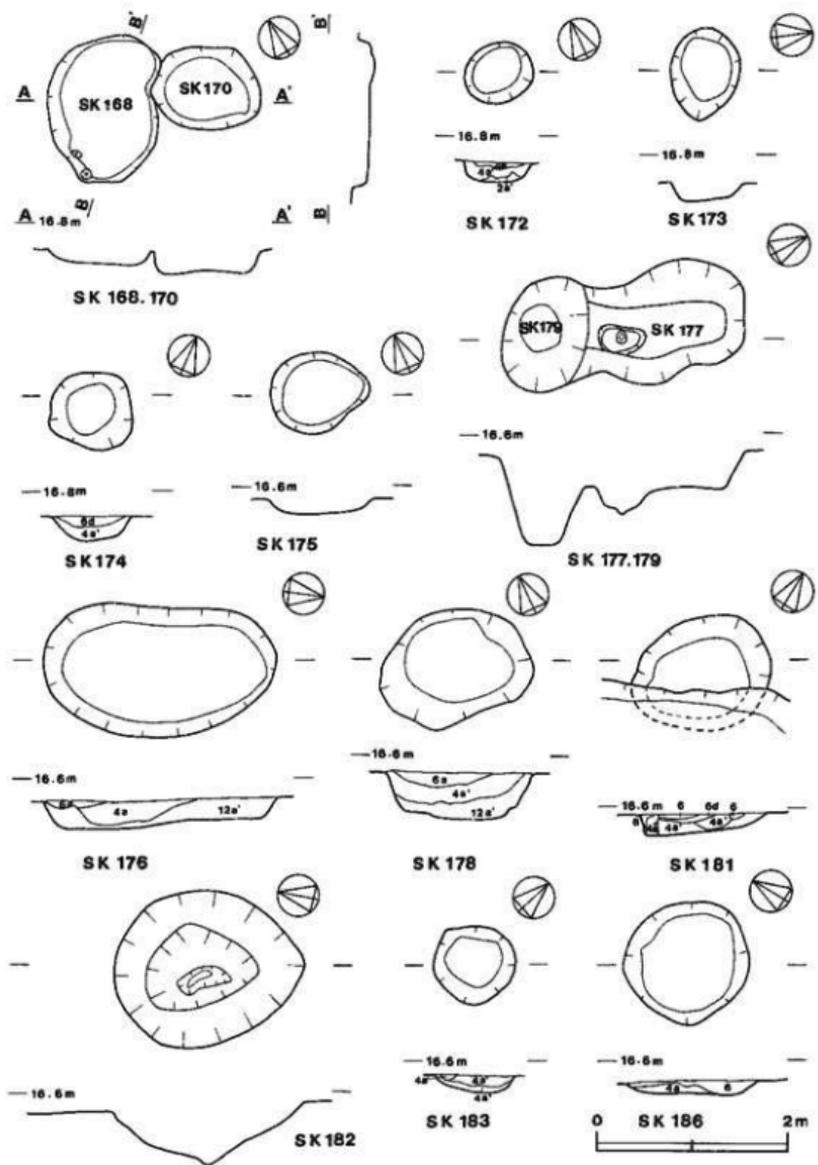
SK 169



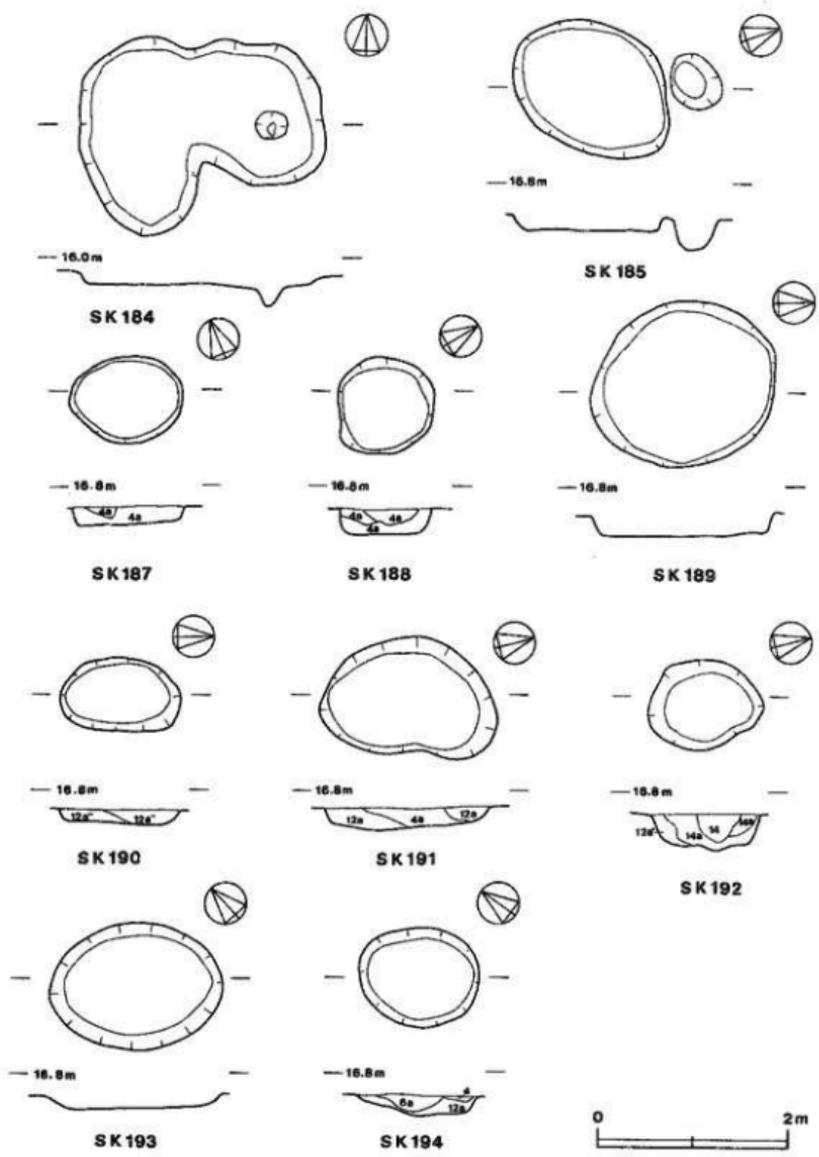
SK 171



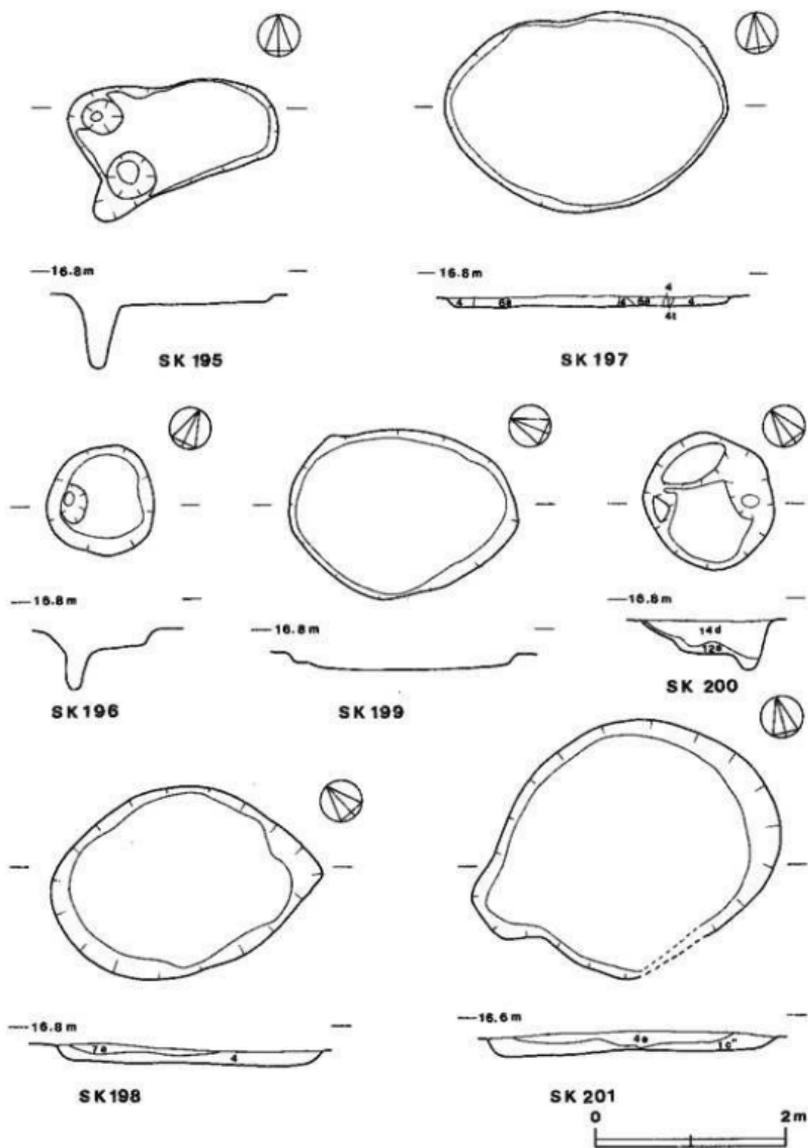
第141图 土壤实测图 (18)



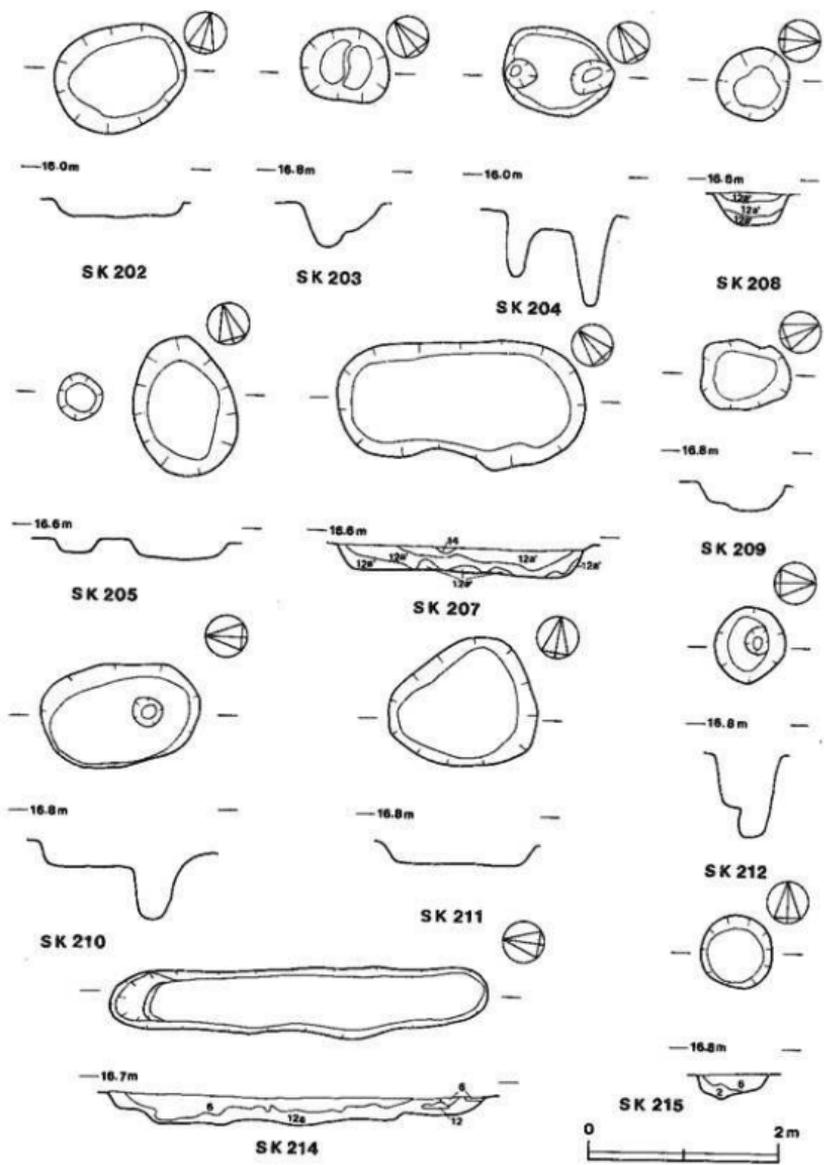
第142图 土壤実測図 (19)



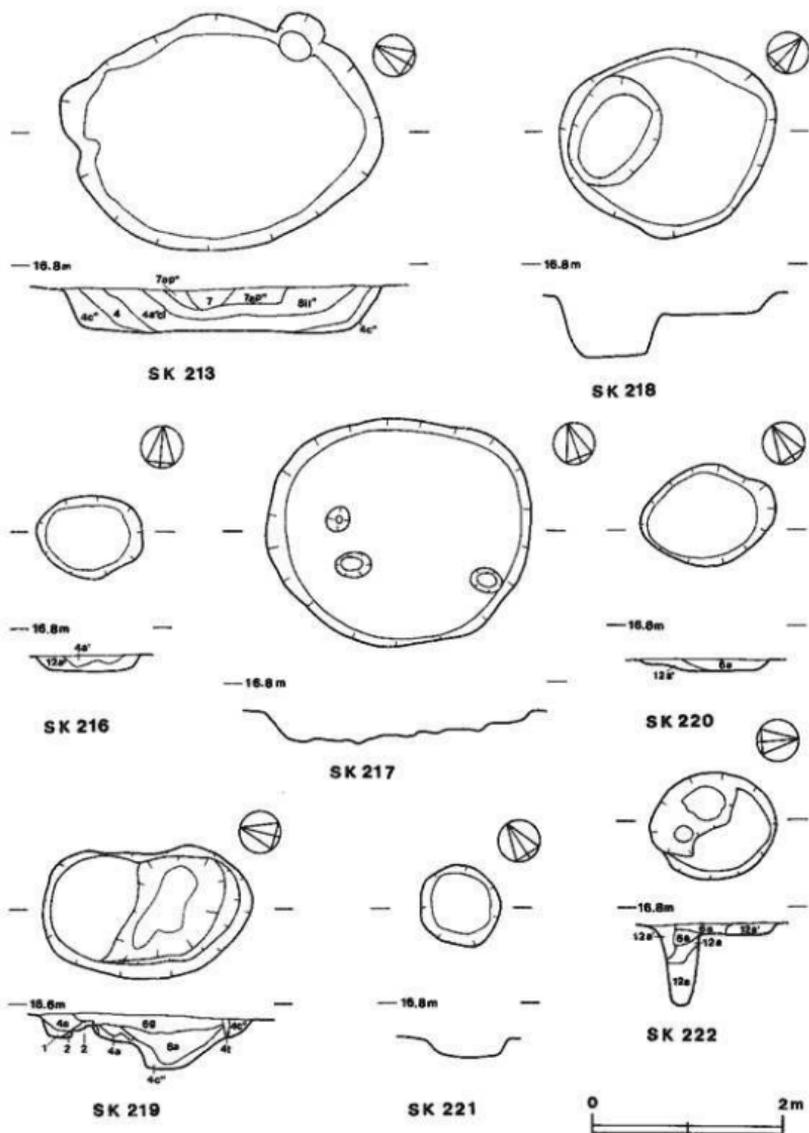
第143図 土坑実測図 (20)



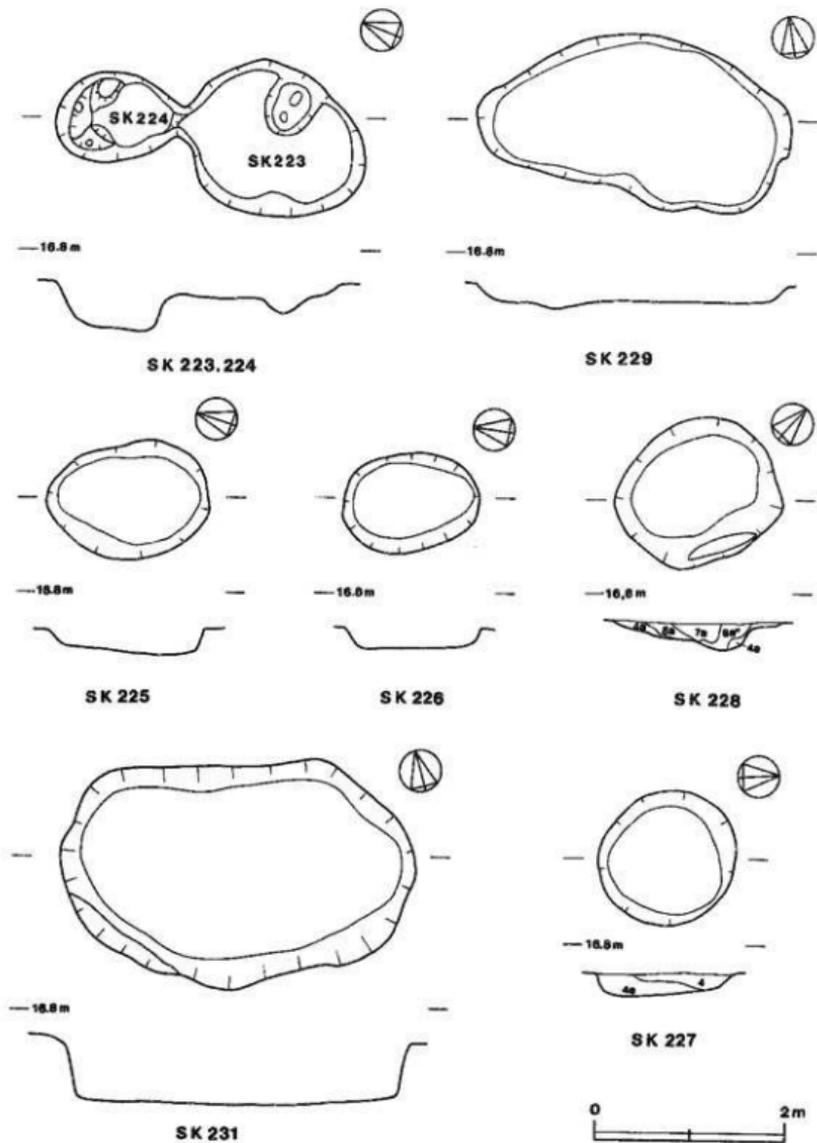
第144图 土壤实测图 (21)



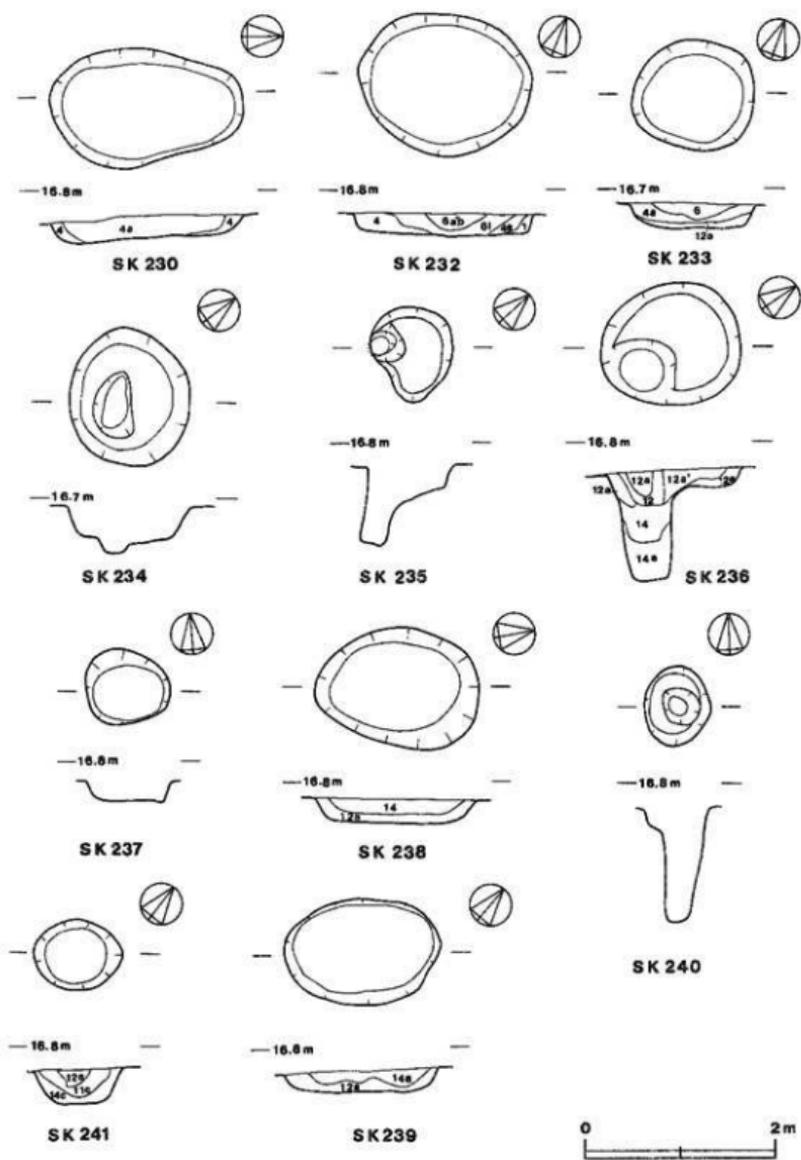
第145図 土質実測図 (22)



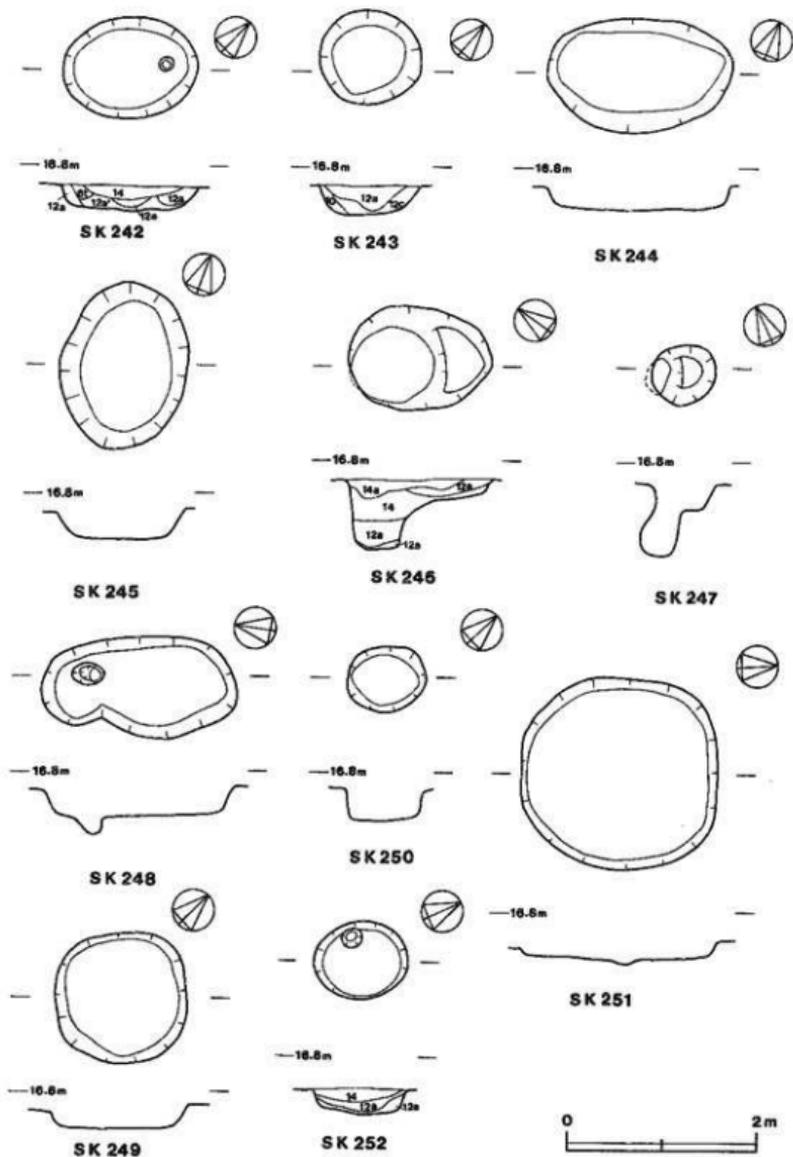
第146图 土壤実測図 (23)



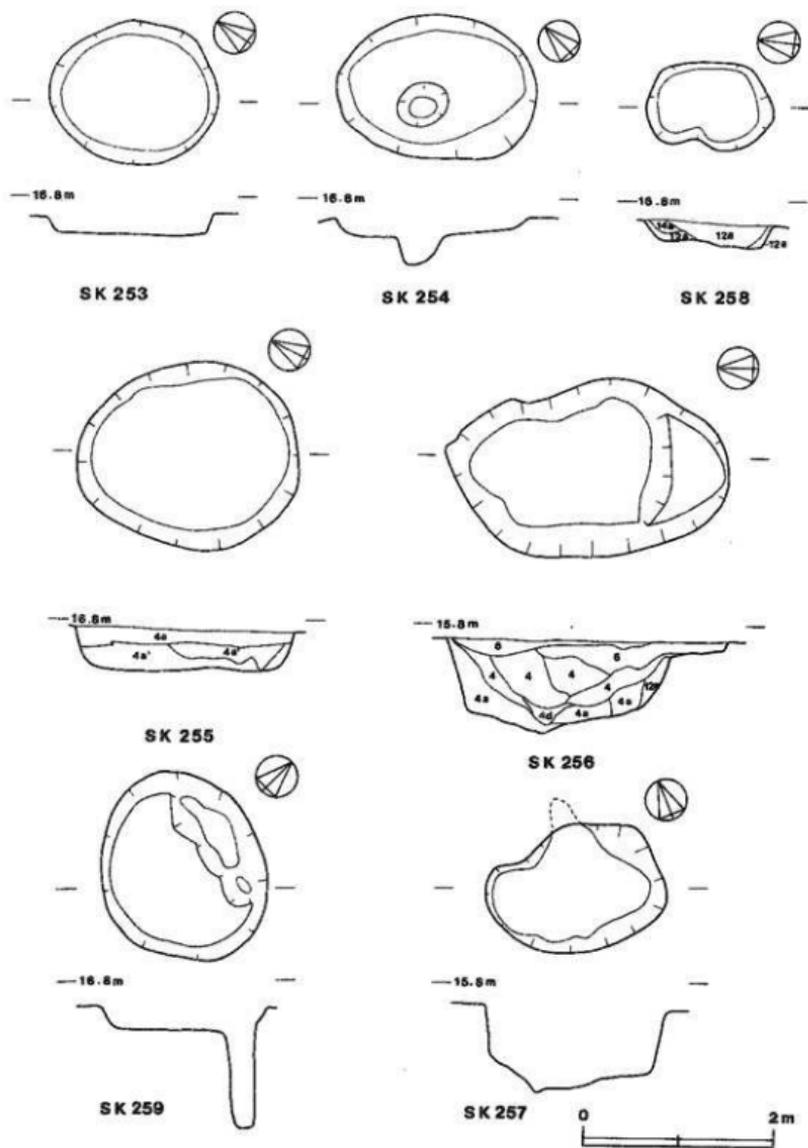
第147図 土坑実測図 (24)



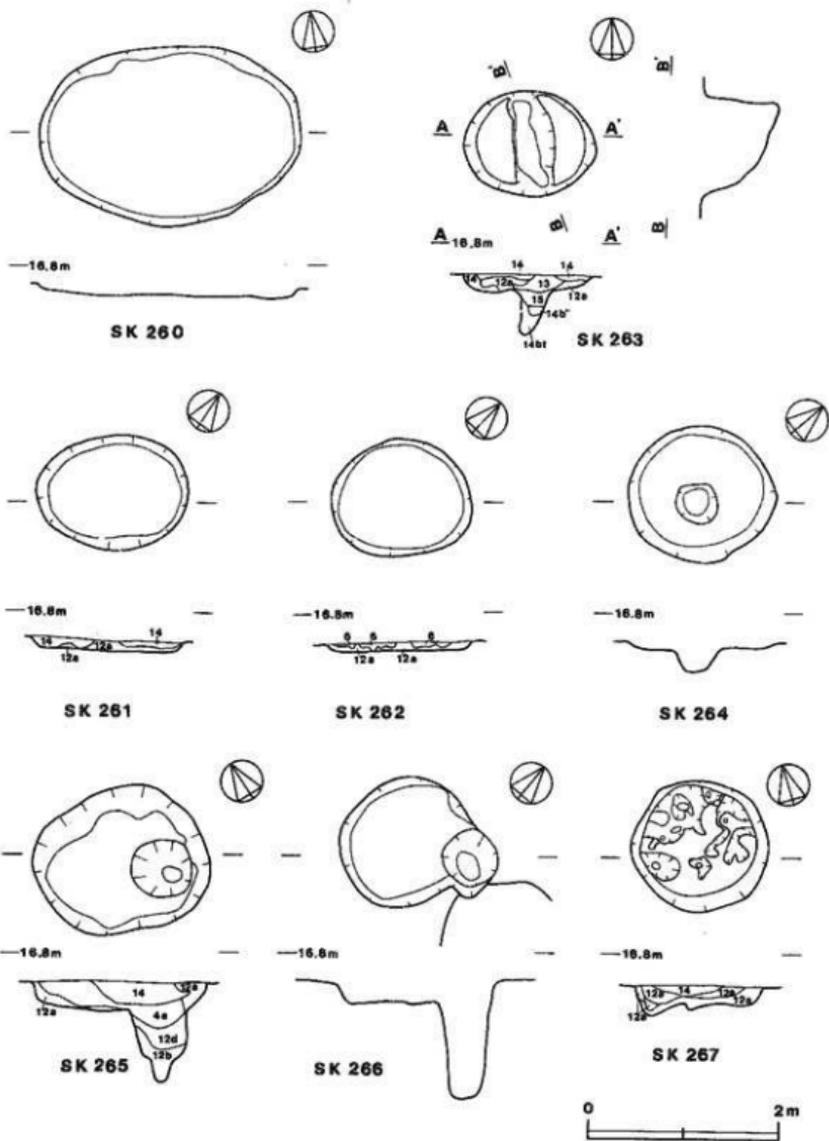
第148图 土壤实测图 (25)



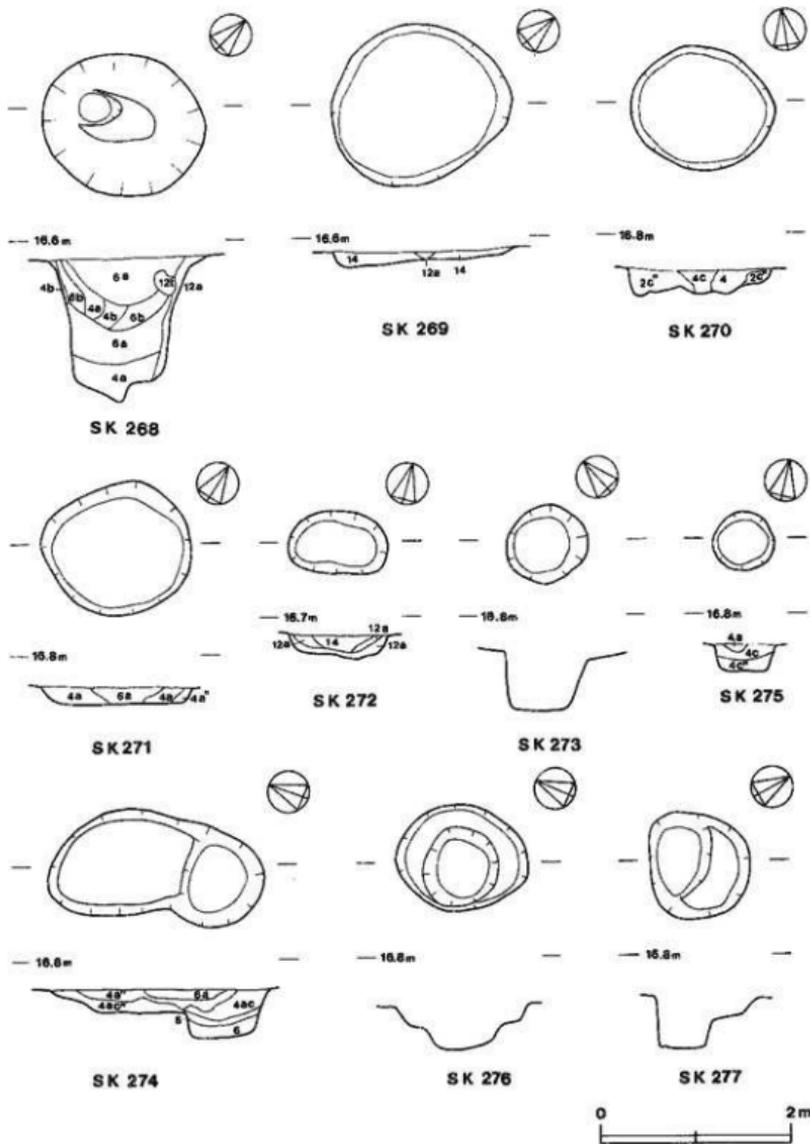
第149圖 土壤実測図 (26)



第150图 土壤横断面图 (27)

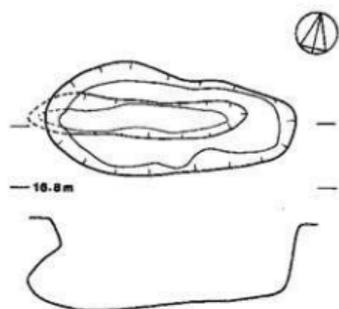


第151图 土坑实测图 (28)

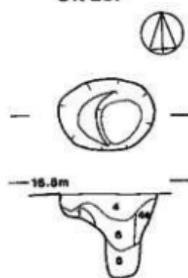


第152图 土壤实测图 (29)

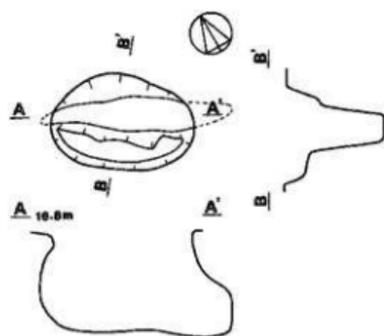




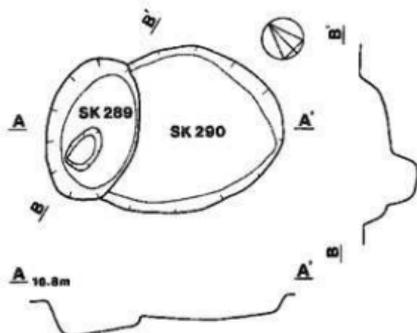
SK 287



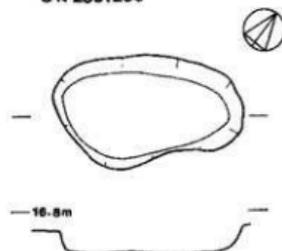
SK 291



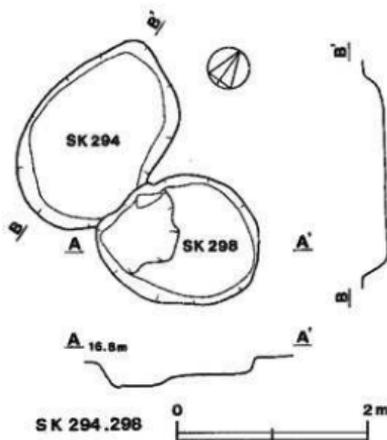
SK 293



SK 289.290



SK 292

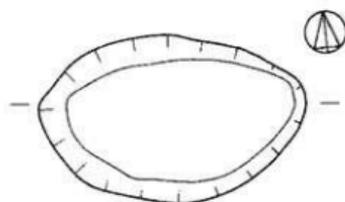


SK 294.298

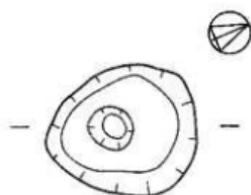
第154图 土壤夹测图 (31)



SK 295



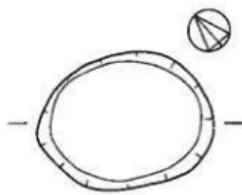
SK 299



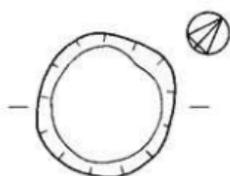
SK 296



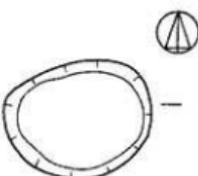
SK 297



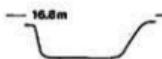
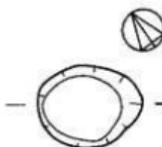
SK 301



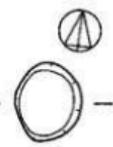
SK 300



SK 302



SK 303



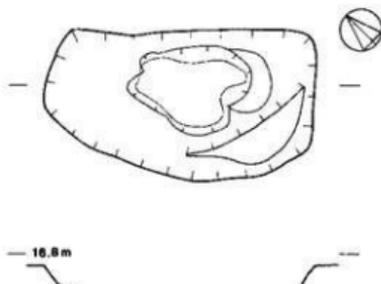
SK 304



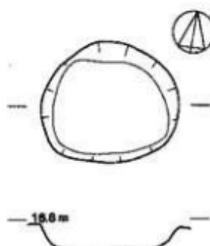
第155图 土壤実測図 (32)



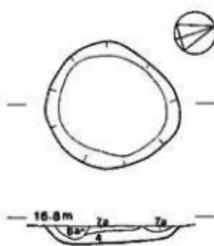
SK 305



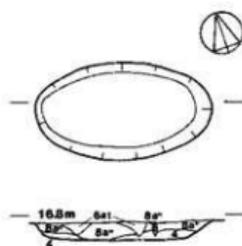
SK 306



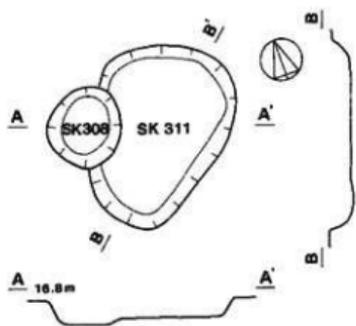
SK 307



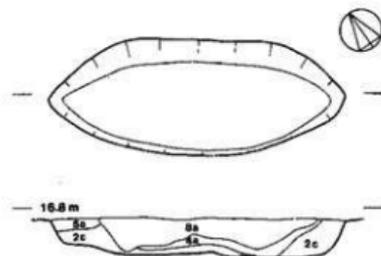
SK 310



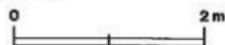
SK 312



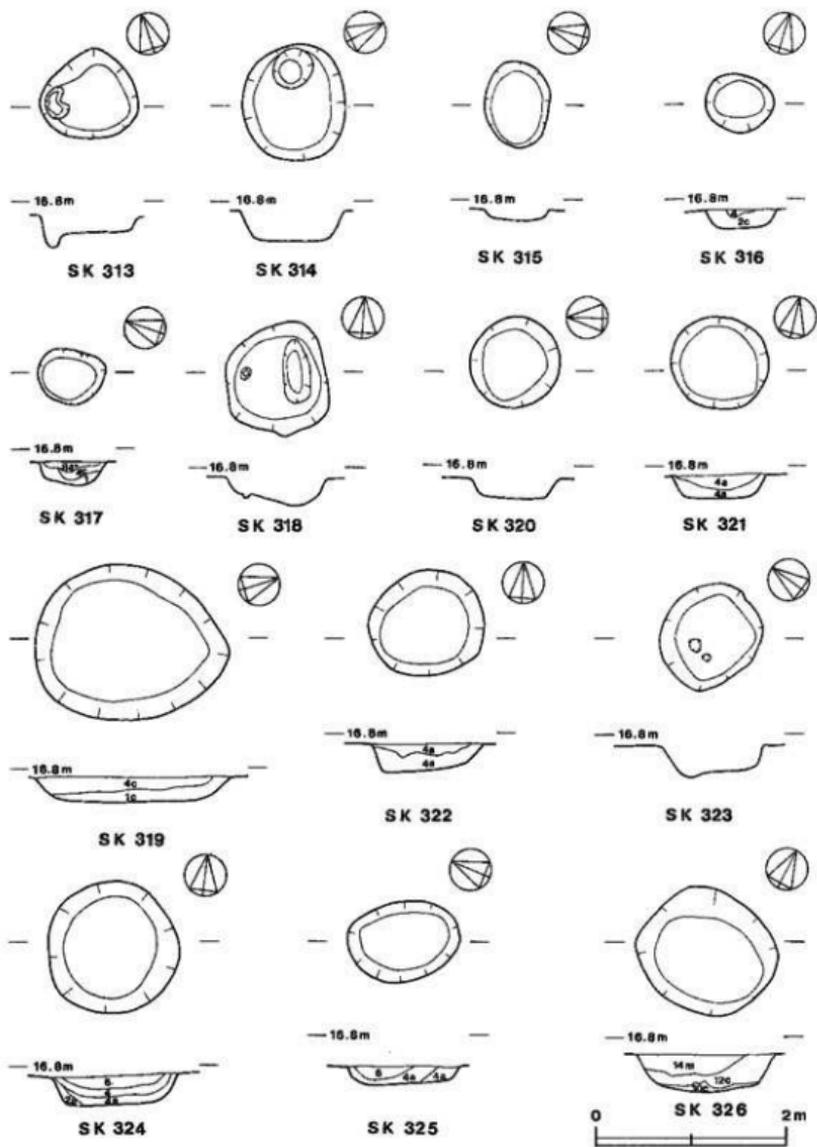
SK 308.311



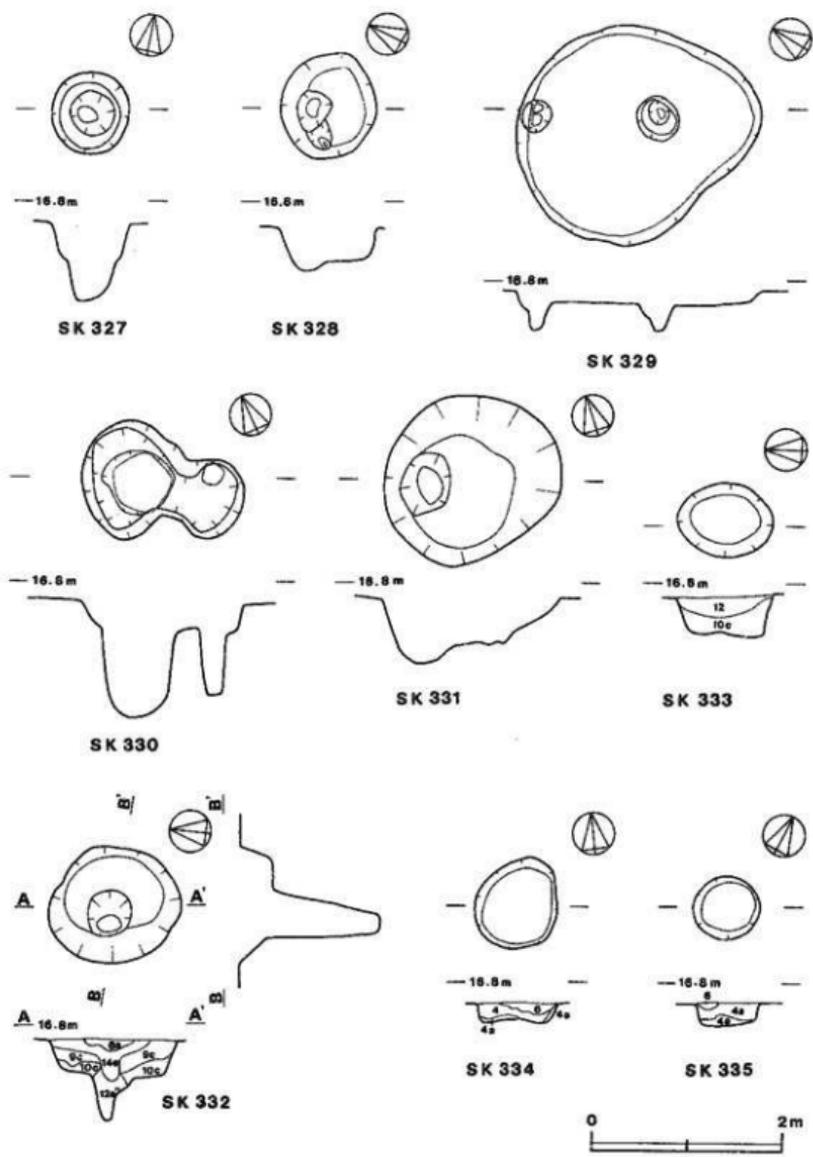
SK 309



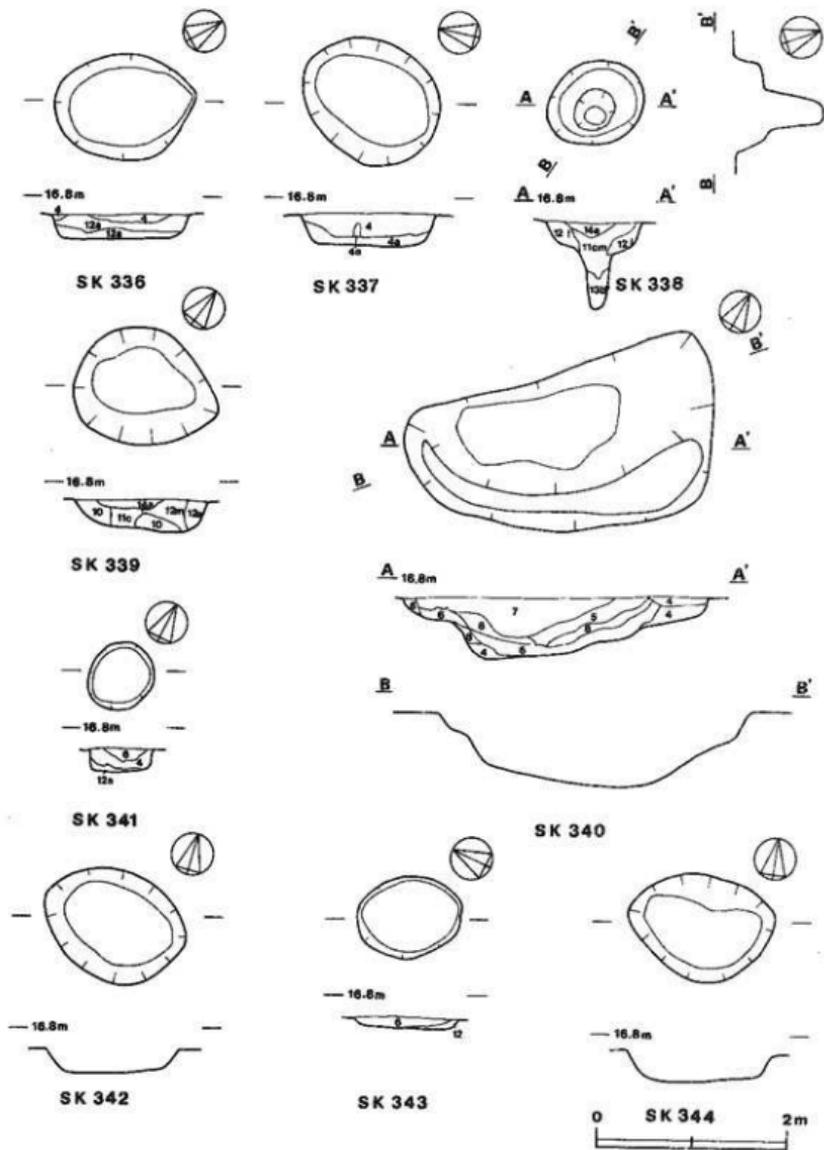
第156图 土壤实测图 (33)



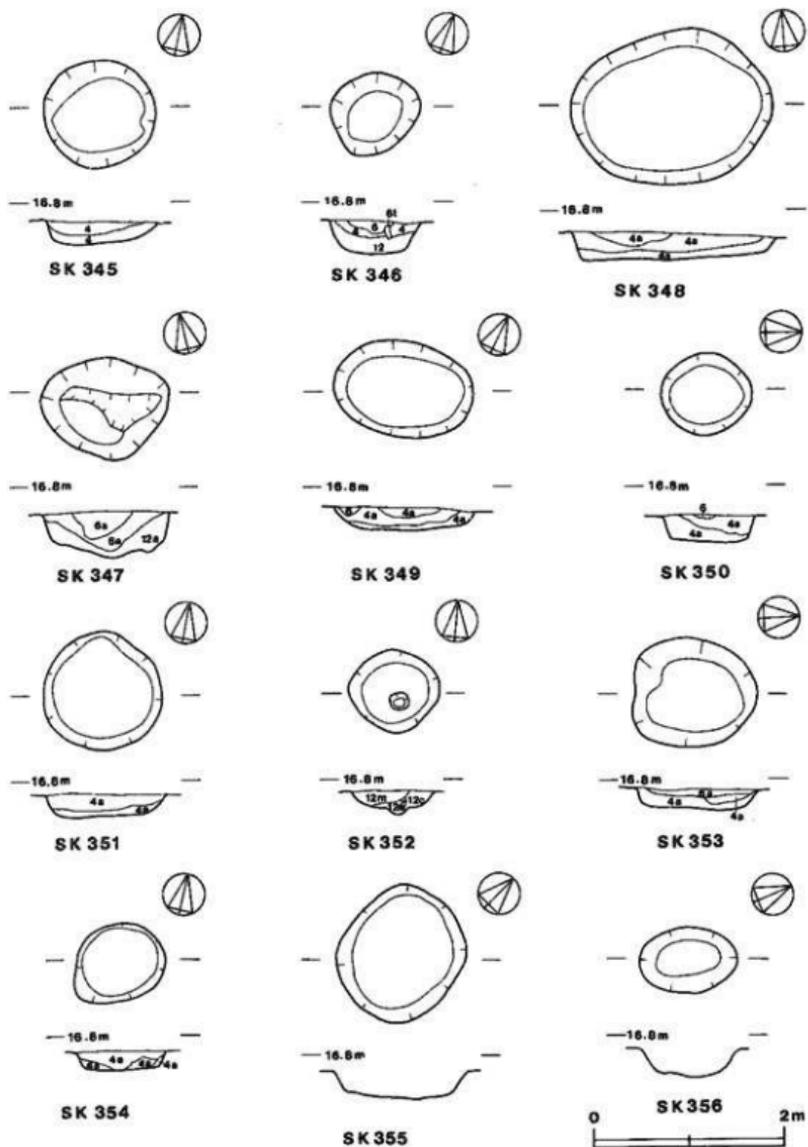
第157图 土坑实测图 (34)



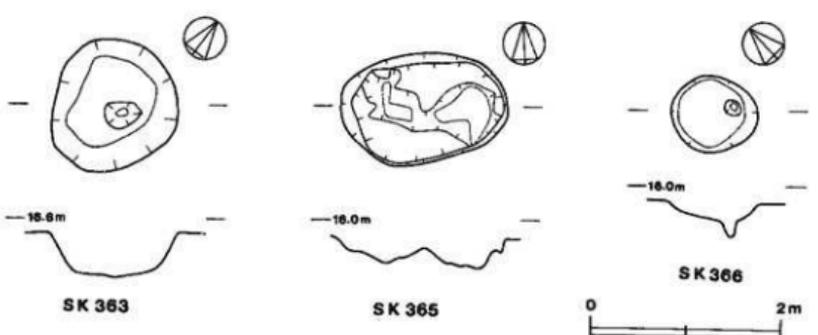
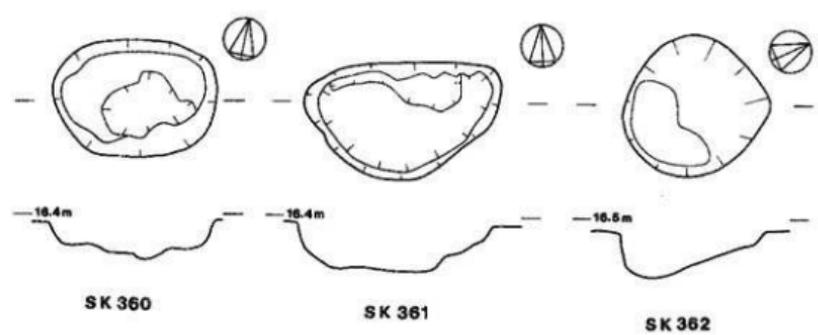
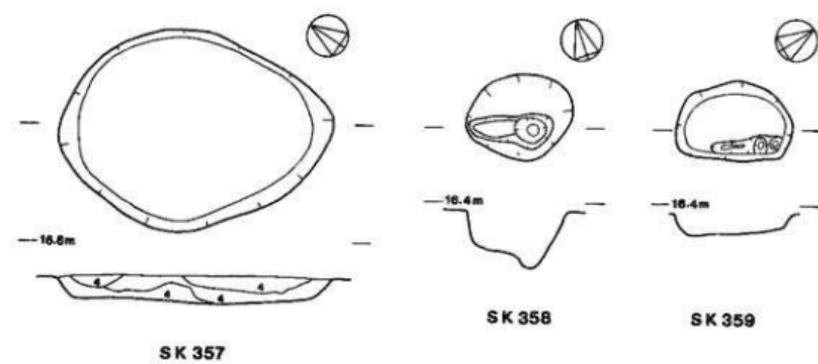
第158图 土壤实测图 (35)



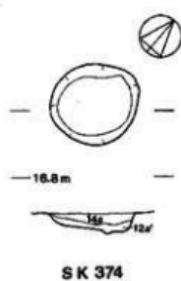
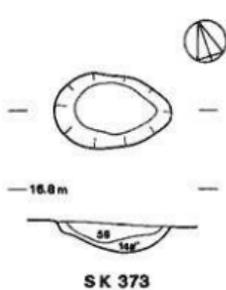
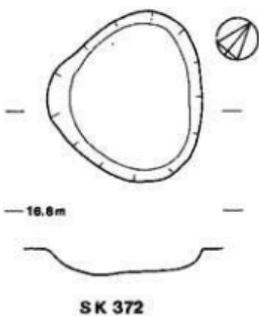
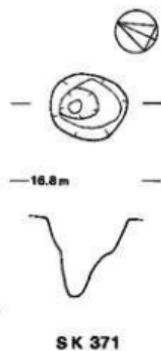
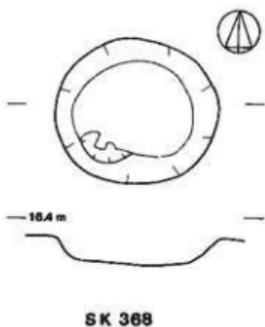
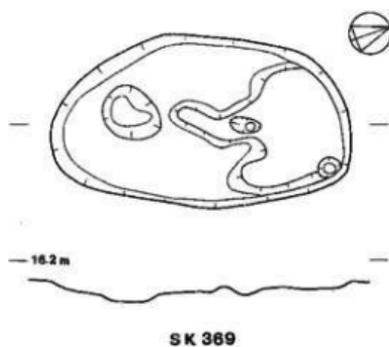
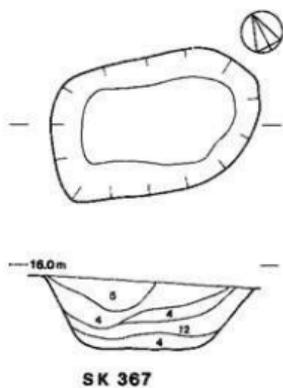
第159图 土壤实测图 (36)



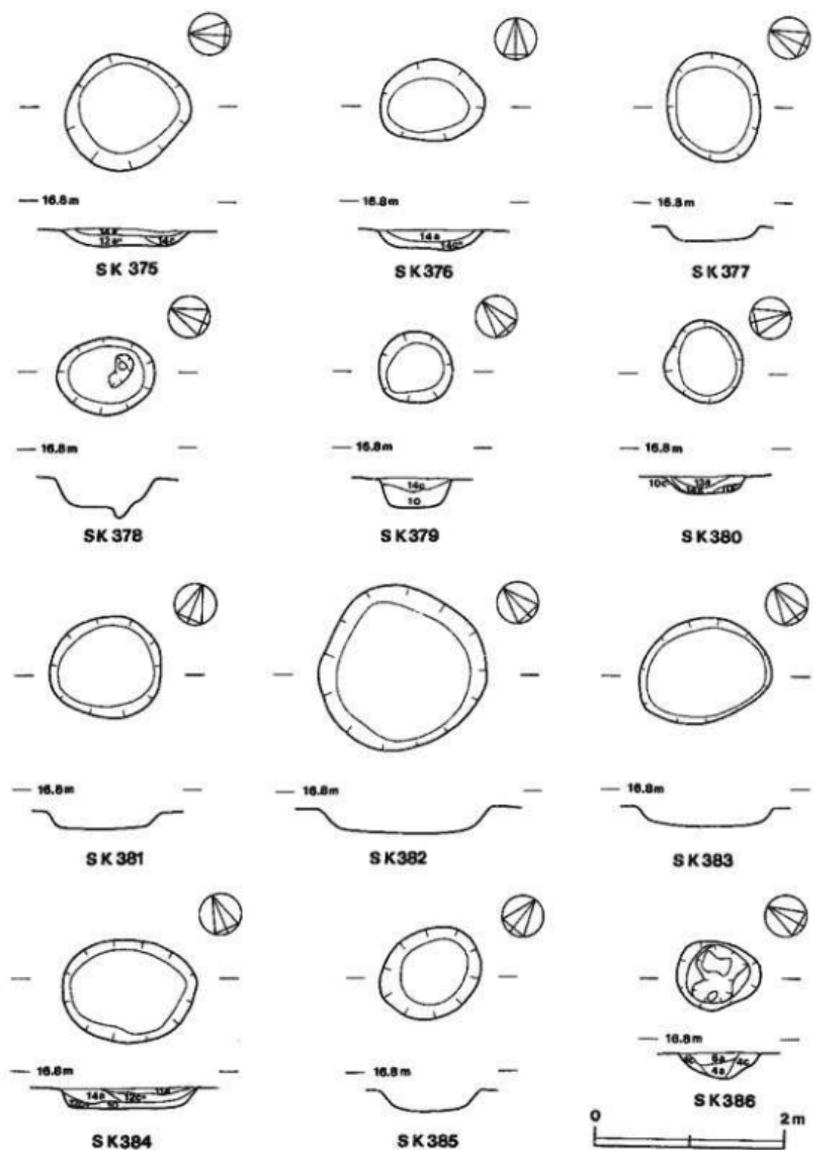
第160图 土坑突测图 (37)



第161图 土坑实测图 (38)

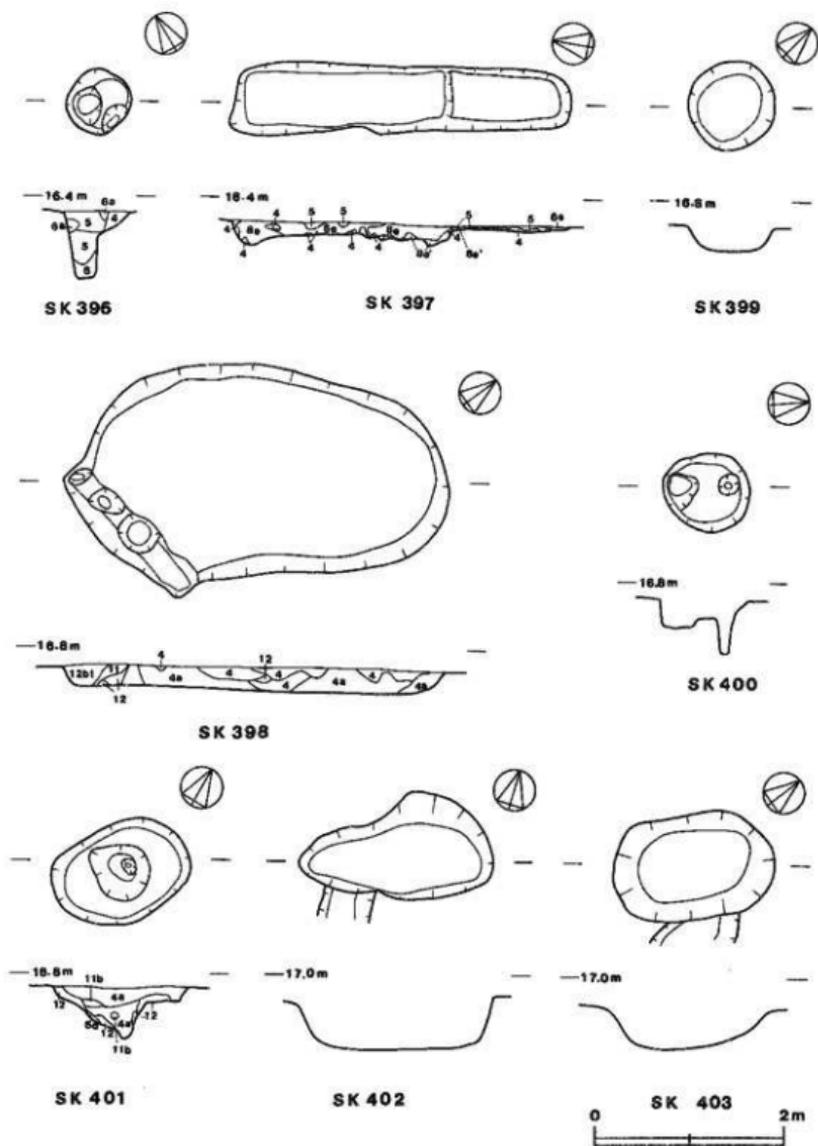


第162図 土坑実測図 (39)

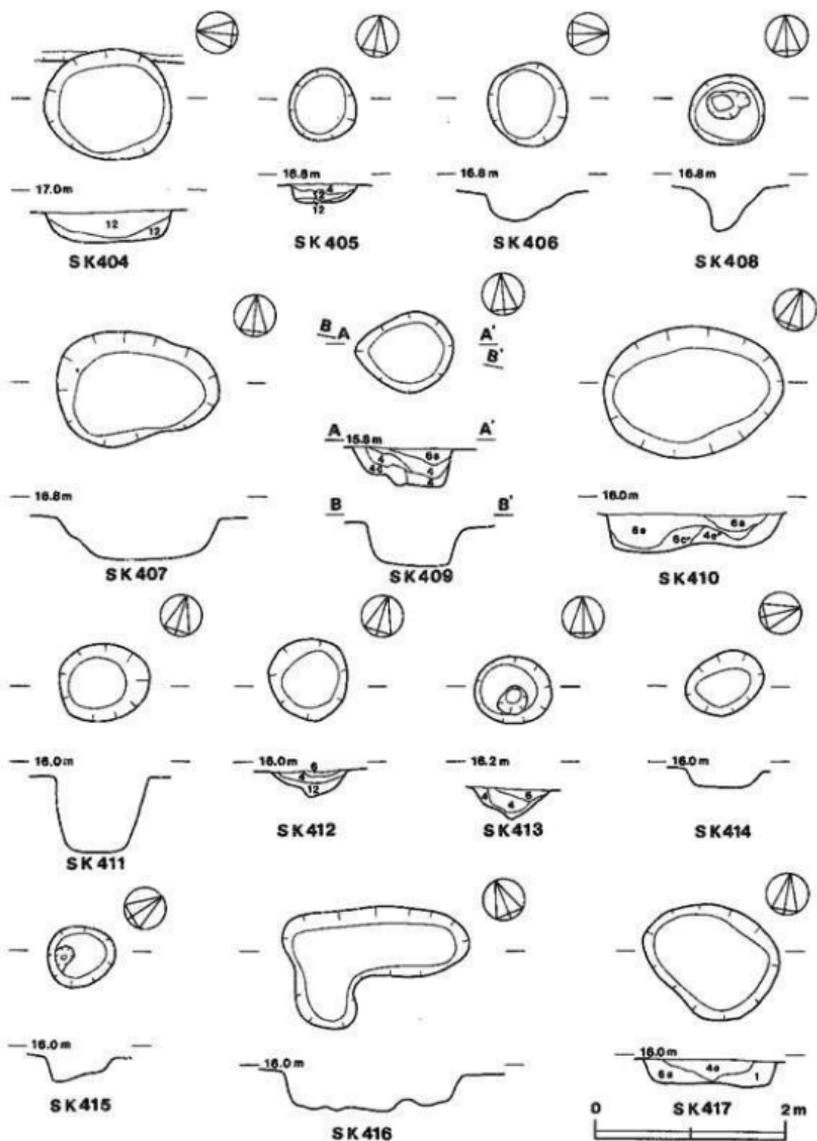


第163图 土壤実測図 (40)

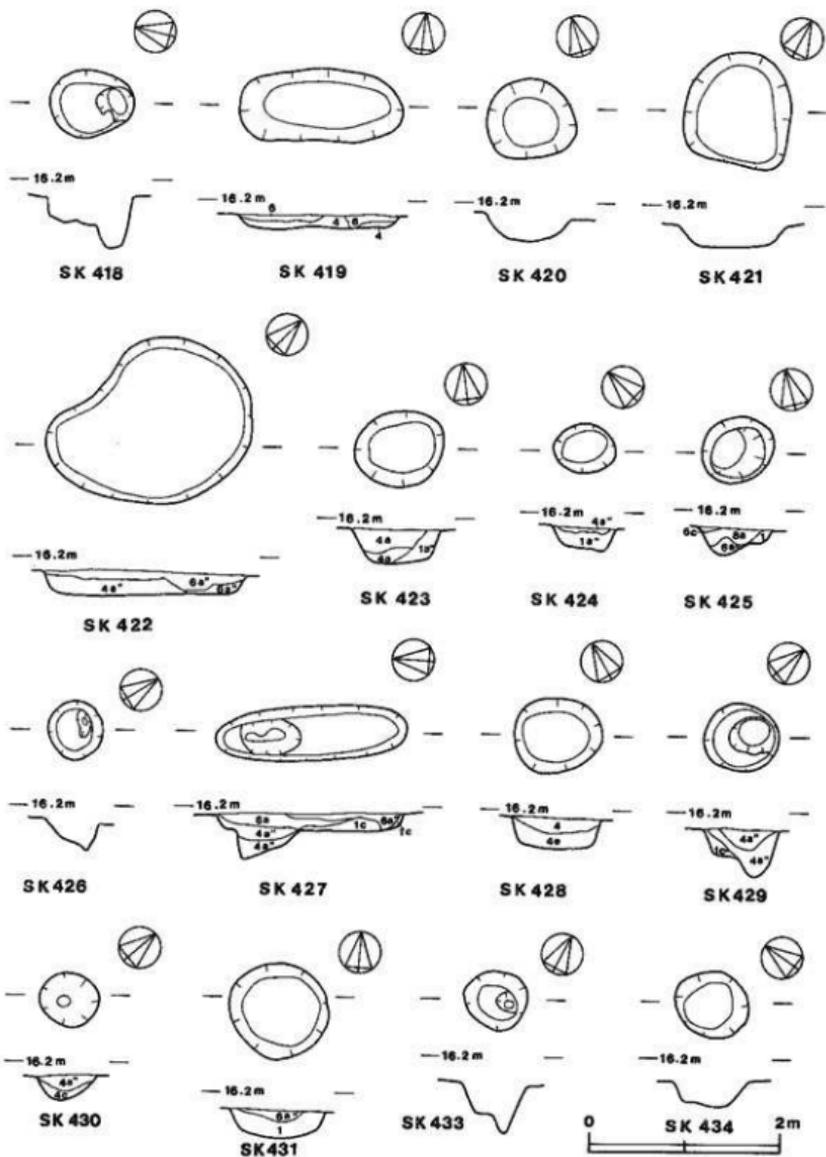




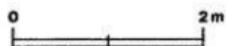
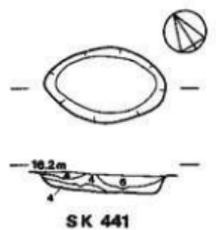
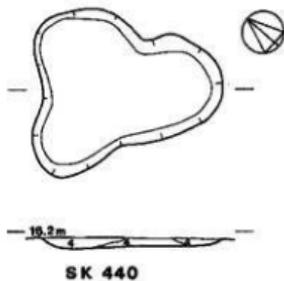
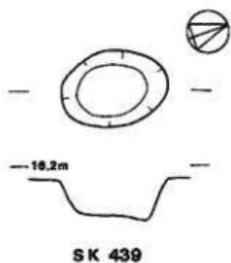
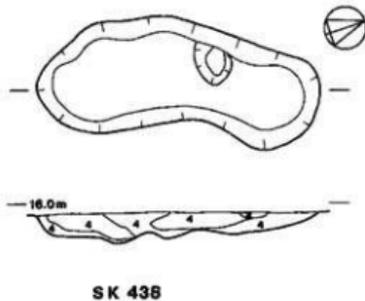
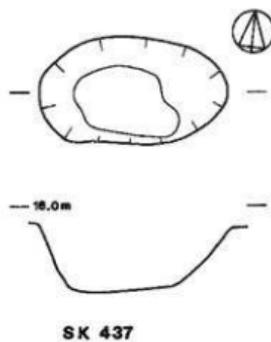
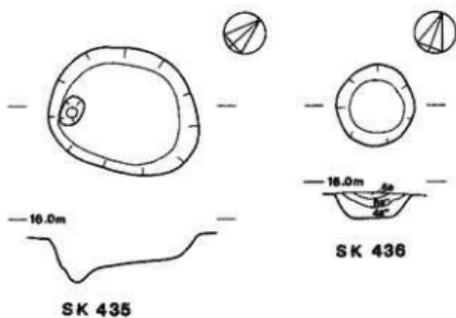
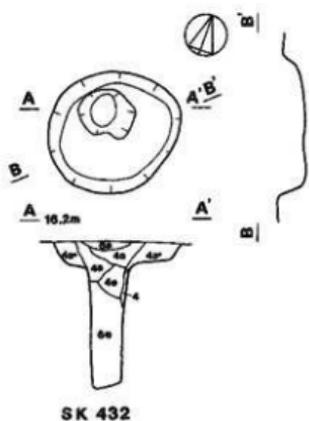
第165图 土壤探测图 (42)



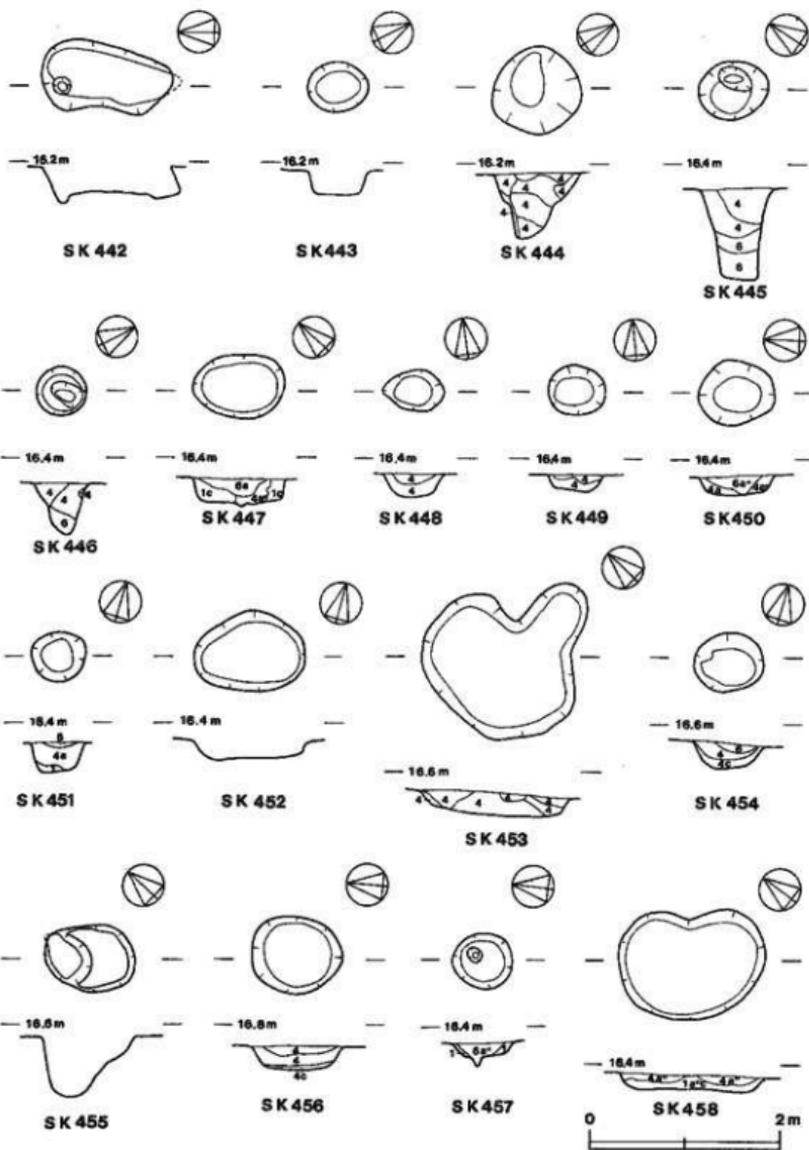
第166图 土壤実測図 (43)



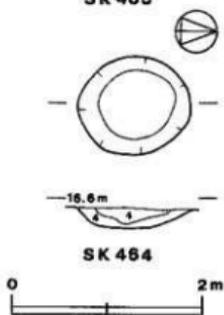
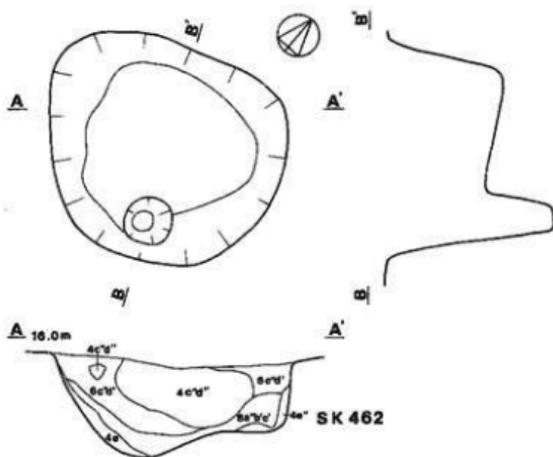
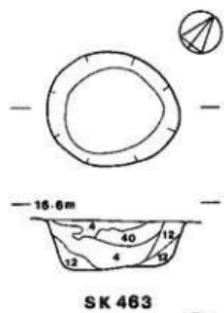
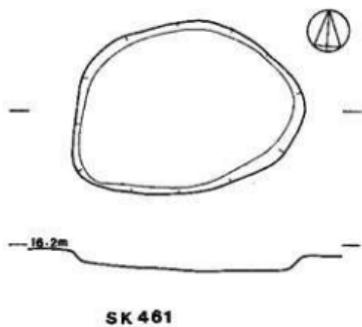
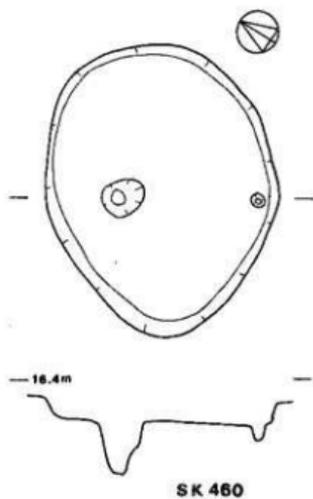
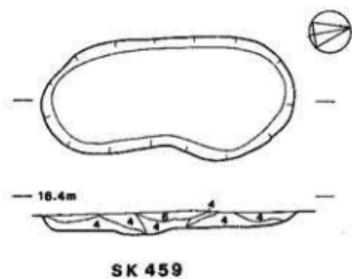
第167图 土壤实测图 (44)



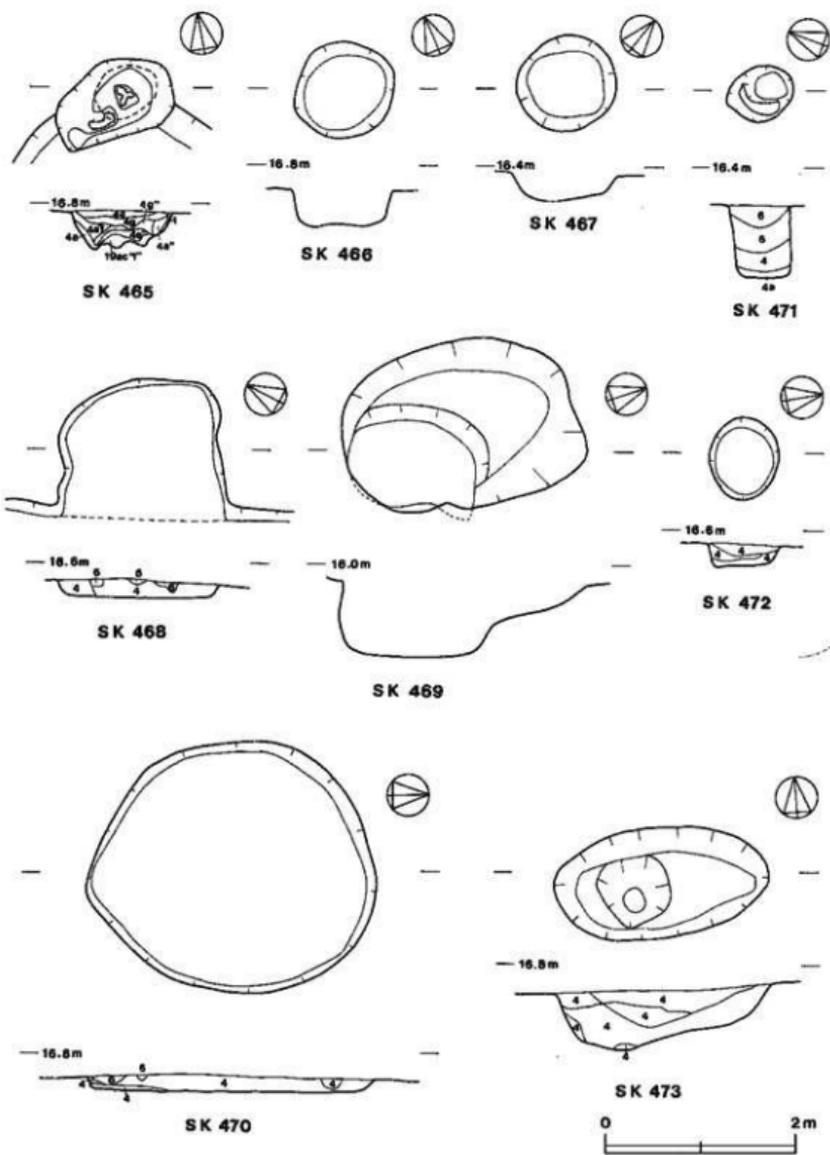
第168图 土壤实测图 (45)



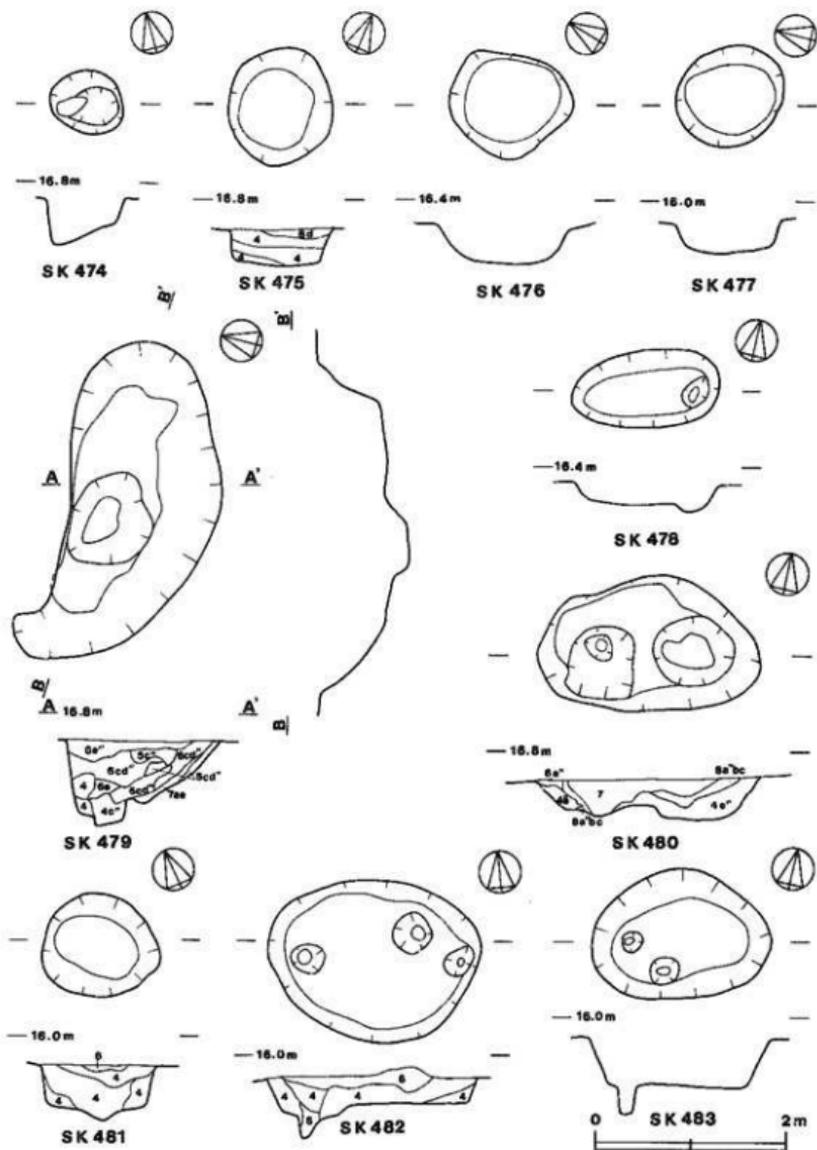
第169图 土壤实测图 (46)



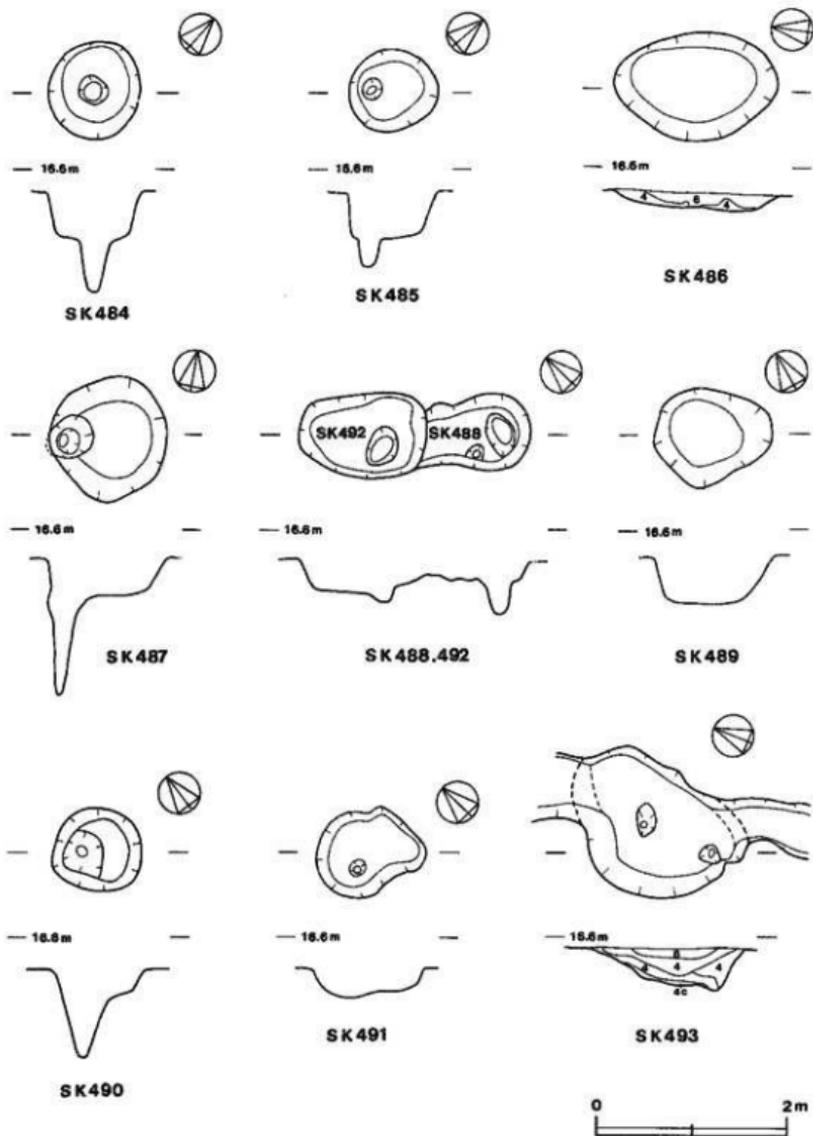
第170图 土壤実測図 (47)



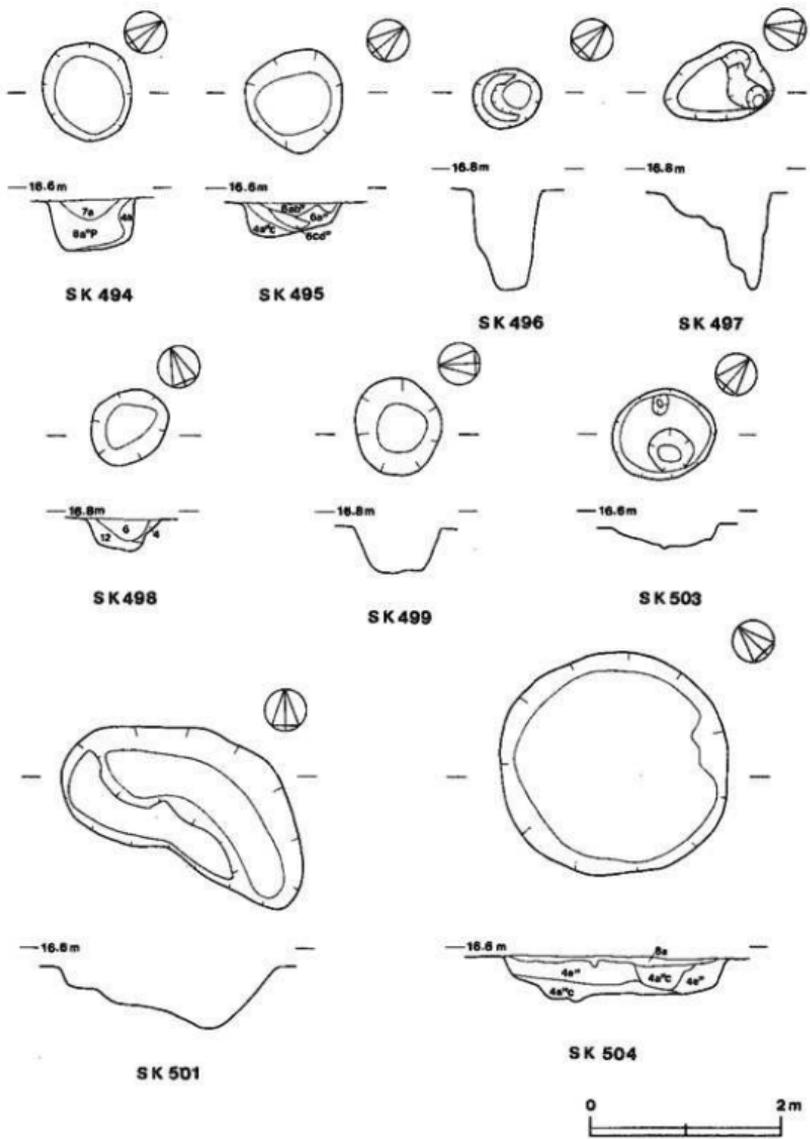
第171图 土壤実測図 (48)



第172图 土壤实测图 (49)



第173图 土壤实测图 (50)



第174图 土壤実測図 (51)

## 第4節 溝

当遺跡において番号を付して調査した溝の数は、Ⅰ次調査区で2条、Ⅱ次調査区で5条の計7条である。その後、遺構の状況を検討した結果、Ⅰ次調査区で検出された第1号溝と第2号溝とは明確な時期差は認められず、覆土の状況等から同一の溝と考え、第1号溝として取り扱うことにした。このため、Ⅱ次調査区で番号を付して調査した第3～7号溝は、溝の番号を1番ずつ繰り上げ第2～6号溝とした。その結果、当遺跡における整理後の溝の数は6条となった。

当遺跡から検出された溝は、いずれも覆土に締まりがなく、ローム面への掘り込みが浅いことが特徴である。時期を決定づける遺物は出土しておらず、性格も不明であるが、状況から総合的に判断して、近年に掘り込まれた根切溝のようなものと思われる。以下、それぞれの溝の状況について記述する。

### 第1号溝 (第175図)

本跡は、Ⅰ次調査区の北西部E2・F2区に確認された溝である。E2es区に検出された部分が調査区内における本跡の北端部となるが、その一部はさらに北側の調査区外へと延びている。

溝の主軸方向はN-8°-Wを指しており、E2es区から南東方向に48m直線的に延びてF3go区に達している。溝はさらに、北端部から46mの位置で「L」状に92°の角度で屈曲し、N-80°-Eに方向を変え、南西方向に28m直線的に延びている。北側で第19・21号土壌を掘り込んでおり、北端部から32mの位置で第27号土壌と重複している。

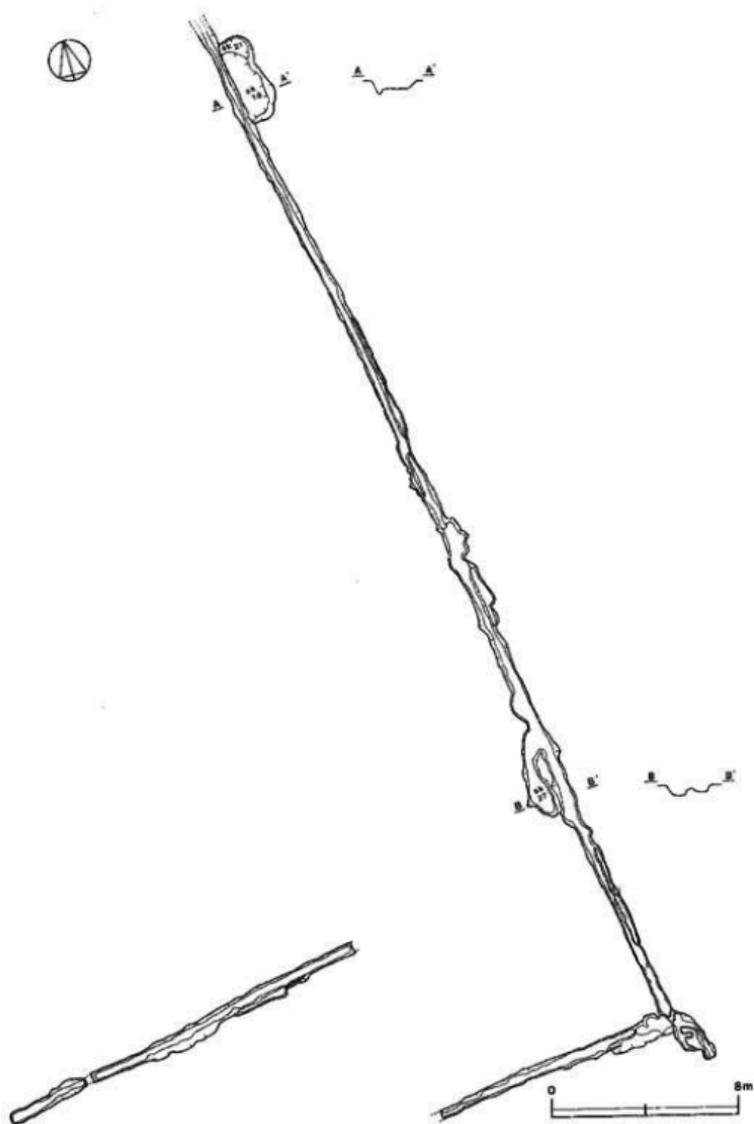
確認面における上幅は、30～100cmであり、平均50cmほどである。断面形状は「U」状を呈しており、確認面から溝底面までの深さは36～64cmである。

溝内の覆土は、上層にローム粒子やロームブロックを少量含む暗褐色土が、下層にはローム粒子を多く含む褐色土が自然堆積しており、軟らかく締まりがない。ごく近年に堆積したと思われる。

遺物は、縄文土器片20点、石6点が出土しているが、すべて覆土中からの出土で、流れ込んだものであり、溝に直接関連する遺物の出土はみられない。

### 第2号溝 (第176図)

本跡は、Ⅱ次調査区の西部D5区に確認された溝である。D5h4区に位置する第260号土壌にその西端を発し、わずかに湾曲しながら南東方向に延び、D5is区に達している。第260号土壌との新旧関係は明確でなく、第260号土壌は本跡の一部とも考えられる。



第175圖 第1号溝突洲図

D5h4区からD5h6区に延びる溝の西側部10mほどは、主軸方向N-84°-Wを指しており、D5h7区でわずかに南側に湾曲しN-71°-Wに方向を変えている。溝の全長は約18mである。

確認面における溝の上幅は、最も広い所で118cm、最もせまい所で27cmであり、幅は40cm前後の所が多い。確認面から溝底面までの深さは5~48cmであるが、第260号土壌との重複部から南東4mの部分は最大幅118cmで、深さも48cmと最も深い。また、溝の南東端は幅81cm、深さ23cmである。溝底面はローム質土で西側に木根による攪乱と思われる小ピットが見られ、やや凸凹状を呈している。断面形状は「」状を呈し、壁は概して緩やかに立ち上がっている。

溝内の覆土は、上層にローム粒子を少量含みやや縮まりを帯びた暗褐色土が、下層にローム粒子を多く含む褐色土が自然堆積している。

遺物は、覆土中から縄文土器の細片が7点出土しているが、いずれも周囲から流れ込んだものであり、本跡に関連する遺物は出土していない。

### 第3号溝 (第177図)

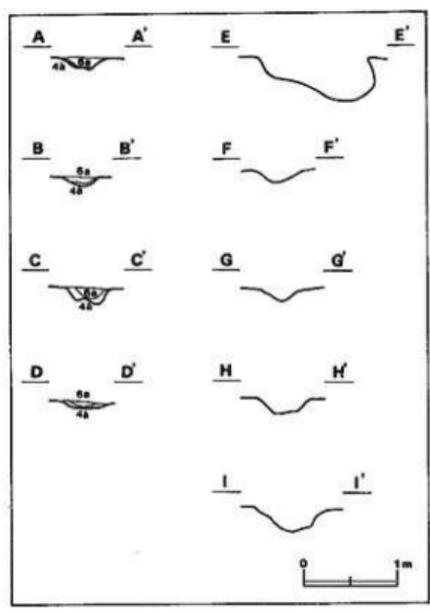
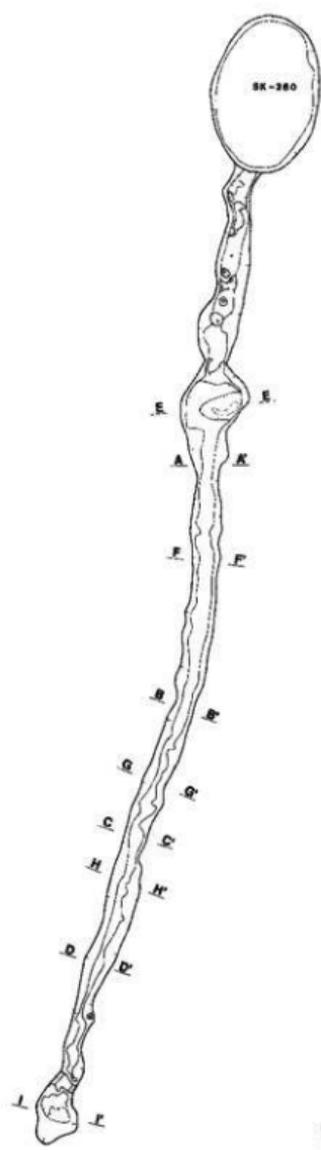
本跡は、Ⅱ次調査区のほぼ中央部D6h3区に確認された溝である。D5h4区に位置する第325号土壌の北東2.3mにその南西端を発し、D6g4区で三方向に分岐する。溝の中心部(A)は、北東方向にほぼ直線的に延び、D6e4区に達している。第2号溝とは北東方向に17mほど離れている。

溝の全長は約32mであり、主軸方向はN-72.5°-Wを指している。溝の南西端を基点として、北東方向に2mほどの位置で一部(B)は大きく屈曲し、N-57.5°-Wに方向を変えている。長さは1.9mである。また、北東に6.8mの位置で(C)、(D)の二方向に分岐する。(C)は、主軸方向N-59.5°-Wを指し、分岐点から北西方向に7.5mほど直線的に延びている。(C)の一部は、さらに分岐点から2mの位置で、北東方向に大きく湾曲し、「コ」の字状を描きながらさらに小さく分岐し、また(A)に接続している。(D)は、主軸方向N-50°-Eを指し、約3mほど北東方向に延びている。

遺構確認面における溝の上幅は、25~50cmである。溝底面までの深さは9~85cmであり、平均で20cm前後と比較的浅い。溝は、(A)から分岐する(B)、(C)、(D)の端部に向かって傾斜しており、特に(C)は、端部で72cmの深さを有し、北東方向に「コ」の字状に湾曲する部分の中央部は、57~85cmと深くなっている。断面形状は、全体的に「」状や「」状を呈しており、溝底面はローム質で硬く、粘性を帯びている。

溝内の覆土は、上層から中層にかけて、ローム粒子を含む軟質の黒褐色土や暗褐色土が、下層には褐色土が自然堆積しているが、一部に木根による攪乱が見られる。

遺物は、縄文土器片が43点、石が2点出土しているが、いずれも覆土中から出土しており周囲から流れ込んだものと思われる。本跡に関連する遺物は出土していない。



第176图 第2号测线测图

#### 第4号溝 (第178図)

本跡は、Ⅱ次調査区の東端部D7c9区からE8g1区にかけて確認された溝であり、調査区の東側の農道と並行して直線的に南北方向に延びている。その北端部から南向きに約38mの位置で、第476号土壌と重複し切られている。

溝の全長は約57mであり、北側は主軸方向N-6°-Wを指しているが、D7c9区の溝の北端部から南に16mの位置でN-9°-Wに方向を変え、南端部のE8g1区に達している。

確認面における溝の上幅は、35~90cmであり、北側で幅が広く南側でやや幅が狭くなっている。平均幅は50cmほどである。確認面から溝底面までの深さは8~20cmほどであり、北端部から中央部にかけてわずかに傾斜し、中央部から南端部にかけてしだいに浅くなっている。断面形状は、北側で「┌」状、中央部で「U」状、南側で「┐」状を呈している。全体としてローム面への掘り込みは浅く、溝底面はなだらかで硬い。

溝内の覆土は、上層にローム粒子を極少量含む軟質のロームが、下層にはやや締めりを帯びたロームが自然堆積している。南端部付近の覆土中には、ロームブロックが極少量含まれている。

遺物は、縄文土器片が49点、石が3点出土しているが、いずれも周囲から流れ込んだものであり、本跡に関する遺物は出土していない。

#### 第5号溝 (第179図)

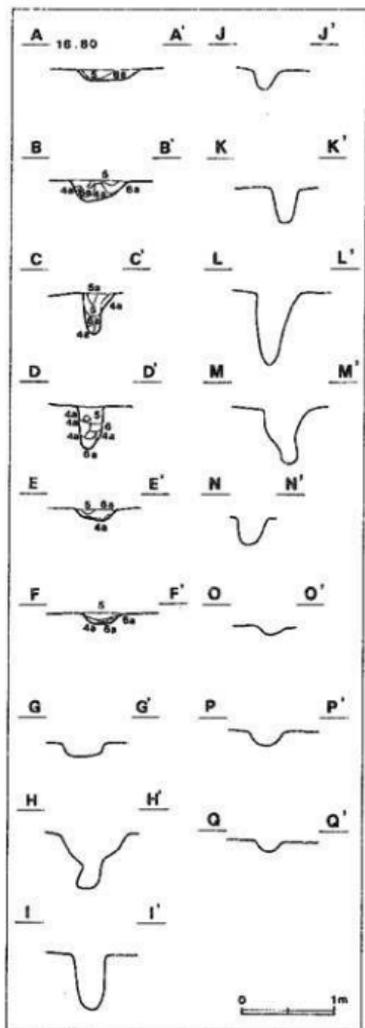
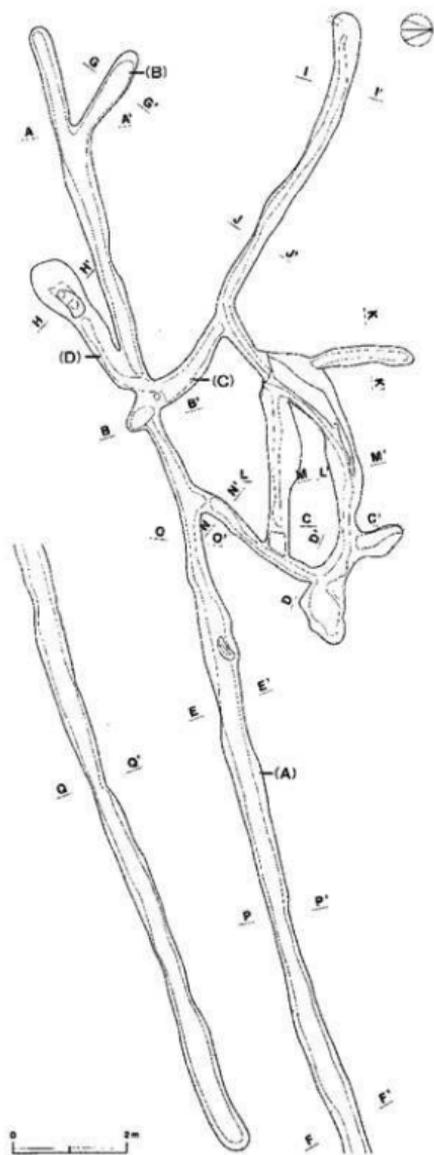
本跡は、Ⅱ次調査区の北東部D7区に確認された溝であり、D7c7区にその南西端部を発し、第43号住居跡の壁の一部や覆土を掘り込み、東側の調査区外へと延びている。

確認された溝の長さは5mほどであり、南西端部から3mまでは主軸方向N-70°-Wを指し、そこからわずかにN-42.5°-Eの方向に向きを変えながら、東側の調査区外へ延びている。

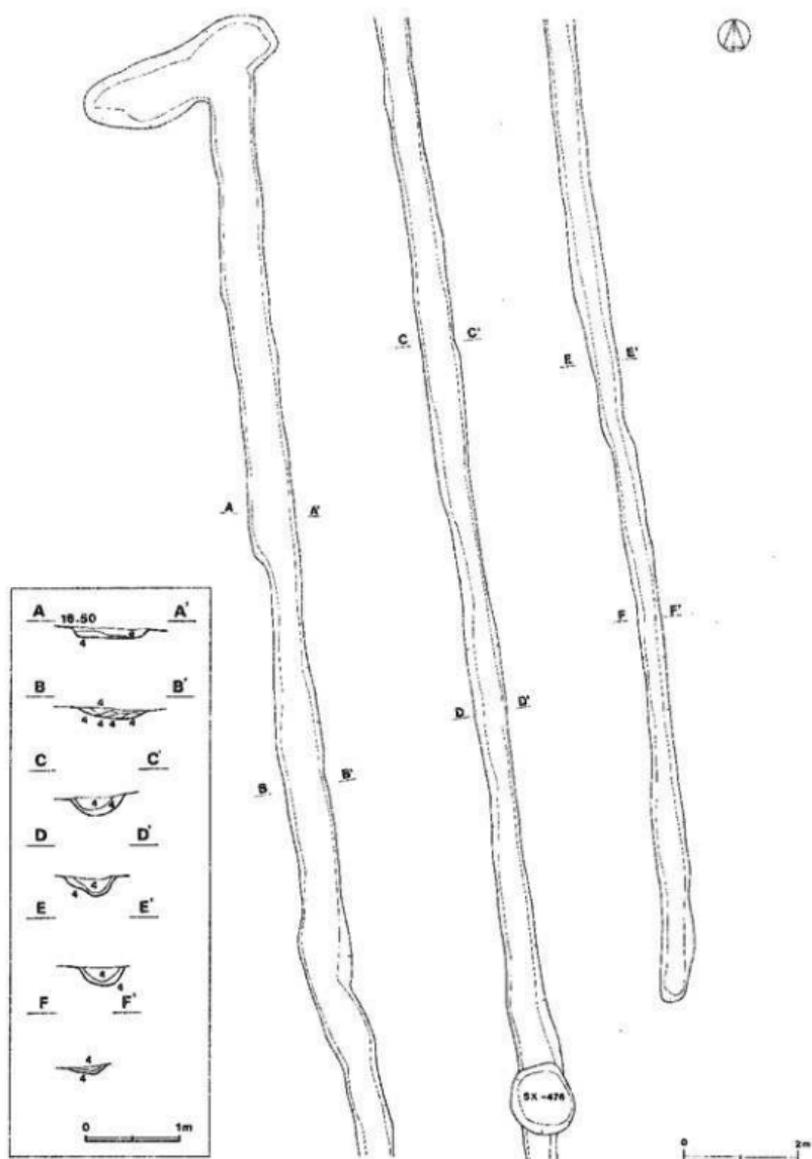
確認面における溝の上幅は、60~90cmであり、南西端部から北東方向に3mほどの間が最大幅を示している。溝底面までの深さは10~26cmであり、北東方向にやや傾斜している。高低差は16cmである。断面形状は「┐」状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。溝底面はローム質で、ほぼ平坦であり硬く締まっている。

溝内の覆土は、上層にローム粒子を含むやや締めりを帯びた暗褐色土が、下層には褐色土が自然堆積している。溝は、表土の残存する東側の調査区外との接点部の土層から、確認面よりも40cmほど上部から掘り込まれていることが観察され、本跡の本来の深さは50~60cm前後であったものと思われる。現地表から溝の掘り込み面までの深さは50cmである。

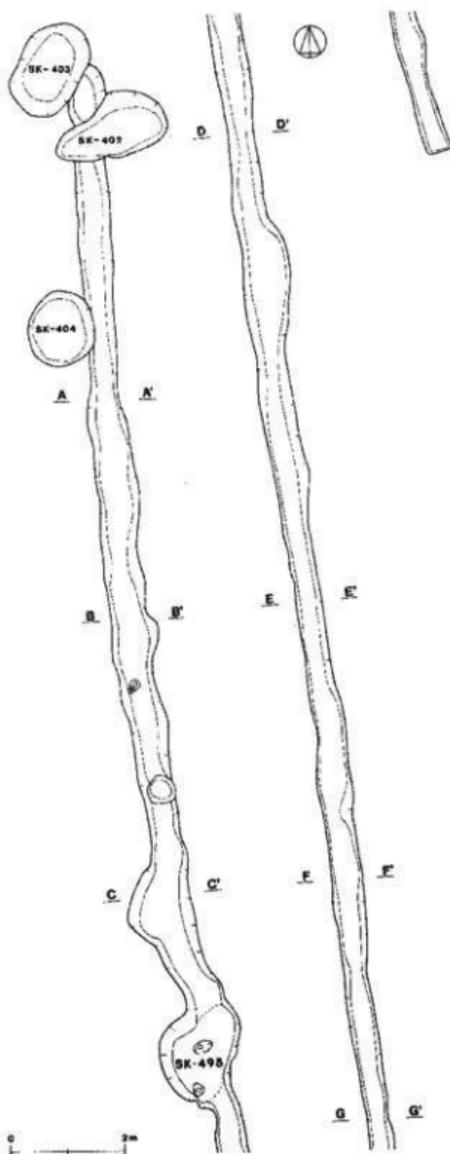
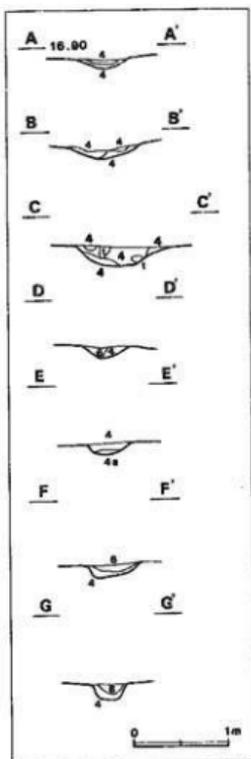
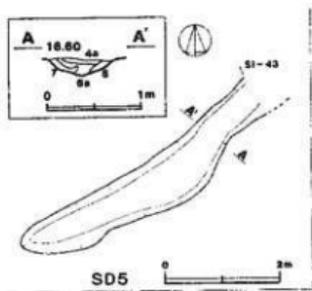
遺物は、覆土中から縄文土器片が10点ほど出土しているが、周囲から流れ込んだものと思われる。本跡に関連する遺物は出土していない。



第177图 第3号溝突測図



第178图 第4号沟渠测图



第179图 第5·6号清淤测图

## 第6号溝 (第179図)

本跡は、Ⅱ次調査区の南部E6js区からG6as区にかけて確認された溝である。北端部は、E6js区に位置する第403号土壌と重複し、ほぼ直線的に南東方向に延び、さらに南側の調査区外へと延びている。北端部で第402・403号土壌と重複し、北端部から南東へ4.5mの位置で第404号土壌の東壁とその一部を接し、17.5mの位置で第493号土壌と重複している。重複する4基の上壌を本跡が掘り込んでいる。

E6js区に検出された溝の北端部の主軸方向は、N-4.5°-Wを指し、南東へ5.6mほどの位置でN-9.5°-Wに方向を変え、ほぼ直線的に南側の調査区外へと延びている。調査区内において検出された溝の全長は、約42mである。

確認面における溝の上幅は、最も幅の広い所で118cm、最もせまい所で45cmであり、幅50cm前後の所が多い。溝底面までの深さは10~20cmと浅い。断面形状は「U」状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。底面及び壁面ともローム質でやや締まっている。底面には小ビットが数か所検出されているが、いずれも形状や覆土の状態から木根による攪乱と思われる。壁面は、緩やかに立ち上がっている。

溝内には、上層にローム粒子を極少量含む暗褐色土が、下層に褐色土が自然堆積している。覆土は締まりがなく軟弱である。

遺物は、覆土中から縄文土器片が数点出土しているが、いずれも周囲から流れ込んだものと思われる。本跡に関連する遺物は出土していない。

# 写 真 图 版



遺跡周辺遠景



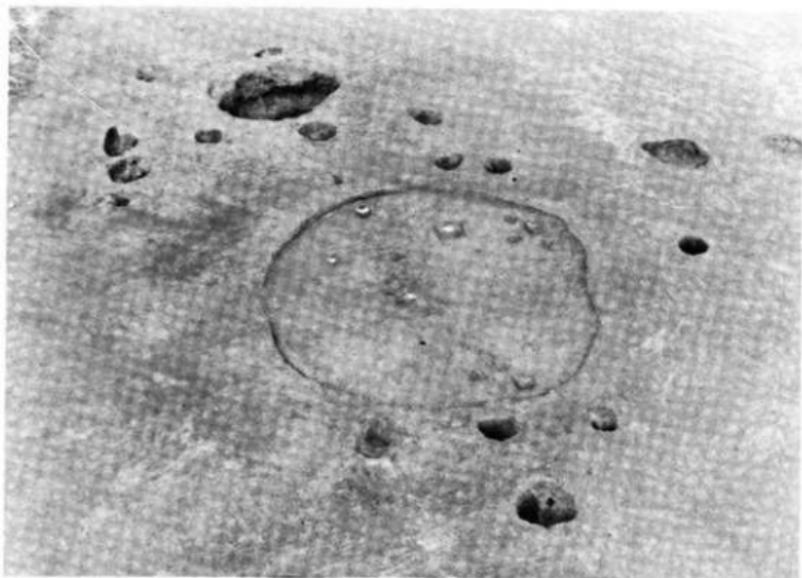
遺構確認状況



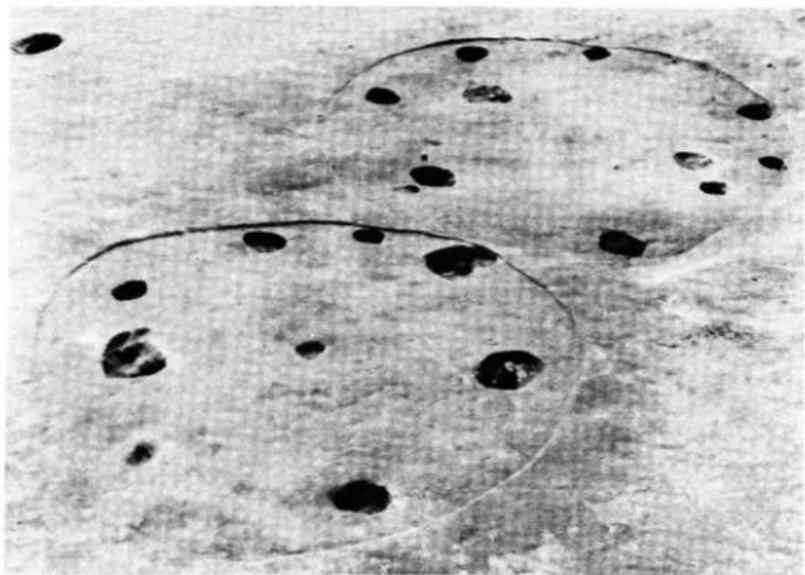
調査後全景 (Ⅱ次調査区)



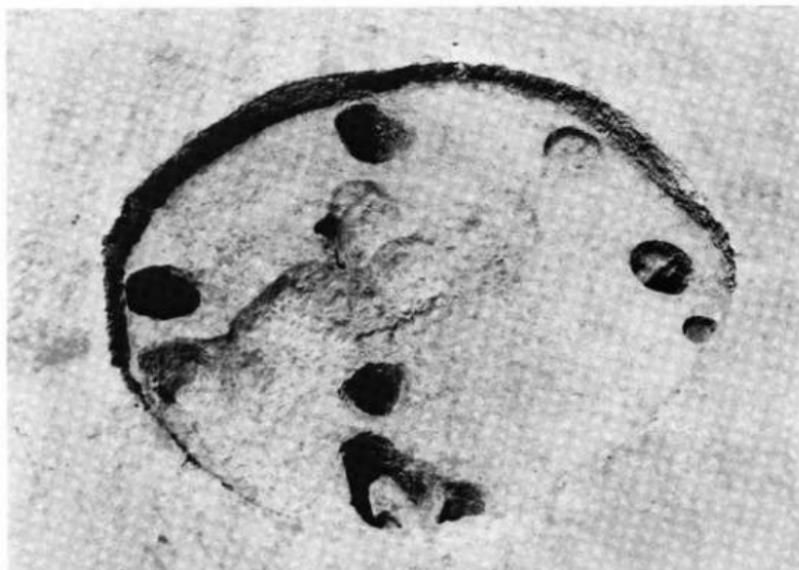
大谷津B遺跡，簡戸A・B遺跡遠景



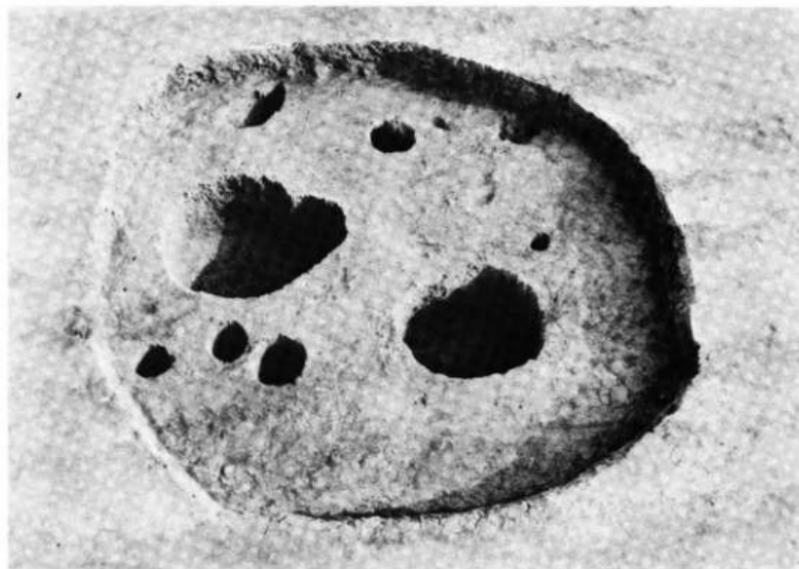
第 1 号住居跡



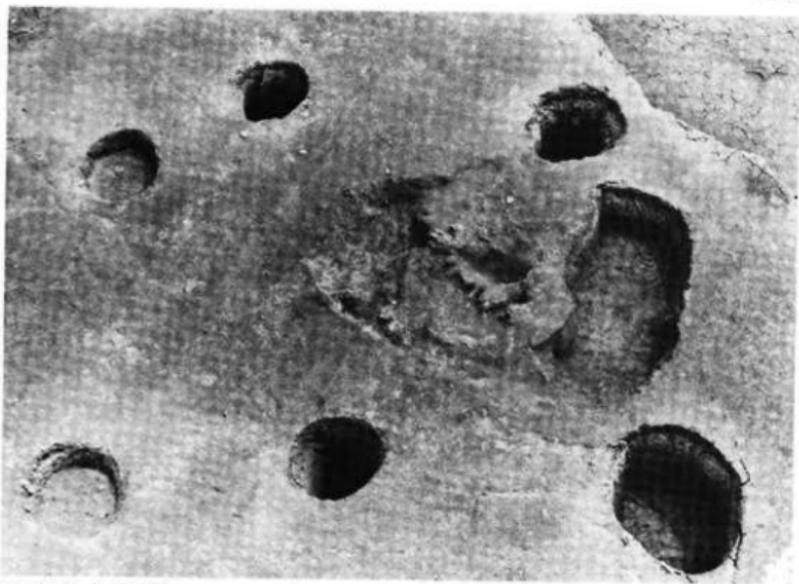
第 2・3 号住居跡



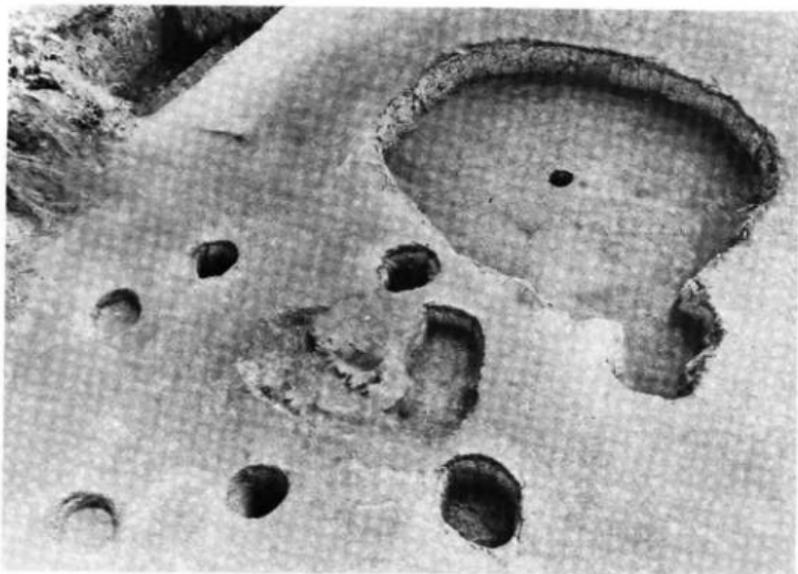
第 4 号 住 居 跡



第 5 号 住 居 跡



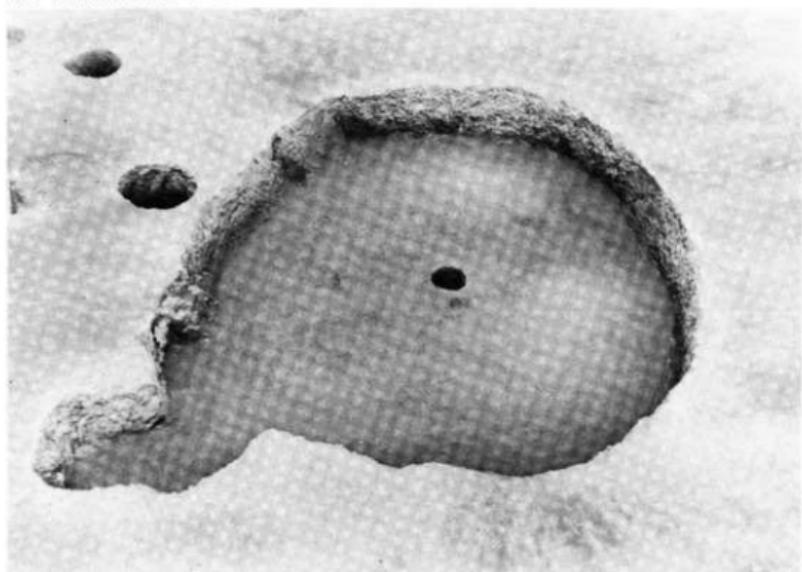
第 6 号住居跡



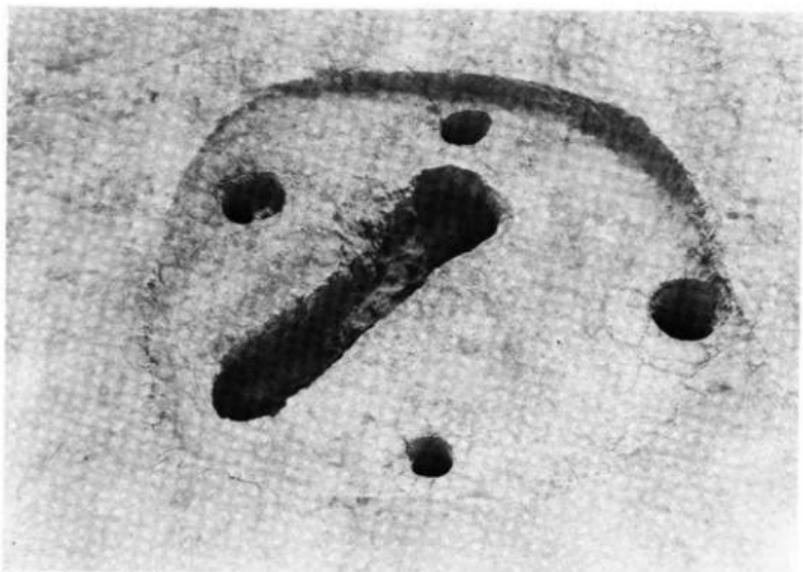
第 6・7 号住居跡



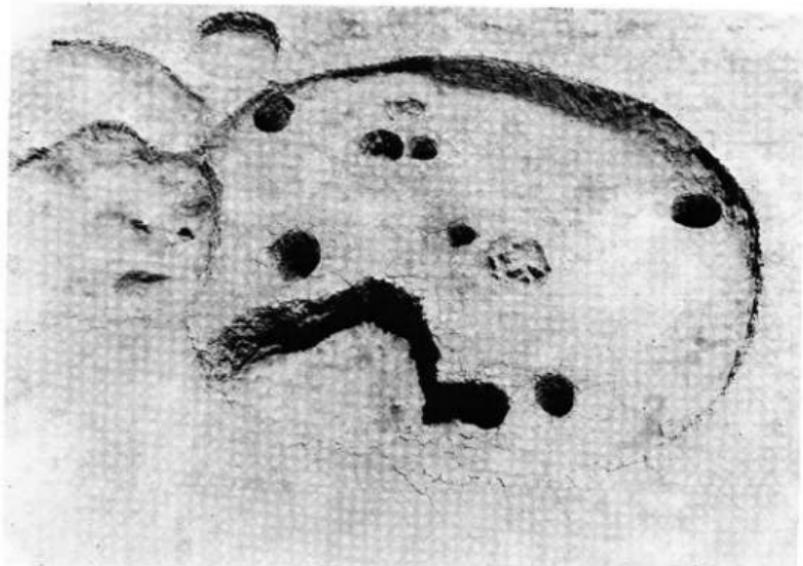
第7号住居跡遺物出土状況



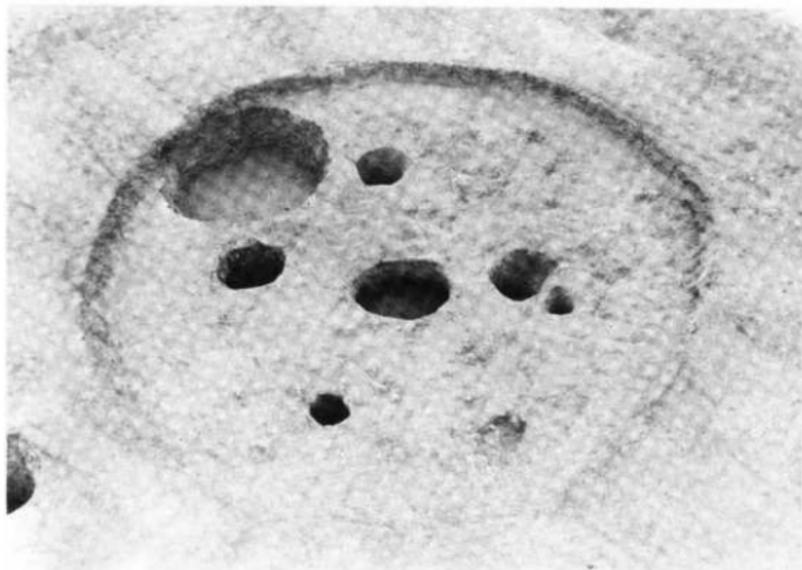
第7号住居跡



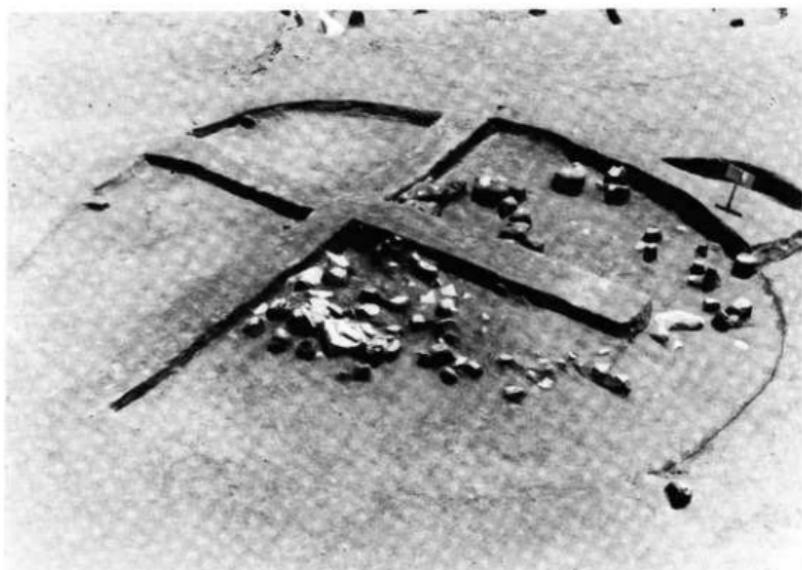
第 9 号住居跡



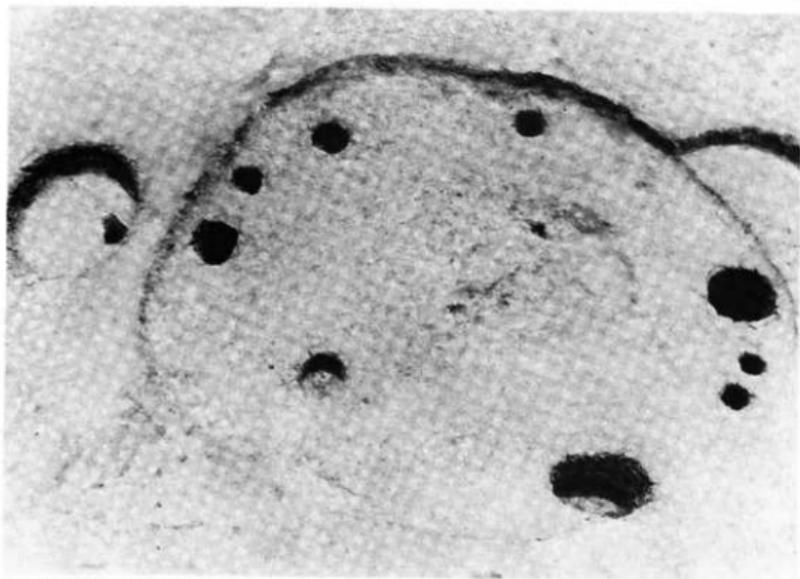
第 10 号住居跡



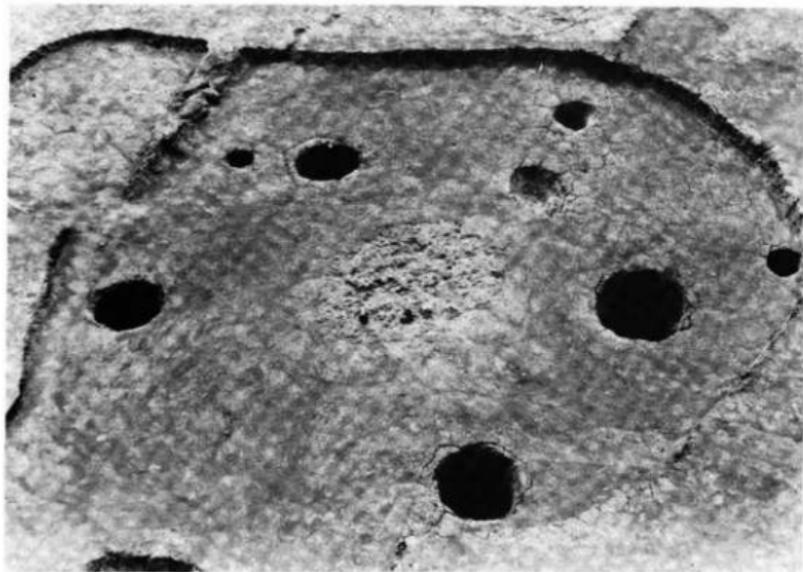
第11号住居跡



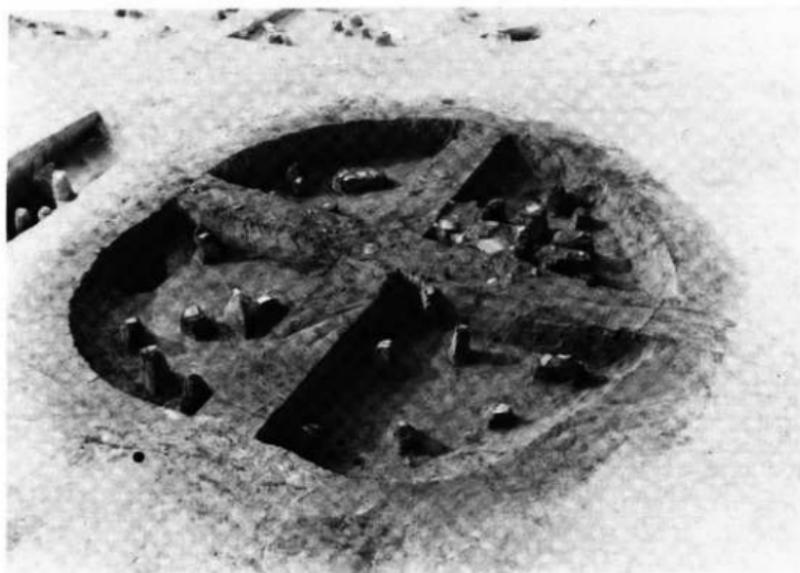
第12号住居跡遺物出土状況



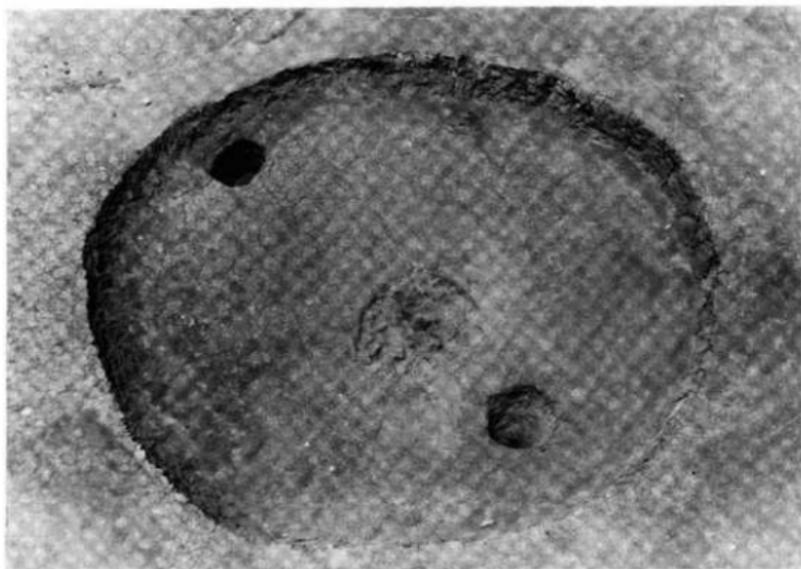
第 12 号 住 居 跡



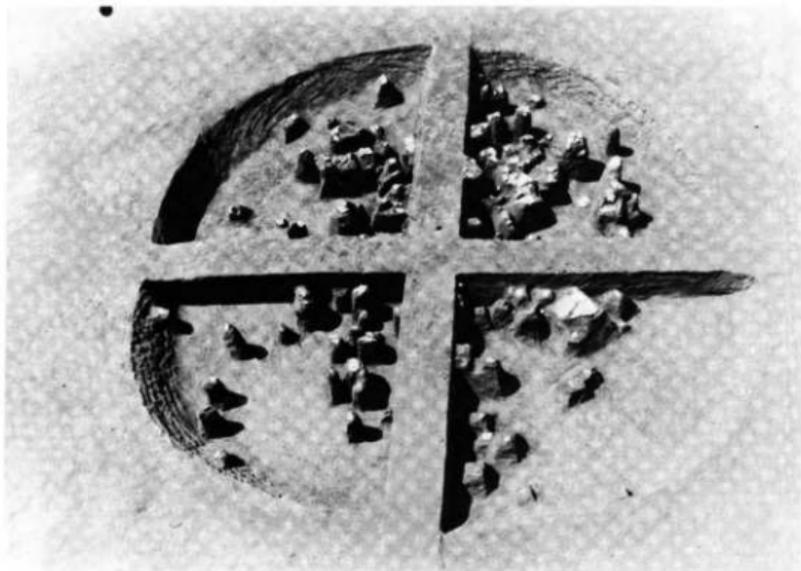
第 13 号 住 居 跡



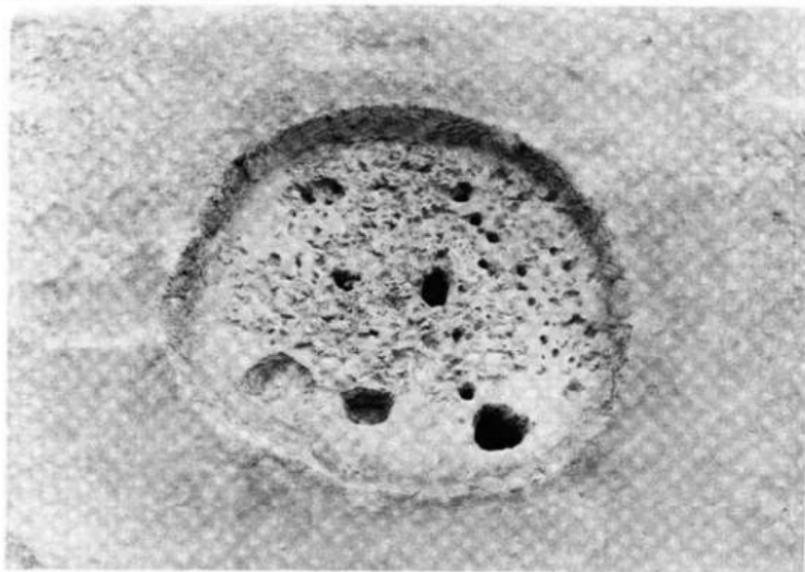
第14号住居跡遺物出土状況



第 14 号 住 居 跡

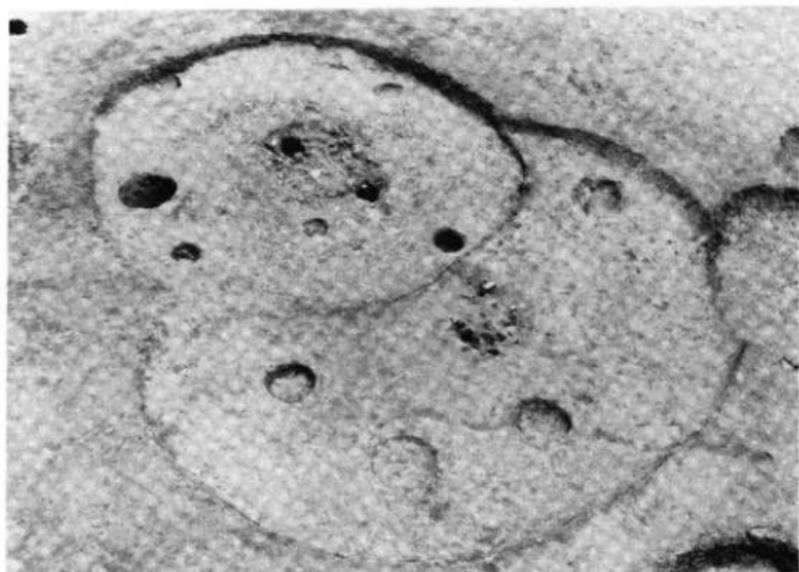


第15号住居跡遺物出土状況

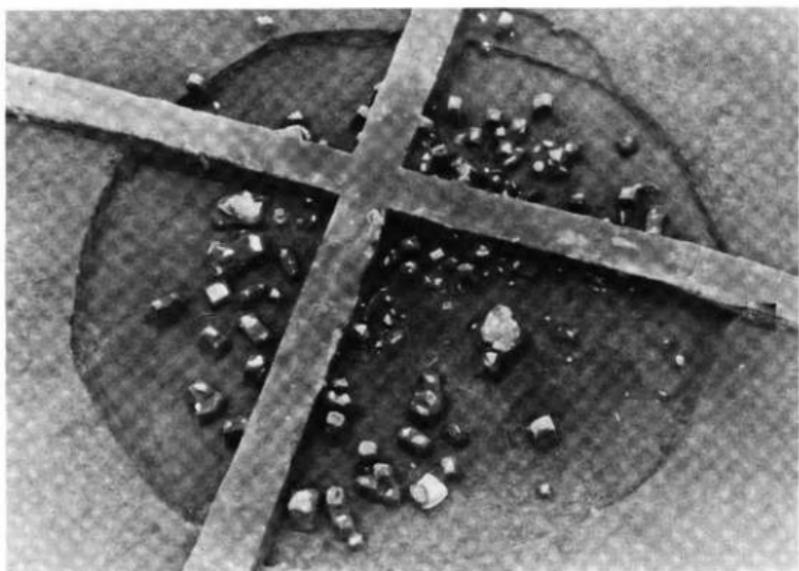


第 15 号 住 居 跡

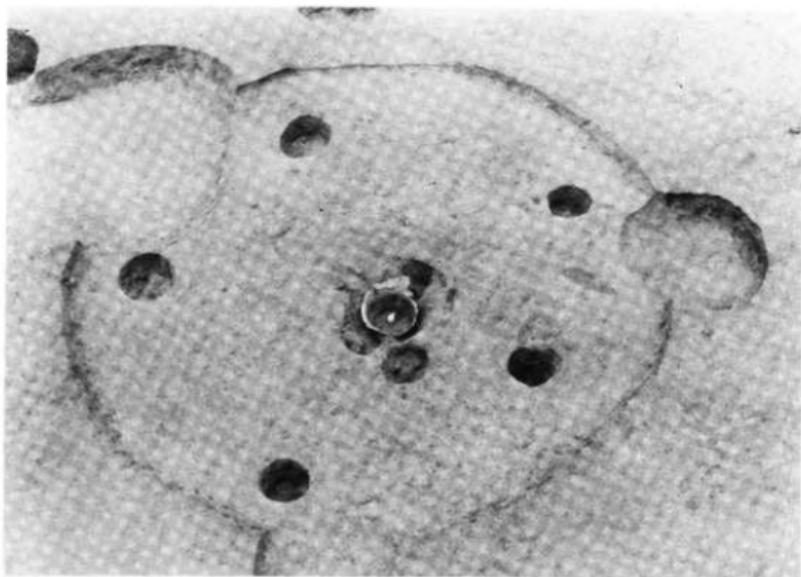
PL12



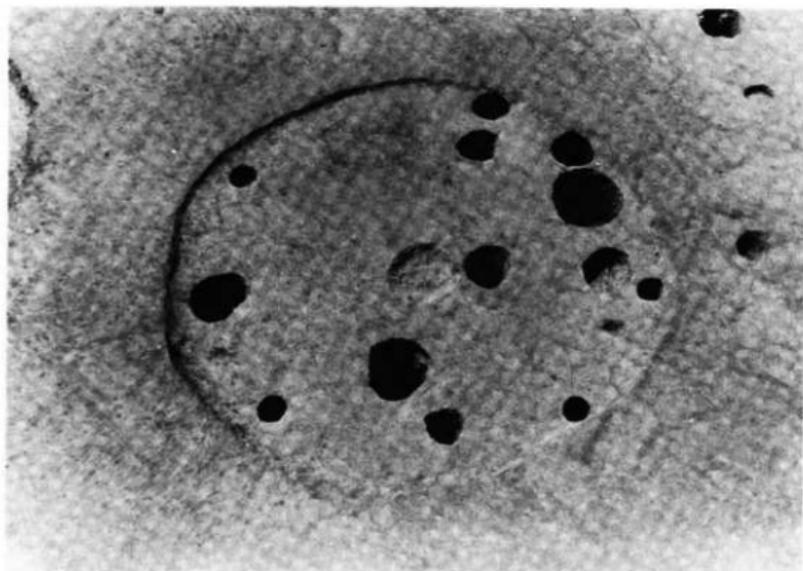
第16・17号住居跡



第18号住居跡遺物出土状況

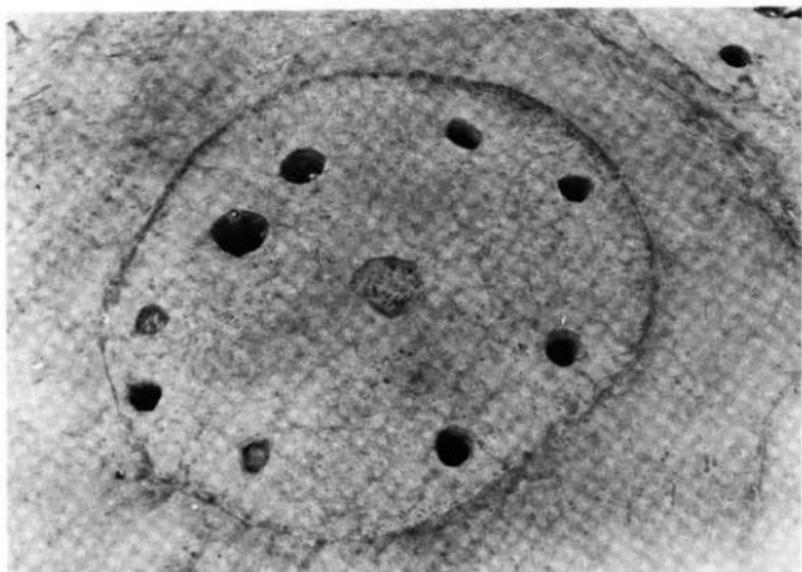


第 18 号 住 居 跡

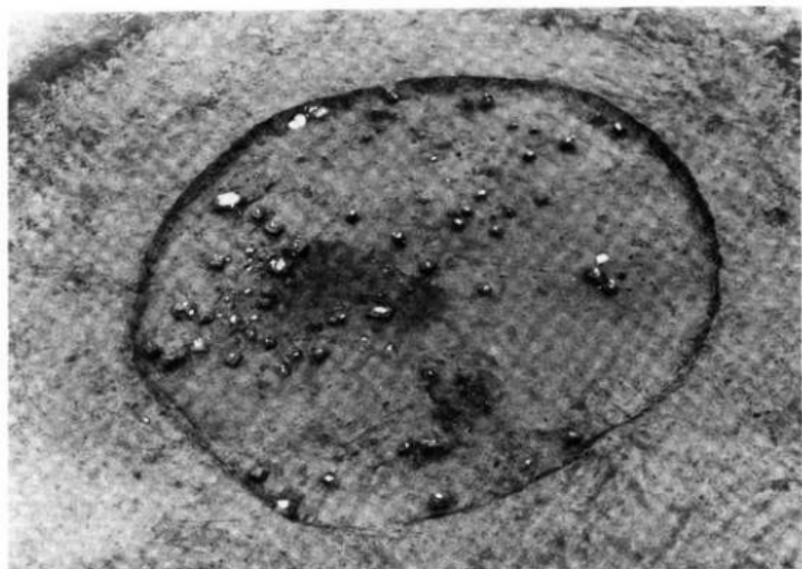


第 19 号 住 居 跡

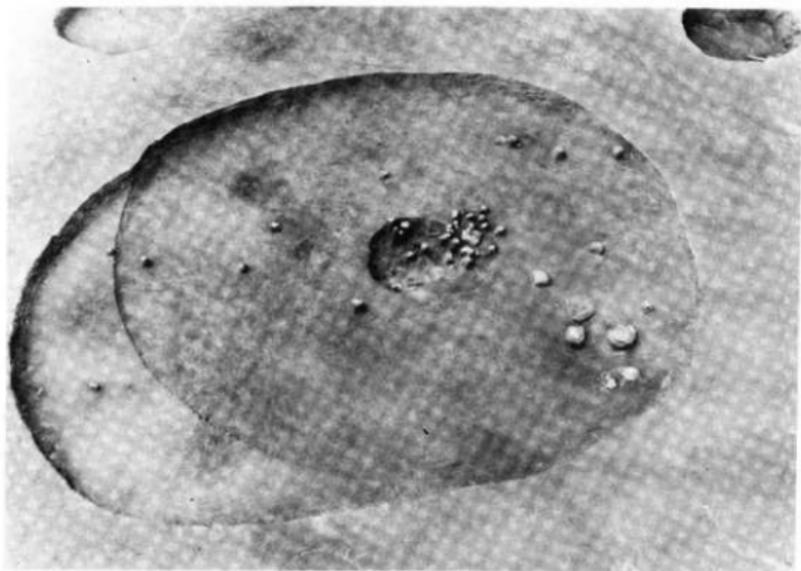
PL14



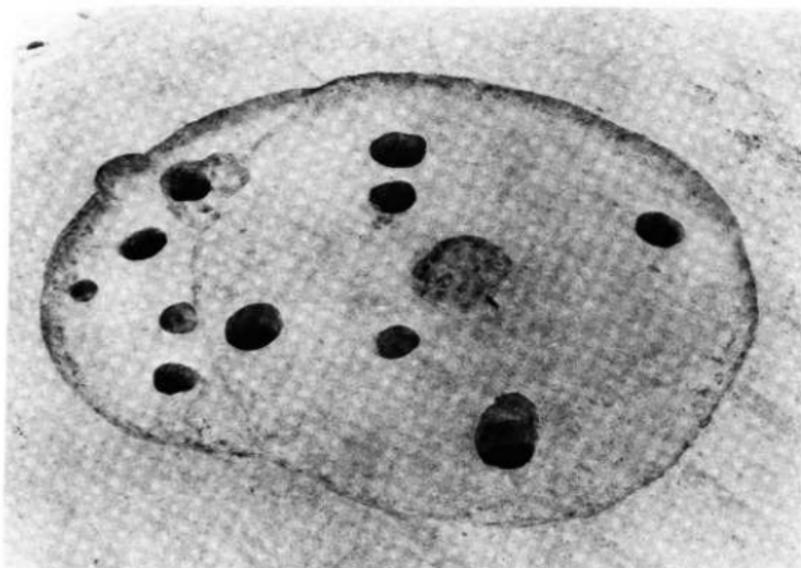
第20号住居跡



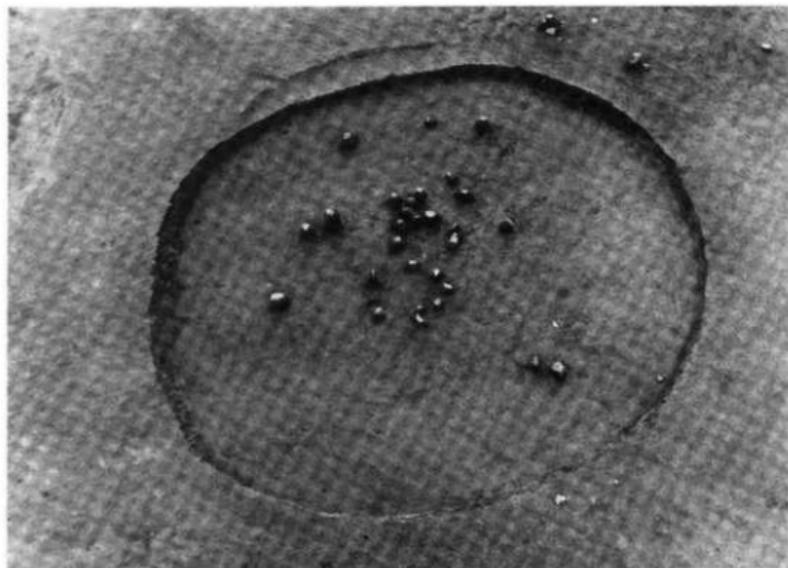
第21号住居跡遺物出土状況



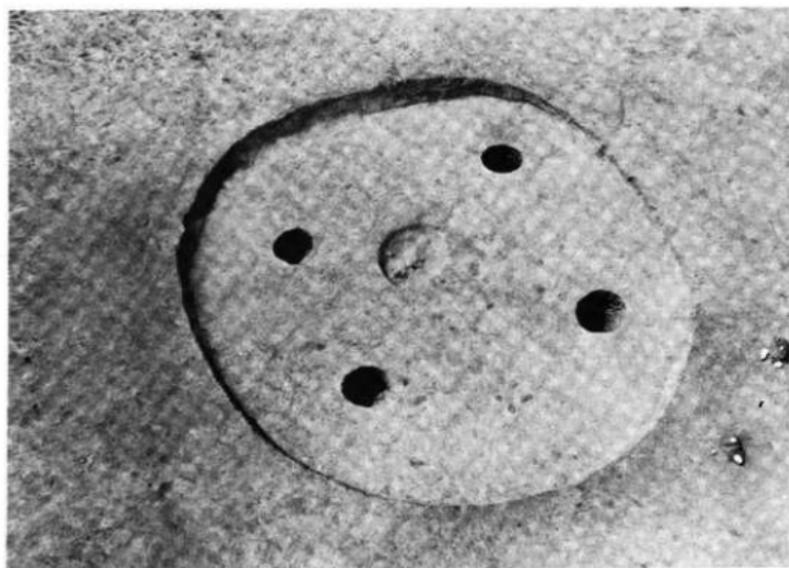
第21・28号住居跡遺物出土状況



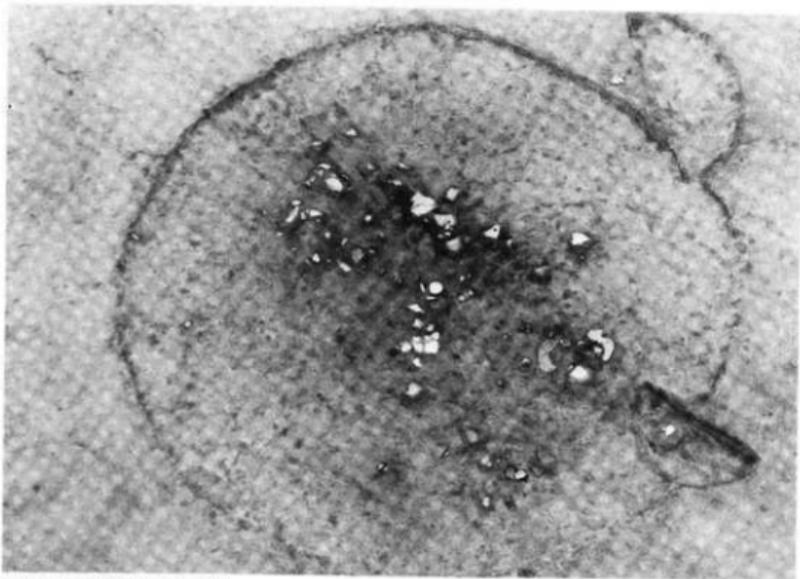
第21・28号住居跡



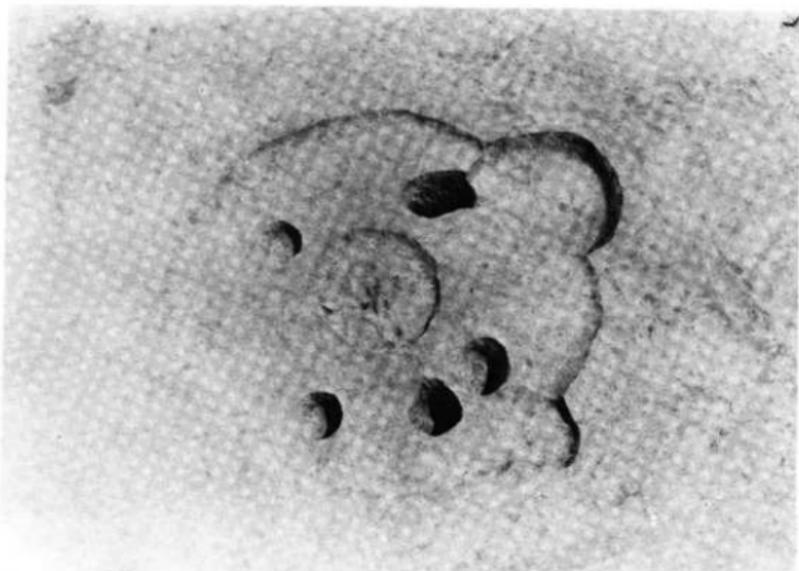
第22号住居遺物出土状況



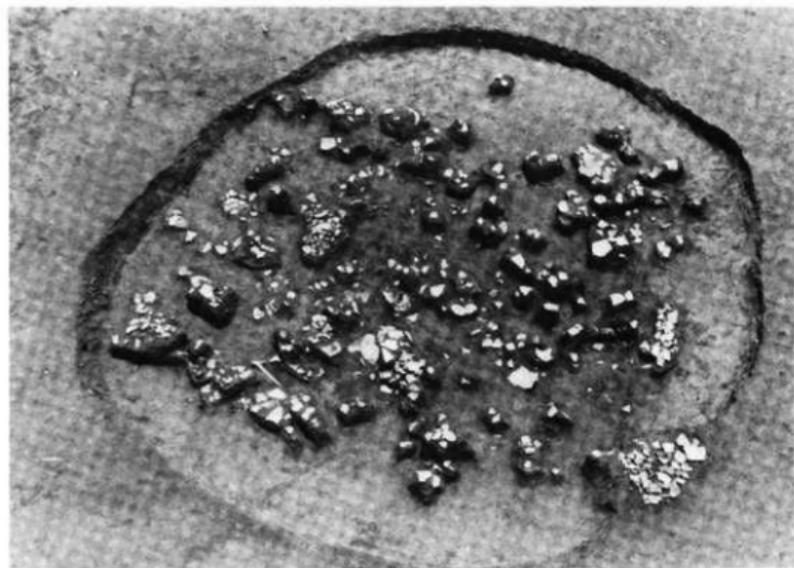
第 22 号 住 居 跡



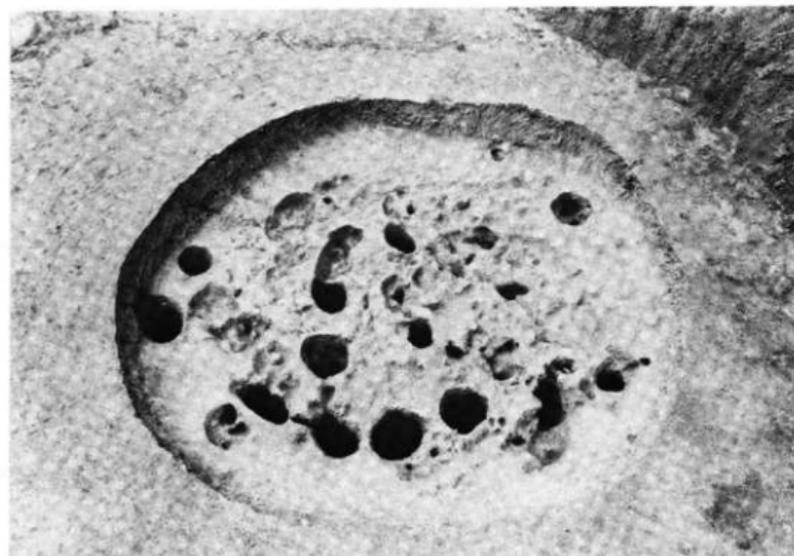
第23号住居跡遺物出土状況



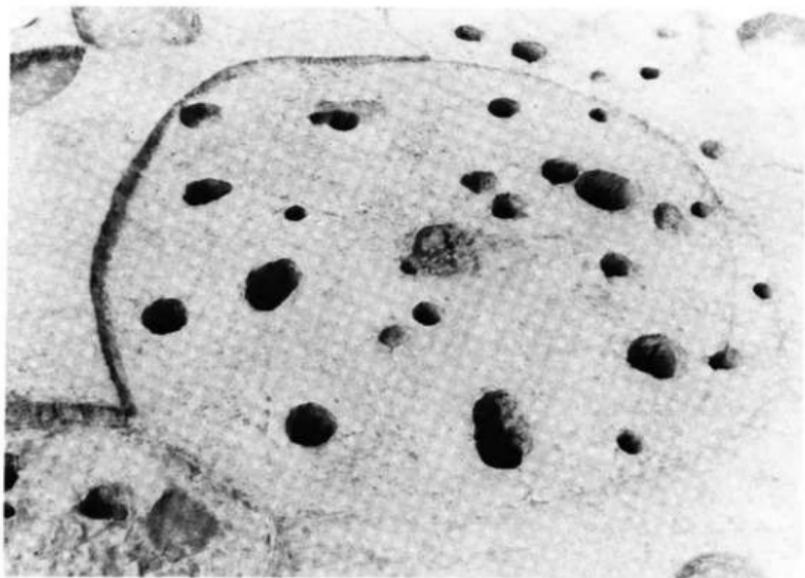
第 23 号 住 居 跡



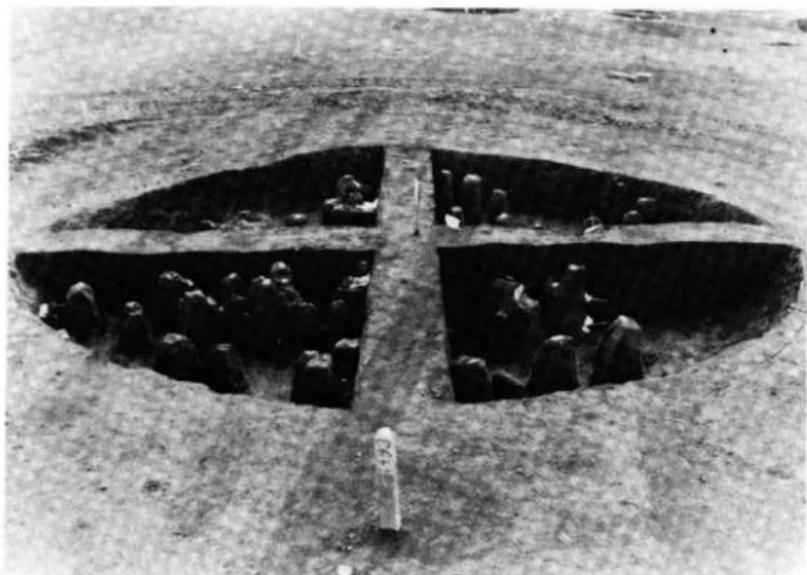
第24号住居跡遺物出土状況



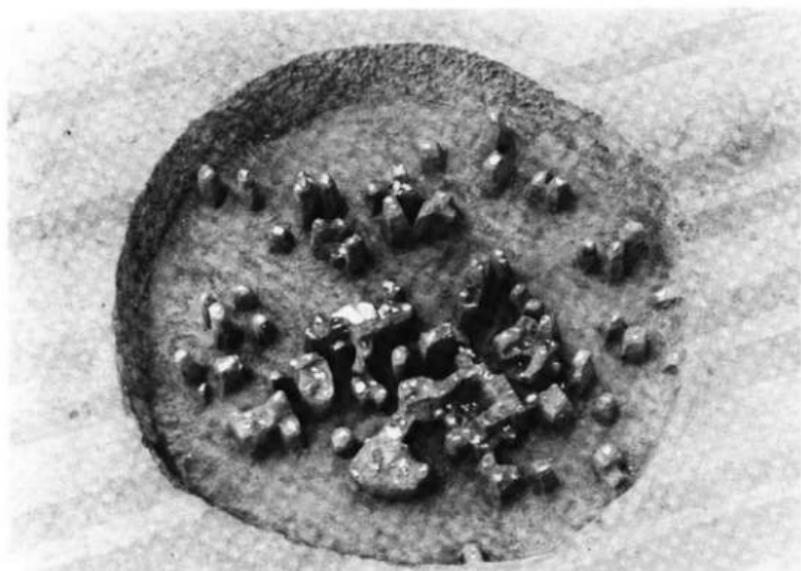
第24号住居跡



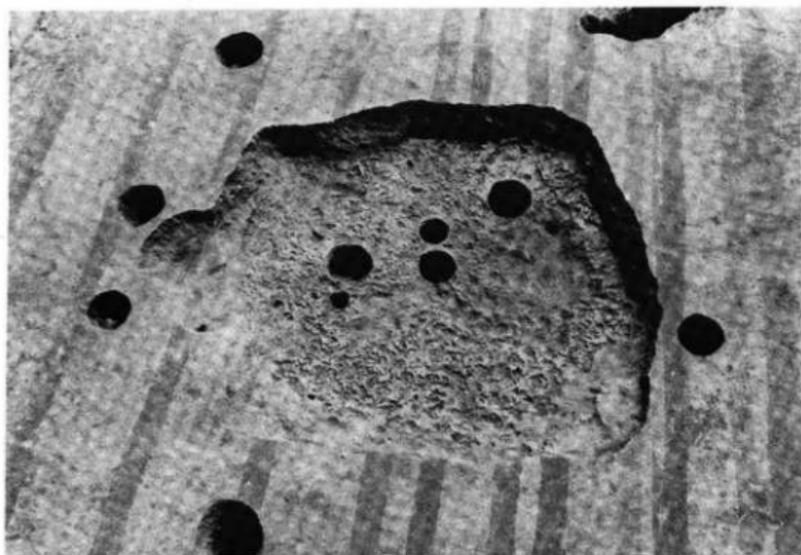
第25号住居跡



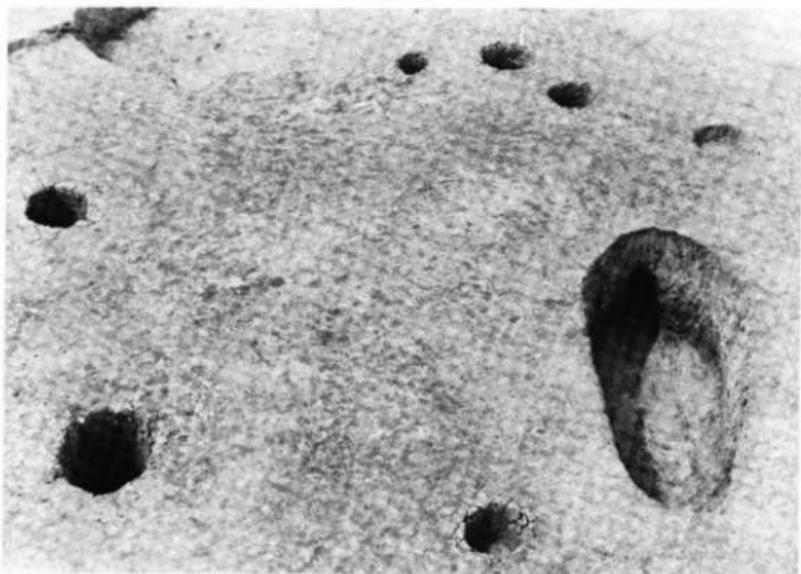
第26号住居跡遺物出土状況



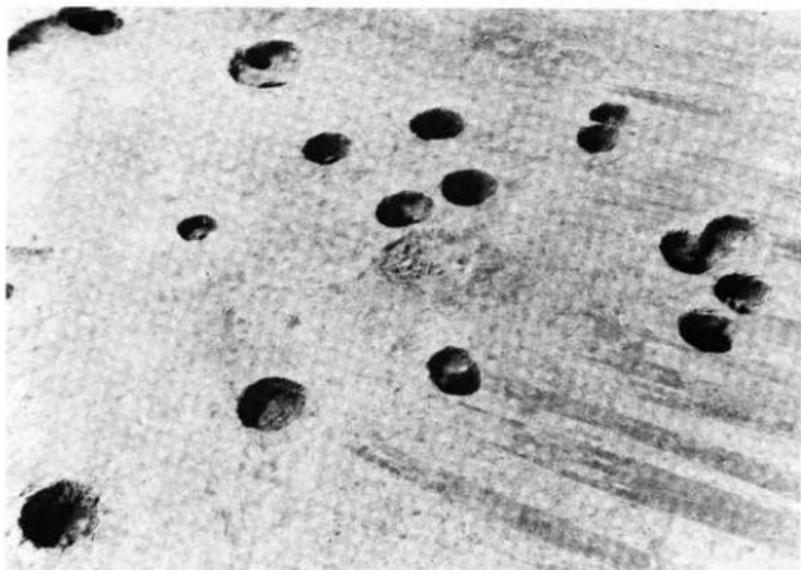
第26号住居跡遺物出土状況



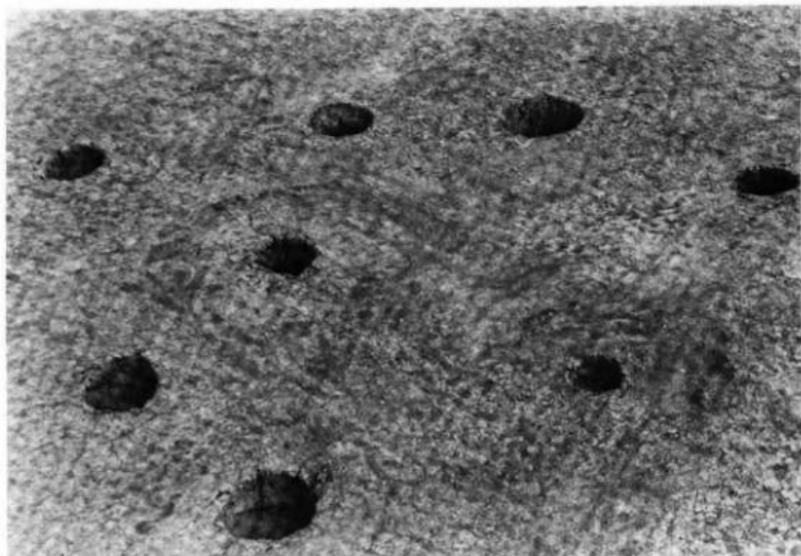
第 26 号 住 居 跡



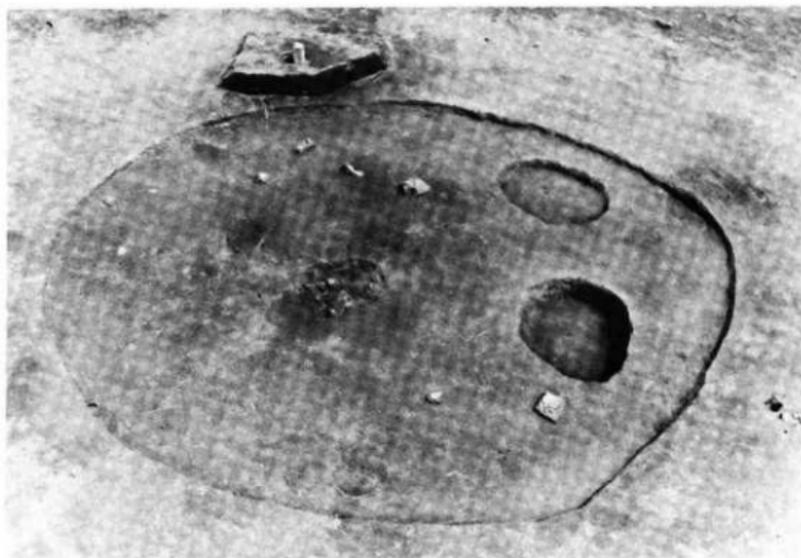
第 30 号 住居 跡



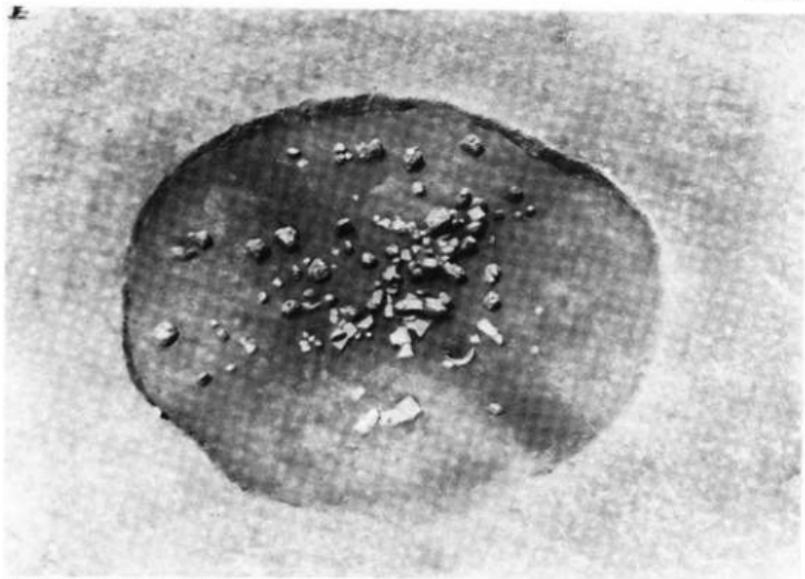
第 31 号 住居 跡



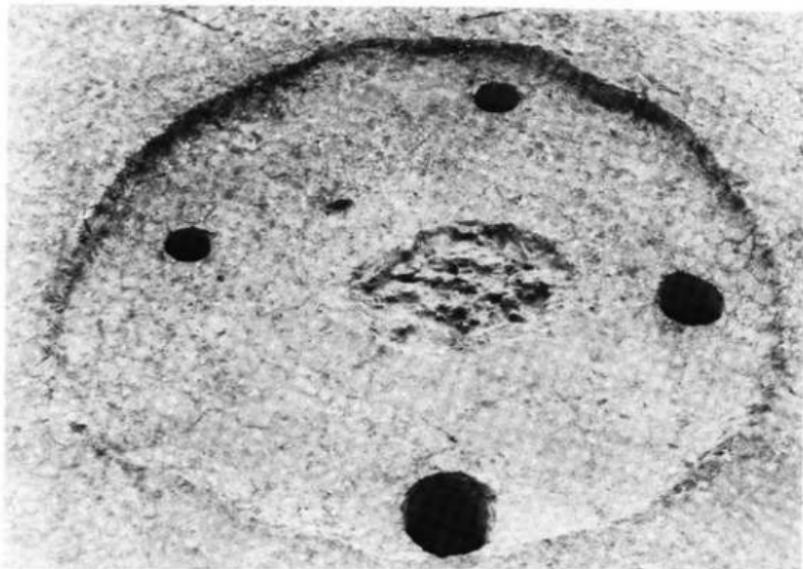
第 32 号 住 居 跡



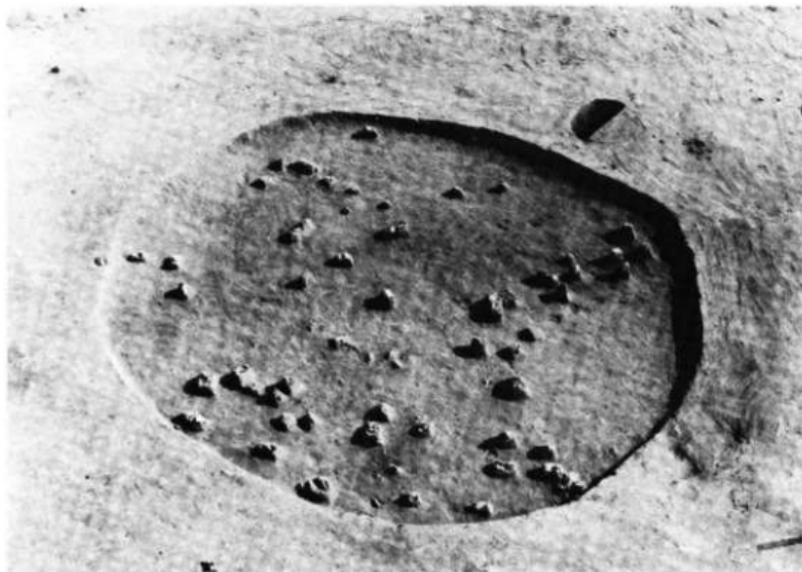
第 33 号 住 居 跡



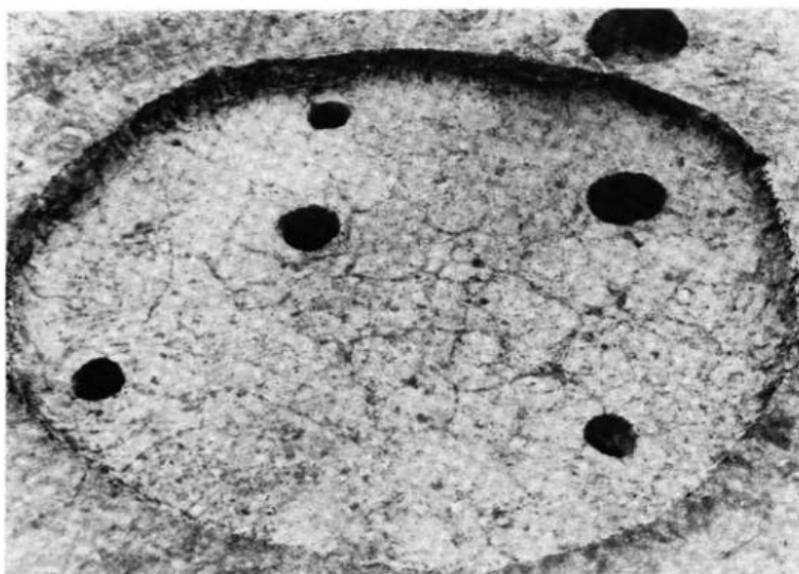
第34号住居跡遺物出土状況



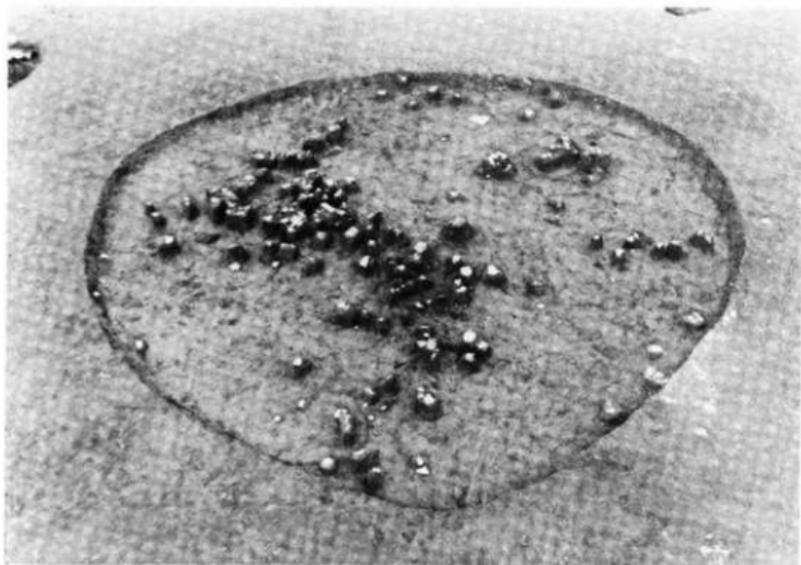
第34号住居跡



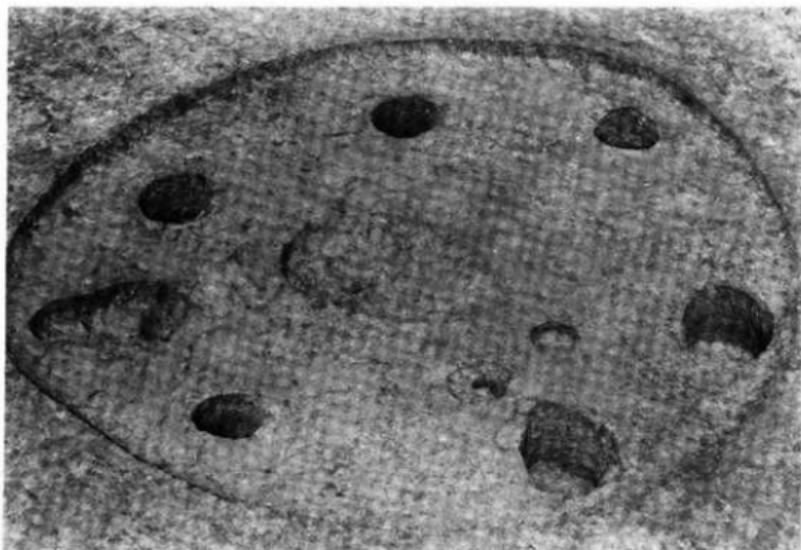
第35号住居跡遺物出土状況



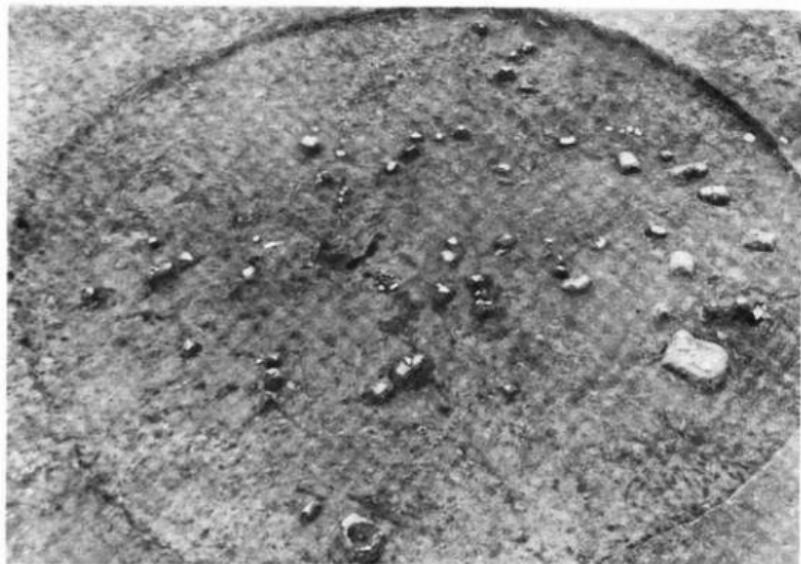
第 35 号 住 居 跡



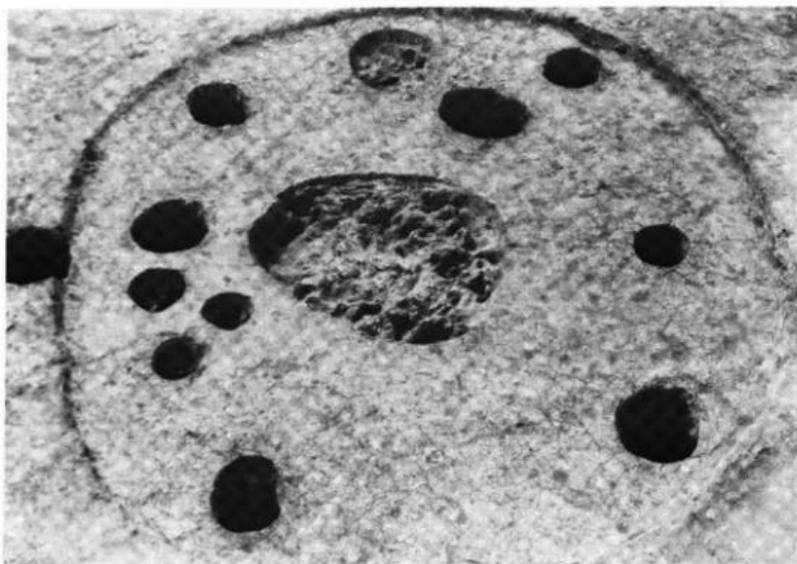
第36号住居跡遺物出土状況



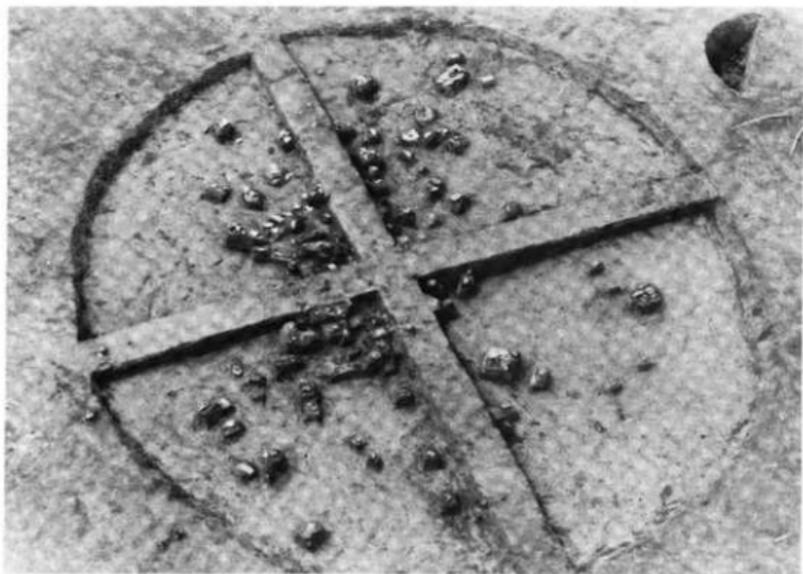
第36号住居跡



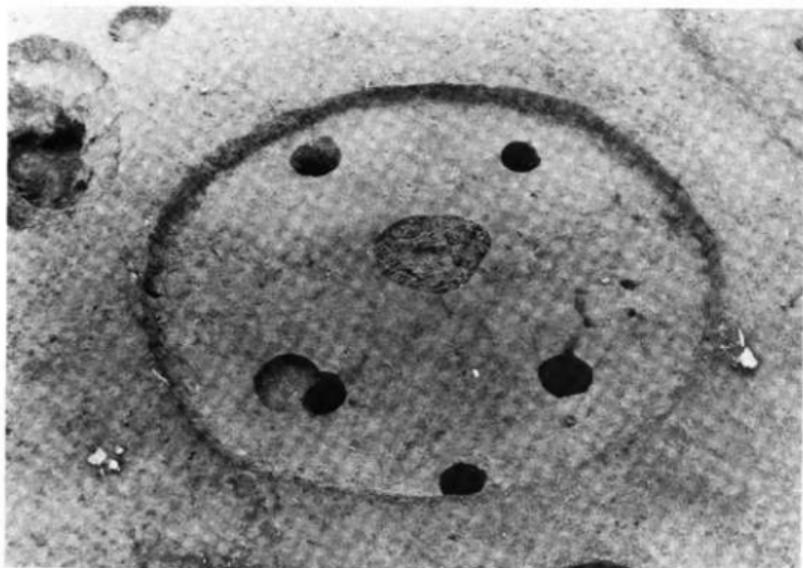
第37号住居跡遺物出土状況



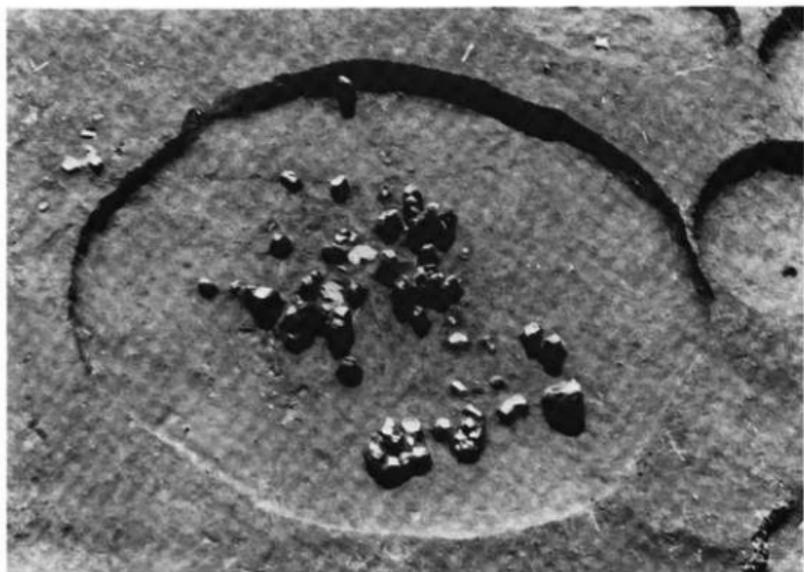
第 37 号 住 居 跡



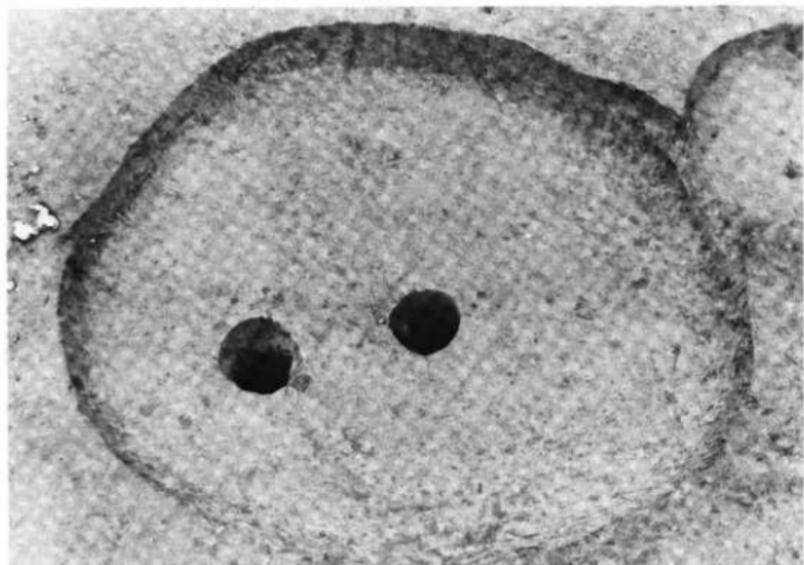
第38号住居跡遺物出土状況



第 38 号 住 居 跡



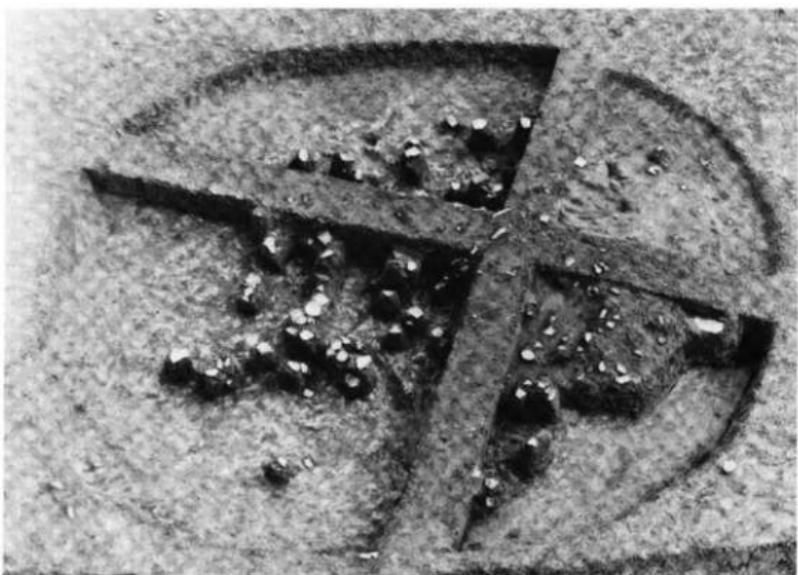
第39号住居跡遺物出土状況



第 39 号 住 居 跡



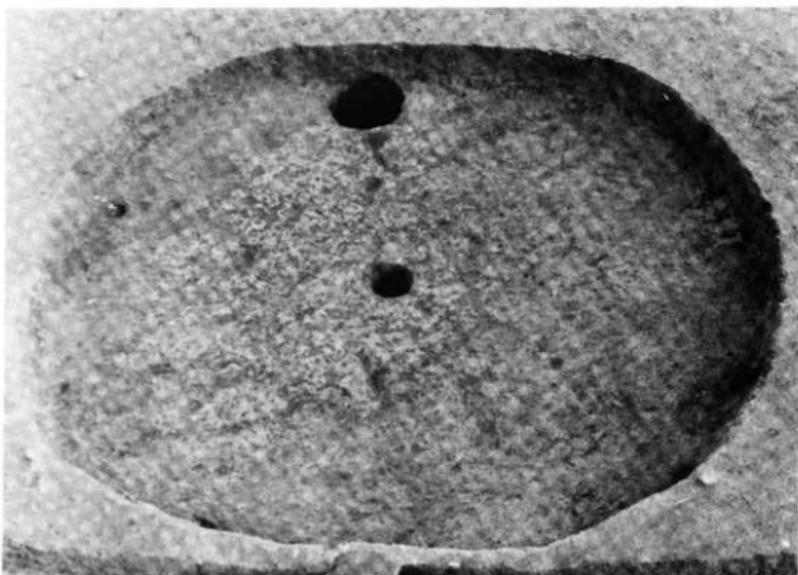
第40号住居跡焼土堆積部分土层断面



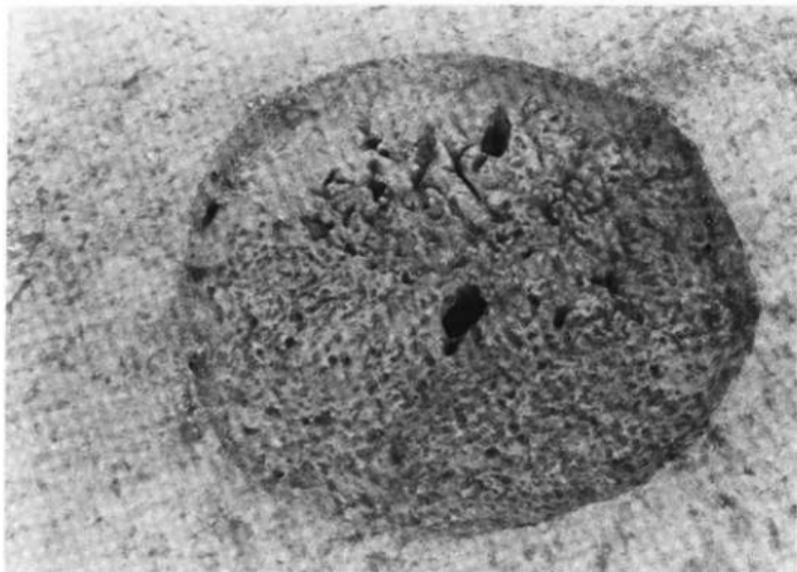
第40号住居跡遺物出土状況



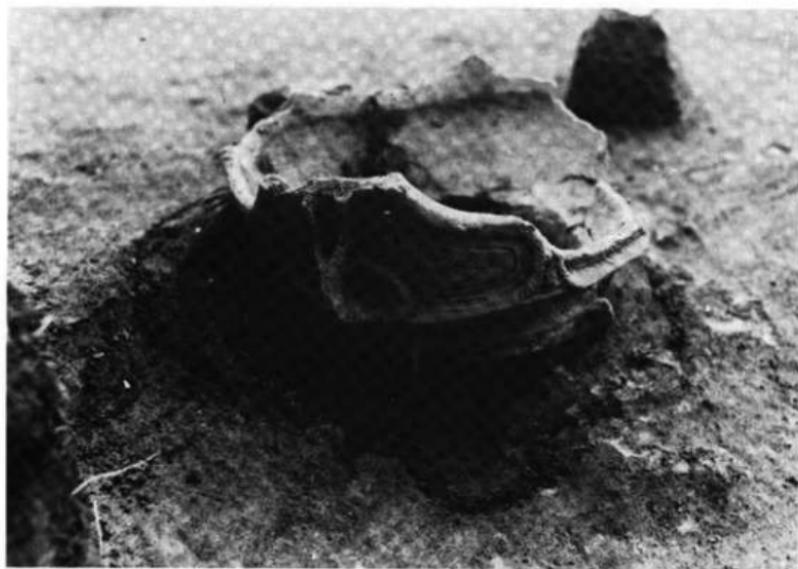
第40号 住居跡焼土堆積状況



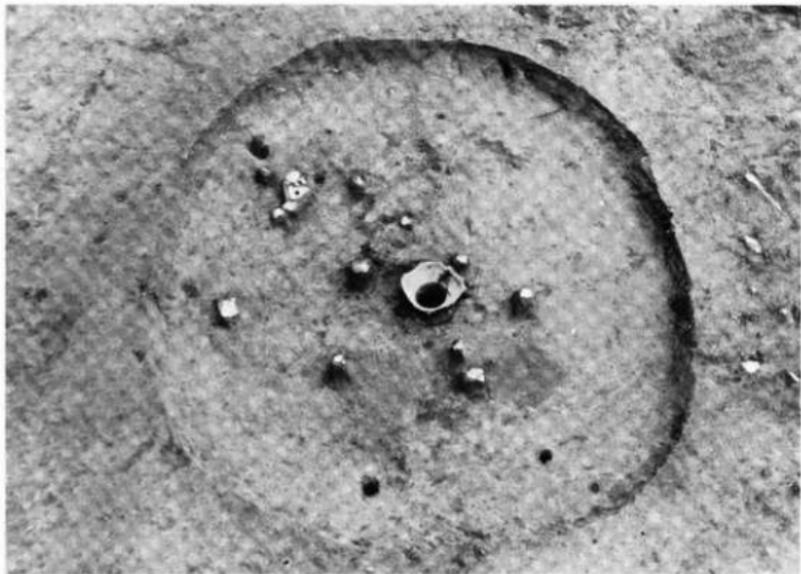
第40号 住居跡



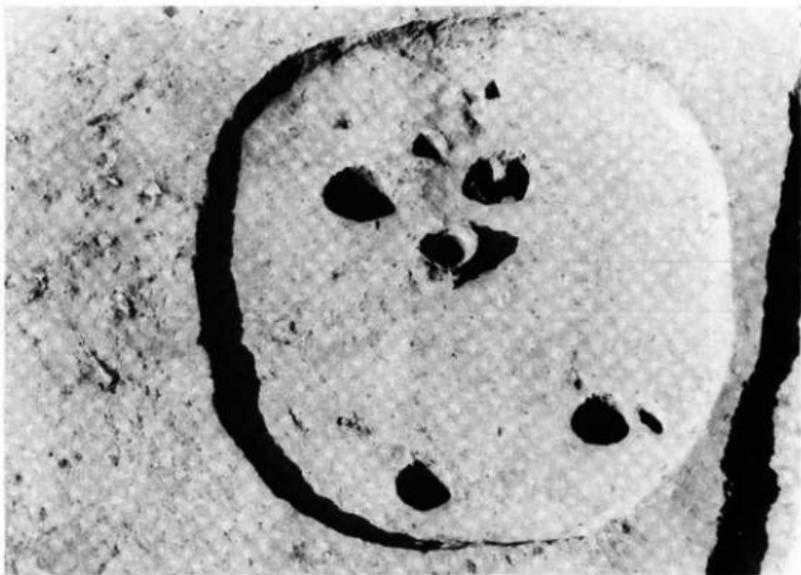
第 41 号住居跡



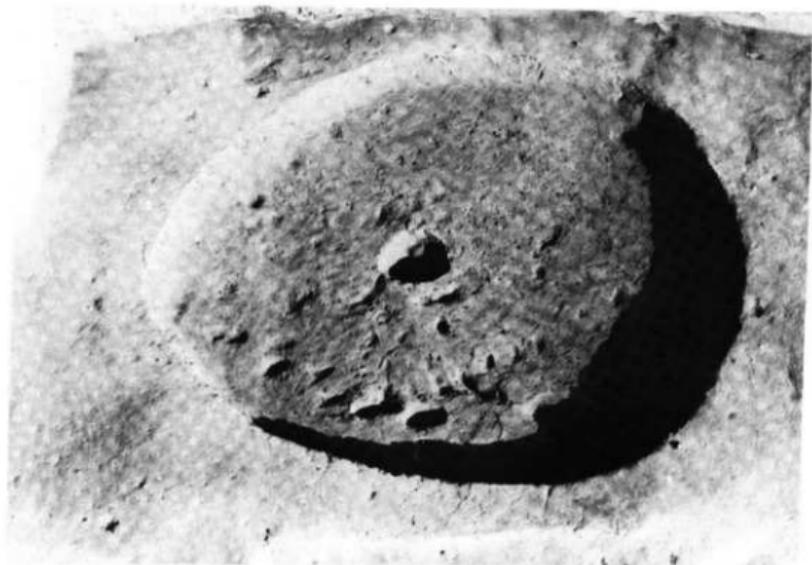
第42号住居跡遺物出土状況



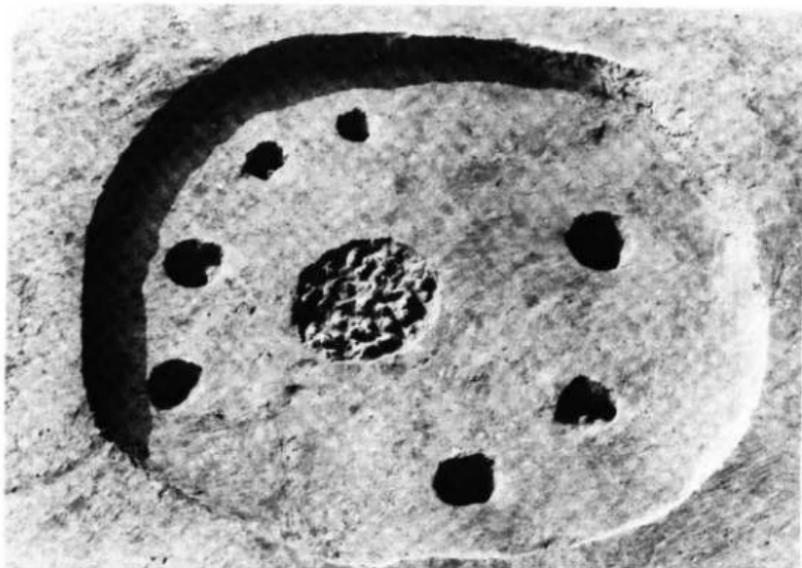
第42号住居跡遺物出土状況



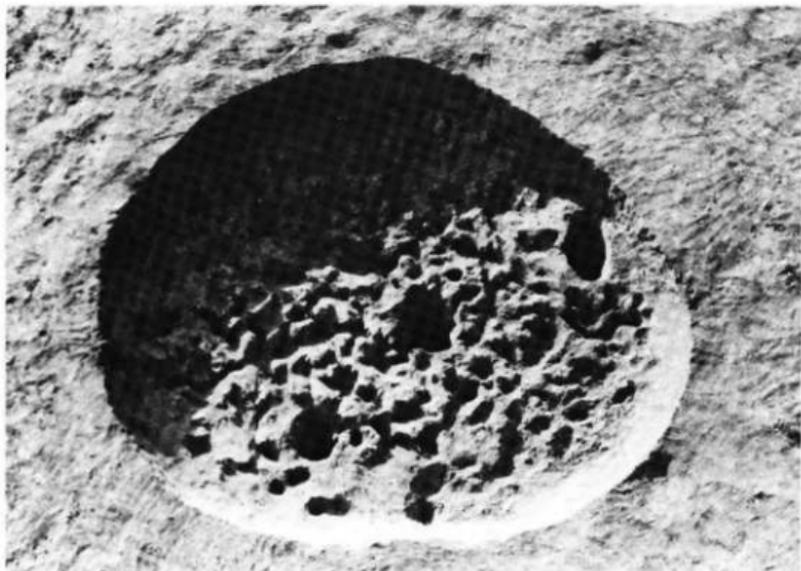
第 42 号 住 居 跡



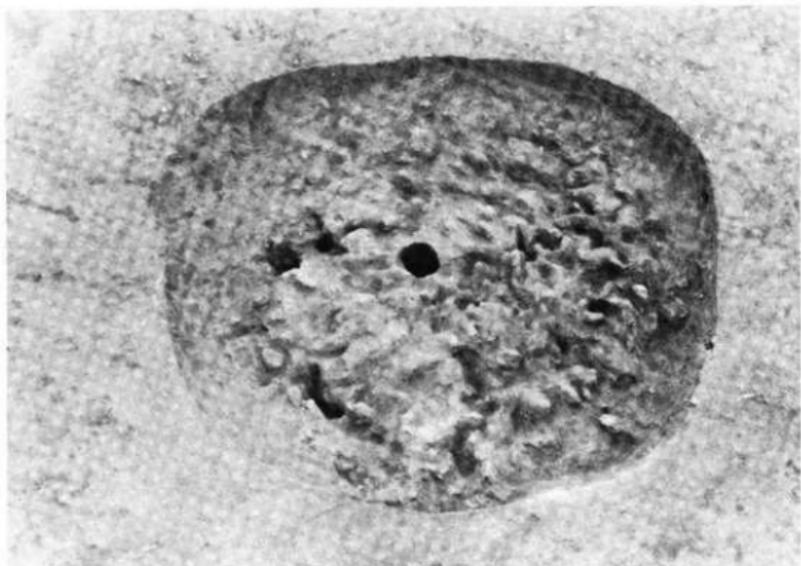
第 44 号 住 居 跡



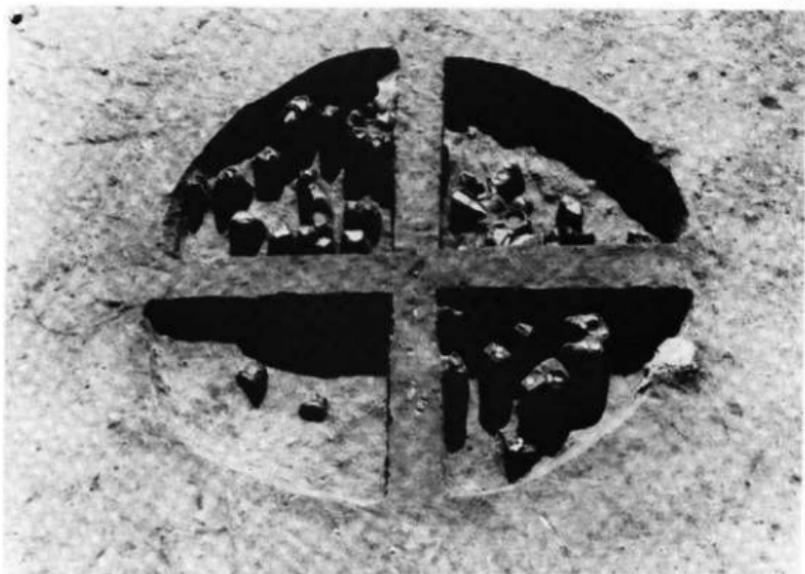
第 45 号 住 居 跡



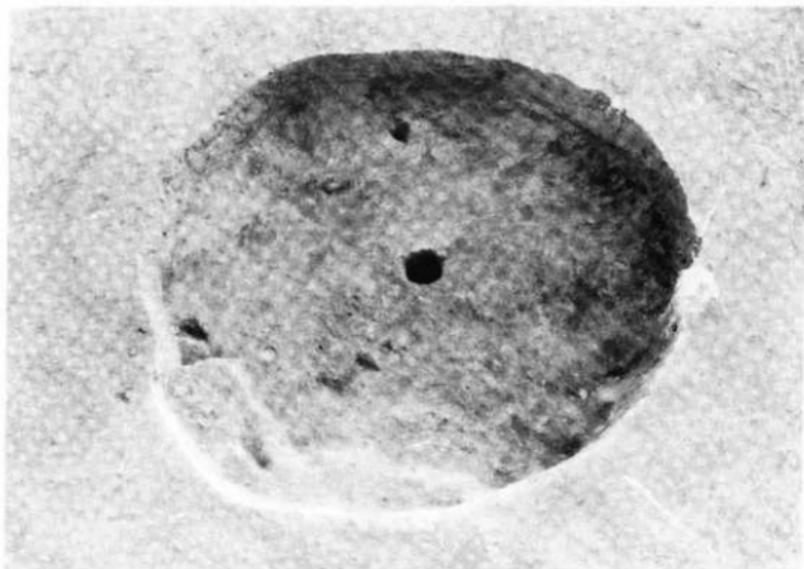
第 46 号 住 居 跡



第 47 号 住 居 跡

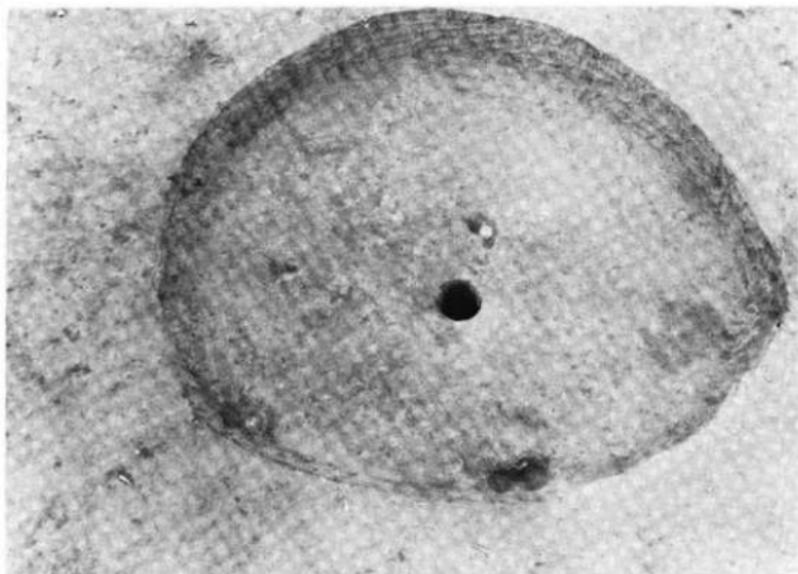


第48号住居跡遺物出土状況

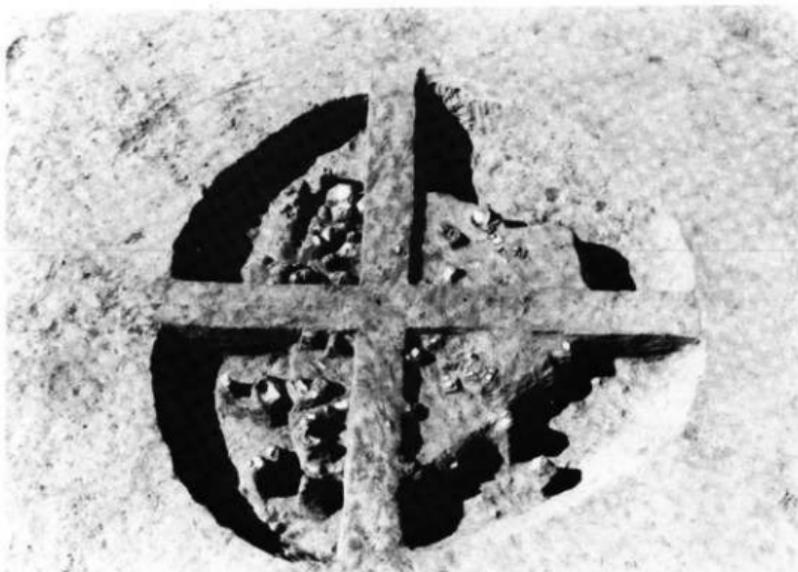


第 48 号 住 居 跡

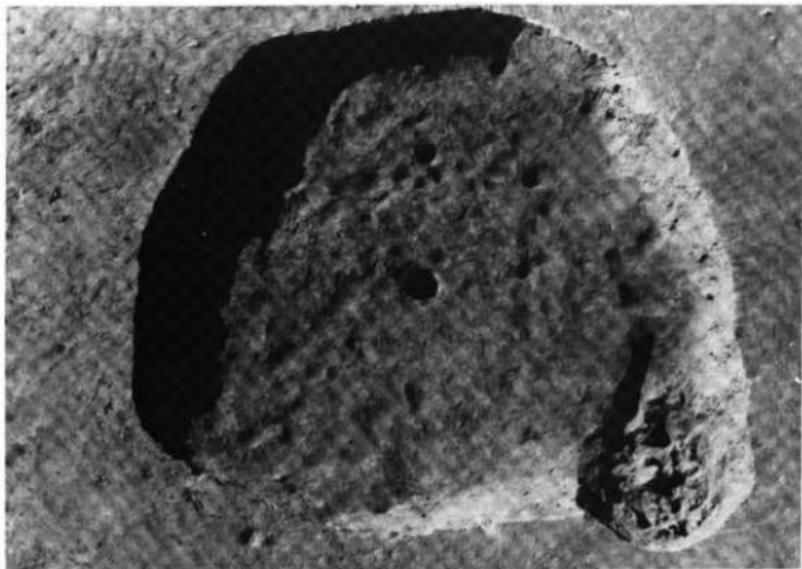
PL36



第49号住居跡



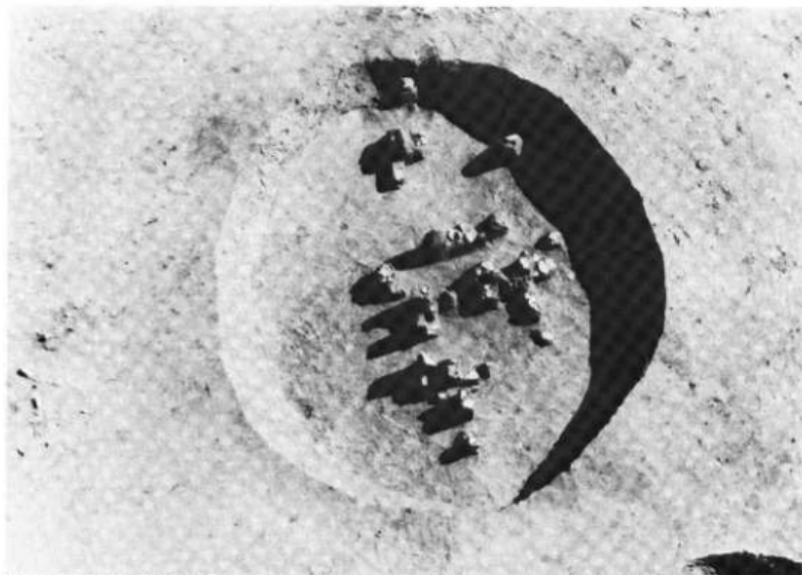
第50号住居跡遺物出土状況



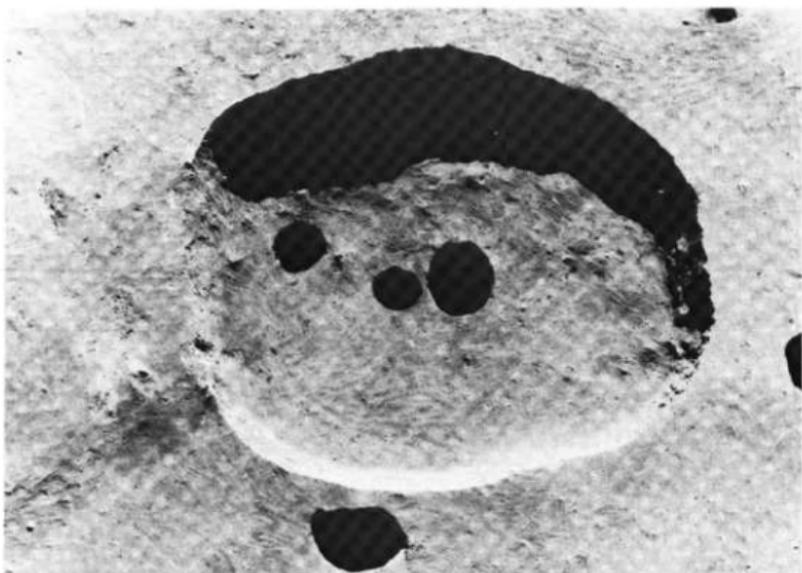
第50号住居跡



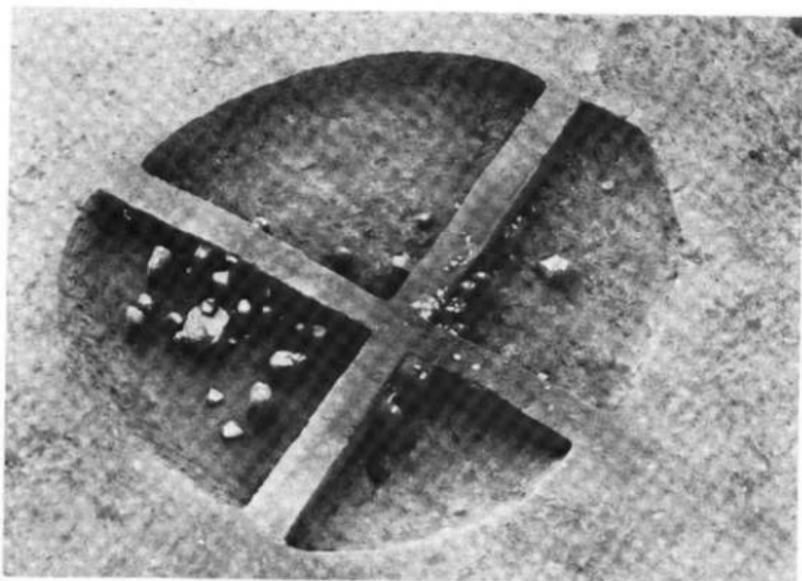
第51号住居跡遺物出土状況



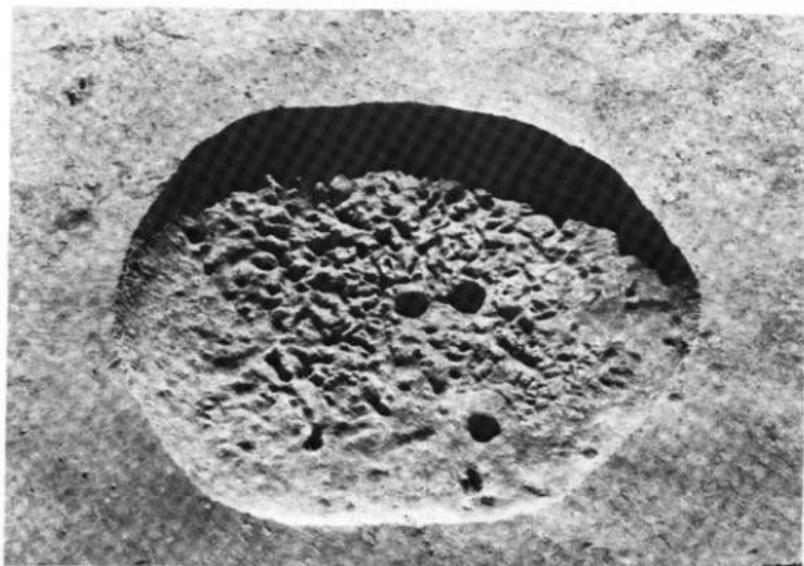
第51号住居跡遺物出土状況



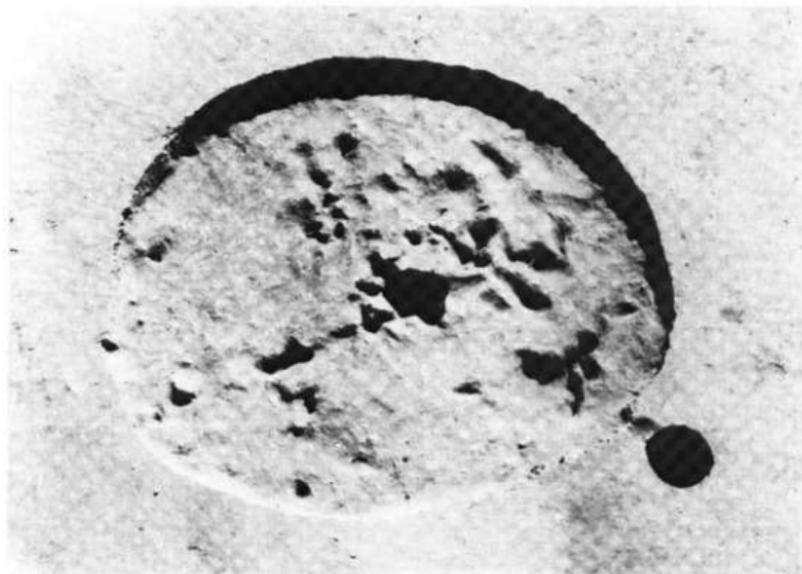
第 51 号 住 居 跡



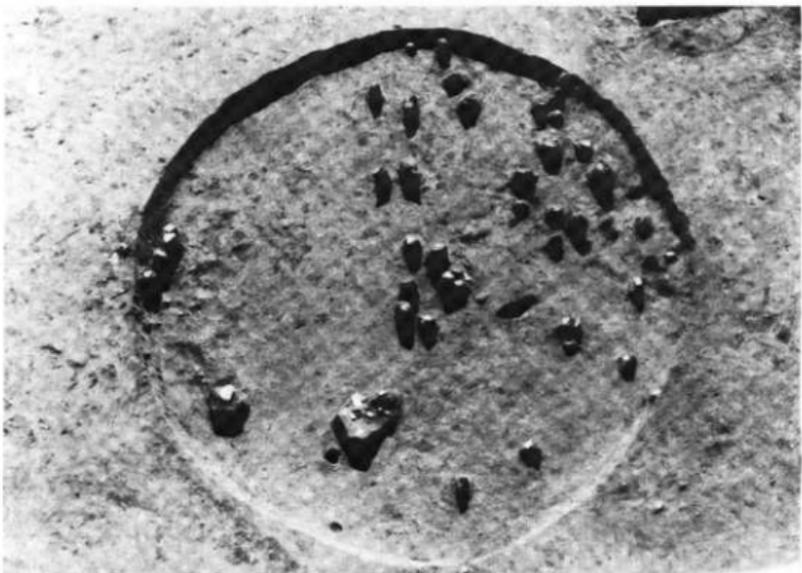
第52号住居跡遺物出土状況



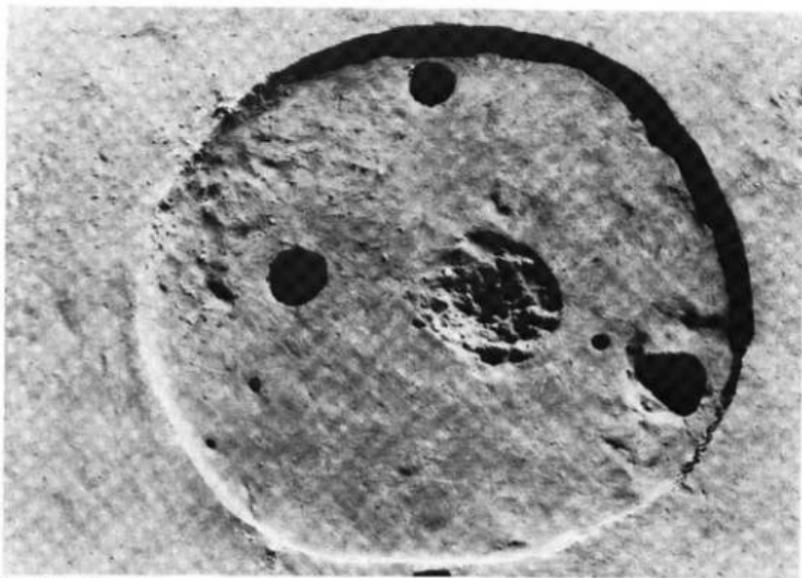
第 52 号 住 居 跡



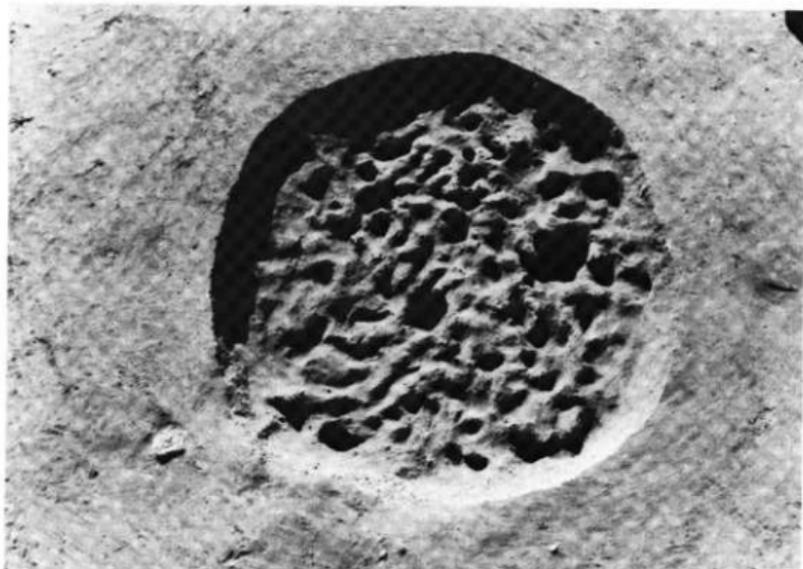
第 53 号住居跡



第54号住居跡遺物出土状況



第 54 号 住 居 跡



第 55 号 住 居 跡